
僕は唄う、金色に輝く想いを乗せて。

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は唄う、金色に輝く想いを乗せて。

【Nコード】

N8550K

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

亡き幼なじみのためにサッカーを続ける阿笠と、羽柴財閥の養女であり阿笠の幼なじみの双子の姉でもある綾女とのサッカー人生を賭けた壮絶な恋物語。

「春の櫻に夏の海、秋の月そして冬の雪。」に出てきた阿笠の高校卒業後の、衝撃的で切なく哀しいラブストーリー。「春夏秋冬」を読んでも話は分か
ります。

第1話『プロローグ』（前書き）

一応「春の櫻に夏の海、秋の月そして冬の雪。」の続編にあたりますが、阿笠を主人公としたラブストーリーです。

成長した彼らをご観覧くださいませ（^^）

第1話『プロローグ』

4年に一度しか開かないオリンピック。

誰もが憧れ、その舞台に立とうと試みる。

桜踊る春

海が高鳴る夏

月が輝く秋

雪舞う冬

そんな季節を乗り越え、日々精進してきた。

それでもオリンピックの切符を掴めるのはほんの一握り。

アメリカで行われたオリンピックは盛大に盛り上がり、日本でも当然話題となる。

そんな中オリンピックでは1つの伝説が生まれた。

今や中学生でも出場することはあるが、なんと1つの高校から5人ものオリンピック選手が現れた。

出る種目は違うし、それだけでは伝説とは言えないが、彼らは全員メダルを手に帰ってきたのだ。

色の違いはあるが、高校生がメダリストとなり、しかも彼らは親友同士ということもあり大層注目を集めた。

夏のオリンピックが終わったあとも彼らはしばらく騒がれ続けたが、もともと日本では有名な学生だった。

テレビに出たり、新聞や雑誌に載ったりと顔は広く、スポーツの実力だけでなくその容姿と人柄で国民的人気者だった。

オリンピックに出場するために海外遠征やらハードな練習やらでスケジュールはびっちりだったはずだが、決して学校の部活動は疎かにしなかった。

部長、あるいは副部長としての責任がある彼らは、オリンピック直前、あるいは直後の部活動の最後の大会に出場。

その功績は、全員優勝トロフィーを持ち帰るという信じられないもの。

学校には垂れ幕が吊るされ、それまで以上に騒がれた。

有終の美を飾ったのち彼らは惜しまれつつも部活動を引退。

その様子はお茶の間に報道され、感動を呼んだ。

そして、高校3年だった彼らは卒業を迎える。

進路は別々になってしまい、彼らの楽しい学園生活は終わりを告げた。

「あー、信じらんねえ」

が、学校を卒業したところで彼らが生涯離れ離れになるわけではない。

「なんで？　こんな偶然もありじゃない？」

彼らは大学2年、あるいは社会人2年生になった。

「何、じゃあみんな暇人？」

そう言うのは、元星陵サッカー部部長で最後の大会で全国制覇を成し遂げ、今はプロサッカー選手として活躍している月影秋人。

「暇ってやな言い方」

秋人に答えたのは、同じく元星陵サッカー部副部長でプロサッカー選手の阿笠大悟。

少しシャギーを入れ、やはり黒髪が似合う秋人と茶色い髪がさらに茶色くなった阿笠。

オリンピックではベンチ入りを果たし、準決勝では2人は出場し勝利に貢献し、日本は銀メダルを獲得。

「でも珍しいわね」

みんなを見回しているのは、元星陵水泳部部长で背泳ぎ100メートル、自由形100、その他2種目で優勝を果たし、オリンピックでは背泳ぎと自由形の100で金と銀を獲得した雪原麻冬。

やはりウェーブが特徴で、高校時代より茶色い。

「ねえ。6人揃うなんてさ、奇跡じゃんね」

冗談混じりに言うのは、元星陵バド部部长でシングルスで全国制覇し、オリンピックでは日本のエースとして銅メダルを獲得した櫻井春樹。

前髪を全部おろして子どもっぽい印象だった昔とは少し違い、前髪が右わけでピンク系茶の髪色をしているのが似合っている。

身長も少し伸びたが、それでも165と小さい。

麻冬と春樹だけが県内の体育学部のある有名な私立大学にAO推薦で進学をした。

「奇跡？ 運命の間違いなんじゃね？」

そして、赤かった髪の毛が更に赤くなっている青いカラコンをつけているのは愛川烈。

元星陵美術部部长で、高校を卒業したのちフランスに留学するが、師匠の一番弟子が日本の大学で教えることになったため烈は助手という形で手伝いに日本に戻ってきた。

本当はさっさと一人前になりたいところだが、弟子から学べることも多いと考えた烈は、そう提案してきた師匠の話に乗ったのだ。

しかも、師匠は烈には阿笠という親友がいて、フランス行きを先延ばししたのもその阿笠のためだと知っていて、日本でプロサッカー選手として活躍していることも知っている。

そのため、同じ県内の大学に一番弟子をいかせることにしてくれた。烈が日本に行くことを決めた一番の理由はやはりそれが大きい。

麻冬と春樹とは違う大学だが、烈がその大学に通うことが決まったとき泣いて喜んだのは、やはり親友の阿笠だった。

「じゃさ、今日はパーッといきますか！」

最後に、元星陵バレー部部长で全国制覇をし、オリンピックでは裏エースとして銀を獲得した海野夏実。

トレードマークの黒いロングの髪は健在だ。

夏実は高校卒業後実業団に入り、バレー選手として日々練習に明け暮れている。

春夏秋冬と言われた4人と、その友人2人。

今回は、その友人2人のうちの1人、阿笠大悟に焦点を当てたストーリーである。

さあ、ここから再び彼らの物語が始まる。

n
e
x
t

第2話【阿笠大悟】

「プロの世界は甘くねえんだ！　いつまでも甘ちゃんでいられると思うなよ！！」

毎日のように同じセリフが叫ばれる。

プロになった阿笠は、朝から晩までの練習を繰り返す。

当たり前だがプロの世界は弱肉強食で、年なんか関係なく実力のあ
る者だけが生き残ることができる。

つまり、例えばまだ高校を卒業して1年と少ししか経っていない人
間でも実力があれば問題はないということだ。

「おい、良い加減にしろ。阿笠がお前に何をした？」

だが当然、阿笠のような自由奔放なプレーをする人間はチームワー
クを大切にはしないため、チームメイトの中にはよく思わない人も
いる。

特に阿笠にポジションと取られた人間は。

「蒲原さん……でもっ!!」

「でもない。阿笠に負けたくないならもっと努力しろ。それから阿笠。お前ももっと周りを見てプレーしろ」

「うっす」

若くて、それでいて日本の国民的スターでもあり、天真爛漫で自由な阿笠は標的にされやすい。

それを庇ってくれるのが、阿笠をスカウトした監督やキャプテンである蒲原、そして今は他の練習をしていて不在の阿笠の生涯の相棒、月影秋人だ。

同じリーグの中には阿笠を好いている人間も多数いるものだから、（というより好いている人間ばかりだが立场上阿笠を庇えない者が多い）特に問題はないようだ。

サッカーは野球のようにドラフト会議などは存在しなく、スカウトされるかテスト生からプロになるが、もちろん阿笠と秋人はスカウトだ。

高校を卒業する前、進路を決めるとき、阿笠はどうしようか迷った。オリンピックで活躍した阿笠をぜひ我がリーグにと外国からも誘い

があり、その中にはフランスのとあるリーグからの誘いもあった。

フランスといえば烈が行く国だ。

フランスに行けばいつだって会いたいときにすぐ烈に会うこともできるし、日本より恵まれた環境でサッカーをすることができる。

でも、阿笠はそれを選ばなかった。

離れても大丈夫だと烈と約束したし、やはりできるものなら永遠に秋人と一緒にサッカーをやっていたい。

高校で終わりだなんてそんな哀しいのは嫌だと、阿笠は県内のチームの誘いに応じた。

大学に進むという道もあったけど、つかさとの約束をはやく叶えたいがために進学はしなかったのだ。

そして、秋人も大学に進学していれば親友である櫻井春樹や彼女である雪原麻冬と同じ大学生活を送っていたのだが、大学でのサッカー部としての生活を送るよりも阿笠とJリーグに入っのサッカーを選んだ。

2人が同じチームに所属することを、「やっぱりな」「これからもコンビを見せて欲しい」という温かい目で見守る人もいれば、「世界が狭い」「依存しすぎ」という厳しい声を上げる人もいる。

まあ、それだけ世間から注目されているということだ。

周りからなんと云われようと、2人は気にするそぶりはなく笑っていた。

「はやいな。お前らが入ってきてもう1年か」

「はい。思ってたより全然大変ですね」

「お前が樂觀すぎなんだ」

「あはは」

キャプテンである蒲原はディフェンダーで、だからこそ阿笠とは衝突しない。

阿笠のことを可愛がってくれる良い先輩でもあり、阿笠も慕っている。

「まさか本当に入ってくるとはなー」

そのとき、後ろから抱きついてきたのは阿笠が最も尊敬する選手である武井だった。

「武井さん！」

昔阿笠と秋人が選抜の練習をサボってまでこのチームのリーグ戦を見に来たことを覚えているだろうか。

秋人と村田、阿笠と武井の4人が揃ったまさかのあの場面。

「やーったね。俺阿笠と一緒にやんの楽しみにしてたんだっつ」

武井は人懐っこい性格をしていて、人見知りという言葉を知らない。おまけに気に入った人間をとことん溺愛し、嫌いな人間にはとことん冷たいというある意味可愛らしい人だ。

もちろん阿笠のことをとても気に入っていて、もしさっきあの場に武井がいたら阿笠に罵声をあげせた人を殴りさえしていただろう。

まあ、もっともその人は武井がいないことを良いことに阿笠をいびっていたのだが、そんなことで怯む阿笠ではないと早く気付けば良いものを。

「俺もです。早く武井さんに追いつきたいなあ」
「うははっ。よく言うぜっ！」

武井は阿笠の頬を軽くつねりながら笑う。

「本当にな。ほらよ、タケ」

そう言いながら近づいてきたのは、武井の親友である村田だった。

村田は武井にタオルを投げて渡し、当たり前のように武井はそれを受け取って汗を拭く。

「よく2人一緒に来たな。まあ分かったことだけど」

「分かってたって、」

「だって俺らも同じだったからさ」

な、と村田は武井に相づちを打つ。

それに応えるかのように武井は笑った。

村田と武井も高校時代一緒にサッカーをやっていて、ちょうど阿笠と秋人のような関係だった。

恐らく小学生のときから選抜でずっと一緒だっただろう。

そこからずっと一緒にいることはかなり珍しい。

みんながみんなプロになれるわけではないのだ。

でも阿笠が武井を、秋人が村田を尊敬するくらい彼らは上手かった、ただそれだけ。

「俺らは、……約束したから」

「ん？」

「覚えてますか？ 秋人が突然ドイツに留学したこと」

高2の初冬、秋人は誰にも何も言わずにドイツへ留学していった。

そのことはニュースにもなり、しかもドイツのどこに行ったのかさ

え謎だとされた。

もちろん阿笠のところに報道陣が押し寄せたが、阿笠は決して口を開くことはなかった。

「ああ、あったな。んでバレンタインデーに帰ってきたんだよな」
「ああ！ あれね！ いや、あのシーンは最高だった」

思い出したように武井は声を張り上げる。

そう、行くのも突然ならば帰ってくるのも突然だった。

バレンタインの日に行われた高校のミスコンに阿笠がエスコート役として出場していたときに秋人が姿を現した。

武井が言っているのは、阿笠がペアの相手そっちのけで秋人に駆け寄り、思いきり抱きついた場面のこと。

「それは置いといてっ！ ……ずっと一緒だって約束してくれたんです。もう離れないって」

秋人とは恋敵だった。

秋人の恋人、雪原麻冬は中学時代の阿笠の彼女で高2の初秋によりを戻した。

麻冬が秋人を好きなことを知りながらも付き合っていたが、麻冬の幸せを願って阿笠から麻冬を振った。

そんな過去がありながらも、やはり秋人は一番の好敵手でありながら相棒だった。

秋人のいないグラウンドは寂しすぎて涙が出るほどに。

「そうだったな」

そう言いながら阿笠の頭を優しく撫でたのは村田だ。

阿笠が村田を見上げると、すごく優しい笑顔をしていた。

ミスコンは全国に流れ、YouTubeでも流されていた。

彼らのやりとりの一部始終はテレビを見ていた全ての人に見られたのだった。

秋人の言葉も、烈との絡みも、阿笠が泣いていたことも

そしてもちろん

「つかお前グランプリだったろ?!」

「ちよっ……それ言います?!」

「まさか阿笠がミス星陵とはなあ。さあすが」

「何がっ!!」

優しい笑顔を見せた村田とは正反対に、武井はおちやらけながらそう言い、阿笠の髪をグシャグシャと掻き乱す。

そう、阿笠がひょんなことからミス星陵に選ばれてしまったこともバレているのである。

……可哀想に。

「ああ、俺も見たな。ミスコンの中継」
「キャプテン」。もう良いですってえ」
「ははは」

約束したあの日から2年以上経つが、一度たりとも忘れたことはなかった。

阿笠にはその約束以上に大切なものはないし、秋人も麻冬との大学生活より自分をちゃんと選んでくれる。

が、やはり秋人には麻冬がいるように阿笠にも大事な人は必要だろう。

秋人には麻冬、春樹には夏実、烈には幼なじみ兼彼女の比護みかさ
がいるように。

まあ、何年も麻冬を想ってきたのだから例え吹っ切れていたとしても
そう簡単にはなかなか好きな人もできないだろう。

恋は永遠に続くとは言わないけれど、阿笠にもみんなが感じる幸せ
を与えたい。

ただそれだけ。

n
e
x
t

第3話【出会い】

「ちえー。こんな良い天気なのにみんな暇じゃないのかよ」

春、プロ2年目にして国民的大スターである阿笠大悟は久しぶりの練習休みの日だというのに街を歩いている。

せっかくなんだから遊ぼうと思っていたが、秋人は麻冬のところに行き烈は大学の授業があり、他はみんな練習三昧だったり忙しいようだ。

チームの同期や先輩は久々だからと休みたいようで、仕方なく阿笠は1人でブラブラすることにしたようだ。

車でドライブでもしようかと考えたが、1人で遠出しても虚しいだけ。

ならば馴れ親しんだ街を久しぶりに歩いてウィンドウショッピングするっていうのも悪くはない。

阿笠は黒めのジーンズに白いシャツの上に茶色いジャケットといったなかなかラフな格好をしていて、目眩ましのために一応サンングラスもかけている。

芸能人ではないが、高校時代から街などを歩くときはバレないように気を付けている。

試合などでテレビに出ていたため顔がバレると騒がれてしまうのだ。

「あ」

阿笠が途中見つけたのは、音楽関係の店だ。

主に楽譜や軽く楽器を置いてある店で、フルートが趣味の阿笠には打ってつけた。

高校の音楽祭や学園祭でフルートを吹き、音楽祭では優勝、学園祭でもクラスの出し物の客寄せに大いに貢献して喫茶部門で優勝を果たした。

サッカー部でのカラオケ大会でも優勝したし、歌もさることながらフルートをこなし、音楽は大の得意だ。

サッカーだけでなく音楽の才能があり、学生ときには成績優秀でこの甘いフェイスに甘いボイス、そしてこの性格は完璧すぎる。

天は彼に二物も三物も与えてしまったようだ。

「おーっ。懐かしな！ あはは、これやったやった」

阿笠が見つけたのはラブバラード特集で、男性ボーカルのラップ入りのものだった。

阿笠が今開いているのはファンモンの告白という楽譜のページで、「やった」と言っている理由は、ミスコンのあとのライブでこの曲をやったのだ。

阿笠が歌い、秋人はギター、麻冬がキーボード、夏実と春樹がダンサー、そして烈はドラムをたたいた。

たった一度きりの最初で最後の彼らだけの即興のライブだった。

「……懐かしー」

学園祭でスペシャルゲストとして秋人が歌ったキセキも含まれていて、なかなか思い出深いものがある。

気がつくと阿笠はその楽譜を持ってレジに並んでいた。

前15曲ほど入っているその冊子は2千円弱ほどのお手軽な値段だ。

それだけ買って阿笠は店を出て、再び歩き続けた。

どれくらい歩いたか分からないくらいに歩いた頃、大きなグラウンドがあるのが見えた。

実は大学のグラウンドだったのだが、そうとは知らない阿笠はノコノコとそこに入って行き、隅にあるベンチに座りながら木陰で休むことにした。

さっそくさつき買った楽譜を開いて眺めている。

フルート持ってくれば良かったと思うくらいすぐにも吹きたい衝動にかられるが、口ずさむ程度で我慢している。

グラウンドでは、このよく晴れた天気の中元氣に女の子たちがサッカーをしている。

今ではサークルで女子サッカー部さえあるようで、阿笠はチラッと女の子たちのほうを見る。

なかなか本格的なもので、遠目では顔も見えないが、その中でずば抜けて上手い子がいるのは分かる。

つい性でマジマジと見てしまう。

阿笠は楽譜をとじて置き、足を組みながら練習している女子たちを

見つめた。

ちなみにこの大学は麻冬と春樹が通っている大学だ。

あまりにも広い私立大学で、裏門と表門では自転車か何かを使わなきゃならない距離だ。

グラウンドは裏門側にあるため、用があるときは表門から入る阿笠は知らなくて当然。

ちなみに春樹たちはこの大学の部活に入っているわけではなく、それぞれコーチについて練習している。

ほとんど大学にはいなく、つまり大学の名前を背負っているだけで阿笠たちとあまり変わらないのだ。

「おー、すげえすげえ」

阿笠は楽しそうに声を弾ませている。

が、次の瞬間には阿笠は目を丸くして驚きの声を上げた。

「えっ……？ 俺の技……」

紅白戦をやっていて、その上手い女の子はどうやらフォワードだ。

そして、阿笠が天才と言われる由縁である数々の神業の1つをたった今阿笠が見ている前でやってみせた。

阿笠自身自分以外の人間がそれをやるとは思えないし、ましてや女の子ができるはずない。

いや、女の子でできるとしたらつかさくらいだ。

烈の彼女比護みかさの姉で、阿笠にサッカーを教えた人。

小学生のとき阿笠の目の前で交通事故で亡くなった阿笠の大切な幼なじみだ。

阿笠がびっくりしながらなおも見ていると、シュートしそこねたボールがふいに阿笠のほうに飛んできた。

「すいませーん！ ボール取ってくださいあい！」

そして、それを拾いに来た女の子こそが……

「——つかさ?!」

阿笠はボールをそっちのけにしてベンチから立ち上がり、サングラスを取って拾いに来た女の子に近寄る。

バツとその子の腕を掴みながらそう叫んだ。

「……阿笠……大悟！」

「つかさなのか?! だってつかさは死んでっ……」

見間違えではない。

確かにつかさにソックリな女の子だった。

あの幼いつかさがそのまま成長したような容姿。

大きなクリクリした瞳に少し童顔な顔、みかさはもう少し大人っぽい
がみかさも似ていると言えよう。

もともとみかさとつかさ自体ソックリではなかったが、どこことなく
似ているものはあった。

だが、この子は似ているなんて言葉ではおさまりきれないほど全く
同じ顔をしている。

「……人違いだよ」

「俺がつかさを見間違えるはずがない！」

「あたしはつかさじゃない」

「嘘だ！」

「嘘じゃないっ……」

いつの間にか阿笠につられてその子もムキになっている。

つかさではない……

ならば誰？

なぜこんなにも似ているのだろう。

他人の空似なんて言わせたくない。

顔も一緒だし、しかもサッカーをやっている。

それだけでなく阿笠と同じ技まで使えるのだ。

そんな女の子、比護つかさ以外にはいない。

だけど、比護つかさが死んだことを誰よりも知っているのも阿笠だ。

「……ごめん。取り乱した……」
「いえ、……」

阿笠は罰が悪そうに顔を反らし、サングラスをかけ直す。

そして、じゃあ……とだけ言って阿笠はその場から去ろうとするが、意外にもあの女の子がそれを止めた。

「……あなた、つかさのことどこまで知ってるの？」

「どこまでって……つかさは幼なじみだよ。俺にサッカー教えてくれた張本人だ」

「やっぱり……」

やっぱりという言葉に引かかった阿笠は振り向いて彼女を見た。

その子は、少しだけ切なそうに微笑んでいる。

「あと30分で練習終わるから待っててくれない？」

「え……」

「大学内だと目立つから、駅近のファミレスにいて」

女の子はそれだけ言うと、ボールを拾い上げてグラウンドに戻って行った。

正直方向音痴の阿笠はそのファミレスがどこなのかさえ分からないし、すでにここがどこなのかも理解していない。

「ここ大学なのか……」

どこをどう驚いたら良いのかさえ分からない状態だ。

だが、先程の言葉から彼女がつかさではないがつかさを知っていることは確実。

つかさの従姉妹か何かなのかもしれないが、彼女が阿笠と話したい様子なのは見てとれた。

とりあえず阿笠は彼女に言われた通り彼女を待つことに決めた。

n
e
x
t

第4話【動き出す運命】

道に迷い、近くを歩いていた見知らぬ人に教えてもらいながらようやく辿りついた約束の場所。

車で来れば良かったと阿笠は散々後悔したが、とりあえず先にコーヒーでも飲んでいようと注文した。

今は土曜日の午前で、じきに昼時になる。

そろそろファミレスも混んでくる頃のため、そろそろ視界が暗くて嫌になってきているがサングラスが外せない。

目立つことを嫌う阿笠（最もその綺麗な容姿や華やかなプレーで目立っているが）は、街中などでファンが近寄ってくることをさえ好まない。

握手もあまりしたくないし、サインを頼まれると内心嫌で嫌でたまらない。

面倒くさいことが嫌いなだけなのだが。

「おまたせ」

そろそろ眠くなつてうとうとしてたとき、ようやく例の彼女がやってきた。

練習だけで帰るつもりだったのだろう、彼女は上下ジャージを着ている。

背中には中宮大学体育学部蹴球部と書かれている。

体育学部とは、つまり麻冬や春樹と同じ学部だ。

「わ、すごいな。中宮大の体育学部かよ」

「あはは、まあね。なんとか推薦で入れてくれたから」

彼女は阿笠の正面に座る。

肩につかない程度の焦げ茶色の髪が綺麗だ。

阿笠は金に近い茶髪をしているから、阿笠の近くにいると童顔ではあるが大人っぽく見える気もする。

彼女もとりあえずアイステイーを注文しようとするが、時間帶的に2人は昼飯を頼むことにした。

注文し終えてからしばし沈黙が流れるが、決して気まずいと思えないのはやはり彼女の顔のせいだろうか。

「名前聞いて良い？」

「羽柴綾女。大学2年」

「あ、同じ年」

「あは、そうね」

綾女というその女の子は気さくに笑った。

つかさは元気で男勝りな女の子だったが、綾女は明るくて朗らかな感じだ。

「で、つかはとはどんな関係なの？」

「つかさは……」

いきなり阿笠は本題に入ろうとするが、綾女は言葉を濁らす。

やはり綾女はつかさを知る人物だ。

つかさを知っている人間なんてそうそういない。

小さい頃に亡くなったせいでそこまで交友があったわけでもないし、同級生たちの記憶からもそろそろ消えてしまっているかもしれない。

覚えているのは、幼なじみだった阿笠や妹のみかさ、家族くらいではなかろうか。

「小さい頃に一度だけ会ったことがあるの」

「え、」

「偶然公園でね。一緒にサッカーしたんだ」

「それだけ？」

「うん」

運ばれてきたアイスティーをかきまぜながら、綾女は薄ら笑いを浮かべている。

「同じ顔だったしね。名前だけ教えてもらって……そのあと会うことはなかったかな」

「死んだことは？」

「……知らなかった」

それにしてはあまり驚いていなかったことを阿笠は不審に思うが、特に疑う意味もなかったので聞き流すことにした。

見れば見るほどつかさにソックリな綾女は、阿笠の心を次第に揺らし始めていた。

今でもきちんと墓参りするほど、つかさの妹のみかさを大事に想うほどにつかさのことを大切にしてきた。

もう二度と会えないはずのつかさが、もう二度と笑いかけてくれなはずのつかさの空似が今阿笠の目の前にいる。

懐かしささえ込み上げてしまうほどに。

「そう……亡くなったの」

「……君はいつからサッカーをしているの？」

「いつから、と聞かれれば生まれたときからかな。父がサッカー大好きで小さい頃からやってたの」

つかさの父も学生るときサッカー部だったそうだ。

「じゃあ、君がやっていた技は？」

「え？」

「さっきグラウンドでやってたよね？ 俺と同じ技」

「あれはあなたの技を真似ただけよ」

綾女の話にはこれと言って矛盾することはない。

それらしいことを言っているし嘘だなと思える部分も見当たらない。

だけど、時折苦笑した顔を見せる彼女に違和感を覚える。

まるで後ろめたいことがあるかのように、彼女は笑って誤魔化しているように見える。

「真似……ね」

そう簡単に真似できるものなら日本中のサッカー小僧がとくにやっている。

難易度が高いものばかりを好む阿笠にはその技の大変さが十分分かる。

見ただけでできてしまうようなものじゃないし、何度も練習しなきゃ使いこなせない。

ならもし綾女が幾日もかけて練習したとしたら？

いったい何のために。

「ね、良かったらつかさの話きかせてくれない？」
「良いよ」

さっきまで苦笑いしてた綾女が今度は微笑んだ。

阿笠は気軽に承諾し、阿笠が知っている限りのつかさの話をしあげた。

阿笠との馴れ初めや、つかさが技を教えてくれたこと、つかさの性格、そして阿笠がプロになると決めたきっかけであるつかさの死。

阿笠はトラックにひかれて今にも死にそうなつかさと、絶対にプロ

になると約束をした。

女の子なのにプロサッカー選手になりたいと言っていたつかさの夢を代わりに叶えると誓ったのだ。

それから、妹のみかさのことも話した。

どんな子なのかとか、みかさの彼氏の烈についてなども事細かに。

笑いも含めながら話したが、綾女は本当に嬉しそうに阿笠の話聞いていた。

まるで自分が褒められているかのように笑っていて、阿笠はどことなく照れ臭くもなった。

綾女は時折相づちを打つだけで、あとは阿笠の話をただ黙って聞いている。

阿笠が話を始めて1時間か2時間くらいは経った頃、綾女の携帯が鳴った。

綾女は携帯を開いて電話に出たが、一言二言喋っただけですぐに電話を切った。

「ごめん。親からの呼び出しだ。行かないと」

「あ、そうなんだ。了解」

綾女は荷物を持って立ち上がり、伝票をつかんだ。

「あ、良いよ。ここは俺が奢る」

「え、でも」

「つかさのこと知ってる人あんまないから。ちょっと嬉しかったんだ。だからそのお礼」

阿笠はニコツと笑いながらそう言う。

サングラスをかけているため表情はいまいち分からないが、綾女には阿笠が本当にそう思っているとなんとなく分かり、お礼を言って店を出て行った。

阿笠は走って去っていく綾女の後ろ姿を少し見て、まだ残っているお代わりをしたコーヒーを口に運んだ。

……このことを烈やみかさに言うべきだろうか。

でも、本当に他人の空似だっていうだけなら特に言う必要はない。

「あ。連絡先くらい聞けば良かった」

阿笠はポツリとそう呟く。

ついさっき初めて出会ったばかりの、ちょっと話をした程度の女の子。

それくらいなら大したことないことだし、また会う約束をしたわけでもないから今後特に会う予定なんかないし、知らない人なのだから会わない可能性のほうが高いだろう。

だけど、感じずにはいられない。

羽柴綾女が阿笠と同じ年で、つかさのことを知っている上につかさと同じ顔をしていて、そしてサッカーをしている。

あの中宮大の運動部に推薦で入れるほどの実力がある。

ならば、感じずにはいられないだろう。

運命を。

n
e
x
t

第5話【波乱の幕開け】

その後1ヶ月ほどは特に何事もなく過ぎて行った。

新しい後輩もできて、サッカーにより一層磨きがかかる時期で、土日はリーグ戦やら大会やらで大忙しだ。

もともと休日なんてそうそうないし、出かけようにも出かけられないのが実際。

昨日ニュースで6月初旬に行われるワールドカップの日本代表23選手が報道された。

なかなか面白いメンバーが集まっている。

欧州組のベテランはもちろん選ばれているが、フォワード5名の中には武井と阿笠、ミッドフィルダー7名の中に村田と秋人、そしてディフェンダー8名の中に蒲原が選ばれた。

ゴールキーパー3名で計23名とされているが、同じチームから5人もの選手が代表として選ばれているのだから興味深い。

この報道に、阿笠の友人や家族からたくさんの電話やメールが鳴り響いた。

スタメンで入れるかどうかは微妙だが、メンバーに選ばれた以上どこかで活躍する場面はあるかもしれないのだから素晴らしいことだ。

「あーきとー。飯食わしてえ」

今日も一日練習を終えた阿笠は、烈が1人暮らししているマンションに寄って少し話をしたのち、みかさと約束がある烈を残して今度は自分のマンションへと戻る。

烈は1人暮らしにも関わらず4LDKの広さで、まあ絵画などを置くためには必要なスペースなのかもしれない。

阿笠と秋人は同じマンションに住んでいて、階は阿笠が5階で秋人が7階なのだが、阿笠はすでに自分の部屋には戻ったりしていない。ほとんどを秋人の部屋で過ごしているといっても過言ではない。

「おま……インターフォンくらい鳴らせよ」

キッチンに立って料理をしていた秋人が呆れながら言う。

そうは言うが、勝手に入ってくる阿笠のために秋人は玄関を開けているのだ。

それを知っている阿笠は自分が入ってからちゃんと鍵をしめるようにしている。

「わ。ビーフシチューだあ！」

阿笠は皿を出すことも箸を並べることもなく、秋人が用意するのをテーブルに座って待っている。

そう、阿笠は面倒くさがりのため家事を全然しない。

家が裕福なため何不自由なく暮らしてきたし、そのせいで家のことなど1つもしてこなかった。

洗濯をしたことも掃除をしたこともなく、ましてや料理なんてもつてのほか。

放っておくと部屋は汚れ、食器は割られ、洗濯にかけた服すら干せない始末だ。

秋人だって家事は得意とは言えないが、人並みにはできるし器用な奴だから慣れれば簡単にこなすようになる。

「ほらよ。食おうぜ」

そんな阿笠が1人暮らしをするにあたって一番心配したのが烈だ。

烈と同じマンションにすれば良いが、烈のマンションは広すぎるため単身の阿笠にその広さは必要ない。

だから烈は秋人に阿笠を託したのである。

「いっただきまーす」

阿笠は嬉しそうに手を合わせて、秋人が作った夕飯を食べ始める。

このマンションは2LDKで、2部屋あるうちの1部屋はすでに阿笠の部屋となっている。

ベッドこそはないが、ソファベッドが置いてあるため問題はなく、必要な服や日用品はすべて揃っている。

阿笠が5階の自分の部屋に帰ることはほとんどないわけだ。

「そうだ。俺ねえ、最近誰かに後つけられてるんだ」

「は?!」

「たぶんだけどねー。でも今日は烈のどこ寄ってきたし大丈夫だったけど」

阿笠は重要なことを笑いながらサラッと流している。

そんなことよりご飯を食べることのほうが大事と言わんばかりに夢中で飯を食べているが、秋人は箸を置いて阿笠をマジマジと見る。

「ちよっ、箸置け! それで?」

「えっ。それだけだよ?」

「じゃあいつから?」

「んー……3週間くらい前からかなあ」

「なんで言わねえんだよ!」

まさか秋人が怒るとは思っていなかった阿笠は目を丸くしている。

なんで怒るの?なんて素っ頓狂なことを言うと、阿笠は額に手を当てながら深くため息をつく。

「お前ね、無防備すぎんだよ」

「？」

「俺らを恨む奴くらいいると思うぜ？ ポジション奪われた奴、代表に入れなかった奴。それから私怨の可能性もあるし熱狂的なファンかもしれない」

「おお」

「真面目に聞けっ！」

秋人はテーブルをバンッと叩く。

さすがに阿笠はごめんごめんと舌を出しながら笑った。

昔からそうだ。

他人には興味ないが大事な友人のことになると必死な秋人。

高校のときも部長としてかなりその役目を全うしてきたのに対し、阿笠は副部長とは名ばかりで特に何もしてこなかった。

部員を指導することも嫌がり、常に秋人を困らせていたのだ。

「とにかく。明日からは用があるとき以外は俺と行動すること」

「いつもしてんじゃない」

「だから行き帰りも。俺が車出すから。お前はとりあえず1人にな

るな」

「……俺だって男なのに」

「お前は華奢すぎる」

ビシッと秋人がそう言うのと阿笠は何も言えなくなる。

確かに阿笠は華奢ながらきちんと筋肉はついているし、プロサッカー選手だけあって身長も180近くはあるし、実際秋人とそう変わらない体格だ。

だがケンカ知らずのお坊っちゃんである上に根が純粹であるがゆえ秋人の言う通り無防備である。

烈（そういえばまだ本編には出てきてない）に守られてばかりの阿笠よりは秋人のほうが数倍頼りになる。

「麻冬は良いの？」

「今カナダだから」

「そっか。あ、そういえばポスト見えてきてないや」

「なんでポスト？」

「ばあちゃんが絵葉書送ってきたらしい」

食べ終わったら見てくるか、なんて言った阿笠に秋人は突っ込む。

「俺が行く」

「えっ、良いよ」

「だから！ 危ないだろ？」

「うー……」

納得できるようなできないような複雑な心境になるが、ここまで自分のことを思ってくれているのだからと阿笠は素直に従うことにした。

しばらくして2人はなかなかの量の夕食を全て平らげ、阿笠も使用した食器くらいは流しに置きに行く。

秋人が食器を洗っている間に阿笠は風呂を沸かし、あとは居間でテレビを見ている。

近頃のバラエティはなかなか楽しいし、ときたま夏実や麻冬や春樹も出てくるものだから面白い。

クイズでスポーツチームと称したり、スポーツ系のバラエティは必見だ。

今阿笠が見ているのはお笑い芸人ばかりの番組だが、自然と笑いが込み上げてくる。

愉快にテレビを見ている阿笠を置いて、食器を洗い終えた秋人は阿笠のポストを見に行くことにした。

家を出て、エレベーターを使って下まで降りる。

特に誰かとすれ違うことなく下まで来て、自分のポストに何か入っていないか確認してから阿笠のポストを探した。

「……何ヶ月分だよ」

秋人はさすがにため息も出ないほどに呆れてポストを見つめた。

あと少しで溢れてしまいそうなくらいギュウギュウに押し込められていて、扉を開けたら一気に落ちてきそうだ。

秋人はそこら辺をキョロキョロと見渡し、落ちていたビニール袋を拾い上げ、少しずつ中身を袋に入れていく。

なかなか地道な作業だがこうしないと散らばって面倒なことになる。

「これか。ばあちゃんの絵葉書……………えっ」

絵葉書を無造作に袋に入れたあと、次にギュッと握りながら掴んだ茶封筒は違和感があった。

秋人がそつと手を開くと、平側の指の第2間接が3本ほどぽっくり切れて血が溢れていた。

思わず身震いがして茶封筒を落とすと、それはカランツと何か金属製のものが入っているかのような音をたてた。

おそらくカッターの刃でも入っていたのだろう。

これはさすがに秋人もびっくりして固まってしまう。

どうしようか、それ以前にもしかして相当やばいんじゃないか。

まさかまだ他にもポストに入っているかもしれない。

いろんな不安がよぎったが、とりあえず秋人は無我夢中で携帯をポケットから取り出した。

そしてアドレス帳からある人物を探しだし、すぐさま彼に電話をかける。

何回かのコールのあと、彼は眠そうな声で電話に出た。

「ああ……俺」

『おう。どうした?』

「阿笠やばいことに巻き込まれてるかしんねえ」

冷や汗をたらしながら、秋人は自分の傷ついた手を見つめていた。

n
e
x
t

第6話【脅迫状】

「阿笠、俺ちよつと出かけ……………ああ、いや……………一緒に行こう」

「え？ どこに？」

「烈んところ」

秋人は急いで部屋に戻ってきて、ポストに入っていた全てのものが入っているスーパードッグ袋を握りしめながら息を切らしている。

「でも烈今みかさと、」

「良いから良いから。ほら、行くぞっ」

居間で寝そべっていた阿笠の腕をグイッと引っ張り、秋人は無理やり阿笠を連れていこうとする。

が、秋人の手が血だらけなのを見た阿笠が叫び声を上げて秋人を止めた。

夢中だった秋人はぱっくり切ってしまった指のことなんて忘れていたようだ。

「ああ……………ちよつと切っちゃっただけ」

「だって……………これ酷いよ?! 手当てする!」

阿笠は救急箱を取り出してきて、丁寧に血を拭き取る。

こんなことしている場合ではないのだが、阿笠が心配するものだから秋人は大人しく阿笠に手当てしてもらうことにした。

消毒をしたあと、傷口に当てる専用のガーゼを割れているところに当て、その上を包帯で巻いた。

右の中3本の指をそれぞれ包帯で綺麗に巻き終え、手当ては終わる。

阿笠は救急箱をもとあったところに戻して、息をつく。

「大丈夫？ 病院行かないとね。明日」

「おう。んじゃ行くぞ」

それだけ答えて、秋人は再び阿笠の腕を引っ張る。

なかなか強引で、阿笠が何を言っても秋人は無視して2人は駐車場に向かい、秋人の車に乗り込んだ。

仕方なく阿笠は諦めて従うことにし、秋人はすぐに車を走らせて烈

のところへと向かう。

烈のマンションまでは車で5分程度で、秋人がかなり飛ばしていたため2分くらいで着いてしまった。

適当に駐車場に車を止めて、助手席から降りてきた阿笠を守るように肩に手を置いて軽く抱きよせながら歩く。

「あ、秋人？ 俺浮気はちょっと」

「あほ……！ 浮気のほうが数千倍マシだっ」

秋人はキョロキョロと剣幕な顔で近くを見回している。

いつもと雰囲気の違い秋人に、さすがの阿笠も不審に感じている。

阿笠はふと秋人が持っている袋に気付き、それが何か尋ねたが秋人は適当にはぐらかして流した。

ここまで焦っている秋人を見るのは久しぶりだ。

秋人が焦るのには必ず何か大きなことがあることを阿笠は知っている。

だが、秋人が何も言わないのでは阿笠もどうしようもできない。

とにかく阿笠は秋人に肩を抱かれながら、そして家を出るときに秋人に被された帽子を深く被りながら烈の部屋がある9階へと向かった。

オートロック式で設備が十分なマンションで、それは阿笠たちのマンションと同じだが玄関で番号を押して部屋主に玄関の鍵を開けてもらうやり方だ。

マンションにさえ入ってしまえばストーカーがいようがどうしようがこっちのもの。

秋人の訪問にすぐに烈は応答し、2人は急いで中へと入りエレベーターに乗り込む。

「はぁ……」

秋人は阿笠から手を離して、安堵のため息を漏らす。

「秋人？」

「みかさちゃんと……ちょっと遊んでくれ。勉強見て欲しいそう
だ」

「え、うん？ 秋人は烈に何の用事なの？」

「大した用じゃないよ。借りたい雑誌とかCDがあるだけ」
「ふうん？」

即興にはなかなかの言い訳で、阿笠はこれといって疑うことをせずに鵜呑みにした。

エレベーターが9階につくと、2人はエレベーターから降りて烈の部屋の前まで行き、インターフォンを押す。

まもなく驚いて顔が少し青くなってる烈がドアを開けて出てきた。

「阿笠っ……何もないか?! 無事か?!」

「え? 無事だよ。今日も足立先輩に文句言われたくらい」

「そっ……か、そっか……。足立にまた言われたか。……あー……」

烈は脱力したかのようにその場にしゃがみ込み、頭を抱えた。

何もなく良かったと、本気で安心しているようだ。

その後ろからひょっこり烈の彼女であるみかさが顔を出し、とりあえずみんなに上がるように促した。

烈から勉強を教えてもらうように言われたのだろう、みかさは阿笠

とすでにみかさの部屋化している1つの部屋へと入っていく。

4LDKもあれば、1つくらいみかが使っていても何の問題もないだろう。

比護みかさは今華岡女学院高等部の3年生で、受験生でもある。

大学までそのままエスカレーターで行けるが、もっと広い世界を知るために外部受験をすることに決めたようだ。

比護つかさ、阿笠にサッカーを教えた女の子の妹で、阿笠とも幼なじみの関係にあたる。

烈とは2年と少し前に結婚の約束もした仲だ。

みかさの部屋で楽しく勉強という名のお喋り会をしている阿笠をよそに、秋人と烈はみかさの部屋から一番遠い部屋に入って話をすることにした。

「で、どういふことよ」

2人は適当にカーペットの上に腰をおろしている。

そうそう、烈の紹介がまだだった。

愛川烈は阿笠の親友で、中学高校が同じ学校だった。

小学生のときにサッカーの選抜に選ばれたことで2人は知り合い、最初はお互いのプレーが気に入らなすぎて口もきかないほどだったが、ある日キレた2人が勝負をして引き分けをしたことで2人は和解し、その日から親友となった。

烈はゴールキーパーとして大活躍を見せ、その実力は今でも阿笠とPKをすれば烈が阿笠を止める確率は五分五分という素晴らしいほど。

高校時代はPK対決で秋人にも勝った。

サッカーは小学生までで、中学も高校もサッカー部には入ってなかったのにだ。

画家になることを志していたためだが、それでもどこかでサッカーと繋がっておきたい気持ちもあるのか河川敷で一般組としてサッカーをしたり、少年サッカーのコーチをしていたりもした。

阿笠はさしずめ烈とみかさのキューピッドである。

阿笠とみかさが幼なじみだったからこそ、烈はみかさを知り合えた。

「ああ。とりあえずさ、これ見て」

秋人は持ってきた袋から中身を全て出した。

「なんだこの量……」

「滞納してんだよ、あいつ」

山のように多く、そのほとんどが勧誘やらチラシやら光熱費関係のものだ。

そして、秋人は先ほどの茶封筒を取り出した。

秋人が一度握りしめたため封筒は破けていて、破けたところからカッターの刃が飛び出して秋人の指を切ったのだと考えられる。

「！　これ……！！」

「気付かなかったからさ、そのせいでこれだよ」

秋人は阿笠に手当てしてもらった指を烈に見せながら言った。

「阿笠のこと好きな女かとも思ったけど、どうみても違うな」

「恨み、か？」

「とりあえず他にもあるかもしれない。探そう」

2人は山のようにある手紙たちをあさり、それらしきものがないかを調べていく。

大半はいらないような宣伝のチラシで、時折阿笠当ての友人か何かからの手紙があり、そして残りの5通ほどは送り主名なしの阿笠の名前すら書かれていない封筒だった。

明らかに怪しいし茶封筒であることから疑われないわけにはいかない。

秋人と烈は息を飲んで、お互いの顔を見つめあう。

「……開けるか」

「だな」

2人は一斉に5通の封を開けた。

すると、中からは3つ折りにされた手紙が出てきた。

とりあえず開いてみると、それらはすべて同一犯だと思える手口で、新聞の文字を切り抜いて作成された手紙だった。

「秘密を探るな」

「これ以上関わるな」

「常にお前を監視している」

「これは脅しではない。知られたそのときは二度と人前に出られないと思え」

「比護みかさとの縁も切れ」

2人は開けた手紙を交互に読み上げていく。

予想以上に事が深刻なことで、シャレにならない言葉、そして阿笠が何らかの事件に巻き込まれているであろうことに2人はサーツと顔を青くする。

カッターの刃は警告ということだろうか。

最近阿笠が後をつけられていると言っていたことも本当のようだ。

「何だこれ……。警察行くか？」

「でも相当やばいぞ……。大人しくしてれば何もしいってことだろ……。？」

「でも現に秋人が怪我してっ、」

「……でもなんでみかさちゃんまで」

謎だらけの脅迫状。

明らかに悪意を込めた脅しとは言えない警告。

2人は静かな空間でただ唾を飲むことしかできなかった。

n
e
x
t

第7話【脅迫状2】

阿笠から何があったか聞き出そうか迷ったり、比護家との関係も見直そうかなど秋人と烈はいろいろ話し合うが、とにかくここは犯人の言うようにそっとしておいたほうが無難だと踏んだ。

ひとまず阿笠には秋人がついてるし、警告通りみかさにも近づけないようにする。

そしてこの脅迫状のことは阿笠には言わないでおくということに話はまとまった。

「大丈夫かな……。くそっ……。側にいれないのがもどかしい」

烈は青い瞳を手で隠しながら悔しそうに言う。

学生時代から赤髪にカラコン、ピアスまでつけて更に制服すら着ることがなかった自由でマイペースな烈が一番大切にしていたもの

それは、たった1人の親友だった。

「烈……俺頑張るから。だから心配すんな。代わりにみかさちゃん頼むな」

「……ああ」

秋人はどうにか烈を励まそうと必死だ。

烈の気持ちが痛いほど分かるのだろう。

秋人にも親友はいるが、今は少し離れたところにいるから連絡しか取れない状態だ。

櫻井春樹は、不器用な秋人の気持ちをいつだって一番に理解してくれる優しい男。

話がついたところで、2人は脅迫状以外のものを再び袋に入れなおし、脅迫状は阿笠に見つからないように机の引き出しの中にしまい、更に鍵をかけた。

あまり長引くと2人も不審に思うだろうと、秋人はそこら辺にあった雑誌を拝借し、烈と共にみかさの部屋へと向かう。

特に話し声も聞こえてこないし、何をしてるんだろうと思いつながら部屋をノックすると、みかが応答した。

「入るぞー」

部屋に入ると、そこにはみかに膝枕してもらいながらスヤスヤ寝ている阿笠の姿があった。

「……………何してんの？」

予想していなかったことに2人は言葉を失うが、そもそも考えれば考えるほどすごいことだ。

烈の彼女とはいえ女の子と2人きりで部屋にいるのに、男の阿笠のほうが目撃してしまったというのは。

いや、幼なじみなんだから変な気も起こらないのかもしれないが、彼女でもない人に膝枕はないだろう。

「ふふ。疲れてるみたい。秋人さんもう帰る？」

「おう。そろそろ」

「じゃあこのまま連れてってくれるかな」

静かに寝息を立てながら気持ち良さそうに寝ている阿笠を、愛しそ
うにみかさは見ている。

髪を優しく撫でる姿は、なんというか兄妹（姉弟か？）のようだ。

「……みかさと阿笠っていつから幼なじみ？」

「そうね、お姉ちゃんがいなくなるちよっと前からかな」

烈の質問に答えたみかさに、秋人が「お姉ちゃん？」と尋ねた。

みかさの姉で阿笠の幼なじみのつかさを知る人は、烈と阿笠とみか
さくらいで、更に生きてるつかさを知るのは阿笠とみかさだけだ。

阿笠はまだ秋人にすらつかさのことを話していない。

「ああ、まだ知らなかったな。秋人は」

そう言う、烈はとりあえず座ろうぜと言ひ烈が買つてあげたみかさのベッドに腰を下ろした。

秋人もつられてその辺に腰を下ろす。

「ん……」

そのとき阿笠は少し寝返りを打つが、どうやらまだ夢の中。

烈はみかさに代わるよと言ひ、阿笠の肩をそつと持ち上げてみかさをどかせ、あぐらをかいた烈の腿の上にクッションを置いて阿笠の頭を乗せた。

今度は烈が阿笠を膝枕している体勢になり、みかさは烈の隣に座る。

そこら辺に適当に寝かせておけば良いのに、そうしないところが烈の愛情のある証拠。

「何から話そうか。みかさには俺らと同じ年の姉がいた。それが比護つかさ」

「いなくなつたって、」

「小2のとき亡くなったんだ。阿笠と公園でサッカーしてるときに、道に転がってったボール拾いに行ってトラックにひかれて……」

烈が横目でチラッとみかさを見ると、みかさはクッションを抱きながら無表情でいる。

つかさが死んでからもう10年以上になるか。

それとも、まだ10年と言うべきか。

「阿笠の目の前で息を引き取ったんだ。そのときに……彼女の代わりにプロになるって約束もしたらしい」

「小2で……」

「永遠に大事な人なんだよ。つかさちゃんは。阿笠にとって」

何があっても、つかさとの約束だけは果たそうと必死だった。

高2のとき秋人に裏切られて言葉すら話せなくて1人では立つことすらままならなかったことがあった。

だが、そんな状態でもサッカーだけは忘れずに練習をしようとしていた。

部活行かなきゃ、と言って部活動に参加したのだった。

つまり、どんなときでもつかさとした約束が阿笠を束縛してしまうのだ。

「なるほど。で、そのつかさちゃんの妹がみかさちゃんなわけか」
「うん、」

そこでようやくみかさも返事を返した。

「大悟さんにサッカー教えたのも、いろんな技を教えたのもお姉ちゃんなの」
「えっ」

サッカーを教えたっていうだけならまだ驚かない。

子どものときの話だから、どうせ無邪気にボールを追いかけてたくらいだろうと。

だが技を教えたのがつかさというのなら話は別だ。

もちろん、今の阿笠が使っている技はつかさから教えられたものの応用ではあるが、その根源が幼い少女であるのなら信じられない。

「正しくは……技がたくさんかかれたノートを大悟くんにあげたの。たくさん教える時間はなかったから、ね」

「つかさちゃんって……何者なわけ？」

「父が学生時代サッカーやってて、父が姉にサッカーを教えたの」

それだけ？

秋人は心の中でそう呟くが、なんとなく聞き返せない。

一応つかさのことを聞けたし烈たちも一通り教えたので、これでの話題は終わりになる。

そしてやはり気になるのは、阿笠への脅迫状になぜみかさの名前が出てくるのかだ。

阿笠が2人きりでみかさに会うことはそんなに多くないし、それ以外は烈と一緒にだったりもつと他にも人がいたりするときだ。

阿笠がここ3週間くらいおかしいと言っていたことから考えても、最近みかさと何かあったとしか考えられない。

犯人は、みかさと阿笠が親交があると、それも最近知ったばかりだと思ふのが筋だろう。

「みかさ、最近阿笠と何かあった？」

「ううん？」

「じゃあ阿笠と交えて何かあったりとか……」

「ええ？ 何もないよ。それに最近は烈くんと一緒に会うくらいだし」

烈と秋人は顔を見合わせた。

いったい犯人の目的はなんなのだろうか。

まったくもって理解できないが、少なくともみかさにも今のところ害はないようだ。

とりあえず烈にはしばらくみかさを見守ってもらおうという方向で片付き、そろそろ夜も遅いからと秋人と阿笠は帰ることにした。

阿笠は3人が話している間もスヤスヤと気持ちよさそうに寝ていて、帰ろうとしている今も起きる気配はない。

だが、烈も秋人も阿笠にベタ甘なものだから阿笠を起こすような真似はしないで、阿笠をおぶっていくことをした。

烈とみかさにあいさつをして秋人は阿笠をおぶったまま部屋を出、そのままマンションから去り駐車場へと向かう。

阿笠を後部座席に何とか乗せて、秋人も運転席に乗り込んで車を走らせた。

ただの脅し文句かもしれないが、こうしている今も見張られているのかと考えるとゾツとする。

泣き虫で精神が弱くて、でもどこか意地っぱりで無邪気な阿笠にこのことを知られたら人前に出れなくなってしまうかもしれない。

とにかくみかさとは当分会わせないようにし、おさまるのを待つしかない。

「ん？」

深夜、ほとんど車なんか通っていないのに信号はいちいち変わるもので、秋人は赤信号待ちをしていた。

窓を開けて、ふちに腕を乗せて頭を傾けたような体勢でいると、ふと向こうから走ってきた人と目があつた。

「え？ あっ、月影くん」

それは見知らぬ人で、秋人は素顔をさらしたままだったので内心慌てたが、今更どうしようもない。

あいにく信号もまだ変わる気配はないし、しかもその人は秋人と目が合ったとたん走るのをやめて近づいてきた。

「どうも。ジョギング？ 危ないぜ。こんな時間に」

「いつもやってるから平気よ」

「へえ。趣味？」

秋人が知らない人とこんな風に話すことはめったにないが、夜中ということでハイになっているのか会話を続ける。

「部活やってるの。サッカー」

「サッカー？ 高校生……じゃないよな。もしかして中宮大？」

「当たり前」

「すげえじゃん。何年？」

「2年」

サッカーをしている女の子とはほとんど面識がない秋人は、なぜか妙に嬉しくなる。

しかもあの中宮大のサッカー部ともなれば強豪も強豪で、日本でも指折りであるからさらにテンションが上がったのだろう。

「じゃ年は同じか。ポジは？」

「フォワードよ」

「フォワード！ じゃ阿笠と同じか。今度阿笠と会わせたいなあ」

「阿笠くんなら前に会ったわよ」

え？ と聞き返したとき、信号はようやく青に変わり、しかも悪いことに秋人の後ろに車が来てしまった。

車がいなければこのまま会話を続けられたが、そうもいかないのだから秋人は仕方なく会話を中断せざるを得なかった。

「じゃあな」

「ええ」

2人はそれだけ言い、お互いに別の方向へとまた向かう。

秋人は気分よさげに鼻歌を歌っている。

そして、ジョギングをしていた中宮大学サッカー部の彼女は、肩につかない程度のこげ茶色の髪の毛を揺らしながら再び走っていた。

n
e
x
t

第8話【約束】

「黙ってたわけじゃないんだよー？」

「ん」

「たださ、なんか同情とかされそうでヤダったんだ」

今日も一日練習が始まり、秋人と阿笠はともにウォーミングアップとしてグラウンドを走っている。

今日はなかなかの晴天で、むしろ暑いくらいだ。

5月でこれでは夏はどうなってしまうことやら。

ここは静岡で、基本的に日本の中でも住みやすい場所ではあるし、そこまで暑くなることも寒くなることもない。

隣の山梨のような盆地なんかと比べると数段良い環境のはずが、最近は温暖化やら何やらのせいでそうもいかない。

「つかさのこと可哀想だねとか、代わりに夢を叶えるなんて重荷だね、とか……」

秋人はどうやら阿笠につかさのことを烈やみかさから聞いたと言ったようだ。

そう言われた阿笠は意外にも驚いたりはず、すんなり受け入れていた。

烈やみかさが進んで話したのなら怒る必要もない。

「でもつかさの夢は俺の夢だよ。だから、」

「同情なんかするかよ」

「え？」

「そのために今こうして一緒にいられんだ。むしろ感謝だな」

秋人は少しばかり笑ってそう言った。

秋人の笑顔に安堵したのか、阿笠もつられて笑う。

そんな2人の肩に手を回してきたのは、後ろから走ってきた武井・村田コンビだ。

武井は阿笠の、村田が秋人の首に手を回したのだ。

「何だ、余裕じゃんか」

「代表に選ばれちゃって受かれてまちゅか」

当然後者は武井のセリフであり、驚いた阿笠と秋人はつい立ち止まる。

「もー。止めてください」

「余裕のわけないじゃないですかあ」

2人が口を尖らせながら文句を言うと、武井と村田は楽しげに笑いながら「そりゃそうだ」と肯定する。

この2人も代表に選ばれていて、スタメン確実だ。

日本には必須の人材であることは確かで、なぜ海外へ行かないのか不思議なくらいだがそんなのは簡単だ。

2人一緒にサッカーをやっていたいからである。

同じ日本にいればまだリーグ戦や大会で顔を合わせることはあるが、どちらかが海外に行けばそれも不可能。

同じ国にいけるなんて保証はどこにもないからだ。

「そういえばさ、お前ら一緒に住んでんだっけ？」

「はあ、まあ一応同じマンションで部屋は違いますが俺が秋人の部屋に住み着いてて、」

つい立ち止まって世間話をしていた4人だが、蒲原のギロツと睨む目に恐れてストレッチをしているフリをし始める。

こんないい加減な人たちが本当にプロなのかは疑問だが、実力があるのは否めない。

「通い妻？」

武井はチラッと村田を見ながら笑って尋ねる。

「阿笠は通い夫です。俺が家事するんで」

「ああ、俺んところは俺がタケの部屋で家事をしてるがな」

「へえ、村田さんが？ お互い大変っすね」

「本当にな」

武井と村田も2人と似たような境遇であるらしい。

2人は別のアパートを借りているが、すでに村田が武井のところに住んでいる。

武井も阿笠と同じで家事を全くしない男で、昔から親友の村田はよくそれを知っているせいだろう。

秋人と村田はクールなところが似ているが、村田は大人の威厳があるのに対して秋人はただ興味ないことに無関心なだけ。

武井はおちゃらけているところがあり、軽いイメージもあるが憎めない人だ。

高校時代、阿笠は天才と呼ばれた。

その実力は誰が見ても明らかで神々しい技が扱える彼はどうしたって天才としか言いようがない。

また、秋人はその美しい動きに魅せられてカリスマと言われた。

敵だけでなく味方さえ立ち止まってしまふことがある彼のプレーは
繊細で美しい。

高校卒業したばかりでなんで代表にまで選ばれるのかと嫌味を言う
人もいるが、昔から2人は強かった。

ただそれだけだろう。

それから2、3日経ち、日曜の今日は朝から同じ県内のチームと
の練習試合をしていた。

プロを拝もうとたくさんのギャラリーが集まり、なかなかの熱気に
溢れている。

当然代表に選ばれている5人はグラウンドを駆け回り、ボールを追っ
かけている。

そんな彼らには、一応楽しいランチタイムがある。

とは言っても、支給される弁当を食べるだけだが、宴会部長の武井がつい盛り上げてくれるのだ。

なかなか賑やかで楽しい一時となる。

水道で手を洗っていた阿笠のもとに、チームの先輩が近寄ってきた。

「阿笠、あっちで女の子が呼んでるぜ」

「え？」

「彼女か？ お前もすみにおけないな」

「もう、先輩。彼女なんていないっす」

そう答えながらも、阿笠は先輩が指差したほうへと走って行く。

女の子と言われて思い浮かぶのは麻冬か夏実くらいだが、2人が自分を呼ぶのはいささか不思議だ。

そんなことを考えていると、ギャラリーがたくさんいる中に綾女がいることに気づいた。

「あれっ。羽柴さん見に来てたんだ」

「うん。阿笠くんを呼んだのもあたしなの」

「あ、そうなのか」

そんな2人のやりとりをファンたちがコソコソ話しながら見てくるので、とりあえず2人は場所を変えることにした。

人気の少ない場所に綾女を連れていき、午前の試合で疲れたのか阿笠は適当に腰を下ろして息を吐く。

「お疲れさま。すごいね」

「いやいやそんな。で、羽柴さん俺に何か用が？」

「綾女」

「ん？」

「綾女で良いよ。あたしも大悟くんって呼ぶから」

綾女と話すのは、初めて会ったときを入れてもこれが2回目。

なのにこうも親近感がわくのは顔のせいだろうか。

「でね、大悟くんにお願いがあって」

「お願い？」

「みかさちゃんに会いたいの」

突然出てきたみかさの名前に、阿笠は「みっ？」と変な声を上げる。

確かに綾女にはみかさの話もしたし、彼女がみかさを知っていてもおかしくはない。

「つかさの妹、見てみたい。あたしにも似てるんでしょ？」

「そりゃまあ……。うん、別に良いよ」

阿笠は快く了承する。

みかさは阿笠の頼みなら大抵普通に受け入れてくれるし、何より幼なじみという粹がある。

烈の彼女と言えど、阿笠のほうがみかさとの歴史も長い分仲だって深いのだ。

「本当?! やった! あ、このことは内密にお願いできる?」
「内密?」

「誰もいないところで良いの。……ほら、いろいろ積もる話もあるし」

綾女は愛想笑いをしながらそう言う。

少し硬い表情もいきなりの頼みも不自然すぎるのに、人を疑うことを知らない阿笠は簡単に信じてしまう。

このとき阿笠は、みかさも綾女に会えばびっくりして自分と同じように親近感もわくんだろうな、くらいにしか考えていなかった。

「なら俺のマンションとか。あ、連絡先聞いて良い? みかさにも日程聞いてみたいし」

「そうね。ちょっと待って」

阿笠は今携帯を持っていないため、綾女は手帳の後ろのページに自分のアドレスと番号を書いてそのページを破り、阿笠に手渡す。

阿笠もそれを受け取り、そろそろ行かなきゃならない旨を綾女に伝える。

綾女もこれから用事があると言ったので、阿笠は今夜メールすると

伝え、走ってみんながいるところへと向かって行った。

綾女は阿笠の走り去る後ろ姿をじっと見つめ、小さくガッツポーズをしてみせた。

「よし。……これでようやく会える」

今思えば、この約束が全ての始まりだったのかもしれない。

哀しい哀しい、恋の幕開けとなった。

n
e
x
t

第9話【真夜中の襲撃】

その日一日練習試合を終え、帰宅したが阿笠はそのまま疲れたため寝てしまったので、翌日の夜綾女にメールを返した。

そして、綾女の都合の良い日程をいくつか聞きだし、そのあとみかさにもメールを入れる。

電話のほうがいと思ったが、秋人が阿笠にべつたりの今電話では連絡できないので、メールで何回かをやりとりして日程を決めた。

6月の頭はワールドカップがあり、それまでには練習にインタビューに大忙しで阿笠自体が時間を取ることにできないので、結局それが終わって阿笠のひと段落がついてからということで話は決まる。

連絡を交換して以来、綾女とはちよくちよくメールをするようになり、時には電話などもする仲にまで発展していた。

綾女がサッカーをしているということから共通点も多く話題もつけないし、なにより同じフオワードとしてアドバイスし合えたりできる。

だが2人が親しくなるにつれて、阿笠に対する嫌がらせは増すばかりだった。

もちろん阿笠に知られないように秋人や烈が前もって処理してくれているが、エスカレートするのならこれ以上黙っているわけにもいかないだろう。

それとなく阿笠に最近変わったことがないか聞いてみても思い当たらないようで、阿笠がこうして脅迫される意図が分からないままだ。

だが、この大事な時期に阿笠に変な心配をさせるわけにもいかず、秋人たちは絶対に言わないと決めているようだ。

だが、大会に向けて日本を出発する予定の前夜、事は起きた。

「あーきと。マンションついたよ」

その日は同じチームの日本代表に選ばれた選手たちと飲んだため、タクシーで阿笠は酔っぱらって寝ている秋人とともにマンションへと帰ることになった。

夜も遅く、街頭だけが頼りの真っ暗闇の深夜で、タクシーから秋人

をおろすとタクシーの運転手はさっさと帰っていく。

阿笠は秋人をおんぶしながら歩き出すが、そのとき阿笠たちに妙な男たちが近づいてきた。

真っ黒い服を着て、サングラスをかけてマスクをした男2人組だ。

不審に思うが阿笠がそのまま知らないふりをしようとすると、1人が阿笠の前に走って来てスツとナイフを出してきた。

銀色に光るナイフは、この暗闇の中でとてもはっきりと見える。

「えっ……ちょっと、何？」

「阿笠大悟。なぜ忠告を無視する」

「ちゅ、忠告？」

あと10歩程度歩けばマンションの玄関にたどりつけるくらいの距離なのに、誰も歩いていないこんな時間にナイフを持った男がいれば例え阿笠でも怖気づく。

秋人が一緒に行動してくれるようになってからは、それほど後をつけられている気配も感じていなかったつもりだが、2人でのいることによる安心感でしかない。

阿笠がストーカーだといっていたのは、おそらくこの2人で間違いないだろう。

とりあえず阿笠は秋人を危険な目に合わせたくはないので、数歩離れた場所に秋人をおろして座らせ、阿笠は男2人を交互に見る。

狙いは自分だと分かっている阿笠は、できるだけ秋人から離れようと、少しずつ秋人から離れていくが、それについていくように2人も動く。

緊迫した空間には、互いの息しか音が聞こえないほどだ。

そうした中、1人が口を開いた。

「これ以上秘密を探るような真似は一切やめろ」
「ひ、秘密？」

なんのことも分からないという表情をしている阿笠をよそに、阿笠の後ろにいた男が阿笠を後ろからガッチリ捕まえた。

振りほどこうにもなかなか強い力をしていて、何より体型がかなり良く、ガードマンかなにかをしているような人たちにしか見えない。

阿笠がチラッと後ろの人を見ようとした瞬間、ザッ！という鈍い音を立てて頬に痛みを感じた。

「いっ……………」

阿笠は片目をつぶりながらその痛みを堪えるが、血が流れ出るのを感じる。

構わず男は、阿笠の頬を切ったナイフをひたひたと切れていないほうの右の頬に当てながら、もう一度言った。

「警告だ。お前には何の得もないことを調べるな」

「調べるって…………だから何なんだよ?!」

何も知らないと言えををする阿笠に苛立ちを覚えたのか、男は阿笠の言葉には答えずに幾度となく阿笠に切っただけだった。

切れている側の頬をもう一度、そして瞼の少し上、しまいには右の二の腕だ。

なかなか深く切りつけてくるものだから痛みには耐えきれず、阿笠はフラッとよろめき、阿笠を抱えていた男が阿笠を離すと阿笠はその

まま前へと倒れた。

いきなりの襲撃に理解できなくて反論したい阿笠だが、体が言うことをきかない上に意識も遠くなっていく。

「お前らっ……………っ……………」

阿笠の頭上でどちらかが、「次は殺す」と言ったのを最後に、阿笠はついに気を失ってしまった。

こんな夜中に外を歩いている人はいないし、目撃者もいなければ倒れている阿笠（それと寝ている秋人）を助けてくれる人などいない。

瞼は軽く切るだけでも大量に血が出てくる場所で、瞼の上を切ったとは言っても瞼にも差しかかっているため阿笠の左側の顔は血だらけになっている。

しかも二の腕のほうの傷は思ったよりも深く早く止血をしなければならぬほど。

しかし秋人が起きるまでそのままの状態であることになり、秋人が

目覚めたのはそれから1時間ほどしてからだった。

こんな時間にずっと外にいれば冷えて酔いも覚めるに決まっていて、秋人は目をこすりながらようやく重い体を起き上がらせた。

「さみー……………あれ、どこだ。ここ」

秋人は酔いが回る頭を動かしながら辺りを見回す。

居酒屋にいたはずなのに、今は外にいる。

しかも自分のマンションの駐車場で座っていたなんて不自然すぎる。

「なんなんだ……………えっ?! 阿笠?!」

立ち上がって歩き出そうとした秋人が見たものは、血だらけになって倒れている阿笠の姿だった。

状況が理解できないながらも、とにかく秋人は阿笠に駆け寄って阿笠を揺らす。

「阿笠?! しっかりしろ! 阿笠!」

いくら名前を呼んでも目が覚めなく、秋人はどうしたらよいのかと混乱する。

とにかく手当てしないと。

だけど、こんな血だらけなのにどう手当てしたら良いのかさえ分からない。

秋人自身酔いが覚めていないし、阿笠をつれて上まで上がれる状態ではない。

途方にくれていたが、秋人はハッと思い出したように携帯を取り出してすぐさま電話をかけた。

飲みすぎたせいで字が霞んで見えるが、秋人はアドレス帳からある人物を懸命に探した。

その彼は、こんな夜中だというのに電話に出てくれ、焦って何を喋っているのか分からない秋人の話を聞いてすぐさま駆けつけてきた。

スウェットの上に軽くジャンパーを羽織った彼は、自分の車を走らせてきておよそ10分もしないうちに来た。

「秋人?! 一体どうし……………阿笠?!」

「は、春樹っ……………」

やって来たのは、高校時代からの親友の櫻井春樹だ。

男子にしては低めの身長でかっこいいよりは可愛らしい、ピンク系統の茶髪をしている。

秋人が連絡したのはこの春樹で、いつもは外国にいるかコーチのものとで違う県で練習していたりしてるのだが、先週末から帰ってきていた。

今は中宮大学で練習しているので、それを思い出した秋人がとっさに春樹に電話したのだ。

「なんでこんなことにつ……………!」

「わかんねえ……！ 居酒屋で飲んでて……俺寝て……！」
「……とにかく病院につれて行こう！」

春樹はその小柄な体で阿笠をおぶさる。

阿笠の血が春樹の髪や肌、服に付着するがそんなことも省みず春樹はひたすら急いで自分の車に乗せた。

救急車を呼ぶより、今から救急へ向かったほうが早いと考えた春樹は、自分の運転で阿笠を病院に連れていくことにした。

今夜救急の担当をしている病院をすぐに調べ、20分もしないうちにその病院に着いた。

春樹は着ていたジャンパーを阿笠に羽織らせ、再びおんぶをして病院の中へ全力で走る。

秋人も遅れないよう春樹の後を追いつ、2人は受付の人に怒鳴る勢いですぐに看護師を呼ばせ、まさかの櫻井春樹と月影秋人の訪問に、しかも怪我をしている阿笠大悟の姿に驚きを隠せずに動揺するも、阿笠は治療室へと運ばれていった。

死ぬことはないだろうが、大量に近い出血をしてなおかつ冷える外でずっと倒れていたのだから、無事ではないはず。

さすがに酔いが完全に覚めた秋人は、春樹と共に神経を張り巡らせながら待ち合い室で阿笠の治療が終えるのを、ただ黙って待っていた。

n
e
x
t

第10話【W杯開幕】

「では松本選手、意気込みを！」

「えー、益田監督その他コーチの指導のもと練習してきた実力を存分に発揮して、日本に勝利を持って帰りたいと思います」

翌日、日本を旅立つサッカー選手たちが会見を開いた。

23人がずらっと並び、ベテランからルーキーまで顔を揃えて記者の質問に答えている。

そして、そこには昨日闇討ちにあった阿笠の姿がある。

「阿笠選手！ その怪我はどうされたんですか？」

やはり記者たちから質問を投げ出されるが、コーチが裏からワールドカップに関係のない質問はご遠慮願いますと言う。

それでも阿笠への注目はおさまることをやめない。

阿笠は、腕の怪我は数針縫うほどの怪我を負い、スーツは締め付けられるから着るなど医者に言われたため、左腕はスーツに通しているが右側だけ羽織る形となる。

更に、頬と額には痛々しいほどの白いガーゼが透明のテープで固定されている。

どこから見ても練習中の怪我ではないことは明らかだ。

「ケンカですか?! 阿笠選手!!」

「阿笠選手! 一般人との関係は?!」

今大会でもともと注目されていた阿笠は滑降の餌食となっている。

怪我については一斎語るなど言われている阿笠は、ただ黙っている。

隣にいる秋人や、特に同じチーム出身の選手たちは阿笠のほうを心配そうにチラチラ見てばかりだ。

さすがにこれでは埒があかないと思った阿笠は、仕方なくマイクを借りて話し出した。

「この怪我はケンカではなく、俺の不注意です。今後怪我に関しては一齋触れないで頂きたいです」

医者には、ワールドカップには参加しても試合には出ないほうが良いと宣告された。

だが、この機会をみすみす逃すプロなんかは存在しない。

鳴り止まないシャッター音と記者の声。

新聞の一面は頂きかもしれないなんて意外にも阿笠は余裕なことを考えていた。

昨日、阿笠は治療後に目を覚まし、そこでようやく自分の状況を理解した。

秋人や春樹に何があったのかを聞かれても、何も知らない阿笠はただ襲われたとしか答えられない。

だが、その一言で秋人に与える衝撃はかなりのものだった。

秋人は知っていた。

阿笠が狙われていることも危険なことも。

だが、結果的に酔っ払って寝てしまい阿笠を守れなかったのだ。

阿笠は秋人に何も害がなくて良かったと笑っていたが、そんな笑顔が逆に秋人を追い詰めてしまうのだ。

会見後、選手たちはみな空港へ向かいようやく日本を発っていった。

飛行機の中では、詳しく話を聞かされていない仲間たち（もちろん監督やコーチでさえ事実は話していない）に質問攻めになる始末。

けれど、通り魔とかそんなものではなく明らかに私怨の犯行のため、阿笠は言うに言えないのだ。

言ってしまうえば世間は大騒ぎになるし、今度こそ阿笠以外の人間に害が及ぶかもしれない。

秋人はそんな阿笠の気持ちを汲んで、何も言えない。

このままにしとくわけにはいかないと、秋人は昨夜春樹のいる前で阿笠に脅迫状の話をした。

最初に秋人が脅迫状を見つけて刃で怪我したことや、その後烈にも話していたこと。

脅迫はそのうちにエスカレートしていったが阿笠にバレないうちに揉み消していたこと。

一緒に秋人の部屋へ帰った2人は、その場で秋人からそんな話を聞

き、秋人は阿笠宛ての脅迫状も差し出した。

あまりの酷さに、春樹は絶句していたが、阿笠は春樹とは違う反応をしていた。

『……みかさ？　なんでみかさと関係が、』

眉を潜めながら、阿笠は数々の脅迫状をじっと見ていた。

身に覚えがないのにやられたと思っていたのに、これは阿笠自身になんらかのことに関わっていることを示す。

『お前……本当に全然覚えがないのか？』

『うん……』

『秘密を探るなって、阿笠は何かしてるの？』

春樹はオズオズとそう尋ねるが、阿笠は首を傾げる。

いくら考えてみても分からないものは分からないし、おまけに秋人と阿笠はもうあと数時間で会見も迫っていた。

脅迫のことや刺されたことについてはまた後ほどにしようという結論になり、とりあえずひとまず寝たほうがいいということになった。

春樹も明日も一日練習があるので、自分のマンションに帰ることにし、秋人と阿笠は真夜中にわざわざ駆けつけてくれた春樹を駐車場まで見送る。

治療を受けて手当してもらったばかりの阿笠はあまりに痛々しくて、試合どころではないはずなのに笑っている姿を見た春樹は、なぜだが胸が苦しくなる。

『阿笠、平気か？』

『うん。多少痛いけど問題ないよ』

春樹は阿笠の精神面について聞いたのだが、阿笠は依然として微笑みながらそう言う。

阿笠がちよっとやそつとくらいのことですぐに落ち込んだり、立ち直れなくなったりすることは秋人だけでなく春樹や、烈たちも知っている。

だからこそ余計心配になるのだ。

『阿笠、ワールドカップ本当に参加す……や、頑張れよ。テレビで見るね』

『ありがとう。こんな夜中にごめん、櫻井。またね』

『おう』

人から頼まれたら絶対に断らなく人の気持ちを優先させる優しい人間であると同時に、自分の感情は一直線。

哀しかったら泣き、嬉しかったら泣き、どうしようもないときにも泣く。

秋人と恋敵になりたくないために春樹が夏実を振ったことがあったが、そのときは哀しい春樹の代わりに阿笠が泣いた。

そんな純粋な人でありながら、麻冬に頼らなきゃ1人で歩くことすらできなかった。

麻冬が秋人を好きと知りながらも麻冬と付き合い続け、麻冬に守られていた。

独立することができなくて、なのにそのくせ意地を張る。

優しいから人に頼まれたら絶対に断らないのかもしれないが、ただ嫌だと言えないだけなのかもしれない。

人を優先するあまり、仮面を被ることもする。

それが阿笠大悟という人間でもある。

日本を発ち、彼らが向かった先はブラジルだ。

今回のワールドカップはブラジルのリオデジャネイロで行われ、彼らはブラジルに着いてすぐ雰囲気慣れるため会場入りをした。

明日開会式を迎え、日本の初戦はその翌日となる。

世界には強い国がたくさんいて、2年前のオリンピックで日本は準優勝をしたが一步違えばメダルすら取れなかったかもしれない。

実力と運がなければ上位にはいくことができず、日本も気が抜けない。

やはり秋人と阿笠は初戦にはスタメンで入ることはなかったが、その次の試合では日本よりも明らかに格下のチームのため2人共にスタメン入りをした。

いくら阿笠と秋人がまだ若いとは言っても日本の代表であり、格下のチームに負けるはずはさらさらなく、彼らのありったけの実力をさらして余裕綽々で勝利した。

リーグ戦を勝ちぬいたチームだけが決勝トーナメントに出場することができ、辛くも日本はなんとかリーグを1位で通過することができた。

ワールドカップは世界中で放映されているのももちろん日本にも彼らの活躍は写し出されている。

特に阿笠は、格上の外国人選手に対しても果敢に挑戦し、負けても負けても粘り勝ちに行こうとするため小生意気なルーキーだと対戦相手は苦笑した。

負けず嫌いの天才肌くんも、やはり上には上がいることを実感しながらも、チャンスさえあれば持ち前の味方さえ圧倒するような動きの読めない爆走をし、得意の数多のフェイントで相手をおちよくつた。

奇怪な阿笠の動きを読めるのは秋人だけだと、さすがに外国チームも知っているから秋人さえマークしていれば何とかなると思っていたるようだが、秋人をマークしたところで意味はない。

「ナイツシュー！ 阿笠ー！！」

結果、ルーキーたちの見事な活躍とベテランたちの貫禄あるプレーで決勝トーナメントも順調に勝ち上がることができた。

準決勝も勝ち上がり、いよいよ決勝はアルゼンチンとで、最終日に行われることになる。

何年かぶりに日本がワールドカップで優勝するかもしれないと、日本では華々しくテレビで報道されていた。

n
e
x
t

第11話【恐れ1】

「あ。綾女？」

夜、ホテルに戻った阿笠は綾女へと電話をする。

同室の秋人は今大浴場に行っていて、阿笠はちょうど今部屋にっているシャワーを浴びて出てきたところだ。

なかなか綺麗な星空だったのでバルコニーに出ながら阿笠は綾女へと電話をかけていた。

『お疲れさま、大悟くん。見てたよ』

「はは。まーた監督に怒られちゃったけどね」

『ふふ。でもあれが大悟くんのスタイルだもんね』

ブラジルに来てからはそんなに暇な時間とかは作れなかったが、明日の決勝を残すだけとなりようやく一段落もついた。

それでも合間合間に綾女と連絡を取っていた。

サッカーのことを話して共感してくれることに、ものすごく居心地の良さを感じているのだろう。

阿笠にはたくさんの方ファンがいるけど、その中の女の子は破天荒なプレーと阿笠の容姿に惹かれているだけでこれといった知識はない。

だから今まで女の子とこんな風にしてサッカーの話ができなかったから嬉しいのだろう。

「明日勝てるかなあ」

『あら、弱気発言？』

「う……だってアルゼンチンだよ？ 無駄にでかいしさ」

とかいいつつ負ける気しないんでしょ？と、綾女は笑いながらそう言った。

自信がないわけではないが、やはり強いチームは強いわけで絶対に勝てるなんて保証はどこにもない。

阿笠はその実力を認められて、決勝トーナメントではほぼスタメン状態だった。

強い相手は避けたいという気持ちが大きい中堅よりも阿笠のような勝ち気なルーキーのほうが使えると監督が判断したのだ。

勝ち気で華やかで自己中なプレーではあるが、その裏にはそんなプレーを裏付ける実力と才能と努力がある。

それを買ってくれたのだろう。

「明日……スタメンで入るんだ」

『嘘!!』

「俺ね、正直高校までは敵なんていないと思ってた」

小学生のとき全国選抜に選ばれてキャプテンとして優勝に導き、その後は中学高校とやはり全国選抜で秋人と共に全国優勝を成し遂げた。

中学校自体はそこまで強くはなかったが、高校は県立ながらも全国常勝の部に入部して負けず知らずだった。

日本代表として学生時代に他国と戦っても、やはり阿笠を止められる選手などいない。

まさしく天才と呼ぶに相応しい人間だった。

「でも、世界って広いんだね」

けれど、プロになってからは壁にぶつかる毎日。

今までは阿笠を恐れて相手が怖じけづいて逃げ腰だったのに、今は阿笠なんて屁でもないかのように向かってくる。

重圧ばかりが押しかかり、代表に選ばれてからはそんなプレッシャーとの戦いだ。

『チャンスじゃない』

「え?」

『その若さで世界一のチームと戦えるんだよ。大悟くんはいつも通り堂々とやれば良いのよ』

「そっかな……」

確かに名誉なことだ。

これで本当に優勝できたそのときは、全世界に阿笠の実力が認めら

れるだろう。

もう誰もイエロールーキーなんてバカにしないだろう。

阿笠や秋人が高校時代に世界から呼ばれた名だ。

日本は何を考えてる、イエローモンキーの生意気なルーキーだと罵られた。

だが、今度こそ彼らの手で優勝したその暁には世界全土が震撼するだろう。

『そうよ。……月並みなことしか言えないけど、……頑張ってね』

綾女は少し遠慮がちに言う。

スポーツマンにとって頑張れという言葉ほど残酷なものはない。

特に負けているとき心が堕ちているとき、頑張っているのにこれ以

上どう頑張れば良いのか分からなくなる。

「っはは。ありがと綾女。……百人力だよ！」

だが阿笠は、何かが吹っ切れたように笑った。

空を見上げて、綾女も同じ空を見てるんだろぅかなんてロマンチックなことを考える阿笠はいつになく珍しい。

『そういえば怪我のほうは大丈夫？ 痛くない？』
「あ」

阿笠は綾女のその言葉で思い出したように綾女に問いかけた。

「あのさ、みかさと会いたってやつ先伸ばしにしてもらっても良
いかな？」

シャワーを浴びたばかりなので今は特にガーゼを貼ったり包帯を巻
いたりはしていない。

額の傷はそこまでではないから良いが、頬の傷は割りと深いし阿笠

が激しく動き回るせいで完治はしていない。

腕に関しては縫ったばかりなのだから本当は試合に出て走り回るときでさえ痛いはず。

阿笠は一言たりとも痛いなんて言わないけれど。

『え……？』

「あ、なんか……みかさ今すごく忙しいみたいでさ。落ち着いたら連絡くれるみたい」

『……そうなの。なら仕方ないね』

残念そうな綾女の声に、阿笠は少し後ろめたさを感じる。

さすがの阿笠も、今はみかさに近づかないほうが良いと分かってる。

何に巻き込まれているのかは定かではないが、みかさを危険な目にあわすのだけは避けたいからしばらくみかさと距離を置くことにしたようだ。

そうなれば当然、綾女との約束も果たせない。

「ごめんな？」

『全然大丈夫よ。それより、じゃあ帰ってきたら遊ぼうよ』
「良いね」

阿笠は綾女との会話に花を咲かせていたから、秋人が部屋に戻ってきたことにも気づかない。

秋人は部屋に帰ってきて早々阿笠に話しかけようとするが、阿笠がバルコニーで電話をしているので適当に冷蔵庫から飲み物を出して飲んでいる。

阿笠はスウェットのズボンにTシャツという格好をしたまま外にいるから、冷えるぞと声をかけたいが阿笠があまりにも嬉しそうな顔をしているため声がかけられない。

彼女か？

なんて考えるが、そういった話を聞いた覚えはない。

とりあえず秋人はテレビでも見ようと、適当にチャンネルを回した。

「ねえ綾女」

秋人に全く気づかない阿笠は、阿笠の口からはまだ一度も言っていないつかさの名前を出した。

「俺ね、今でも夢に見るんだ。つかさを」

『うん？』

「俺と幼なじみじゃなかったらあのとき死んでなかったのかなーとか、……結局俺がプロになったところでつかさの夢が叶うわけじゃないんだよな、とか」

ベランダに繋がるガラスの扉は、少し隙間が空いているせいで阿笠の声が部屋まで届いてくる。

つかさという名に、秋人はハツとしたように阿笠のほうを振り向いた。

未だバルコニーの柵に手をかけながら部屋のほうを見向きもしない阿笠の背中を見つめ、唾を飲む。

「そんなことばっか考えてる……」

そんなことが起きているのは、つかさにソックリな綾女と出会ってしまったからだ。

だが阿笠はそうとは気づかず、綾女も言わない。

『そんなことっ……』

「……だって！」

電話越しに否定しようとする綾女の言葉を遮るように、阿笠は少し声を張り上げた。

「だって……つかさに会わなきゃ俺はサッカーなんかやってなかった」

さっきまで笑っていたのが嘘のように、阿笠は哀しそうな表情を浮かべる。

今は亡き人を想いながら、切なく語りかける。

「つかさが死ななきゃ、プロにだってなろうなんて思わなかった…

…」

そんなことないと言いたいけれど、その言葉のどこに信憑性があるのか分からず綾女は黙っているしかできないでいる。

阿笠は、後ろから見ても微かに震えているのが秋人にも分かる。

「今だって、つかさのためだけにサッカーやってるんだ。……けど、世界一になったところでつかさは還って来ない」

たかが小学2年生の子どもだった。

けれど、大事だった。

つかさに未練があるわけではないし、ちゃんとつかさ以外にも好きな人ができたりはした。

好きとか、そんな簡単な気持ちではない。

「……何のためにサッカーしたら良いか分かんないんだ」

サッカーを好きじゃないわけではない。

強くなりたくないわけでもない。

けど、どうしてもサッカーだけをしたいわけでも頂きを目指したいわけでもない。

どうしたって、サッカーをやる前提にはつかさの存在があったんだ。

「世界一になって約束果たして……その次は？」

まさかこんなにも早く夢を叶えるチャンスがくるとは思わなかった。

つかさとの約束を旨に、ずっと一生を過ごしていくんだろうと思っていた。

なのに、まだハタチにすらなっていない。

成人すらする前に約束が叶ったら、その後の人生をどう過ごしていけば良いのだろう。

つかさのためだけのサッカー、つかさのためにゴール地点に辿り着いたその先は、どうすれば良いのだろう。

「何もないんだよ……。それがすごく怖いんだ」

つかさに捧げた人生。

つかさのためだけに生きてきたサッカー人生。

今度は何を支えにサッカーを続ければ良いのだろう。

『やめないで』

「……」

『絶対にやめないで。つかさは大悟くんにはサッカーやめて欲しくて教えたわけじゃない』

綾女は透き通るような声ではっきり言う。

『つかさはのためにプロになったんでしょ？　なら死ぬまでつかさとの約束貫いて……』

「……綾女？」

『一生つかさのために生きて』

さすがのような口調で意味深な言葉を言う綾女に、阿笠は不思議に感じた。

どうして綾女がそこまでつかさに思い入れするのか分からないが、あまりにも泣きそうなのを堪えているのが伝わってくるので聞き返せない。

だけど、綾女の言葉は阿笠の心に響いていた。

つかさのために過ごしてきた今までのなら、これからもつかさに自分の人生を捧げて良いのではないかと。

「……分かった」

それがどういう意味なのかを深く考えもせず。

n
e
x
t

第12話【恐れ2】

「風邪ひくぞ」

秋人がようやく阿笠にそう声をかけたのは、秋人が部屋に戻ってきて30分は軽く経つ頃だった。

ひよんなことから綾女とつかさの話をし始め、やっと電話を切ったは良いもののとても哀しげな阿笠の背中に、秋人は上着を羽織らせてやる。

「えっ……？ 秋っ……」

扉を開ける音すら聞こえず気配も感じていなかったから阿笠は突然の秋人の行動に目を丸くしながら驚いている。

気づけば、上着を着ていなかった自分の体は完全に冷えてしまっている。

「とりあえず中入ろうぜ」

「あ、うん……」

秋人に導かれるまま部屋の中に戻り、阿笠は少しボーツとしながらベッドの上に腰を下ろした。

今の阿笠は、後悔の念でいっぱいだ。

綾女につかさのことで愚痴を漏らしたことを激しく後悔しているのだ。

つかさのことを知ってる人にしか話せないけど、綾女に話す話題でもなかった。

人のためだけにサッカーやってるなんて、同じサッカーをする綾女には言ってはならないセリフ。

どうして口を滑らせてしまったんだろうと、そんな悔やみしか出てこない。

「秋人……聞いてた？」

「んー」

「……幻滅した？」

秋人を直視できない阿笠は、うつむきながらボソツと呟く。

今にも涙が溢れそうになる瞳は、哀しいと切ないと物語っている。

顔を上げない阿笠をじっと見つめ、秋人は阿笠の隣に腰を下ろして、阿笠の首に腕を回してグイッと自分に引き寄せた。

「なーに怯えてんだよ」

阿笠はされるがままに、秋人の肩に寄りかかる。

それでもまだ顔を上げることはできなく、泣きそうなのを必死に堪えていた。

「良いじゃん。つかさちゃんのためにサッカー始めたんなら、つかさちゃんのために一生を捧げろよ」

「……秋人は……」

「ん？」

秋人はこんな俺とそれでもコンビ組んでくれるの、と消えてしまい

そんな声で言った。

秋人につかさのことがバレて一番恐れていたことは結局そこだ。

ゴールデンコンビと何年も昔から言われてきた相棒に愛想を尽かされるのが最も怖い。

ずっと考えていた。

秋人のように、他のみんなのようにならなくてプロになったわけではない自分は、何を目標にすれば良いのだろうか。

つかさのためつかさのためと言うけれど、ゴール地点に辿り着いたところで「もう良いよ」と言ってくれるつかさはこの世にいない。

終わりのない迷路にさ迷っているようだった。

「……俺の相棒はお前しかいないって言っただろ？」

「……」

「先が見えなくて途方に暮れるんだったら、じゃあ今度は俺と約束しよう」

その言葉に、ようやく阿笠は顔を上げた。

見上げた秋人の顔は思ったよりも近くて、秋人の真剣な瞳から目が離せない。

アメリカでスキップして10歳で大学に入った秋人が、日本に来てサッカーという道を見つけた。

そこで阿笠と知り合って、世界一になろうと言った阿笠のおかげでサッカーの道を進もうと決めた。

阿笠がつかさのためにプロになったように、秋人は阿笠のおかげでプロになった。

つまりは、そんな秋人が阿笠を見捨てるはずがない。

「まずは世界一になって、世界一を取り続けて……いつか結婚して子どもが生まれたらサッカーを教えよう」

「え……」

「俺たちの子どももプロにするんだ」

秋人は阿笠の首に回しているほうの手で、今度は頭を撫でた。

真剣な瞳が、優しいものになって秋人は微かに微笑む。

「そしたら、俺たちみたいな関係になるよ。きっと」

「俺たちみたいなの……」

「そう」

約束をしたわけではない。

言葉にしたわけでもない。

けど、初めて会ったあるときから分かっていた。

永遠に一緒だと。

「俺との約束を守るまで一緒にサッカー続けよう」

約束という名の縛りがなければサッカーを続けることができない阿笠には、その言葉がどんなに嬉しかったことか。

ただ好きだからサッカーをやるんだと言えない阿笠には最高の言葉だ。

けれど、素直にうんと言えない阿笠はこう答える。

「約束……果たしたら？」

秋人の目が見れなくて、視線を外した。

「そしたらまた俺と新しい約束を作ろう」

あまりにも優しいその言葉に、阿笠はついに涙が溢れた。

ボロボロとこぼれる涙は止まらないが、阿笠は涙を拭うこともせず
声を押し殺して泣いている。

阿笠の髪の毛の隙間から流れ落ちる涙が見えた秋人は、クスッと笑う。

「忘れた？ もう一生離さないって言ったこと」

2年半近く昔のミスコンがあったあの日、阿笠を抱きしめながら言
った言葉。

忘れもしない。

「つかさちゃんのためにプロになったなら、今度は俺のためにプロ
でいてくれ」

明日を迎えるのが怖かった。

オリンピックのときはまだプロではなく学生だったから、万が一
界一になれたとしても問題はなかった。

約束は、プロとして世界一になることだから。

だけど、ようやくプロとして大きな大会を迎えて明日は全世界が見
守る中決勝が行われる。

しかもスタメンとして出場することができる。

願ってもない好条件のはずなのに、怖くてたまらなかった。

「だからさ、まず明日は勝とう」

だけど、明日もし勝てても未来はある。

秋人が約束してくれた。

「自分のためにサッカーができないんなら、明日まではつかさちゃんのために、明後日からは俺のためにサッカーして欲しいんだ」

昔からサッカーをこよなく愛し、部員たちに快く指導している秋人が羨ましかった。

どんなときでもつかさのことだけを考えて、プロになることだけを考えてサッカーしてた阿笠とはまるで違う。

だから一緒にいたいと思ったし、尊敬できた。

そして、秋人はこんなときでも自分を救ってくれる。

他人からしたら何てことのないような悩みでも、秋人はきちんと受け入れてくれた。

「ごめん……秋人」

「阿笠、」

「……………ありがとう……………」

ようやく阿笠は言葉を発し、それと同時に腕で目を押さえながら声に出して泣いた。

我慢していたのだろう、鼻をすすりながら一層溢れる涙を堪えきれずに肩も震えている。

まだ19歳のコドモが、人生の終わりのような感覚に襲われていたのだ、無理もない。

大袈裟だと思いかもしれないが、プロになるために大学すら進まずにこの道を来たのだから不安にもなる。

「大丈夫だって。お前はこれからサッカーやって良いんだよ」

秋人は精一杯の笑顔で、阿笠をギュッと抱きしめた。

風呂上がりの秋人の髪から良い匂いがして、秋人が抱きしめてくる腕が力強くて、普段ならこんなこと絶対にしない秋人がこうして励ましてくれて、とにかく秋人の全てにまた泣けてしまった。

安心して良い、お前の居場所はここにあるんだぞと言ってくれているような包容感。

それがたとえお世辞の言葉だったとしても、それでも今この瞬間は救われた。

秋人は阿笠が泣き止むまで、ずっと抱きしめていた。

n
e
x
t

第13話【決勝戦】

ついに迎えたワールドカップ決勝戦。

誰もが固唾を飲んで見守る中、試合は開始された。

阿笠や秋人の所属するチームから代表に選ばれた5人全員がスタメンとして出場していることで、静岡ではかなり大きな声援となっている。

アルゼンチンチームからの攻撃で、体格的にも外国人に劣る日本チームは些か不利ではあるが、ディフェンス陣が頑張ってかわしている。

事前の試合から阿笠が読めない動きをすることは相手も了承済みのようだが、阿笠にばかり気を取られてベテラン勢の動きを見落としがちになっている。

そうなると予想していた日本チームは、あえて阿笠を走らせておいてベテラン勢にボールを回していく作戦を練った。

ベテラン勢が止められるようなら阿笠に回すことになるが、阿笠に回すと味方でさえ理解できない動きをしてしまう。

そこで登場するのが月影秋人というわけだ。

秋人だけは阿笠の動きを先回りして読むことができ、アシストすることができ。

ゴールデンコンビ健在ということだ。

正直準決勝での阿笠はどことなく遠慮しているようなプレーをしていた。

仲間がパスしても自らは得点しようとはせずに誰かに繋げたりして、終始ゴールを避けているように見えた。

もちろんそんな阿笠のプレーに相手が惑わされてくれたものだから仲間や監督には特に何も言われなかったが、秋人だけは気にしていた。

阿笠の辞書にサッカーに関しては遠慮という文字が存在しないことを知っている分、不可解に思えただろう。

だから昨夜阿笠がああやって本音を話したとき、秋人は躊躇することなく受け入れた。

準決勝を勝ったら決勝に進まなければならないという恐れがあると理解した。

阿笠が何を思い、何のためにサッカーをしてきたのか初めて知ることができた。

秋人が今こうしてフィールドを駆け回っているのは阿笠のおかげだから、何としても繋ぎ止めておきたかったのだ。

「ちよっ……秋人どこに蹴って……!」

後半戦、得点は1・0でアルゼンチンがリードしている。

体格も技術も体力も全てアルゼンチン側が優勢だ。

けれど、日本にはそれ以上にチームワークがある。

「あっ! 阿笠?!」

「くっ……マークしろ! 追いかける!!」

パスを受け取った秋人がドリブルしながら走っていたが、ディフェンス陣に囲まれてそれをヒョイヒョイと軽やかによけていたが、何を思ったのか左横めがけて思いきりボールを蹴った。

誰もいるはずのない場所へのパスという予想外のプレーに相手も味方も一瞬足を止めた。

だが、そのボールが来るのが分かっていたかのようにまさにそのとき阿笠が現れて、見事にパスを受け取ったのだ。

秋人から渡されたボールを、今度は阿笠がゴールめがけてドリブルしていく。

阿笠の超人的な足の速さは日本人離れているほどで、ディフェンス陣に加えミッドフィールダー陣をもかわしながら走っている。

豪快で華やかすぎる阿笠のプレーは、昨日までのたどたどしいものとは違う。

もう優勝しても怖くない。

そう思えた阿笠には、恐れるものなどもう何もなかった。

「武井さん！」

阿笠は武井にパスを回し、武井は阿笠の見事なセンタリングをそのままシュートした。

その球は微かにキーパーの手でセーブされたが、真上に上がったボ

ールを阿笠が待ってましたと言わんばかりにオーバーヘッドをした。

ディフェンス陣がボールを取られまいと阿笠と同時にジャンプしたが、阿笠のシュートのほうが速度が速く、ボールはものすごいスピードでゴールめがけていく。

真逆にいたキーパーが止めようと食らいつくが、ボールはキーパーにかすりもせず綺麗にゴールへと入った。

その瞬間、フィールド上に歓喜が沸き起こった。

「阿笠ー!!」

着地した阿笠のもとにチームメイトたちが駆けよってきて、みんなが阿笠を抱きしめた。

まだ得点は1・1のタイなのに、まるで優勝したかのような騒ぎ。

「武井さんナイスアシスト!」

「このやろっ! 偶然だっつの!」

「あははっ」

武井が阿笠の首に手を回して2人は仲良くはしゃぐ。

そして当然秋人だって駆けよってきた。

阿笠は秋人と目が合うと、嬉しそうな顔をしている秋人を見て阿笠までつられて笑う。

秋人が右手を拳にして右腕を水平に伸ばしてきたから、それに応えるように阿笠も腕を伸ばし、ゴツンと拳を合わせた。

阿笠のシュートがまぐれにせよ本気にせよ、見事なオーバーヘッドは日本に風をもたらした。

オフェンス陣を信じて秋人率いるミッドフィールダーたちは守備に徹し、秋人は佑亮譲りの素晴らしい守りを見せた。

相手にボールを渡さない正確なパスもドリブルも華麗な走りも、どれもがカリスマと呼ばれるに相応しいもので、阿笠に負けじとばかりに競っている。

そんなミッドフィールダー陣たちに応えんばかりに、阿笠率いるフォ

ワードたちは猛反撃を始めた。

こうなった日本チームを止める術などもなく、明らかに日本が有利となる。

その後残り1分を残してベテランのフォワードが1点取り、追いつこうとしてくるアルゼンチンをほぼ全員で守備に回り絶対に点を取らせまいとしつこくマークし続ける。

最後まで粘ってくるアルゼンチンチームに、日本も最後の瞬間まで粘り、そして今、ホイッスルが鳴り響く。

その瞬間、ワァッ！！と歓声が響き渡った。

日本チームはフィールド上をガッツポーズしながら駆け回った。

空を見上げてボーッとしている阿笠に、秋人が駆け寄ってきた。

「阿笠っ!!」

秋人の声に振り向いた阿笠は、信じられないという顔をしながら驚いている。

阿笠の表情を見た秋人は、プツと少し笑い、そして手を広げた。

おいで、と言っているような動きに阿笠は反射的に秋人に抱きついた。

抱きついたというより、思いきり飛び乗ってしがみついた。

よく野球選手の捕手と投手がしている光景で、確か3年前にもそんな光景を見た。

県大会で優勝したとき、こうして阿笠が秋人に飛び乗った姿がスポーツ新聞の一面トップを飾ったのをよく覚えている。

まだ優勝した実感が無い阿笠は、飛び乗ったものの何も言えずに秋人に抱きついているだけだが、そんな阿笠を秋人は優しく受け止めた。

「ナイスプレー。……阿笠」

ボロボロと涙を溢しながら抱きついている阿笠に秋人はそう呟いた。

「……つかさっ………っ……」

「見てるよ。ずっと、空から」

小2のときにした約束、12年経ってようやく果たせた。

その約束のためだけに、そのためだけに生きてきた。

サッカーを教えてくれた恩人との、最初で最後の約束。

今、ようやく。

「阿笠ー！ 秋人っ！ー！」

抱き合っている2人のもとに、武井村田蒲原に続いてチームメートたちが駆け寄ってくる。

2人を覆い囲うようにして一段と盛り上がった。

秋人と阿笠の連携プレーのおかげで巻き返すことができたのだから今日の主役はこの2人だ。

「えっ?! わわわっ!」

秋人にしがみついていた阿笠を、誰かが引き剥がしチームメートたちが阿笠を胴上げし始めた。

それに続いて他の選手たちも秋人を胴上げし、2人は空に高く舞う。

最後の最後まで手を抜くことなく善戦した両チームが、勝ち負け関係なく晴れ晴れした表情を浮かべている。

アルゼンチンチームも悔しくはあるが、完全燃焼できたと少しだけ笑っていた。

「優勝だーっ！っ！」

誰の声か分からないが、確かにそう叫んだ。

晴天に響き渡る声は、全世界に震動を与えた。

テレビを見ている者、応援に来ている者、勝利を願っていた者、みんなが歓喜の声を上げた。

何十年ぶりのワールドカップ優勝。

そして、思い出すのはやはりあの日の光景。

『サッカーしてる大ちゃん……大好き』

死ぬ間際につかさが一生懸命阿笠に話しかけた。

『つかさ！ ……する！ いくらでもする！ プロにもなってみせる！』

『あは……プロかぁ……』

つかさに助かってほしいがために言った必死の言葉。

『や……くそく……ね……』

ようやく果たせた。

ありがとう

そんな言葉が聞こえてくるように思えた。

n
e
x
t

第14話【本音】

日本が勝利をおさめたワールドカップも閉会を迎え、ようやく選手たちにも安堵が伺える。

現地に來ていた日本人の記者や外国の記者たちがこぞって日本チームに詰め寄るが、やはりその中心にいたのは阿笠大悟だった。

得点したという事実もそうだが、この若さで代表に選ばれてスタメン入りも果たし、何より優勝に貢献したということで注目を集めている。

質問攻めにされているがきちんと対応できていることはさすがというか。

「ヨーロッパへの移籍は考えていないんですか?!」

「当初なぜ外国からのスカウトを断ったんですか?!」

数々の言葉が一度に寄せられ、何から答えたら良いか阿笠は少々困ってはいるが、覚えている範囲での質問に答えていく。

「移籍については分かりません。ただ、日本にいるほうが良いと思
いまして」

秋人がいるから、なんて言わなくても日本中の人ならみんな分かる
だろう。

2人は永久を共に過ごしていくつもりなのだと。

秋人の存在なくして阿笠の活躍は飛躍しない。

阿笠はふとナイフで切られた頬に手を当てた。

なんとなくヌルツとした感覚があったからだが、予想は的中して怪
我していた頬から血が多少出ていた。

試合では邪魔になるからと、今日は頬と額にはガーゼをせずに挑ん
だのだが、相手との接触や顔をこすったりすることでまた切れたよ
うだ。

左頬から流れている血を半袖のユニフォームの袖で拭うが、その仕草をするとき包帯が巻かれている右腕も目に入る。

優勝したことで流されていた阿笠の痛々しい怪我也、そんな仕草のせいで再び質問攻めとなってしまうた。

どう考えても練習中の怪我也でもないし不注意程度の傷でもないし記者たちは詰め寄るが、阿笠はそんなことないの一点張りで平行線だ。

結局そのまま時間の関係で取材は終わりとなり、日本チームは更衣室へと向かって行く。

阿笠と秋人もその流れにのり、更衣室で着替えることになるがそのとき秋人が思い出したように阿笠に尋ねた。

「綾女って誰？」

昨夜は結局泣きはらした阿笠をそのまま寝かせたから聞くに聞けなかった。

阿笠が時々誰かと仲良く電話やメールをしていることは知っていたが、それが誰かまでは分からなかった。

だが昨日は阿笠がはっきりと綾女の名前を呼んでいたのだから、とにかく気になるのだろう。

「あれ？ 秋人なんで、」

「昨日電話してたろ」

「あ、そっか」

高2の冬に麻冬と別れて以来、阿笠から恋愛話を聞いたことがなかった秋人は心なしか嬉しく思っている。

麻冬への未練があるかもとかそういう不安ではないが、これだけモテるのに一向に彼女を作ろうとしないから少し心配していたのだ。

「綾女は……友達。中宮大の2年なんだ」

「へえ」

「でね、サッカー部なんだよ。女子の」

「えっ、すげ。………ん？ どっかで聞いた話だな……」

秋人はフィールドの土で汚れているユニフォームを脱ぎながらそう

言う。

と、秋人がユニフォームを脱いだ瞬間秋人は阿笠のユニフォームの袖が血まみれなのを見てギョツとした。

さっき頬から流れていた血を拭いたせいで、頬のほうは血はとりあえず止まっている。

「大丈夫なのか？　とりあえず消毒しないと」

「ん？　あ、これ？」

「汗とかでしみただろ？」

「んー。んー」

阿笠はヘラツと笑いながら曖昧に言葉を濁らす。

嘘がつけず肯定もできない様子はまさに阿笠らしい。

着替えてから消毒しようと言う秋人のセリフに頷き、2人は再び着替えを続けた。

「で。彼女ではないわけ？」

日本チームの仲間たちがいるので更衣室はワイワイと賑やかだ。

一応2人は一番下なのだから荷物運びなどたくさんやらなければならぬことがあるので、みんなよりも早く着替えて阿笠の消毒もパッパと終え、更衣室を出ていく。

他にもあと数人の下の人間がいるので、彼らと一緒に仕事をする。

そんな作業をしながらも秋人は阿笠に問いかけた。

「彼女ではないよ」

「ふーん。じゃあ片想いか」

「えっ?!」

秋人が何気なくそう言うと、阿笠は目を丸くしながら驚いた顔をしていた。

不思議に思った秋人が違うのかと尋ねると、予想外にも阿笠は当たり前だと言い張った。

けれど阿笠がこんなにも女の子と仲良くすることはあまりないから、秋人にはどうしてもただの友達には思えないようだ。

「綾女は……好きになれないよ。たぶん」
「なんで？」

阿笠は女の子に愛想振り撒くことも好まなく、これといって女友達を作ろうとしない。

彼女欲しいなんてセリフすら聞いたことがないほどののに、その阿笠があんなにも嬉しそうに綾女と電話をしていた。

阿笠には自覚がないのかもしれないが、阿笠のその表情はかつて麻冬に見せたものと同じもの。

幾度となく秋人が見てきた表情なのである。

そんな秋人がそう思うなら間違いはないだろうし、そもそも勘は良いほうだ。

だから阿笠がここまで否定するには何かあるのではないかと踏んでいる。

「なんでって言われてもなあ。ただの友達なんだよ」

阿笠は苦笑しながら答える。

「……友達ねえ」

「だよ」

阿笠は基本的に人の気持ちに敏感な男で、だからこそ人を優先させてしまうところがある。

麻冬と別れたときも、付き合っていたと言った麻冬を振ったのが精一杯の阿笠の優しさだった。

そんな懐かしい過去の恋愛事情を思い出しながら秋人は頭の中で回想している。

そして、ついつい更に突っ込んでしまった。

「でもいつか好きにはなるかもしれないだろ？」

だが、その言葉は逆効果のようで阿笠は逆上したように叫んだ。

「なるわけないだろ?!」

あまりに阿笠にとって衝撃的だったらしく、阿笠は持っていた道具類をガシャンと音をたてて落としてしまった。

その音と阿笠の怒鳴り声に、他の仲間たちも振り向いた。

阿笠の怒鳴り声に驚いて秋人は一歩引き、阿笠はすぐさまハツとしたように道具類を拾い集めながら微笑した。

「あ……ごめんごめん。何ムキになってんだろね、俺」

笑みを浮かべる阿笠を見て特に問題ないと悟った仲間たちはそのまま荷物を運び歩いて行く。

手にいっぱい荷物を持っている秋人は拾うのを手伝えず、隣に立ち尽くしている。

すぐに全て拾い上げた阿笠が立ち上がり、俺たちも行こうと秋人に

声をかけて2人は共に歩き出した。

まさか阿笠が怒鳴ると思っていた秋人は、これ以上聞くに聞けなくてしばらくの間沈黙となる。

そのままたいした会話もせずに仕事を終わらせ、先輩たちが戻ってくるのを他の仲間と他愛もない話をしながら待つ。

日本の国旗が入ったジャージに身を包んだ先輩たちがようやくぞろぞろと集まってきて、日本チームは帰りの便の飛行機に乗り込んだ。

これで行く日本に帰れると安堵する者も多々いる。

日本に着いたら着いたでマスコミが殺到していることは確かだから、おそらくみんな飛行機の中で仮眠を取るだろう。

阿笠と秋人は先輩たちが全員飛行機に乗り込んだのち、最後に入る。

席まで迎え途中、秋人が「あっ」と声を上げて立ち止まるとつられ

て阿笠も立ち止まった。

「秋人？」

「思い出した。俺も中宮大女サカ2年に知り合い……ってか顔見たことある奴いる」

「へえ。どんな？」

通路でいつまでも立ち止まるわけにいかず、2人は再び席に向かい始める。

「目がくりつとしたのが印象的な肩までの髪の毛してた」

「へ……え」

阿笠はあまりにも知人と特徴が似ているものだから少し戸惑っているような反応をする。

だがそんな阿笠に気づかずに秋人はこう言ってしまった。

「あ、みかさちゃんにちよつとだけ似てたかな」

秋人がそう答えたとき、ようやく2人は席についた。

近くに座っている他の仲間たちは既にほとんど寝ているようで少し静かだ。

それでも他にも話している人たちもいるから、2人の会話だけが漏れているわけではない。

先に席に腰を下ろした秋人が、未だ立ち尽くしている阿笠を見上げて尋ねた。

「どうした？」

阿笠は秋人のほうを向きながらうつむいている。

下にいる秋人には阿笠の表情がよく見え、阿笠は哀しそうに微笑んでいた。

「それ……綾女だよ」

「え……」

「羽柴綾女……っていうんだ」

席についてベルトをつけるようアナウンスが流れるが、阿笠はそれでも未だ立っている。

秋人も阿笠を座らそうとするが、なんとなくそんなことを言える雰囲気ではない。

阿笠の表情に、言葉が出てこないでいるのだ。

「つかさにソックリなんだ……。……綾女が」
「へ……」

性格はまるで違う。

だけど、サッカーやっているという事実もその容姿も、つかさを思い出さずにはいられない。

どうしても重ねずにはいられないのだ。

「つかさがいるみたいで……。……だから絶対綾女だけは好きになっちゃいけないんだ」

本来ならばずっと隣にいてくれるはずの幼なじみ。

綾女をつかさとして見ないなんてできない。

これが阿笠の答えだった。

n
e
x
t

第15話【春樹再び】

「阿笠？ 出かけるのか？」

「あ、うん。今日綾女と遊んでくる」

ワールドカップで優勝して日本に帰ってきてから祝賀会が行われ、翌日もテレビに出演したりと大忙しだった。

大会を終えて1週間あまり、ようやく落ち着きを取り戻しつつある。

今日は夕方からのミーティングだけだから、阿笠は綾女と約束を取り付けていた。

「そう。ミーティングには遅れるなよ？」

「あはは。うん、分かった」

本来ならばワールドカップ直前に襲われたばかりなのだから危ないと言いたいところだが、なんとなく阿笠と綾女の間には入れない。

結局帰りの飛行機の時も、阿笠はあれからすぐフライトアテンダントに座るように促され、そのまま眠りについてしまった。

つかさと綾女が似ていて、だから綾女だけは好きになっちゃいけないとだけ言い残して。

だいぶ顔の傷も薄くなってきてはいたが、腕は数針縫う怪我をしていたにも関わらずあれだけ活躍してしまったのだから傷口が開いてしまい、練習は今しばらく控えているところだ。

とりあえずみかさには本当に距離を置くことにして、でも綾女とは特に問題がないわけだからノーとは言えない。

秋人は寝起きの格好のままリビングに向かい、コーヒーを入れ始めた。

昨日の夜食べた食器はまだ洗ってなくたまっているのが目に入る。

2人分の食器は、阿笠が確かにそこにいた証拠。

綾女とはそんなではないと言うけれど、例え綾女じゃなくても彼女ができたりしたら阿笠はその彼女の家に住み着くのかな、なんて

考えると少しだけ寂しくもなる。

最初は面倒だと思っていた家事も、阿笠が上手いと言うから食事も作るし阿笠が気持ち良いというから洗濯もする。

烈に頼まれたってこともあるが、秋人自身阿笠との共同生活を楽しんでいた。

「……春樹暇かな」

秋人はボーッと窓の外を眺めながら呟いた。

カーテンの隙間から木漏れ日が差し掛かり、今日は良い天気そうで暑くなりそうだ。

こんな日は家でゴロゴロしていたい気持ちにもなるけど、綾女に阿笠を取られて暇だった秋人は携帯を取りに寝室へ向かう。

春樹とは日本出発の前夜以来ではあるが、阿笠を心配して何度か電話がかかってきていた。

そういえば出発日の会見を見た烈が驚きのあまり会見直後に阿笠に電話をかけた。

周りにも聞こえるくらいの金切り声で、かなり焦っているのが伺えた。

「えーと……」

履歴から春樹の名前を出して電話をかけようとした、まさにその瞬間携帯が鳴り始めた。

何事かと思って画面を見ると、なんと春樹からの着信だ。

なんという偶然に秋人はついほころんでしまう。

「はい？」

『あ、秋人？ 今日休みなんだね』

「よく知ってんな」

『さっき阿笠とすれ違ったんだ』

ふと、電話越しにガヤガヤした音が聞こえることに気づいた秋人が尋ねた。

「今どこ？」

『もうちょいで秋人んち』

「はっ？」

『あ。着いた』

春樹が当たり前のようにそう言うものだから、秋人は急いでベランダに駆けつけて駐車場を見下ろした。

車から降りてきた春樹が、眩しそうに7階にいる秋人を見上げながら手を振っている。

予想していなかった展開に秋人は啞然としているが、そんな秋人に春樹は大声で叫んだ。

「5分で来ーい！」

まじかよ……とか思いつつも反射的に秋人はすぐに部屋に戻って支度を始めた。

とりあえず洗面所で顔を洗い、クローゼットから適当に服を取り出した。

ジーンズと胸元に白いラインの入った黒地のシャツというラフな服装で、慌てて髪にワックスをつけて財布と携帯とキーケースだけを持ち、秋人は走って部屋を飛び出す。

なかなか来ないエレベーターに何とか乗り込み、やけにゆっくり降りていくような気分さらされながら秋人は内心自嘲していた。

5分で来いと言われたからといってここまで焦りながら本当に5分で行く必要なんかないのにと。

ただ春樹とはなかなか会えない分、会えるときを楽しみたいというのも事実。

この前は前置きなく真夜中に呼び出してすぐに解散になってしまったが今日は別だ。

高校のときは暇さえあれば遊びに出かけて学校ではいつも一緒にい

て、時折2人で授業をサボったりもしていた。

麻冬に振られたとき、阿笠との対決に負けたとき、アメリカとの友人との和解のときも全部春樹が側にいて支えてくれた。

可愛らしさが売りのキュートボーイはどんなときも秋人の味方でいてくれた、かけがえのない親友。

外国を転々としている彼とはなかなか会えないから、春樹がこの近辺にいるときは必ず会うようにしているのだ。

「春樹っ」

ようやくマンションの玄関を出て駐車場にいる春樹のもとへ駆けていく。

春樹は自分の愛車に軽く寄りかかりながら携帯をいじっていたが、秋人の呼びかけに気づいて顔を上げた。

「早いじゃん。5分3秒前」

「つたりまえだ」

春樹はピンクの半そでのパーカーに身を包んでいて、それが似合うものだから何とも言えない。

2人並ぶと20センチ以上身長差がある。

「お前なー、来るならもっと早く連絡しろよ」

「えー。だって秋人が休みだとは知らなかったし」

春樹いわく、適当にドライブしていたら阿笠が私服で歩いているのを見て今日サッカーがないと知ったようだ。

春樹はここ3日間ほどは練習をオフにして休養していたのだが、親友も暇と知れば遊ばないわけにはいかない。

2人は春樹の車に乗り込み、とりあえず車を走らせた。

眩しさ防止のため春樹がサングラスをかけているのを見て、秋人はハッとする。

「どこ行くの？ 俺何も持ってきてない」

「え？ あ、あー変装？」

「おう」

秋人だけでも街を歩けばかなりの人だからできてしまうのに、春樹も一緒となれば倍になってしまう。

春樹の普段の愛らしいキャラと試合で見せる真剣な表情というギャップが人気で、番組に出演するときも春樹がいれば盛り上がる。

無愛想な秋人も、春樹の側にいるだけで緩和されたように見えるしさしずめラブリーアイテムというところか。

春樹は後部座席を指差し、秋人はつられて後ろを見る。

布の袋のようなものがあり、秋人がそれを手にとって開けると中には伊達メガネや帽子などの変装グッズが入っていた。

「用意良いな」

「いつも持ち歩いてんだ。好きなの使って良いよ」

秋人が何にしようか選んでいる間にも春樹は車を走らせ、15分も

しないうちに目的地に到着した。

n
e
x
t

第16話【「告白」】

「すっげえ！」

「あはっ。またストライク出ちゃった」

阿笠は大学前で綾女と待ち合わせて、そのままラウンドワンへと向かった。

もちろん公共のものに乗るのを避けるために阿笠の車で。

なぜラウンドワンかというと、遊園地でも良かったが明日2人とも朝が早いため近場ですまそうとしたからで、スポーツマンの彼らは映画やショッピングよりは体を動かした遊びのほうが似合うだろう。

ラウンドワンならボーリングやスポッチャ、ゲーセンなどいろいろあるから飽きないし、飽きても適当にまた近場の娯楽に移動すれば良い。

そして今はボーリング2ゲーム目に入っている。

「大悟くんっ、スピアの次大事だよ」
「まかしてっ」

ラストの回になり、阿笠はスピアのあとということで少し緊張ぎみにもなるが、なんなくボールを転がす。

多少ど真ん中を外れたものの勢いのある球のおかげで9ピン倒れ、
そしてもう1ピンもなんなく倒していく。

最後だけはスピアを出せば3回目も投げることができ、阿笠はどの
ボールを使おうかと選ぶ。

阿笠以上に阿笠の周りにいる赤の他人たちのほうが緊迫している。

すでにスコアが200を超えている超人的な記録に周囲も釘付けに
なっているのだ。

ここまできたら何としても奇跡的な記録を出してもらいたいのが
周りの声だ。

もちろんプロに比べたら落ちるが、阿笠はプロでもなければボーリングが趣味というわけでもないのにこのスコアが出せるのは本当にたいしたものだ。

みんなが固唾を飲んで見守る中、阿笠は選んだボールを持ってレーンに投球した。

ボールは綺麗に真っ直ぐ真ん中を通りすぎていき、気持ちの良い音を立てながらピンが全て倒れていく。

「おーっ！　っしゃー！！」

「きゃー！！　大悟くんすごい！！」

席に戻ってきた阿笠と綾女はハイタッチをしながら喜んでいる。

次は綾女の番で、綾女も180はもう出している。

女の子でそんな数字が出せる人もなかなかなく、何ていうカップルだよと周囲は哑然としているほどだ。

最終的に綾女は8本しか倒すことができずに188点と終えてしまったがそれでも大満足だ。

阿笠にいたっては230を超している。

「あのカップルすげー……」

わざわざ他のレーンから阿笠たちを見に来ていた人たちが2人のスコアを見つめながら固まっている。

阿笠はピンクの色つきサングラスをかけ、髪の毛に黒いスプレーをかけている。

そのためこれが阿笠大悟だなんて誰も思わない。

阿笠といえばかなり明るめの茶髪という印象が強いから、黒髪効果は抜群だ。

外に出るたびいちこんなことをしなくてはならないのはかなり面倒だが、ファンに言い寄られたほうがもっと面倒なので致し方あるまい。

「あっちの2人もすげえぞ!!」

3ゲーム目をやるかやらないか阿笠たちが迷っていると、そんな声が聞こえてきた。

なんだろうと2人は顔を見合わせ、人だかりができてるほうに近寄る。

人だかりの中心にいたのは、ピンクのパーカーを着てフードをかぶりながら茶色いサングラスをかけている青年と、サンバイザーと黒縁のメガネをかけている青年の2人組だった。

「あっ。秋人と櫻井だ」

ガヤガヤ賑わう周囲に聞かれないように阿笠は小さく呟いたが、綾女はそれを聞き逃さずに答えた。

「月影秋人くんと櫻井春樹くん？」

「そう。2人もここにいたのか」

秋人と春樹が向かっていたのもこのラウンドワンだったとはすごい偶然だ。

いや、考えようには偶然ではないかもしれない。

秋人や春樹だって阿笠や綾女と同じようにスポーツマンなのだからやりたいことは同じだ。

声をかけようか一瞬迷うが、ここで出会うと自分たちが何者なのかバレル可能性があるから阿笠たちは2人には近寄らずに、ボーリング場から出ていくことにした。

その後もバッティングをしてホームランを出しまくり、卓球をしてみては見えないほどの球の速さで打ち合う。

本職はサッカーだが、ここまでくると本当に運動神経が尋常ではないことがうかがえる。

阿笠がかなりの運動神経の持ち主であることは衆知の事実だが、阿笠についてこれる綾女は本当にすごい。

普通の男以上の運動神経で、これはあの中宮大の女サカに入部できた理由も理解できる。

ラウンドワンの中にはカラオケもあり、2人はそこで昼食も食べが
てら歌うことにした。

個室だがあまり狭くはなく、カラオケの中なら変装をといても見ら
れる心配はあまりない。

「うわっ、うま〜」

そして、阿笠といえば音楽の才能も人並み以上なのは世間的にもも
う有名だ。

音楽祭では阿笠のソロやフルートで金賞を取り、ミスコンでは秋人
たちとライブをしたときにボーカルをして大いに盛り上がりを見せ
た。

「大悟くんといえはやっぱファンモンの告白かな〜」

「え、そう?」

「ほらだって、ミスコンで歌ってたじゃない?」

また、学園祭でも阿笠の音楽は多大な影響をもたらした。

クラスで喫茶店を開いたのだが、阿笠は客寄せとして働いていて、まさに七変化をしていたのだ。

フルートを吹いて美しい音色で人々を呼び、美しい歌声で客を集め、時には部活のユニフォームを着て阿笠大悟としてファンたちを連れてきた。

烈との名探偵コナンもなかなかのもので、信じられないほどの客が集まって喫茶部門では堂々の1位を獲得。

「あはは、そうだっけね」

「そうそう。ね、歌ってよ」

「あ、良いよ」

綾女は阿笠の了解を得る前からリモコンを操作してその曲を入れていた。

阿笠的にはミスチルなどのほうが得意ではあるが、テレビの前で歌った以上周りはそうは思わない。

あのとときファンモンの告白を歌ったのは、秋人へのお帰りという言葉の代わりだった。

裏切られても、突き放されても、それでもやっぱり君がいないとダメなんだと言ってあげたかった。

前奏から始まり、阿笠は告白を歌い始める。

ラップが多い曲ではあるが、阿笠は懐かしげにしかもいとも簡単に歌いこなしている。

綾女もつい真剣な顔をして聞きいつてしまっているほど。

特にサビは、共感できるような歌詞だと当時なかなか反響が大きかった。

「大好きだ。大好きなんだ。それ以上の言葉をもっと上手に届けたいけど、」

阿笠の歌い方とか、リズムの取り方が上手すぎてつい歌ってことを

忘れて、まるで言葉のように胸に刻まれる。

綾女は注目したクリームソーダのアイスを少し食べながら、意味もなくテーブルを見つめたまま動かない。

綾女が歌ってと言ったのにいまち綾女自身が盛り上がっていないように見える。

「……本当のこと知ったら……大悟くんどうするのかな」

綾女は消えてしまいそうなくらい小さい声でポツリと呟いた。

綾女と阿笠が出会ったのは、本当にたんなる偶然。

だけど、2人が近寄りあったのは決して偶然ではない。

綾女は、阿笠の高校の学園祭にもミスコンにも行っていた。

少し離れた場所にある星陵を何度も訪れていた。

「……羽柴なんか……」

だから、2人が出会ったのは偶然でもなく必然でもなく、運命だった。

大好きだ

大好きなんだ

それ以上の言葉をもっと上手に届けたいけど

どうしようもなく溢れ出す思いを伝えようと

やっぱ

大好きしかでてこない

next

第17話【光と影】

羽柴家は平安から続く由緒正しき華族の家系で、何千坪の敷地を持つ大金持ちだ。

今ではいろんな事業に手をつけ、多角経営をしているがそれが偶然か必然か大成功をおさめ、富豪の名を語るに相応しい。

場所は静岡県の中部で、地元で知らない人はまずいないだろう。

そんな家柄に生まれたのが、奇しくも綾女というわけだ。

綾女には兄弟はおらず1人娘であるが、親や親戚を無視して金持ち学校には決して通うことはせずに女子サッカー部のある強い学校に進み続けた。

華族としてはそれなりの最低限の学歴も必要であり、中宮大体育学部は運動をする人にとっては頂点ではあるが一般にはたいしたことではなく、どうしてもという綾女の譲らない固い意志に勝てずに両親は、大学院は親の決めたところに行くことを条件に入学を許した。

もちろん、綾女はイエスともノーとも言っておらず、どう考えたって綾女が大学院なんかに行くはずもないのだが。

だが、1人娘のため羽柴を継ぐのは綾女しかない。

必然的に綾女は世界の羽柴のトップに君臨する人間であった。

「……め？ 綾女？」

カラオケを出たあとは、2人で街をぶらぶらすることにしてショッピングを楽しんでいた。

どうしたってスポーツショップにはかり目がいつてしまいがちな2人だが、普通にファッションにも興味はあるし綾女だってジュエリーなどは好きだ。

「え？」

「どうかした？ ぼーっとして」

しばらくウィンドウショッピングをして歩いていたが、阿笠の問いかけに反応しない綾女に阿笠は不思議に思う。

綾女は阿笠に言われて自分がぼーっとしていたことに気づき、何でもないと言いながら愛想笑いをした。

「そう？　暑さにやられたかと思った」

阿笠はニコリと笑う。

時折綾女は阿笠の知らない表情を浮かべて何かを考えている。

心ここにあらずなときもあるが、阿笠はあえて何も言わないで笑ってみせていた。

純粹だからか人を疑いたくないからなのか、阿笠は綾女に絶対的な信頼を寄せている。

「……大悟くんはさ、あたしのことどう思ってる？」

綾女は突然足を止めて、阿笠にそう尋ねた。

つられて阿笠も立ち止まり、振り返って綾女の顔を見る。

綾女は何かに堪えているような表情を浮かべながら、じっと阿笠が答えるのを待っている。

いろんな人が歩いて賑わっている街中、楽しそうな若者の声や元気な子どもの声が飛び交っているが、阿笠と綾女の周辺だけ時が止まっているようだ。

サンサンと照りつける太陽をよそに、阿笠は覚悟したようにキュッと唇を噛み締めた。

「……それを俺に聞くの？」

阿笠はピンクのサングラスを外して綾女を直視する。

周りから、あれ阿笠大悟じゃないかという声が聞こえてくるが2人は逃げもしない。

「大悟くんだから聞いたの」

最初はつかさの話がしたいから待ち合わせをした。

だけど、そんなの本当にただのきっかけにすぎない。

それ以後あまりつかさの名前は出なくなったし、というよりお互い出さないようにしていた。

出してしまったら、阿笠と綾女の関係にはつかさがいることが前提になってしまうから。

つかさのことをなしにしても一緒にいたいくらい、お互い惹かれ合っていることくらい分かっている。

「綾女は大事な友達だよ」

「友達？」

「それ以上でも以下でもない、でしょ？」

明るくて可愛らしい女の子

最初はそんなイメージだった。

だけど話していくたび、サッカーにだけは情熱的なことや芯が強いことを知って、もっと知りたいと思えた。

綾女はいつだって隣で笑っていてくれた。

辛いときは励ましてくれたし、優しい言葉をかけてくれた。

こんなにも夢中になれる人は麻冬以来だ。

「……つかさをなしにしても？」

むしろ、麻冬以上に夢中になれているかもしれない。

そんな思いの裏にはやはりつかさの存在があるからだ。

「つかさをなしになんてできない。綾女は綾女だけど、……」

「顔？ 顔がつかさに似てるから？」

「……」

どうしたって、綾女のその笑顔の向こうにつかさを見てしまうんだ。

もういないはずのつかさが楽しそうに隣で笑ってくれてると思うってしまう。

こんな自分は最悪だと思いながらも、綾女と会ってしまう。

自分が見ているのは、今は亡き幼なじみ。

綾女ではない。

綾女のことをスキナワケじゃない。

「……顔がなんだったというのよ」

阿笠の正直な言葉に、綾女は泣きそうになる。

だが、絶対に泣くものかと必死に堪えている。

「綾女？」

顔も髪型も好きなものも全く瓜二つの、まるで双子のような綾女とつかさ。

重ねてないなんて綺麗事言えるはずがない。

死んだ人はもう忘れろと言われたって、忘れられないくらい大事な人だった。

今でも夢に見るくらい、約束のために本当にプロになったくらい大事な大事な女の子だった。

「あたしの顔がつかさにソックリなんじゃない！ ……つかさがあたしにソックリなのよ！」

「?!」

「あたしがサッカーやってるのだってつかさの為なのにつ……」

温和な綾女が、我を忘れてそう叫んだ。

拳をギュッと握りしめながら溢れる感情を露にしている。

「どういうこと？」

だが、阿笠のその一言でハッと気づいて平常心を取り戻そうとする。

「あ……なんでもないよ」

綾女は困ったように笑いながら、取り返しのつかない言葉に翻弄されている。

こんなことを言うつもりではなかったのにと自分を責めながら、せめて阿笠にだけは真実がバレないようにと願った。

「なくないだろ？」

「違うの……今のは……」

「綾女！」

言葉を濁らせながらまごまごしている綾女に、阿笠はつい怒鳴り声を上げた。

こんな街中でケンカしているだけでも目立つのに、ましてや今阿笠はサングラスをしていなく素顔をさらしている。

髪の色と髪型を軽く変えているからバレはしないものの、阿笠に似ていると周囲には野次馬がたくさんいる。

時々聞こえてくるカメラのシャッター音すら2人の耳には届かない。

「……もう会わない」

苦しさや哀しさに苛まれながら、綾女は苦渋の決断をした。

え？と聞き返した阿笠の顔をキッと睨むその目には確かに涙が浮かんでいる。

溢れてしまいそうなほどの涙が瞳の中で揺れていて、綾女は阿笠の胸をドンツと軽くたたいてからもう一度言った。

「もう大悟くんとは会わないっ……！ あたしは羽柴綾女だよ……！」

そう言った綾女の目からは涙が溢れ落ち、そのまま走ってその場を去っていく。

「綾っ……」

綾女を掴もうとした手は届かなく、綾女を追いかけることもできずに走り去る彼女を見つめることしかできない。

呆然としながらも、これで良かったんじゃないかと思っている自分もいた。

どうしたって綾女とつかさを切り離して考えられないのならば、これ以上お互いが傷つかないうちに離れたほうが良い。

綾女がいなくなってまた元の生活に戻るだけ。

そう、だから何も変わることはないはずなのに無性に苛々している自分がいる。

綾女にじゃなく、こんな風にしか言えない自分に。

「っ……………どうしろってんだよ……………」

阿笠は握りしめていたサングラスを地面に思いきり叩きつける。

プラスチックだから割れはしないが、割れないことにさえ腹がたち、サングラスを踏みつけて折ってしまった。

「阿笠大悟……………だよな、あれ」

まだ野次馬がいる中、阿笠はそんな声を聞き取る。

阿笠はその声がしたほうへ振り向き、キッと睨みつけながら言い放った。

「ちげえよ！ 誰が阿笠だ！ じろじろ見てんな！！」

阿笠が怒鳴ると一瞬にして周りはシンとなる。

確かにあんな人阿笠くんじゃないよね、と言いながら残念そうに去っていく女性たちに、怒鳴ることないだろと不満気味の男性たち。

半信半疑の人もいるが、みんなそそくさといなくなる。

阿笠はいつもよりワイルドな服装をしていた上に髪色を変えていたので、他人の空似と言えば通じる。

迷彩柄のズボンに、七分丈の白いシャツの上に黒いジョッキを着ている。

普段の阿笠のスタイルとは全くの別物だ。

だからどんな醜態をさらしたって問題にはならない、のだが、さすがに阿笠もまずいと思ったのか踏みつけたサングラスを拾うことなく、ポケットに手をつ突っ込みながら歩き出す。

言葉に出来ない怒り、焦燥、哀しみ、嘆き。

追いかけることのできないもどかしさ。

もう会うことがないと思うととても寂しい。

会わないほうが自分のためにも綾女のためにも良い。

そう思いながらも、心のどこかで綾女とまだ一緒にいたいと思っていた。

n
e
x
t

第18話【写真】

「1人ですかあ？」

「遊びに行きません？」

綾女とわかれて1人になった阿笠は逆ナンされ放題で数多の女性たちから声をかけられている。

無視しても無視しても言い寄ってくるのでうんざりしているところだ。

ズボンのポケットに手を突っ込みながらムスツとしてるにも関わらず、見境もなく女性たちは阿笠に近づく。

プロサッカー選手というレッテルが今の姿にはないのにこんなにモテるとは、やはり容姿が抜群だからだ。

綾女がいれば女避けができたのだが。

阿笠と綾女はラウンドワンに車を置いて街をかなり歩いていたので、帰るには車を取りに戻らなければならない。

2人で歩いているときはあっという間だったのに、まさかこんなに遠い道のりだったとは。

苛々が最高潮に達したとき、誰かが阿笠に話しかけた。

「大悟くん？」

またかよ、なんて思いながら阿笠は振り向いた。

「違うっつつってんだろ！」

だが、振り向いた先にいたのは驚いた顔をして手を振ろうとしてた幼なじみだった。

まさかみかさだと思わなかった阿笠は、焦りながらみかさに近寄る。

「みっ……ごめっ」

「あ、ううん……どうかしたの？」
「や、えと、」

今日のみかさはいつものフリルな服装ではなく、髪はおろして黒いピッチリとしたズボンをはいて、ピンクのキャミの上に半袖の革のジャンパーを着ていて、しかもサングラスまでかけている。

あまりにもいつものみかさとは違いすぎて阿笠でさえ一瞬誰だか分からなかったほどだ。

お互いが別人すぎて、2人して吹き出した。

「ははっ。みかさどうした？ 珍しい格好して」
「ふふ。変装」
「変装？」

そういえば、みかさにも阿笠あての脅迫状のことを知らせたのだった。

なにやらみかさと関係しているようで、烈や秋人にはみかさとはばらく会わないようにも言われていたし、阿笠もみかさを傷つけないから了承していた。

そのことを思い出して、阿笠はみかさがなぜ変装しているのか理解したようだ。

変なことに巻き込んでごめんと阿笠は謝るが、逆にみかさのほうが申し訳なさそうな顔をしながら、こっちのほうこそごめんと述べた。

みかさからすれば、自分のせいで阿笠がからまれていると思っている。

みかさと縁を切れ、なんて言うくらいだからみかさ側に元凶があると思っているのだろう。

だがお互い未だになぜ脅迫されているのか分からない。

なにが原因で、なにが問題なのか全く検討もつかないようだ。

本来ならば今この瞬間にも狙われているのかもしれないのだから、知らないふりして離れるのが筋だろう。

だけど、今の2人にはそんな気持ちはほとんどない。

阿笠が襲われたことをみかさは知っている。

みかさも危険な目に遭うかもと阿笠は分かっている。

だけど周りから離れろと言われて離れられるほど簡単な絆なんかではない。

この世に1人しかいない幼なじみで、つかさを知る唯二の存在でもある。

みかさの彼氏で阿笠の親友の烈は、会見で阿笠が怪我しているのを見て寝込んでしまった。

阿笠が大丈夫だからと懸命に何回も電話をかけ、みかさも必死に看病した。

秋人も今まで以上に守ろうとしてくれている。

だけど、それすらハネのけてしまうくらい2人の気持ちはどん底にあった。

「遊ぼうか。大悟くん」

「え、」

「怖い？」

学校ではみかさは阿笠の幼なじみだと知られており、阿笠のことをいろいろ聞かれる。

そのくせ阿笠には会うなと彼氏に言われ、自分も何らかの事件に巻き込まれてると知っていればヤケクソにもなる。

阿笠だって、誰かに狙われていて周りに心配をかけて、綾女とも悪い風に流れてしまって落ち込まないはずがない。

「まさか」

もうなんともなれ

そう思ってしまったても仕方ないだろう。

2人は共に歩き出した。

その頃綾女は、街を抜け出して適当に道を歩いていた。

行くあてもなく途方に暮れながら、時折後ろをチラリと見てはため息をつく。

自分から突き放したのに、追ってきてくれるかもしれないという淡い期待を抱きながら。

ついちょっと前までは本当に楽しい一時を過ごしていたのに、一気に奈落の底に突き落とされた気分だ。

あんなことを聞いてなんて言って欲しかったのか自分でもよく分からない。

別に好きだと言って欲しかったわけじゃない。

ただ、つかさとは別だと言って欲しかっただけ。

綾女は綾女だよと笑って欲しかったただけだった。

「……言いすぎたかな」

それでも、あんなことを言うつもりではなかった。

もう会わないなんて、なんてばかなことを言ってしまったんだろうと後悔ばかり。

確かにきっかけはつかさだった。

阿笠が自分をつかさと見間違えてくれたおかげで友達になることができた。

ずっと伺っていた。

どうしたら阿笠と知り合いになれるだろうと。

念願が叶って、あと少しのところだったのに欲を出してしまった。

「……小浦？ 迎えきてくれる？」

綾女はカバンから携帯を取り出して電話をかけた。

用件を伝えるとすぐに携帯を切り、再びカバンに携帯をしまった
だひたすら迎えが来るのをその場で待ち続ける。

人通りの少ない道はずれで、あまり物音もしない。

本当ならもつと阿笠と遊んでいるはずだったが、自分でそれを壊し
てしまった。

きつともう電話をかけてくることもメールをしてくることもないだ
ろう。

そう思いながらも、やっぱりカバンからまた携帯を取り出して来る
はずのない連絡を待っている自分がいる。

待ち受け画面の時計が1分1分と時を刻んでも、阿笠から連絡が来
ることはなく、20分ほどしてようやく迎えの車がやってきた。

こんな道はずれな場所には相応しくない黒のロールスロイスに乗り
込み、綾女はその場からやっといなくなる。

羽柴家の令嬢ともなれば運転手を好きなときに呼び出せるし、世話役だっている。

普通ならば大学のサッカー部になんて所属するはずもないくらいの地位だ。

見知らぬ道をぐんぐんと通り、大通りに出たら出たで道行く人がじろじろと車を見てくる。

このへんでこんな車に乗っているのは羽柴家しかないから、一目瞭然だ。

地元民なら誰もが知る大富豪であり、なぜ静岡にとどまるのか不思議に思われてるくらいだ。

本社は東京を拠点に、関東地方中部地方にまで事業は繰り広げられている。

東京にいたほうが何かと便利だというのに、羽柴は代々静岡に住み着いた。

阿笠は綾女が富豪の娘だということを知らない。

綾女を家まで送ろうとしても、たいてい途中までで良いと言われたりしていたからだ。

東部に住んでいた阿笠はこっちで一人暮らしをしているくらいだからここら辺のことはあまり詳しくない。

綾女も言おうとはしないし、阿笠も綾女はただの女子大生としか思っていないのだ。

着いた家は、屋敷というより豪邸と言う言葉が相応しい洋館だ。

門から玄関が見えず、無駄に広い庭の中には池や噴水もあり、玄関まで車で行くほど。

「ありがとう。小浦」

小浦と呼ばれる運転手が車のドアを開けると綾女が出てきて、一言

そう言うと家に入った。

迎えてくれるのはメイドや執事といった使用人たちで、口々にお帰りなさいませと発する。

「お嬢様、ずいぶん早かったですね」
「相良」

両サイドに並びながら頭を下げている使用人たちの向こうから相良と名乗る使用人が現れた。

かなり若く黒い髪をワックスでセットしているためか好青年に見える。

「今日は暑かったでしょう。何か飲み物でもご用意いたしましょうか」

ニコツと笑いながら言う青年の蝶ネクタイを、綾女はグイッと引張った。

「バカにしてる？ 相良」

「そんな恐れ多い」

「ったく。なあにが世話役よ。こんなのただの幼なじみじゃない」

綾女はブツブツ文句を言いながら自分の部屋へと向かう。

当然のように相良も綾女の後について歩く。

相良はその容姿のごとく、本当にまだ若くて実は綾女と同じ年なのだ。

相良家は代々羽柴家に仕えてきた身分で、彼の父親は使用人の総取締役である。

つまり、相良の息子である彼が羽柴の娘である綾女の世話役になるのは自然の流れだ。

「幼なじみとは嬉しい言葉ですが、お嬢様に仕えてる身としては相応しくない肩書きですね」

他の使用人たちも見えなくなり、そのうち自分の部屋に着きそうなとき、相良が言ったその言葉にムツとした綾女は相良睨みつけた。

相良はキョロリと周りを見て、降参と言っているかのように両手を軽く上げた。

「仕方ないだろ？ 親父の手前敬語使わないと」

「分かってるよっ」

「なんだよ、今日は珍しくご機嫌ななめじゃん」

部屋につくと、綾女に続いて相良も入る。

どのくらいの広さなのかと言われてもなかなか難しく、綾女用の居間と寝室と書斎が別々の部屋に設けられている。

今入ったのは普段使ういわゆる居間で、32インチの液晶テレビに向かうようにソファが置かれていて、その間にはガラスのテーブルがある。

綾女はその部屋にカバンをおろしたあと、今度は書斎として使っている部屋へ向かう。

どうしたんだよ、と言う相良の声を無視し、綾女は書斎部屋に入って1つの棚から何かを取り出した。

マナー系、学問系、国際系などの本がたくさん並べられているこの部屋の中で唯一ぬくもりがある棚だ。

懐かしい絵本や学校の卒業アルバムなどが置かれている。

そして、綾女が取り出したのは自分の幼少時代のアルバムだ。

今の綾女がそのまま小さくなった、もっと言えばみんなの記憶の中にいるつかさの姿が写されている。

「綾女、……」

綾女がそのアルバムを開いて黙って見ていることに相良は胸がしめつけられるような衝動にかられる。

代々仕えてきたということは、綾女の一番側にいたのは相良で綾女のことを一番分かっているのも彼である。

何を思っこのアルバムを開いているのか、相良には痛いほどよく分かる。

「……つかさに似てるからいけないんだって」

「え？」

「似てたらなんだって言うのよ……」

綾女はアルバムの中から1枚の写真を取り出す。

その写真を握る手は微かに震えていて、相良は哀しげな綾女の背中をただ黙って見ていることしかできない。

その写真には、嬉しそうに寄り添いながら笑っている3歳ほどの綾女とつかさがいた。

n
e
x
t

第19話【因果】

『綾女。パパがサッカーボール買ってくれたよ!』

あれはいつだったか。

ようやく1人で歩けるようになった頃、父親が買ってくれたサッカーボールを大事そうに抱えながら綾女のもとに少女がやってきた。

『へ』

『綾女もやろ?』

『やらない。つかさみたくサッカー好きじゃないもん』

その少女とは、紛れもなくつかさだった。

髪の毛が短くボーイッシュな服装を好むつかさと、髪の毛が長くて可愛い服装を好む綾女がそこにいた。

公園にいても、サッカーボールで遊ぶつかさとブランコで遊ぶ綾女は性格がまるで違うが、見た目は髪型さえ同じならば見分けがつかないくらい。

出身が違う2人がなぜ一緒の公園にいるのかは謎だが、綾女の頭には今幼少期の記憶が蘇っている。

懐かしいアルバムを見ているせいか、阿笠との口論が原因なのか、なににせよ綾女だってつかさの存在を忘れることなどできない。

阿笠には偶然たった一度だけ公園でつかさに出会ったと言ったが、本当はそんなのではない。

たった一度きりの間柄なんかでは収まりきれないような絆がそこにはあった。

ただ、こんなことを表沙汰にすることはタブー。

羽柴の血を唯一継ぐ綾女の過去は、羽柴家最大のトップシークレットなのだ。

「相良……。つかさに似てたらあたしは綾女じゃないの？」

綾女はアルバムを閉じて、相良のほうを見ながらそう問う。

相良は躊躇うことなく、綾女は綾女だと答えるが綾女はちっとも納得していない。

おそらく、綾女を納得させられるような言葉なんて誰の口からも出てこないだろう。

つかさと重ねて見られることに怒りながらも、つかさと突き放されたらそれはそれで哀しくなる。

切っても切っても切れない存在なのだから割りきるしかないのだが、どう足掻いたってそれもできない。

「だから最初から会うなと言ったのに」

相良は困ったようにため息をつきながらそう言う。

この暑いのに黒いスーツに身を包みながらも汗1つかいていない相良も、堅苦しいのは嫌いなようでネクタイを軽く緩める。

綾女と2人ときにはちゃんとした格好や態度をしていなくても問題はない。

「知ってたろ？ 阿笠大悟が比護つかさと幼なじみで、比護つかさが阿笠大悟にサッカー教えていたことくらい」

綾女は相良から視線を反らし、罰が悪そうな顔をする。

「知ってたから近づいたのよ……」

「阿笠大悟がどれだけ比護つかさを大切に思うくらい分かる範疇だろ」

「そうだけど、」

それでもやっぱり嫌だと、綾女は小さく呟いた。

綾女は華族のお姫様でありながら、中学も高校も一般の学校に通ってきた。

全てはサッカーのために。

小学校のときは有名大付属の初等部に在籍していたが、そのままエスカレートで上がることはせずに女子サッカー部のある学校へと進学をした。

地元では羽柴綾女といえば華族であると知られていて、なぜ普通の学校に来るのかと散々周りから言われ続けた。

そして、生まれつき綾女に仕えていた相良もまた綾女と同じ学校に通った。

世話役として常に綾女の側にいる相良の存在は、金持ち学校以外では受け入れ難いものであったが、綾女が望む以上相良は従うしかないし、逆らうという文字は相良の脳にはない。

もちろん今も綾女をお守りする立場であるから大学も中宮大に在籍していて、綾女のようにスポーツをしているわけではないから本来ならば体育学部には入れないのだがそこは羽柴の力（つまり金とコネ）で体育学部に通っている。

体育学部のくせにどこの部にも属していないのだが。

「……だってずるじゃない。つかさの一番近くにいたのはあたしだよ。なのに……」

「なのに？」

「つかさ死ぬ間際に大悟くんに自分の代わりにプロになってって約

束したんだって……」

綾女の思いがけない言葉に、相良は目を丸くした。

綾女は相良のほうを向きもせず、少し震える声で話し続けた。

「じゃなきゃサッカー選手になってないって言ってた……。ならさ、あたしは何なの？」

「綾女……」

「あたしこそ何のためにサッカーしてると思ってんのよ……」

通っていた初等部ではジュニアサッカーなんてなく、学校が終わったらわざわざ他の小学校まで行ってサッカーチームに入って練習をした。

なぜかって、最初からサッカーに興味があったわけではなく、むしろスポーツなどたいして好きではなかった。

本当なら初等部を卒業して中等部高等部大学部に上がって両親が望むような人生を歩んでいるはずだった。

つかさがいなければ。

プロになりたいと常日頃から言っていたつかさの話を綾女はいつも受け流していた。

楽しそうにサッカーボールを持っているつかさの気持ちは綾女には理解できなかったが、つかさが嬉しそうにしていると綾女も嬉しくなる。

滅多に会えなくなってしまっただけから、つかさはやっぱりサッカーが好きだと笑うから。

そんな矢先、つかさは不慮の事故で死んだ。

葬式にも参加し、綾女だけは羽柴の代表として通夜にも行き、きちんとつかさの最期を見届けた。

なんでと、死なないでと叫びたかったけど、そんな幼心も羽柴家長女のレッテルが邪魔をして焼香を上げるときに顔を見るくらいしか

できなかった。

つかさの妹のみかさは、綾女がやりたいと思ったことをしていた。

お姉ちゃん死なないでと、わんわん声を上げながら泣いていた。

久しぶりに会うみかさに懐かしさを感じる反面、比護家の娘としてつかさの妹として参列できている彼女を恨んだ。

どう足掻いたって綾女はそこにはいけないから。

「ならあたしサッカーやなくて良かったんじゃない……。なんのためにわざわざ……」

亡きつかさのたった1つの夢を叶えてあげたいと思った。

叶えられるのは、いろんな意味で自分しかないと思った。

だからサッカークラブに入部して死ぬほど練習して、違う学校に通うことにして朝も夜も休日も返上してサッカーに打ち込んだ。

「阿笠大悟がサッカーやってるのは比護つかさのため？ ……んなばかな」

「……プロになって優勝するって約束を果たしたら、今度は何のためにサッカーすれば良いんだって言ってたもの」

この書斎部屋には、綾女が受賞した数多の賞状やトロフィー、メダルも飾られている。

市内予選優勝、中部予選優勝、県大会優勝、東海大会優勝、全国優勝、MVP受賞、その他準優勝3位などの数えきれないほどの賞状。

1メートル近くはあるトロフィーや小さなトロフィー、金色のメダルなど実に華やかで、しかしその裏には相当の努力があったことが伺える。

阿笠の部屋にあるようなパネルもあり、綾女の歴代の功績が讃えられている。

才能がなければ一流にはなれないと言うけど、才能があっても考えられないほどの練習をしなければ一流にはなれない。

更にこれで食べていける人間はほんの一握りだ。

綾女はその一握りの人間になろうと、全く興味のなかったサッカーで生きていく覚悟を決めた。

事実、阿笠と同じなのだ。

「お前と一緒なんだな」

相良は押し殺すような声でそう言う。

周囲の反対を押しきってサッカーを始めたり学校を変えたりしても、相良だけは何も言わずについてきた。

綾女に仕える立場であることをのぞいても、相良は愚痴1つ溢さずにむしろ綾女を励まし続けてきた。

相良だけは綾女のことを理解してくれ、綾女も全ての事情を相良に

話している。

そう、トップシークレットであるつかさとの関係やサッカーを始めた理由、そして阿笠大悟や比護みかさのこと。

「お前が比護つかさと同じ顔でサッカーやってるから、あいつはお前と比護つかさを重ねて見てんじゃねえのか」

相良の言葉に綾女はカッとして相良のほうを振り向く。

今一番言われたくないことをずかずかと言う相良が許せないのだから、綾女は悔しそうに唇を噛み締めながら相良を睨み付けた。

相良は一瞬ひるんだが、何とか綾女を阿笠大悟から引き離したいがために続けた。

「お前に死んだ幼なじみの面影を見ないはずがない。あいつには大切な幼なじみだっ……」

「分かってるわよ!!」

だが相良の言葉を遮るかのように綾女は叫ぶ。

「あたしはつかさの存在を示すためにやってるの！　つかさに見られるなら本望なの！」

綾女の矛盾する言動に相良は何も言えない。

綾女のしていることを知っている相良は、綾女の複雑な感情や葛藤、嘆きを十分によく分かっている分綾女が矛盾しているとしても指摘することはできない。

つかさのためにしているのは確かで、綾女がこうすることですつかさを世に知らしめたいという思いはあるのだが、その一方で自分は羽柴綾女であって比護つかさではないという気持ちもある。

難しい思いに、かける言葉など存在しない。

「……………つかさがなんだってのよ！　こんなものっ……………！」

綾女は棚上に置かれていた数々のトロフィーを思いきりはね除けた。

トロフィー同士があたり大きな金属の音を立て、激しく鈍い音を立てながらトロフィーたちは床に落ちていく。

あまりにも勢いよくトロフィーを飛ばしのけたせいで、綾女は左手に痛みを感じているがそれどころではないようだ。

「ばか大悟……っ!!」

哀しい哀しい声だけが部屋中に響いていた。

n
e
x
t

第20話【飛び交う想い】

「あれ、みかさいねえの？」

昼過ぎに起きた烈は、部屋の中にみかさがいないか探している。

みかさの通う華岡女学院は東部にあるのだが、みかさは高等部の国際科に進学していて国際科だけは中部にあるのだ。

家からも電車で通えるのだが、やはり烈のマンションからのほうが断然近いと親も黙認してくれている。

烈とみかさは公認の仲であるし、すぐ近くに幼なじみの阿笠もいるからたいして心配ではないようだ。

「たく……阿笠とだけは鉢合わせてないと良いけど」

寝癖のついている髪を軽く掻きながら烈はあくびをする。

みかさにも阿笠にもお互い会うなど言っていることで烈は安心している。

阿笠が元気よく日本に帰ってきてきて烈のもとに訪れたことで烈はようやくショックから立ち直ることができた。

だからまさか今みかさと阿笠が一緒にいるなんて夢にも思っていないだろう。

烈は適当に冷蔵庫をあさり、何か食べようと料理を始めた。

のんきに烈が家にいる時間、春樹と秋人はさすがにラウンドワンにも飽きて定食屋で遅すぎる昼飯を食べていた。

時間はすでに15時を回っているというのに、1人あたり2人前はペロリと平らげている。

普段運動量が激しい分、食べる量も半端ないのだ。

春樹も小柄ながら底無しの体力を持っているため秋人と同じくらい食べている。

「そういえば阿笠は誰と遊んでんの？ 烈？」

ようやく食べ終わり、人があまりおらず混んでいないことを良いことに2人は店から出ようとせず更に飲み物を追加し、居座ろうとしている。

だが定食屋といえど人が集まる場所で素顔をさらすことはできず、未だに変装したままだ。

パーカーのフードをかぶりサングラスをしている男とサンバイザーに黒縁伊達メガネをしている男がいたら有名人ではないかと疑いたくなるものだが。

「や。女と」

「えっ、彼女？」

「友達なんだと」

意外な答えに春樹はちよつと楽しげだ。

仲間うちで彼女がいないのは阿笠だけだからか、阿笠にもはやく彼女ができると良いと思ってるのは春樹だけではないだろう。

「へえ。阿笠もやるねえ。どんな子？」

「なんか……幼なじみに似てるらしい」

「幼なじみ？」

「阿笠には昔亡くなった幼なじみがいるんだよ」

つかさのことを知っているのは阿笠とみかさ以外では烈と秋人だけだ。

烈には自らが話したが、秋人は烈とみかさから聞いた。

あまり話したがらないのかもしれないため秋人も詳しくは説明できないが、それだけ言った。

「なるほどねえ」

春樹はジュースのストローをクルクル回しながら納得したように返事をする。

春樹の脳裏には、高校時代の恋模様が浮かび上がっていた。

夏実を振った自分に、ケンカ口調になりながらも本当のことを伝えるべきだと阿笠は言った。

おそらく阿笠があそこまで怒ったのもケンカしたのも、春樹とのそ

の件だけだ。

我を忘れてエースストライカーのその足で春樹を思いきり蹴ろうとしたのを秋人に止められたりもした。

そして、諦めるなど何度も言ってくれた。

春樹は、秋人と阿笠が恋敵であることをすごく悩んだ。

秋人は親友であるから本来なら秋人だけを応援したいが、阿笠だって友達だし何より自分が辛いときに救ってくれたのは阿笠だったから。

結果春樹はどっちの味方にもならなかった。

「あ、中宮大の体育学部だぜ」

「えっ。誰だれ？」

「羽柴綾女」

「えー?!」

春樹が予想以上に驚いたので秋人はビクツとした。

そんな秋人とは逆に春樹は興奮したように言う。

「綾女友達！ 麻冬とも！」

「え、まじ？」

「すごいサッカー上手いし可愛いし性格も良いんだよ！」

確かに3人は同じ学部ではあるが、毎日大学に通う綾女とは違って春樹や麻冬はほとんど学校にはいない。

出会いは入学式で、やっぱり春樹や麻冬は周りから囲まれていろいろ言われていて、みんなこぞって友達になりたがっていた。

2人の大学進学の様子はテレビでも報道され、入学式も当然記者が押し掛けてきていてそれはもう本当に大変だったのだが、そんな2人に全く興味を示していなかったのが綾女だ。

学部生が2人に話しかけてきているときにも綾女は付き人の相良と仲良く喋っていて、見向きもしなかった。

事実綾女は昔から阿笠しか興味がなかったから春樹や麻冬のことなど感心はなかったのだ。

だがそんな綾女の態度が逆に春樹の好奇心を誘い、春樹から綾女に話しかけて友達となった。

「綾女って超金持ちの令嬢でさ、付き人もいるわけ」

「まじ？」

「相良陸ってゆーんだけど、相良も同じ学部生なんだ」

学校では羽柴の手前一応付き人らしく振る舞い、綾女のことをお嬢様もしくは綾女様と呼んでおり、いつどんなときも片時を離れない。

その証拠に相良はいつだってスーツだ。

黒いスーツに白い蝶ネクタイがトレードマークで、物腰が低く常に綾女の一步後ろにいてかしまっている。

だが、春樹や麻冬の前だけでは素顔を見せてくれる。

付き人としていたときはクールに笑うが、それ以外のときはきちんと喜怒哀楽があり、そんな相良は春樹もすごく好きだ。

「すげ……」

「へーえ。綾女と阿笠ねえ。確かにお似合いだよなあ」

「でも恋はしないんだと」

秋人の言葉に、春樹は不思議そうに首を傾けながらなんでかと尋ねる。

幼なじみと似てるから重ねて見てしまう自分が怖いんだろ、と秋人は淡々と答える。

春樹や秋人に見てみたらそんな理由かと思うかもしれないが、まるで赤の他人とは思えないほどのソックリすぎる顔だったとしたら2人だって阿笠と同じことを言っていたかもしれない。

つかさが阿笠にとって特別ではなかったらこんなことは考えないだろうが、大事な幼なじみだったつかさだからこそ、もし生きていたら今こんな風なんだろうなと綾女を通して感じてしまう。

笑っている綾女の向こうには自分に微笑みかけているつかさがいて、いつか無意識のうちに綾女のことをつかさと呼んでしまうかもしれない。

そうしたらきつと阿笠は自分を責めて、二度と綾女と会わなくなるかもしれない。

結果、どちらにせよ2人は離れる運命だった。

「難しい、のかもね」

春樹はそう言うジュースを飲み干した。

「だけどその幼なじみを超えられるくらい好きになるかもしれないのに」

春樹は何気なくそう言ったが、秋人はその言葉に考えさせられてしまった。

悪いとか良いとかそういうことではなく、あのとき飛行機の中であ言った阿笠に秋人は何も言うことができなかった。

肯定せることも否定することもできず黙ってることしかできなかった

たし、事実何を言ってやれば良いかさえ分からなかった。

でも春樹ならきつとあんな場面で必要な言葉をかけてやること
ができただろう。

「明日学校行ったら聞いてみよっかな」

「何、明日もオフ？」

「うん。しばらくは学校のあと練習するくらい」

そうなんだ、と秋人が軽く返事をして2人はまたしばらく他の話題
で盛り上がる。

気づけば昼食を食べ終えてから1時間以上話しており、秋人はミ
ーティングがあることを思い出して春樹に企業の会議室まで送って
もらうことにした。

帰りの車の中でも話に花が咲き、久しぶりだからだろうけど本当に
楽しそうだ。

前までは学校で毎日一緒だったものだからなかなか会えない分嬉し
くなるのだろうかという積もあるんだろう。

車を走らせること30分強、ようやく秋人は目的の場所に着いた。

またな、と手を振ると春樹も笑ってばいばいと言い、車を走らせていく。

1人になった秋人はどこか心寂しくなるが、とりあえず会議室に向かう。

少しまだ早いが数人は来ていて、その中には阿笠もいた。

阿笠は一番端の椅子に座りながら窓の外をじっと見ている。

秋人が阿笠に話しかけようとすると、同期生が秋人の手を掴んでそれを阻止し、耳元でそつと囁く。

阿笠めちやくちや機嫌悪いぞ、と。

阿笠は窓の外を見ているためその表情を確認することはできないが、

ズボンのポケットに手を突っ込み軽くのけ反るようにして椅子に座っている姿は確かにいつもとは違う。

朝マンションで会話したときには普通だった、ということは綾女と何かあったということだと秋人はすぐに察する。

だが放っておくわけにはいかず、秋人はどうしたら良いか迷っている。

阿笠は自分からは決して弱音を吐いたりしないのだ。

秋人は意を決して同期生の忠告を無視し、おそらく秋人が今ここにいることすら気づいていない阿笠の肩を軽く叩く。

「阿笠。どうした？」

緊張した感じを見せず、あくまで普段通り振る舞う。

振り向いた阿笠は眉を逆八の字にしながらその瞳には何か強い意志が見られた。

ドキッとしたが、秋人は躊躇わずに続ける。

「羽柴綾女ってさ、春樹と麻冬の友達なんだって。でさ、」

「綾女の話しないでくれる」

「え？」

ドスのきいた低い声で、秋人の話を遮りながら阿笠は言う。

「綾女とはもう会わないから」

阿笠はそれだけ言って席を立ち上がり、部屋から出て行ってしまった。

秋人にたいしてもこんな態度を示すことに周りにはシンとしてしまい、秋人もまた呆然と立ち尽くしている。

意外すぎる反応に言葉が出てこないだけでなく、あそこまで阿笠が怒るのは秋人が知る中では初めてだ。

結局阿笠はミーティングが始まる直前まで戻ってはいなかった。

n
e
x
t

第21話【不覚の安堵】

「羽柴綾女って人について調べて欲しいの」

阿笠に烈のマンションまで送ってもらったみかさは、ノックもせず勝手に烈の部屋に入って突然そう言った。

いきなり何なのかと烈も驚いているが、そんな烈に構わずみかさはずかずかと言う。

「絶対おかしい。お願い、烈くんならできるでしょ？」

烈ならできる、というのは烈が情報通だからだ。

どんな些細な情報も見逃さないし知っていて、また烈に探せない情報はないに等しい。

学生的时候は学校中のことを知っていたし、誰も知らないはずの秘密さえあたかも見ていたかのように細かく知りつくし、その情報通ぶりには生徒会が恐れをなし、影で生徒会を操っていたほど。

本職は探偵なんじゃないかと疑うほどのすごさには誰しもが圧倒され、そのことをみかさもよく知っている。

「ちょ、落ち着けみかさ。詳しく経緯を話せ」

烈は大学の抗議で使うプリントをパソコンで作成しているところだったが、キーボードから手を離してとりあえずバックアップを取り、パソコンから離れる。

詳しく聞こうと座椅子に腰をおろし、みかさも座らせて話を聞くことにした。

さすがに落ち着きを取り戻したみかさは少し恥ずかしがっていてもいるが、さっそく本題に入る。

あのあと阿笠はみかさに綾女のことを話した。

綾女と出会った日、出会い方、その後の経過、綾女という人物について、そして今日何があったかということまで。

さすがは幼なじみ、何でも話せてしまうのだろう。

阿笠は綾女に関することを全てみかさに話し、もちろん顔がつかさにソックリであることまで写メを見せながら話した。

そして綾女がみかさに会いたがっていたことも。

それを聞いたみかさがおかしいと感じたのは、阿笠が狙われ始めたのと綾女と出会ったときがほぼ同時期であること。

そして綾女と仲良くなるにつれて嫌がらせがエスカレートしたことだ。

嫌がらせの件に関してはみかさも関係しているので放っておけないのだろう。

とにかく今みかさが知っている全ての情報と推理を事細かに烈に話した。

「……偶然だと思う？ 羽柴綾女がお姉ちゃんにソックリでしかもサッカーまでやってて、それで大悟くんとも友達だなんて」

「確かにな」

「しかも羽柴綾女はあたしに会いたいって言ってるようだけど、脅迫状ではあんなだし」

つまりみかさは、阿笠を襲った人と綾女が何らかの形で関係していると言っている。

確かにいろいろ共通するところはあるが、でもどう考えたって矛盾してしまう。

その線で調べるのは無謀のようにも思えるが、烈だって阿笠やみかさが関わってるとなれば黙ってられない。

烈は少し考えたあと、一応調べてみると承諾した。

だがみかさが阿笠から話を聞いたと言ってしまったので禁止されるにも関わらず今日阿笠と会っていたのがバレてしまい、みかさは説教をくらはめになってしまった。

阿笠やみかさを思っただけだから仕方ないのだが、近くにいる幼なじみを見無視しろというほうが無茶な話だとみかさも反論するため、烈とみかさは言い合いになり話は平行線だ。

理屈から言えば、阿笠が何もせず毎日を平穏に送りみかさと縁を切ったフリをしていれば問題はない。

正論だし、守りたいと思ったならそうさせるしかないだろうけど、ならばそれはいつまで続けられれば良いのか。

目に見えないものに怯えながら一生続けなくてはならないのか、それは果たして幸せと言えるだろうか。

阿笠にとってみかさは、みかさにとって阿笠は幼なじみという枠以上、つかさが確かにこの世に生きていたことを証明してくれる証人である。

縁を切るなんて絶対に不可能だし、可能にしたいくはない。

みかさと烈の言い合いは終わりを見せなかった。

夜の9時にもなると、さすがに阿笠たちもミーティングを終えてみんな続々と帰宅していく。

寮に帰る者、実家通いの者そして1人暮らしの者と多種多様であり、とりあえず秋人は阿笠にこのまま直でマンションに帰るのか尋ねた。

阿笠がチラッと秋人の顔を見ると秋人はドキッとして怯みそうになるが、そんな秋人の気持ちとは裏腹に阿笠は軽く笑いながら言った。

「どっか行ってくて言ったらついてくるんでしょ？」

その顔はいつもの楽しそうな表情でホッと安堵する。

「だけどごめんね。今日みかさと会ったんだ」

笑顔も束の間、今度は秋人をじっと見つめながら言う。

黙っていればバレないのに、阿笠にはそれはできない。

きつとこれからもみかさを無視することはできないし、何より阿笠は気づいていた。

綾女と離れた今、みかさと仲良くしていても問題ないことに。

「だけど、俺は綾女のほうを切った。だから大丈夫」

「どういう……」

「分かんない？ あの手紙の送り主と綾女は関係してるんだよ」

予想外の展開に秋人は驚きを隠せない。

阿笠もまた、自分で言うっておきながらまだどこかでそうじゃないことを願っている。

他の選手たちがみんな会議室から出ていき、阿笠たちも出なくてはならなくなったので話の続きはロビーですることにした。

大きなソファや自販機があり、床は大理石で輝いていて豪華に見える。

阿笠は2人分のジュースを買って、1つを秋人に手渡した。

秋人はとりあえず受け取り、2人は一緒にソファに腰を下ろす。

人の出入りも割りとあるので2人がそこにいても何の違和感もなく、阿笠はさっそく本題に入ることにした。

とは言っても所詮憶測に過ぎないのだが。

「綾女と会ったときのこと話してなかったよね。……一から話すから聞いてくれる？」

「ああ」

秋人が躊躇なく即答してくれたことに阿笠はどことなくホッとする。

そして全てを話すことに決め、綾女と出会ったあの日はいつでなぜ知り合って何があったのかという細かいところから、そして続けてこれまでの経過についても説明し始めた。

そう、例えば綾女がもともと阿笠を知っていたとしてもあのとき阿笠から話しかけていなければ2人は親しくなることはなかった。

言うならば、綾女がつかさに似ていなければ2人は交わることなどなかった。

綾女はつかさに似てるからダメだと阿笠は言うけれど、似てるのがなんでいけないのかと綾女は言うけれど、似ていなければ出会うことはなかった。

メールをしたり電話をしたりして少しずつ仲を深めていき、一緒に遊ぶまでになったくらいなのに、どうしても一線を越えられない。

正しくは、阿笠だけが越えることを恐れているのだ。

長々と話す阿笠の説明を、秋人は相づちをしながら黙って聞いている。
た。

もちろん遊んだことだけでなく綾女という人物についても話し、もうこれ以上話すことが何もないというくらい、阿笠は容赦せずに話

した。

阿笠は綾女が金持ちの娘であることを知っていた。

綾女が絶対に家まで送らせてくれないことに疑問を抱いていた阿笠が、車を運転中にある豪邸を見つけた。

門から玄関までかなりの距離がある相当な金持ちらしいことは分かるし、偶然メイド2人が門から出てくるのを見て、つい阿笠は車のスピードを緩め、メイドたちの会話を聞いた。

『綾女様も本当に元気でいらっしゃるわ。大学でまでサッカーやるなんて』

『本当。旦那様もサッカーやってらしたようだけど高校までだそうよ』

『そりゃあそうよね。羽柴家の嫡男ですもの』

『あら、綾女様だって1人娘でおいでだわ』

知っている単語がポンポン飛び交っていることに阿笠は目を丸くした。

今の流れでいけばこの豪邸に住んでいるのは羽柴家であり綾女はその羽柴の娘で跡取り。

中宮大で女サカに入ってるくらいだからそういう道に進むものだと思っていたが、どうにもそうではないことに驚きつつ、おそらく金持ちであることを知られなくなかったという綾女の気持ちに哀しくもなる。

何か事情があるにせよ、羽柴のことを話してくれたら良かったのに。

なんていうモヤモヤした暗雲ばかりが立ち込めて、そのときから阿笠の心にはどこか綾女との溝ができてしまっていた。

それでもまだ繋がっておきたい一心で綾女との親交を深め、知らないふりをしながら楽しい時間を過ごしていた。

同時に、あの襲われたとき黒いスーツを着た男たちを見て綾女の顔が浮かんた。

綾女と出会ったときから変なことが続いている上に、綾女は何かを隠しているという実感があったからだ。

家のこともそうだし、最初つかさの話をしたときにも感じた違和感や話しているうちに感じる疑問を阿笠は常に不思議に思っていた。

つかさと会ったのは一度だけだというのに、やたらとつかさのことを知っているしつかさを気にかけている。

絶対につかさどこかで関係があるはずだし、似ているのも綾女がサッカーやっているのも偶然ではない気がしてた。

だからこそ余計に綾女を好きになれないとも思えた。

綾女が本当につかさとは全く関係のない赤の他人だという確証があれば例え類似点があるとしてもそんなことは思わないけれど、どうにもそんな運命的なものは実在しないようだ。

結果、今日綾女にああ聞かれたときもあんな風に言うしかなかったのだ。

「もう会わないって言われて、ホッとしてる自分もいたんだ」

今日のことまで全て事実を話し終えたあと、阿笠はおとなしめに軽く笑いながらそう言った。

そうは言うけれど、脅迫状の件と綾女が関係してもなかなか切れずにいたのはやはり綾女の側にいたかったから。

つかさに顔が似てるからだとしても、それがきっかけだとしても綾女の言葉1つで嬉しくなったり心が軽くなっていたのも事実だった。

じゃなければこんなにもずっと一緒にいるはずがないのに、阿笠はつかさという存在ばかり気にしてその事実からは目を離してしまっている。

「……寂しくねえの？」

「寂しく？　なんでよ」

秋人の言葉に、阿笠はクスツと笑いながらそう言う。

ホッとしているのは事実だろうし、これでもう何かに怯えることもない。

なぜ脅迫状を送ってきたのか、その秘密とは一体なんなのか、なぜみかさまで関係しているのかなど謎ばかりだが、阿笠はそれを探るつもりは一切ない。

ようやく安心して毎日を過ごせるね、と阿笠は秋人のほうを見ながら笑った。

否定も肯定もせず困ったような顔をしている秋人の表情を見ていないふりをしながら。

n
e
x
t

第22話【意固地】

綾女と連絡を取らなくなってから1ヶ月は経ち、季節は初夏を迎えていた。

7月も半ばに入り、阿笠の怪我も完璧に完治して練習に身が入り、この暑い中グラウンドを駆け回る日々が続いていた。

阿笠の思った通り、綾女と関係を絶ったあとから全くといっていいほど嫌がらせも何もされなくなり、つけられているような感覚もなくなつて、襲われることもなければみかさとも普通に会ってももう大丈夫という平穏な日々に戻った。

秋人も次第にそこまで阿笠にベッタリした暮らしをしなくなり（とは言うものの2人は同じ部屋で暮らしている）、本当に前の生活と変わらなくなる。

シーズン中で試合試合試合と忙しく慌ただしい日々が続く、昨年は2位で終えたため今年こそは1位を狙いに行っている最中で、なかなか順調だ。

いろんな県を行き来し、泊まっては練習し練習しては試合し試合してはまた他所の場所へ移動するの繰り返しで、元に戻ったというより更に忙しくなった感じた。

だがこの忙しさが阿笠を紛らわせてくれている。

サッカー尽くしの日々のおかげで綾女のことなどさっぱり忘れている。

いや、正しくは慌ただしさを利用して忘れようとしているのだ。

どうあがいても綾女を記憶から消すことはできない。

けれど、一生綾女を思っていていくわけにもいかない。

綾女は言葉通りもう連絡もしてこないし会いにも来ない。

このままいけば確実に阿笠の心から綾女への想いは消えてなくなる

だろう。

「……」

それを望んでいるはずなのに、来るはずのない電話を待ち構えている阿笠がいた。

「阿笠？」

試合後、ホテルで夕食を食べてから風呂に入ってエスパルス選手たちもみな各自自由の時間に入る。

とは言うものの明日は移動となるから朝もはやく、ほとんどの選手たちがすでに就寝している。

そんな中阿笠は一向に眠らずに部屋の中のソファに腰をおろしながら月明かりの空を見上げていた。

そして時折携帯を開いては、ため息を漏らして再び携帯をしまうという動作ばかりを続けていた。

「眠れないのか？ お前だって疲れてるだろ」

先に寝ていたはずの同室の秋人が眠そうに目をこすりながら起き上がり電気をつけた。

起こしてごめん、と謝る阿笠に秋人は首を横に振って起こされたわけじゃないと否定する。

時刻はすでに1時を回っていて、明日は朝の6時にはここを出発する予定でスケジュールはかなり詰め詰めだ。

しかも、ワールドカップで優勝に貢献した阿笠と秋人はチームでもうレギュラー固定されていて疲れもピークのはず。

「もう寝るよ。おやすみ、秋人」

阿笠はヘラツと笑いながらいそいそとベッドに入る。

じゃあ電気消すね、と秋人の返事を聞かずに勝手に消すと部屋は真っ暗になり、窓際だけが月に照らされて少しだけ明るい。

地元に留まる期間が今はほとんどないため、友達との連絡手段は携

帯だけ。

単に烈やみかさからのメールや電話を待っていたのかもしれないが、それならばなぜ新着メールがなかったびに切なく思うのだろうか。

好きになってはいけない人とは友達すらなれないのだろうか。

「……意地張ってんなよ」

暗闇の中で秋人は静かにそう呟いた。

シンとしているものだからその声は部屋中に響き、寝たふりをしていた阿笠も反応する。

だが阿笠は何も言わずに秋人に背を向けたままだ。

「会いたいなら会えば良いじゃん」

「無理」

「なんで」

こんなにも忙しい生活ならどのみちみかさには会わないのだから、まだ綾女とは切らなければ良かった。

なんて、たまに思ったりしてしまうのも事実。

でもいつかなくてはならないのなら早いほうが良い。

何かを犠牲にしなきゃ成り立たない生活だから、阿笠は平穏な生活を選んでみかさとの関係を犠牲にした。

もう会う気がなかったからこそあんな酷い言葉を綾女に突きつけたのだ。

「……結局俺には綾女より平和な毎日のほうが良かったってことなんだろう」

今にでも泣いてしまいそうなあのときの綾女の顔が、今でも忘れられない。

携帯を開くたびに思い出し、みかさと話すたびに自責する。

襲われたことがネックになっていゐるわけではないし、戦おうと思えば立ち向かえない問題でもない。

だけど、綾女と別れたあと街で見かけたみかさの格好を見てこれで良かったと実感した。

自分みたいに有名人でもないみかがただ街を歩くだけなのにあんな風に変装をしなければならぬことに胸が痛む。

なぜみかが関与するのか不思議ではあるが、自分と関わりがあるからだということは確定的だった。

綾女が泣いたとしても、これで良かったんだと、そう思うしかないかなったんだ。

「全てを守ろうとすることはそんなにいけないことなのか」

躊躇うことなくそう言ってのけた秋人の言葉が阿笠の胸を貫いた。

綾女を取るかみかさを取るか、阿笠の選択肢はそれしかなかった。

天秤にかけてどちらがより大切に重大なことなのかだけを考えて、みかさの安全と友達の負担を減らすことを第一にしたら答えは簡単に出た。

両方選ぶなんて阿笠にできるはずがない。

綾女との関係が続けたいと思うのは自分の勝手に、みんなのことを考えて早く片をつけるにはこうするしかないと思っていたからだ。

今でもそう思うし、きっとこれからも。

「……全てなんて守れないよ」

全てを守ろうとすることはそんなにいけないことなのか。

その問いに、本当は全てを守りたかったんだと言いたかった。

けど守ろうとせずに逃げた自分を否定したくて、そんなことは思っていないと思ひ込むことで不可能だと言いたかった。

時をかけて少しずつ解決していけばその先にはもしかしたら幸せな未来があったかもしれないけれど、今すぐにでも何とかしなければならぬこの状況で、ああする以外方法はなかった。

ただ救われたのは、綾女のほうから切ってくれたこと。

阿笠から切らなかったにせよあんな酷い言葉を吐けば結局傷つけたことに変わりはないが。

「みんなだってもう心配せずにすんで良かったろ？　これが最善策なんだよ」

阿笠はやけくそのようにそう言う。

その言葉にムツとした秋人は、枕元にあった本を阿笠目掛けて投げつけた。

暗くて今阿笠がどんな姿勢をしているのかさえ分からないが、鈍い音と同時に阿笠の痛がる声がして本はどうやら阿笠に命中したようだ。

いきなりのことに驚いた阿笠はスタンドの灯りをつけ、秋人のほうを振り向く。

「なんだよ!」

自分から切ったのに未だ立ち直れないことのもどかしさとそれを秋人に知られた羞恥、そして思い通りにならないことへの怒りが爆発する。

スタンドによって見える秋人の表情はいつになく険しいものだが、それは阿笠も同じだ。

互いに睨み合いながらも先に口を開くのは阿笠だ。

「……嫌なんだよ俺も! 秋人に迷惑かけて烈を寝込ましてみかさまで巻き込んで!!」

やり場のない憤りを押さえきれずに、誰にも言えないまま過ごしてきた日々の中でいろんな感情が芽生え続ける。

自分で決めたことだから誰かに弱音も愚痴も吐けなく、哀しいとも言えなかった。

自分が哀しむのはお門違いで自分さえちゃんとしてたらこんなことにはならなかった。

いるはずのないつかさと綾女を見間違えるなんて最低すぎるし、それを利用してきたことへのばちがあたった。

「やっと普通の生活に戻れてすっきりしてんだよ！……言わせんなよっ……！！」

阿笠は枕を壁に投げつけ、悔しそうに唇を噛み締めた。

ずっとヘラヘラ笑って誤魔化してきた阿笠が思わず本音をぶちまけてきたことで、さっきまで怒っていた秋人の表情が和らいでいく。

何を聞いても遠回しに尋ねても知らないふりをしてきたのに、今は直球だ。

やけになってるだけかもしれないが、知らないところで泣かれるよりずっと良い。

「……迷惑なんて思ったことないよ」

「そんなのっ……」

「俺も春樹も烈もみかさちゃんだって。……少なくとも俺は絶対に」

まっすぐに阿笠を見つめる真剣な瞳に、阿笠の怒りも徐々に抑えられてくる。

あのときと同じだ。

ワールドカップ決定戦の前夜、つかさとの約束を果たしたらその先どうしていけば良いのか不安に思う阿笠をそのまっすぐな瞳で捕らえ、優しい言葉をかけてくれた。

たいして人に興味なんかないくせに、こんなときばかり優しいん

だと阿笠は心の中で呟く反面、秋人がこういう場面では嘘をつかないことも知っている。

秋人がそういうのなら、本当に迷惑ではなかったのかもしれないけれど、だからと言ってその好意に甘えるわけにはいかないし何よりもう既に今更だ。

今どうこう言ったって終わってしまったこと。

「羽柴さんの存在をみんなが嬉しく思ってたんだ。……ようやく阿笠が自分の幸せ見つけたんだって」

「……」

「お前が幸せだと俺たちも嬉しいんだよ」

いや、違う。

終わってなんかいない。

なぜなら、まだ始まってすらいなかったんだ。

逃げてばかりで偽りの気持ちを隠そうとしながらも君に向けた笑顔

は本物だった。

嫌だったらとっくに会ってないし、遊んだりしない。

少なくとも君と一緒にいるとき俺は楽しかったんだ。

理由はどうあれ、一緒にいられるだけで嬉しかった。

「分かってる？俺も烈も春樹も……夏実も麻冬もみんなお前の味方なんだって」

たくさん励ましてもらい、たくさん支えてもらった。

なのに俺が君にしたことは酷い言葉を浴びせたことだけで、恩返しどころか恩を仇で返してしまった。

大事な人が突然いなくなる哀しみは誰より知っているはずなのに、突き放されて放っておいている自分が情けない。

言い訳ばかり綺麗事ばかり並べてる自分は最悪で、いつもこうやって簡単に諦めてしまう。

肝心なときに、欲しいものを欲しいと言える勇気が欲しかった。

「会いたいなら会って来いよ。後悔だけはすんな」

また会いたいって思ったらそれこそ命狙われるかもしれないしまた心配もかけることになるのに、それでも良いって言ってくれるの。

1人じゃ何もできないバカでごめん。

いつもいつも誰かの手を借りなきゃ立てなくてごめん。

「……………うん」

だけど、もうごめんは言わないことにする。

それでも笑ってくれる君に伝えたいのは、ありがとう。

n
e
x
t

その言葉だけ。

第23話【母子手帳】

「……………嘘だろ……………」

7月の中旬ともなると高校では夏休みがぼちぼち始まり、大学では試験が始まる時期だ。

蝉が鳴き太陽が照りつける暑さを喜ぶ小学生たち、部活や遊びに打ち込む中高生たちが楽しげに街中にいる。

そして烈もちろん、大学講師の助手として試験問題の作成をしたり学生たちの課題の採点をしたりしている。

と言いたいところだが、今はみかさと実家のほうに戻り、みかさの家のつかさの部屋の中にいた。

みかさからの頼みで羽柴綾女についてあれからいろいろ調べると、なかなか興味深いことなども判明してきたのだ。

どうやって調べたかと言えば、交友関係の広い烈には羽柴の関係者の1人や2人くらいはいて、そこからねずみ方式で人脈を広げていき新たな情報を取得していったのだ。

羽柴家に入るとは難しいことなので、羽柴の使用人などから綾女の身辺についても詳しく聞いたり、羽柴の当主である綾女の父親や母親などについてまで抜かりなく調べていった。

なぜつかさの部屋にいるのかというと、何か手がかりがないか確認しているのだ。

阿笠がそこまでつかさと綾女が似てるといふのならもしかしたら接点があるのかもしれない。

生き別れた姉妹かと思うところもあったが、綾女は確実に羽柴の血を引いている。

なぜなら、血液型が一致しないからだ。

羽柴の両親はA B型とB型で綾女はB型。

つかさの両親はともにO型でつかさもみかさもO型。

A B型とB型からO型の子どもは生まれなし、O型の両親からB

型が生まれるこつもありえない。

つまり綾女が比護家から生まれることもなければつかさが羽柴家から生まれることもないというわけなのだ。

「……なんで……………」

烈はクローゼットの奥からあるものを取り出し、それを見て顔を青ざめていた。

そこにあつたのは母子手帳。

「なんで羽柴……比護綾女と比護つかさの手帳が……」

そこには、綾女の名字が比護とされている綾女とつかさの2人の母子手帳があつた。

「長女綾女、次女つかさ……誕生日……………10月11日……」

もしかしたら名前が綾女と同じなだけで、つかさは双子だったのかもしれない。

みかさからそんな話は聞いたことがないから、生まれてすぐ亡くなったため綾女の実在は知らなかったのかもしれない。

けれど、こんなで済んだ偶然ってありえるのか。

羽柴綾女について調べていくうちに彼女の誕生日を知った。

その日がこの手帳に書かれている日で、比護つかさも同じ誕生日。

2人が双子であることは血液型からありえないが、こんな偶然のほ
うこそありえない。

「烈くん。なんかあったー？」

手帳を前に動けずにいると、みかさが入ってきた。

烈はとっさに2つの手帳を隠し、誤魔化したように笑う。

「なんもないや」

「やっぱー？ お姉ちゃんとはあまり関係ないのかな」

「……かな」

烈はズボンの後ろポケットに手帳を差し込み、みかさと一緒につきさの部屋を出ていく。

まだ何か出そうな気がして、烈はチラッとつかさの部屋を見るがみかさにはまだ何も言えないので黙っていることにした。

確かな確証がない今の段階では断言できないし、ましてや阿笠になんて口が滑っても言えない。

阿笠は烈が綾女のことを知っていることを知らないのだ。

烈は引き続き羽柴綾女について調べていくことにした。

そして、大学にすることは同じなのだが講師助手の烈とは違い学生の春樹は珍しく学校に登校していた。

大きな試合も終わり、日本では敵なし世界でもトップクラスの功績も残して夏の間は練習に打ち込むだけの日々となる。

もちろん国内での試合は別とするが。

春樹が登校となるとやはり大学中がザワめき出し、カメラのフラッシュが絶えずに春樹は人々に囲まれてしまう。

入学直後もかなりすごかったのだが時間が経つにつれて徐々にみんなも落ち着いてくるのだが世界大会のあとはやはりまた盛り上がってしまう。

持ち前の明るく人懐っこい性格のせいで、つい声をかけられたら笑顔を見せてしまうがそれが仇にもなる。

だがそんな春樹の天の助けになるのがこの人物だ。

「春樹様。お久しぶりでございます」

この声を聞くと周りは一斉にその人のほうを振り向いて静かになってしまう。

そう、それは

「相良」

「お元氣そうでなによりです。それはさておき、久々の登校をこんなお出迎えでは歓迎を通り越して地獄では？　みな様にも春樹様の気持ちを考えて頂きたいものですね」

ニコリと笑いながら相良がそう言うと、シンとなりながら周りはぞろぞろと春樹の側から離れて行く。

相良ほど敵に回したくない性格の人はなかなかいないし、なにより相良は羽柴の付き人。

相良を敵に回すのは羽柴を敵に回すことにもなる。

「さあすが相良。ありがとっ」

「いえ。喜んで頂けてなによりです」

「いつまでそうしてるの？」

周りがいなくなったにも関わらず敬語をやめないことを春樹が指摘すると、相良は声を漏らしながら笑う。

ここは大学ですので、と付け加えた相良はなぜか楽しそうだ。

大学内となれば誰にどこで見られているか分からず、羽柴家の品位を下げるわけにはいけないので常に敬語で話し綾女の友人にも一歩引いての接し方をしなければいけないのだ。

だから本当に、例えば全く関係のない場所で知っている人がいないと断定されるような場所でなければ春樹にも綾女同様こんな接し方をするしかない。

相良にしてみればそれは何の苦でもなく、幼少からそうしてきたものだから自然になっているが春樹たちにはまだ慣れないようでもある。

それでも春樹がどうしても言うため、相良は春樹の一步後ろではなく隣を歩くことにしていて、今も共に向かっている。

本日の予定は2限に体育があり昼をはさんで3、4限に期末試験となっている。

2人はこのまま更衣室に行くことにした。

綾女はすでに更衣室に向かっていて、相良も更衣室に行こうとしていたところを校門付近が騒がしいことで春樹か麻冬が来たのだと察

知して助けるために校門に向かったのだ。

更衣室は学部棟の1階にあり、まあ大抵体育学部生は普段から運動用のウェアやジャージを着ているからあまり着替える必要もなく、春樹もすでにウェアを着ている。

一応貴重品をロッカーに入れるために来ていて、言うまでもなく相良はスーツを着ているため着替える必要がある。

実技が多いのにわざわざ相良はスーツを着直すのだが、そんなところからも付き人である証が伺える。

更衣室で着替えを済ませたあと2人はグラウンドへ向かう。

体育ではいろんな種類のスポーツを行っていくが、今は男女ともにハンドボールだ。

かなり広い大学内を歩くのはなかなか至難で、場合によっては次の授業に間に合わないときさえある。

だから学生は中を原付や自転車で移動する人が多く、通学には自動車は許されているが敷地内での乗り回しは禁止されているため、春樹や相良も当然バイクでの移動だ。

あらかじめ駐輪場に乗り物を置いとき、1日それを愛用することになる。

今向かっているグラウンドは学部棟のすぐ裏にあるから問題はない。

グラウンドに着くとまだ少し早かったらしく同じ学科の人はまだあまりいないようだ。

適当にストレッチでもしていようかと思うが、春樹は思い出したように言い出した。

「あ。ねえ、綾女と阿笠知り合いだったんだね。言ってくれば良かったのに」

春樹が阿笠と交流があることくらい国民なら知っていることだ。

春樹が突然そう言うと、相良はまるで時が止まったかのように動きをやめて春樹の顔をじっと見た。

阿笠は秋人の相棒で、その秋人の親友は春樹なのだからいつかはバ
レるかもしれないとは思っていたが相良も綾女もあえて春樹にも麻
冬にも言わなかった。

違う、言えなかった。

春樹と麻冬自身が綾女と親しい仲だからだ。

「相良？」

「……聞いてません？ もう2人は連絡を取ってませんよ」

「え？」

「そうですね、1ヶ月ほど前くらいから。詳しいことはわかりませ
んけれど」

相良は春樹から目を反らしながらそう言う。

仲が良いと秋人から聞いていたため、予想外の展開に春樹は頭がつ
いていけない。

が、あのと秋人が言っていた言葉を思い出して春樹は再び相良に
尋ねる。

「自然消滅ではないよね？　なら阿笠から？」

「え、」

「やっぱ幼なじみに似てるからだめなのかな……」

ボソッと呟いたその言葉を相良は聞き逃さず、悲鳴のような驚きの声を上げた。

その声にビクついた春樹が慌ててどうしたのか尋ねるが、相良は我に返ったのかどうにか理性を保とうと必死に誤魔化す。

まさかつかさのことまで知っていると相良は思っていないく、ましてや顔が似てることで口論になったことまでバレてるのかとヒヤヒヤしている。

実際には春樹はそのことを知らないし、秋人から少し聞いた程度だからつかさの存在も何も全くもって知らないのだが。

「阿笠もなあ……やっぱつかさちゃんのこと忘れられないんだろうなあ」

春樹は後々秋人からつかさのことを聞いた。

阿笠とどんな関係だったのかとか、阿笠がプロになった理由なども含めて。

それを知ってもやはり春樹は同じことを思う。

「似てたって綾女とは別人なのになあ」

その隣で相良が目を細めながら怪訝な表情を浮かべていることに気づかずに。

n
e
x
t

第24話【募る想い】

「え？ 春樹が？」

試験を終え、春樹と軽く1時間ほど綾女と相良は談話していた。

麻冬は学校には来れなかったようで、春樹もこのあと練習をする予定だ。

夕方からの部活までまだ時間のある綾女は相良と共に教室でテスト勉強をすることにした。

体育学部とは言ってもその中で科は保健体育科とスポーツ研究科の2つに分かれていて、言わばスポーツのエリートたちは保健体育科、将来トレーナーなどを目指す人はスポーツ研究科に所属している。

春樹も麻冬も綾女も相良も保健体育科に所属していて、保健体育科には1学年40人ほどいる。

実力から言えばやはり春樹と麻冬がトップとなる。

オリンピックに出たのだ、当たり前だろう。

だが春樹と麻冬はほとんど学校に來れないので、それを抜きにする
と綾女はトップに君臨するほどの実力がある。

男女差はあるし一概には言えないが、全てをそつなく軽々とこなす
運動能力は日本でもトップクラスなのだ。

「まさか春樹様まで知っておられるとは予想外ですね」

「……何を？」

「阿笠大悟のこともそうですが、もちろん比護つかさですよ」

ペラペラと教科書を適当にめくりながら相良はぶっきらぼうに言う。

いきなりの相良の話題にすでに手を止めていた綾女は、相良から少
し横に視線を外しながら黙り込む。

視線の先には雲一つない澄みきった青空がある。

「なぜ切ったんです。阿笠大悟と。あれほどまでに親密になりたが
っていたのに」

空は青くて眩しくて、飛行機雲さえないのになぜだろう、美しいと思えない。

むしろこんなにも澄んだ空を見ると気持ちが悪くなる。

きっと綾女の心が朗らかではないからだろう。

「比護つかさのことを知っている人と親しくしたかったんでしょう？」

こんな澄んだ空は、やっぱりあの日を思い出す。

つかさの葬式が行われたときも鮮やかな晴天で、でもいるはずの大悟くんの姿が見当たらない。

幼なじみなのになんでいないのか不思議で、でもつかさの両親にそんなことを聞く余裕もなくて、それでみかさがやっぱり泣いていて。

忘れはしない。

死化粧をして美しさを保ったままのつかさの顔も、お姉ちゃんがいなかったら兄弟が誰もいなくなると泣き叫んだみかさも、それから3年くらいして小学生の全国選抜に選ばれてテレビに出ていた大悟くんも。

つかさの顔を最期に見たとき、つかさがいたことを証明するために羽柴に反抗するためにサッカーをやると誓った。

泣き叫ぶつかさに、あなたの兄弟は他にもいると本当は言いたかった。

テレビに写る大悟くんに今までにないほどの憎しみを覚えて、同時になぜサッカーをしているのか不思議でならなかった。

「……つかさと仲良い人と知り合いたかったわけじゃない。大悟くんと知り合いたかっただけ」

「ならばなぜ」

「あたしという限りつかさのこと忘れられないでしょ」

本当は、人よりも運動能力が高いことが恨めしかった。

つかさのためにサッカー始めたけど、つかさのためにプロになるって決めたことは事実だけど、そんなに簡単ではないと思っていた。

なのに始めてからぐんぐん上達していき、サッカーだけでなく学校での体育や体育祭球技大会マラソン大会でもトップを誇る成績をおさめてきて、もしかしたら本当にプロになれるかもなんて甘いことを考えていたら、高校3年のときにスカウトされた。

卒業したらぜひうちに来てほしいと監督直々にやってきたほどで、プロになるということはゆくゆくはLリーグに所属することになるのだから願ってもないチャンスのはずだった。

なのに、ちっとも悩みもせずに断り大学に進学した。

そのままプロになっていればつかさの夢を実現できたのに、もうこんな好機ないだろうと分かっているにもイエスと答えることはできなかった。

「それが願いなのでは？」

つかさの夢を追っていながら、羽柴を憎んでいながらもやはり羽柴のことを考えたらプロになることはできなかった。

大学に進学すれば、あと4年考える猶予ができると思ってしまったのだ。

あの場で人生の決断をすることができなくて、先伸ばししようとしてしまった。

「比護つかさの存在をまずは阿笠大悟に示して、お次は比護みかさ、そしてプロになって日本中の国民に。それが目的だったのではないですか」

結局なれなかったらなれなかったで、そんな簡単なことではないと言いつくれば良いと思っていた。

羽柴を裏切って親の望む学校には進学してこなかったというのに、これでは意味がない。

憎らしくても恨めしくても、やっぱり自分は羽柴の血筋があって、本家の一人娘だという肩書きには抗えない。

「……女心も分かんないの？　うちの付き人は」

綾女はため息をつきながら静かにそう言う。

だが、相良はその問いに答えることはせず綾女をじっと見つめながらこう言った。

「ならば羽柴を継ぐことだけに専念されてはいかがですか？」

こんな暑い日に汗1つかかずにスーツを着ている相良は涼しげに言う。

水色のネクタイが初夏を表しているのかもしれないが、その上に黒いスーツでは見ているほうが暑い。

相良の言葉に綾女は勢いよく顔を上げた。

何か言おうとした綾女を遮るように相良は続ける。

「プロになる心構えができなく、比護つかさに見られることさえお嫌なら本来の姿である羽柴綾女様として生きたら良いだけです」

確かにその通りだ。

相良が言うのも最も。

「何度でも言います。あなたは由緒ある元華族・羽柴家の姫君にあらせられます」

相良の言葉に、反論しようとしていた言葉が出ずに綾女は押し黙る。

綾女が跡継ぎとして生きてきたなら相良にも迷惑はかかっていなかった。

付き人がゆえに綾女と共にエスカレーター为学校をやめて名もない学校に入り、相良にとっては何の意味もない体育学部にまで入られた。

綾女が放課後サッカーが終わるのを何年待ち続けてきたことだろう。

相良は決して嫌だとは言わなかったし、綾女が決めたならと何も言わずについてきてくれたが、綾女がそうしなければ相良にもそれ相応の学歴がつくはずだった。

羽柴家にとって相良家にとって何の役にも立たないスポーツで有名な私立大なんて入らずにすんでいた。

「私にはお嬢様に意見する権利はありませんが、お嬢様が迷っておられるなら私も黙ってはいられません」

綾女が卒業して結婚して年を取っても、一生相良は綾女に仕える。

主従関係は永遠に続いていくことがずっとずっと昔から約束されている。

綾女の決断は相良の人生を大きく変えることになるし、相良に自由など存在しない。

従者としての代々流れる血のせいで主に抗うこともできないがそれが嫌だというわけではないし、覚悟なんて棟の昔からできている。

ついてこなくて良いと綾女は言うけど、そんなこと許されるはずもない。

「……ごめん。相良のこと振り回して」

綾女は相良の真っ直ぐな瞳に申し訳なさを感じる。

的確なことを言うのはいつものことだが、それでも綾女に反抗したことはない。

それが定めなのだと分かっているからこそ余計哀しい。

「……だけど、憎いの」

綾女はうつむきながらポツリとそう呟いた。

相良はしばらく黙っていたが、綾女が続きを話そうとしないので何が憎いのか尋ねた。

綾女は顔を上げることなく、弱々しくつかさの名前を言う。

予想外の返答に驚いたが、流れ的になんとなく分かる気がして相良は何も言えない。

肯定も否定もできず、静まり返った教室にただ居座る。

つかさのために生きてきたのは自分だと思っていたのに、阿笠まで同じ人生を歩んできた。

しかも2人は直接約束し合っていたなんて聞いたたら、本当なぜ自分がこんな生き方をしてきたのか分からなくなる。

それだけならまだしも、阿笠は未だにつかさを忘れられない。

幼なじみだから当たり前かもしれないが、生きてる自分を見ようとはせずに死んだつかさを重ねている。

それがなにより悔しくて。

「……そんなに好きなのか。阿笠大悟のこと」

教室だということを忘れて相良はついたため口になる。

綾女はうつむいたまま顔を両手で覆う。

ただ仲良くなるだけのつもりで、つかさのことをもつとよく知りたくて近づいた。

なぜサッカーを続けているのか知りたかっただけ。

なのに彼は、あんなにも優しくてあんなにも無邪気で、側にいることが嬉しくなった。

「……………好き……………」

綾女は消えてしまいそうなくらい小声で答えた。

つかさを未だに忘れられずに大切に想っていると知っているのに、それでも募るこの気持ちを抑えることができなかった。

n
e
x
t

第25話【守りたいもの1】

「烈ー。明日大学？」

「あー、まあな。ったく、めんどくせえ」

8月に入り、暑さも本格的になってきた。

エアコンの効いた涼しい部屋で久しぶりにくつろいでいるのは阿笠と烈だ。

ここは阿笠の部屋で、なんとも久々の出入りになるためかなり汚く、さっきまで烈が汗水流して掃除をしてくれた。

阿笠も多少手伝うのだが完璧主義の烈は阿笠に手出しされたくないようで、結局阿笠は見ているだけとなる。

掃除を終えて烈が買ってきたケーキと阿笠が入れた紅茶で一休みしている最中。

「俺も行こっかなあ」

ようやく取れた2日間の連休の初日、阿笠は烈と過ごすことにした。

「絶対だーめ」

阿笠の呑気な言葉に烈は真っ向から否定する。

快適な空間の中でテレビのバラエティを見ているなんてごくありふれた当たり前のことなのだが、専門職の彼らはなかなか休まる時間はない。

阿笠はもちろん一年中サッカーの練習や試合ばかりで家に帰ってきてもすぐに寝てしまったりとまったりする時間はなく、烈もまた講義のプリント作成に試験や課題の採点、自分の絵画を描くなどしていればなかなか時間も取れなく不規則になってしまっていた。

その道を選んだのだから仕方ないのだが、こうも若いうちから仕事仕事では先が思いやられる。

「なんでよお」

「お前なー。ただでさえ阿笠の親友ってだけで学校中の奴らから質問攻めなのに実際にお前が来てみる。騒ぎどころじゃ済まねえぞ」

烈は高校生のときから阿笠の親友だと国民に知られており、当然大
学で助手なんかをしてれば質問攻めになるのも無理はない。

今をときめく有名人にして人気者の阿笠大悟と親友となれば嫌でも
注目される。

烈が助手としてやってきた当初よりはマシにはなっているが、阿笠
のサインを欲しがる人や阿笠の話聞いたがる人が後を絶えない。

もちろん烈自身も高校生のときからテレビに出たりして有名だった
ので美術系の学生からはなかなか人気である。

「あはっ。じゃあ明日の補講終わったら夕飯食べに行こう」

「おお。んじゃイタリアンで良い？ 予約しとく」

「頼む」

夏休みにも関わらず補講があるため明日は午後の4時間ほど烈は大
学に行くようだ。

その時間阿笠はまるっきり暇になるので何してようか考えていると、
阿笠はふと秋人の言葉を思い出した。

遠征中にホテルで深夜に2人で会話した内容、会いたいのら会ってくれば良いというストレートな秋人の言葉に納得しつつも忙しさでそんな余裕はなかった。

向こうから会わないと言ってきたのだからもう会いたくないのかもしれないし、もう連絡先も変えているかもしれない。

会いたい、会いたいと何度思っても電話することはできず、そんなことをしていたらいつの間にか真夏になっていた。

こんな日々が続いてももう携帯を確認することすらなくなったら、いつか綾女を忘れてしまう日が来るのだろうか。

初夏に起きた幻だと、諦められるのだろうか。

あんな酷い言葉を最後に終わらせてしまうのか。

幼なじみに似てるから恋愛感情は持てない、なんてそんなありふれたセリフで傷つけたまま二度と会うこともないのか。

だけど、酷く傷つけたと分かっているにも謝れない。

つかさを重ねて見てしまう事実は事実だし、そのことでこれから先傷つけてしまうことがあるならいつそのこと今傷つけて終わらせたほうが良い。

会いたい

って、会ってなにをすれば良いのかさえ分からない。

会わないなんて言わないでくれだなんて言えない。

「……さ？ 阿笠？」

ぼーっと考えごとをしていた阿笠は、烈の声にようやく我に返る。

ヘラツと笑いながら何？と聞き返すと、烈は呆れたようにため息をついた。

「……考えごと？ 違う、悩みごとか」

烈は髪の毛を軽くくしゃり、おもむろに立ち上がる。

「へ？ 悩みなんて、」

阿笠に背を向けた烈を見ながら阿笠は首をかしげる。

「……みかさと会ってるんだって？」

「えっ」

「言ったよな？ みかさとはしばらく距離置けて」

阿笠が何に悩んでいるのかくらい烈には分かるが、一応綾女のこと
は烈はまだ知らないことになっている。

みかさから聞いて調べてはいるものの、阿笠からは一度も聞いたこ
とがないのだ。

無理に聞きたいわけではないが、綾女について調べていくうちに浮
上する黒い影を烈は放っておくことができない。

だからあえて烈は知らないふりをして阿笠から聞き出そうとしてい
るのだ。

「や、あの……えと……」

阿笠は返答に困りたじろぐ。

理由を話したら全てを話さなくてはならなくなるからだ。

黙っていたいわけではないが、阿笠にとっても良い話ではないし、
なにより烈はつかさの顔は知らないもののつかさのことは阿笠から

聞いていたため知っている。

バカだと言われるのがオチだと思っているようだ。

「で、でももう何にも起きてないだろ？　だから、」

「これから起きない保証もないだろ」

「それは……」

出会ってからもう10年近く経とうとしている。

まだ10年と言うべきか、けれどやっぱりもう10年。

完璧で隙のないプレーを好む烈と豪快で華やかなプレーを好む阿笠は出会った当初は反発しあっていた。

あまりにスタイルが違いすぎてお互いを嫌っていて喋ったことすらないほどだったが、ある日ついにキレた2人が対決をして、そうして引き分けに終わった。

完璧で隙がないプレーをするからこそ烈は無敵のキーパーであり、豪快で華やかなプレーをするからこそ阿笠は最高のストライカーなのだと理解した。

その日から2人は親友になり、いつでも一緒だった。

隠し事なんてほとんどなく、まあ正しくは烈は隠すようなことは全くしないし阿笠の場合は隠そうにもすぐ烈にバレるし特に隠そうともしない。

なんでも知りあえている仲のはずだった。

何か隠していることがバレたときも、阿笠はすぐに烈に打ち明かして、今回みたくはぐらかしたりなどしたことはない。

だから、よっぽど言いたくないのかもしれないと烈にも伝わっている。

だがすでに知ってしまったている烈には、はいそうですかでは済まされない。

「……とにかく、もう本当に大丈夫なんだ。今まで心配かけてごめ

ん」

決して振り返ることのない背に訴えかける。

珍しく頑なな阿笠だが、そうまでして言えない理由を烈には分かっている。

阿笠がまだ知らない事実さえ知っているのだから余計に。

でも、やっぱり阿笠から言って欲しかった。

隠し事をするなど言いたいわけではないし、親友だからと言って全てを話さなくてはならないってわけでもない。

ただ、そのことで悩む日が続くのなら力になりたい。

いつの間にかぼーっと考えてしまうくらいなら、いっそ口に出してしまえば良い。

支えになりたかった。

ただそれだけ。

「……別れたのは、みかさのため？　自分のため？　……秋人や俺のため？」

「……え？」

「俺が知らないと思った？」

腕を組みながら烈は窓に近づき、空を見上げた。

阿笠が否定してくることくらい分かっていたから、阿笠と面と向かって話すことができなくて背を向けた。

阿笠はまさか烈が知っているとは思わず、冷や汗を流しながら困ったように笑い、それでもまた「なんのこと？」と言い逃れようとする。

勝手に調べるなんて酷い行為をしたのはこっちなのに、阿笠にそんな顔をさせることになってしまった。

「……知ってるんだ。全て」

申し訳なさそうに烈はそう言いながら、振り返る。

哀しげに微笑している顔から目が離せず、阿笠は肩がすくみ軽く緊張感を覚える。

「……本当に……」

「ああ。……みかさに頼まれたんだ。羽柴綾女について調べて欲しい、と」

本当はこのまま言わないまま最後の最後まで調べて、裏で糸を引こうと思っていた。

阿笠に害が起きないように、そしてもう二度と阿笠を襲ったであろう人物たちや羽柴綾女が阿笠に近づかないようにさせようと考えていた。

だけど、どうしたってそんなことは君が望まないはずだから。

秋人や春樹からも聞かされて、たまに阿笠に会えば何か考えごとをしたり携帯を見つめたりと絶対に羽柴綾女を引きずっていると分かるから。

「そ……か」

ショックを受けるであろう阿笠の表情を見たくなくて振り返らないつもりでいたけど、でももし阿笠が泣くとしたら受け止めたかった。

それでも否定するなら、支えになりたかった。

笑って誤魔化すのなら、励行したかった。

見ないふりはもうしない。

阿笠が彼女を必要だと追い求める限り。

例え俺自身が阿笠の心を傷つけることになったとしても。

n
e
x
t

第26話【守りたいもの2】

「勝手なことしたって思ってる……けど、放っておけなかったんだ」

烈に黙っていたことがバレたことに対する動揺や、また掘り返すことになった哀しみなどが混ざって阿笠は混乱している。

困ったように眉をひそめて、なんと言ったら良いのか分からず瞳は潤いて揺れる。

普段はお人好しで人に頼まれたら断れない性格で、そんなときでもニコリと笑い、サッカーのことになれば唯我独尊となるため阿笠は基本的に困るような出来事もなければそんな表情を浮かべることがない。

隣にマイペースの烈がいるというのもあるかもしれないし、何かに悩んだりしても1人で抱え込もうとする。

精神的に追い詰められたときに誰かに手を差し出してもらえたときには泣きつく。

これが阿笠だ。

今まさに阿笠側にしてみればかなり追い込まれた状態にいて、それは烈にも分かる。

適当にはぐらかすでも笑うでもなく、何も言えなくなったときに阿笠が本当に困っているときであるのだ。

「阿笠、俺に言いたくない理由はなに？」

「っ……」

「あー、違う……。言いたくないなら言わなくて良いんだ。ただ……」

どうしても詰め寄る口調になってしまう自分を制するかのようには髪をくしゃっと握り、目を瞑りながらもどかしげに言う。

「……何があったとしても俺はお前を嫌いにはならないし敵になることもない。絶対に」

赤い髪の毛が陽にあたってキラキラしていてとても綺麗で、困りき

っていた阿笠は吸い込まれるように烈の髪を見入る。

赤い髪に青いカラコンが烈の昔ながらのトレードマークで、その髪の間隙からシルバーのピアスが輝いている。

ワイルドな容姿がとても似合っているけど、マイペースなところもあるけど本当はすごく優しい人。

阿笠のことが大好きで阿笠にだけ優しい人。

いつだって阿笠の側にいて、阿笠が笑えば烈も笑い、阿笠が泣けば慰め、挫けそうときには心配して支えてくれた。

そう、分かっている。

話せばきっと烈は阿笠の味方になってくれると。

失望することはないと。

「……話せないわけじゃないんだ……。ただ、……」
「ただ？」

「……きっと烈は全てを調べてしまうだろうと」

綾女と出会った当初から感じていた違和感、いろいろ思うことがあったけど自分でわざわざ詮索するつもりはなかった。

隠し事があるならば綾女から話してくれるのを待とうと思ったし、脅迫状の件も綾女と関係ないと信じたかった。

だから情報通の烈に話してしまったら、おそろくいとも簡単に調べてしまうと思った。

「……阿笠………最初から気づいて……」

意外だと烈は驚く。

「うん………だけどそんなことないと思った。………思いたかった」

偶然の出会い

これは運命の出会い

そう信じたかった。

だって、そうでなきゃやってらんないだろう？

例えば綾女がなぜ近づいてきたのかとか、脅迫のことはなしにしても綾女との出会いまで仕組まれたものだとしたら、綾女への思いは一体どうしたら良いのか。

ここまで気が合う女の子なんてそういないし、相性だって良いと思った。

そう、つかさのことをなしにしても綾女が存在はとて大きくなくて、麻冬より愛せると思えた。

それが嬉しかった。

「俺にもようやくまた好きな人できるって……」

周りは恋人だらけで、それが嫌だってわけではないけど羨ましかったのは事実。

仲良さげな春樹と夏実、婚約までしてる烈とみかさ、相思相愛の秋人と麻冬。

羨ましくて憧れた。

あそこまで愛し愛されることができるとすごいと心底思っていた。

だから、俺もみんなのように幸せになれるかもしれないと思ったんだ。

幸せになりたかった。

「……でも、信じられなかったんだ」

「……なんで？」

「誕生日が一緒だったんだ。綾女と……つかさの」

綾女が落とした学生証を拾ったことがあったとき、ふと彼女の誕生日を見た。

一瞬目を丸くして、こんな偶然が何度も続くことってあるのかと思った。

顔が似てて特技も同じ、2人は知り合いだったようでおまけに誕生日まで一緒となれば疑いたくもなる。

「知ってたのか……」

「双子かなって思ったけど……」

阿笠は説明しようとしたが口を止めた。

というより、言葉にしたくないようだ。

ここから先を話してしまえば烈からいろいろな情報を聞くことになるだろうし、今はまだ可能性が高いってだけなのに確信をついてしまいそうだからだ。

綾女と会わないようにして連絡も取らなくなってもう関係ないはずなのに、それでもどこかで綾女は事実無根だと思いたかった。

烈は阿笠が言葉に詰まる理由がなんとなく理解でき、しばらくは待っていかうかと思っていたがおそらくこれ以上自分からは言っていないだろうと考える。

阿笠の気持ちを思えば自分が何も言わずに何も教えないほうが良いのかもしれない。

知らないふりして羽柴綾女はもう過去のことにして闇に葬り去ったほうが気が楽だろう。

知りたくないのなら無理に知る必要はないし、諦められるのならそれでも良い。

だけど

「血液型、だろ」

だけど、このままで良いわけがない。

烈がそう言うと、阿笠は割り切れないようで何か言おうとするがそれすら言葉にせず、ギョツと口を閉じる。

「羽柴綾女が比護家の実の娘であることも比護つかさが羽柴家の実の娘であることもありえない。もし双子だとするなら、2人はどちらの家の子どもでもなくなるだろうな」

阿笠は小さい声で烈の名を何度か呼ぶが、烈は聞こえないふりをする。

うつむいているが、今にも泣きそうなことくらい烈にも分かっているが、例え阿笠が泣いたとしても烈は止められない。

事実阿笠は唇を噛み締めながら眉をひそめて、目を潤ませていてあと少し詰め寄れば泣いてしまいそうなほどだ。

「おかしいだろ？ でも絶対この2人は繋がってる。現に阿笠を襲った奴らについては、」

「烈……………も……………良い」

「身元が判明した。やっぱ思っていた通り奴らは」

「もう良いよ！！ 烈！」

聞きたくないというように阿笠は両耳を手で塞ぐ。

無視して話し続けようとしたが、うつむいてる阿笠から涙が1粒こぼれ落ちたのを見て烈はそれ以上言えなくなる。

泣いてでも言わなきゃと思っていたけど、やはり阿笠の涙には敵わない。

「阿笠」

烈は阿笠に歩みより、ソファーに座りながら腕で目を覆い泣いているのを見せないようにしている彼の目の前にしゃがむ。

声を押し殺しながら早く泣き止もうとしている阿笠を見て罪悪感に苛まれるが、目を覆っている腕を掴んで離させ、阿笠の首に手を回して阿笠を抱き締めた。

「ごめん……」

驚いた阿笠は目を丸くしたため更に涙がこぼれた。

横目で見ても烈の横顔さえ見えなく、目に入るのは赤い髪の毛と首の後ろだ。

抱きしめられるその身体は、細いが今でも適度な運動を続けているせいで筋肉質だが必要最低限の筋肉しかなく、しなやかで美しささえある。

「れ……」

「阿笠が、………春樹も秋人もひどく心配してた。みんな羽柴綾女のことだ」

「え……」

「みんな……お前が彼女を想って哀しむ姿を見たくないってよ」

烈はギュッと力を込める。

烈がまさか綾女のことを阿笠から聞かされていないとは思わず、みんな烈に話を持ち出してきた。

自分たちが何を言っても何の助けにもならないから烈から言ってくれと。

親友なのに聞いてないなんてプライドが許せず、烈は分かったとだけ答えるしかなかった。

本当はなんで言ってくれないんだと阿笠に詰め寄りたかったけれど、あえて言わなかった阿笠にそんなこと言えるはずもない。

だからと言ってやはり阿笠には自分しか弱音を吐ける人はいないのだから、聞くしかないだろう。

「みんな……優しいね」

阿笠は烈の背中に手を回して、軽く抱きつく。

烈がこうしてわざわざ言ってくれているのも優しさなのだと阿笠には痛いほど分かっているし、阿笠もこのままで良いなんて思っていない。

「俺、自分のことばかりだね……」

烈が首から手を離しても阿笠は背中に回した手をほどくことはせずに更に強く抱きついた。

まるで離さないでと言っているようで、烈はしゃがんでいた体制から膝立ちにし直し、そうすると自然と肩に乗せていた阿笠の頭は烈の胸へと下がる。

烈の胸に思いきり抱きついている阿笠が愛しくて、烈は阿笠の頭を優しく撫でた。

n
e
x
t

第27話【守りたいもの3】

その後しばらく阿笠が泣き止むのを待ち、落ち着いてから話そうとしていたが不覚にも烈のほうが入ってしまった。

ソファに座りながらいつの間にか睡眠中の烈を見て、泣きすぎて赤くなった目を緩ませて阿笠はクスリと笑う。

朝には弱いが昼間に寝ることは滅多にない烈だが、おそらく大学の仕事や綾女の調査をしていたため最近あまり眠れてないのだろう。

阿笠はソファから立ち上がり、烈をソファに寝かせてやることにした。

動かしても全く起きる気配のない烈は本当に疲れてるんだろうとよく分かる。

「……ふふ」

烈の髪に触れながら阿笠は密かに笑う。

そうして烈の邪魔にならないようにとカーペットの上に寝転んで雑誌を読み始めた。

もちろんスポーツ系の雑誌で毎月買っているものだ。

いつもなら熟読しているところなのになぜか落ち着かなく、そわそわしてしまう。

烈が寝ているからというわけではないが、烈との会話を思い出せば雑誌なんか読んでいる場合ではない。

烈は一体どこまで調べたのだろう。

さっきの様子では阿笠を襲撃した犯人も分かっているようだし、綾女とつかさとの関係も何か知っているようにも思える。

みかさから頼まれたと言っていたし、みんなからも言われたらしいから調べざるを得なくなってしまうたんだろう。

ただでさえ忙しそうなのに余計な手間を取らせてしまっている。

阿笠は寝ている烈を見上げながらそんなことを考えた。

分かってる。

みんながここまでしてくれているのにそれを無下にする必要はどこにもないし、こんなに味方ができたのならもう恐れることもない。

向こうがもう会いたくないと言ったとしてもこちらが追いかけてはならない理由にはならないし、むしろ追いかけるべきなんだと思う。

だけど、いろんな想像が頭の中で繰り広げられる。

例えば、綾女と出会ったのは意図的なんだとすれば用済みになっていたとしたらもう自分に会う必要はないのだろうし、そうでなくても出会いが偶然ではないことは分かっているから、向こうにはそんな気持ちはないのかもしれない。

それなのに追いかけるのは単なるバカで惨めだ。

しかもあんな酷いことを言った手前なんて声をかけたら良いかさえも分からない。

だけど、明日があるなんて保証はどこにもない。

大事な人がある日突然いなくなることがあることくらい、誰よりも自分が一番知っている。

それを繰り返して良いものなのか。

阿笠は身体を起こして胡座をかきながら悶々と自問自答し続ける。

くだらないことかもしれないけど、こんなに悩んだのは生まれて初めてだ。

「どうしよう……烈。……なんて、本当は悩まなくても結論は出てるんだ」

しばらくしてから、静まり返った部屋の中でそんな声が響いた。

寝ている烈に問いかけるように話しているのは、起きている烈には言えないから。

だけどバレてしまっていたのならどうせなら俺の口から言えば良かった。

秋人も櫻井もみかさも知っているのに、……櫻井には言った覚えがないけど、親友の烈にだけ言っていないのはあまりに酷な話だ。

本来なら一番に報告したり相談するべきなんだろうけど、でもやっぱり言えなかった。

最後の最後まで綾女を信じていたかったんだ。

そう言う綺麗ごとには聞こえるし、事実綾女を信じることで自分を正当化させたかっただけ。

綾女との出会いはまさに運命そのもので、お互い惹かれあっていた。

そんな理想を描きたかったのかもしれない。

仕組まれた出会いに勘違いして恋をした可哀想な自分を消し去りたかった。

「綾女に会いたい。……できるものなら好きだと言いたい」

阿笠は小さな声で独り言を話し始める。

「そりゃ最初は確かにつかさとまた一緒にいれるみたいだっと思ってたけど…………でも綾女をつかさと重ねたりなんかしない。あんな嘘だよ…………」

あの日綾女に言った残酷な言葉を思い出しながら阿笠は悔いたように唇を噛み締める。

似ているからダメなのかと問うてきた綾女に何も言ってやれなくて、肯定も否定もできなかった。

それが精一杯の誠実だと思ったんだ。

重ねているわけがないのに、綾女と離れるためにあえて何も言わずにあたかも肯定しているかのごとく沈黙になり、結果綾女はまんまと勘違いをしてくれた。

嘘を言葉にしないことが自分なりのせめてもの償いのつもりではあったけど、何も言わないなら同じことだよな。

むしろはっきり言葉にしたほうがマシかもしれない。

綾女はつかさに似ているから親近感がわくだけで、つかさの代わりでしかなくて決して綾女に恋心を抱いているわけではないと思いつくことで綾女を切る糧とした。

やっぱり俺には両方ではなくどちらか一方の選択しかなくて、そうしたらどうしたってみかさを見捨てるわけにはいかないから必然的に答えは決まっていたんだ。

全か無かで全を選べたら素敵なんだろうけれど、そんなことをしようとしたらきつと失敗して無になってしまうだろう。

安パイで行くしかないと思ったんだ。

なのになぜみんなはこんな俺のためにいろいろしてくれるんだろう。

勝手なことにして勝手に傷ついた俺を責める人は1人もいなくて、みんな大丈夫だと背中を押してくれる。

こんなに背中を押されていても、なかなか綾女に会いに行こうとは思えない。

「……でもわざわざ惨めな思いしに会いに行くなんてバカみたいだろう？」

綾女が本当につかさと双子だったりとかしてもともと俺の存在を知っているなら、なぜわざわざつかさを知らないふりしていたのか。

俺が今でもつかさを忘れられなくて情がうつって綾女を好きだと勘違いしないようにするための予防線だったとしたら、俺が綾女を好きだと思うこの気持ちは迷惑だろう。

というより、最初から狙って近づいたのなら俺を好きになるはずもなくただの俺の一人相撲でしかない。

そんなことをまた綾女に会いに行くことで自ら証明するのは恥ずかしいし惨めだし、とてつもなく辛い。

「……へえ？　いつになく諦めが早いんだな」

どうしたら良いか分からずに髪の毛をくしゃくしゃ搔きながらやり場のない気持ちを抑えられないでいる阿笠にそんな声が聞こえた。

ふと横を見ると、寝ていたはずの烈が目を開けて呆れたような表情をしている。

「え？　れ……なん……」

「わり。阿笠がソファ横にしてくれたときから実は目え覚めてたんだ」

「えっ?!」

烈はムクツと上半身を起こ上がらせて、まだ少し眠いのか目をこすってから髪の毛を手で軽く整えた。

烈に聞かれてるとは知らずに独り言を話していた烈は驚きのあまり放心状態であんぐりと口が開いたままだ。

そんな阿笠を見て、烈は真顔で言った。

「麻冬んときはずっと粘ってたじゃん。俺、あれ感動したんだけど」
「……」

「いつも人の気持ちを最優先に考えるお前が初めて自分の気持ちを押し通してさ、そりゃ最後は秋人と付き合ったかもだけどあんどき麻冬はお前といれて幸せだって言ってたろ」

そりゃそうだけど、と阿笠はうつむきながらボソボソ答える。

あのとときは状況も立場も何もかもが違いすぎる、と言いたかったけれど言い訳みたいだしおそらくそんなことは承知した上で烈もそう言ってるんだと阿笠は自分に言い聞かせる。

確かに麻冬の本心に気づかないふりをして麻冬と付き合い続けたけど、最後は麻冬を振ったじゃないか。

守りたくて麻冬と付き合い出したはずなのに、いつの間にか守られていたのは俺のほうで、守っていて欲しくて秋人に譲れなかったんだ。

それじゃだめだと気づいて別れたのは本当だけど、秋人を想い続けながらも俺の側にいてくれようとしたことに耐えられなくなったのも事実。

結局は自分の気持ちしか考えていなかったんだ。

「……好きって気持ちだけじゃ無理なこともあるんだよ」

こんなことが言いたいわけではない。

あれほどみかさを諦めようとした烈に説教かましたくせに、こんなこと言えた義理ではない。

みんながみんな順調に恋愛してきたとは言わないけど、なぜ俺の恋はいつだって実らないのだろうか。

悔しくてたまらない。

はがゆくて仕方ない。

努力はしてきたつもりだけど、足りないということなのか。

素直になれない自分がここにいる。

n
e
x
t

第28話【守りたいもの4】

『良かった。良かったね、烈』

あれはもう2年半以上も前になるだろうか。

将来フランスに行くことが決まっていた俺は、束縛したくないがためにみかさに告白をすることができなかった。

みかさもたぶん、それを分かって何も言わずにいて、お互い思い合っているを知っていても知らないふりをしてきた。

『ああ。……ありがとな、阿笠。阿笠のおかげ』

『はは。そんなこと、あるかもしれないね』

そう答えながら無邪気に笑う阿笠はとても眩しくてすごく羨ましかったのを覚えてる。

阿笠が俺たちに何度も何度も何度も、好きならそんなことは関係ないのだと教えてくれた。

だから、俺たちはようやく結ばれることができたんだ。

長い恋だった。

出会いは小学生のときで、阿笠と全国選抜で仲良くなってからみかさとも知り合った。

いつからとかなぜとかはもう思い出せないし、はっきりとした理由もないだろう。

ただもう好きになってしまっていた。

恩人なんだ。

みかさとの将来をとっくの昔に諦めていた俺に、阿笠は好き以上に大事なことなんかはないと言ってくれた。

『……みかさが言おうとしたのを止めたんだって？　みかさが阿笠らしいって笑ってた』
『ん？　あー、あはは』

晴れて付き合うことになったあと、みかさは幼なじみの阿笠に感謝の意味も込めて報告しようとしたらしい。

だが、おそらくその話であることが分かった阿笠はみかさに待ったをかけた。

苦笑いしながら阿笠はごめんと謝ったようで、一瞬みかさはなぜだか分からなかったがすぐに理解したらしい。

『だってやっぱり烈から聞きたかったから』

そして、俺が阿笠に言うまで阿笠からは何も聞かずに待っていてくれた。

いつだって阿笠が誰よりも俺の幸せを思ってくれているように、俺だって阿笠の幸せのことばかり考えてるんだ。

阿笠が嬉しそうだったら俺も嬉しいし、阿笠が辛いのなら俺は哀しい。

「好きでも無理なことはある、だって？」

烈は嘲笑うように含み笑いをしながらはつきりとした声で言う。

ここで笑われるとは思っていなかった阿笠はキョトンとしながら烈の顔を見上げる。

烈は冷酷な瞳をしながら、少し怒っているように見えた。

「俺がそう言ったとき、お前は好きだという感情に勝るものはないって言った」

「そ……」

「俺がフランスに行っても離れる必要なんかないと、告白しちゃいけない理由にはならないと、相手を想って傷つく必要はないと言った」

もう何年も前の話なのに、今でも鮮明に覚えている。

烈だけでなく阿笠も、あのときの記憶は忘れられない。

どんなに状況が違おうとしても、阿笠がそれを否定することは過去の自分のセリフをも否定することになり、そのセリフのおかげで成就した烈は無意味になってしまう。

そんなことないなんて、口が避けても言えない。

阿笠は返す言葉がなくて黙り込むが、逆に烈は話し続ける。

「あれ嘘か。……それとも所詮は他人事ってか」

「ちがつ……」

「じゃあ教えてくれよ。お前が羽柴綾女が好きであること以上に守らなければならぬものを」

どうしてみんなそんなに綾女とくっつけたがるのか。

応援されるたびにそんなことを思ってしまう。

俺が良いと言ってるんだからもう良いじゃないか。

なんて、携帯開いて綾女からの連絡を今でも待ち続ける奴のセリフではないよな。

そう、確かに吹っ切れてないのは事実だし未練がないと言えば嘘になる。

けれど、怖いんだ。

つかさを中心に渦巻いている何かに巻き込まれそうで嫌なんだ。

もうとっくの昔に亡くなっている人のことでどうこう言いたくないし、つかさは大事な幼なじみで俺の全てだ。

綺麗なままの記憶で残しておきたいんだ。

だからそれを壊すものがあるなら、俺は徹底的に排除したいし俺を巻き込まずにすむのならそうしてもらいたい。

……つまり逃げたんだ。

真実を知るのは怖くて。

「……比護つかさか？」

俺が答えられずに黙っていると、烈のほうからその名を出してきた。

心を読まれているようにも思えるけど、俺の親友ならまあ分かってもおかしくないよな。

確かにつかさの言葉がきっかけてサッカーやろうと思えて、つかさのためだけにこれまでの人生を捧げてきた。

けど逆に、つかさがいなかったら今の生活はない。

この道に進むと決めてから得たものは多すぎて、まず烈にすら出会わなかったかもしれない。

烈にも秋人にも出会わず、きっと星陵には行っていなかったかもしれない。

サッカーの道に行かなかったらそれはそれで順風な毎日を過ごしていたかもしれないが、今俺はとても幸せだから。

だから本当につかさには感謝してるんだ。

「なら余計に思わないか」

「……え？」

「明日があるなんて保証はどこにもないと」

それを言われたら何も言い返せなく、阿笠はグツとなり何も言えない。

分かっていると肯定したいけど、肯定してしまったらこれ以上は抗えない。

かと言って否定することはできなく、気持ちのぶつけようのない阿笠はキツと烈を睨む。

睨みながら何か文句を言うでもなく、何も言えない悔しさを全面に出している阿笠に、烈は一瞬怯む。

ずけずけと深入りしすぎたかもと後悔するが、それでもやはり抑えきれない。

大切な友達だからこそ伝えなきゃいけないものがある。

「それをよく分かってるほうはお前のほうじゃ……」

「分かってるよ!!」

これ以上聞きたくないと、烈の言葉を遮るようにして阿笠は叫ぶ。

「分かってるよ……。分かっているのにやろうとしないのは、知らないことと同じだってことも分かっているんだ」

その言葉に烈はピクツと顔をしかめ、反論する。

「いーや分かってない。何も分かってねんだよ、お前」

睨んできた阿笠にお返しするかのようには烈は睨み返す。

心配したり励ましたり同情したり怒ったりとめまぐるしく変わる感情に翻弄される2人の間にはすでにピリピリした空間しかない。

どうしても綾女とくっついて欲しい烈と、どうしても嫌だと言い張る阿笠の意地のぶつかりあいだ。

「知らないことと同じだ？　ざけんなよ。現にお前は知ってるじゃねえか。良いか、分かっているのにやろうとしない奴のことを臆病者って言うんだよ！」

「なっ……」

「逃げてばかりで前に進みたくないただけの言い訳なんだよ。もっと言ってみようか。卑怯って言うんだよ、そういうのは！」

今のお前は、まるであの頃の俺と同じだ。

自分の思い込みと意地のせいで明るい未来を信じられずに、周りを
僻みながら生きてきた俺とそっくりだ。

だけど俺はお前のおかげで前に進むことができた。

意志を変えることは難しいことだと分かっているけど、でもどうし
ても阿笠にも前を向いて欲しいんだ。

世界を広げることで今の俺があるように、今の俺が幸せであるよう
に阿笠にもそうなってもらいたい。

360

「……やらないで後悔するよりやって後悔したほうがずっと良い」
「……」

「どんな結果になったとしても努力してきたものは決して無駄には
ならない。サッカーと一緒にしろ」

空調の効いた部屋

快晴な窓の外

会話以外の雑音がない空間

そして、清々しい烈の微笑んだ表情

全てが新鮮に思えた。

目に映る見慣れた光景がとても美しい。

言葉など浮かばないかのごとく、言い返す気などちっとも起こらないで、パアツと世界が開けた気がした。

「……比護つかさが大事なら真実を追求したほうが良いぞ」

最後に念を押すように烈は声のトーンを落とした。

そうして、もうこれ以上言う気はないらしく再びソファに横になって、近くにあったテレビのリモコンに手を伸ばす。

電源が入ったテレビは突然映像が写り、静かだった部屋に音声が入って少しばかり賑やかになるが、阿笠はテレビに背を向けたまま微動だにしない。

烈は構わずテレビを見るが、心ここにあらず状態で、ただぼーっとしているだけだ。

だが烈と違い阿笠はぼーっとしているわけでも呆然としているわけでもなく、自分の手を見つめていた。

軽く閉じて開き、まるで生きていることを確認しているかのようだ。

そして、阿笠はそのまま後ろに倒れ、仰向けになりながら天井を見つめた。

「阿笠？」

いきなりの行動に烈はつい反応してしまい、阿笠は目をつむりながら笑い出した。

「あは、ははは……。……………うん……。そうだよね」

「え？」

「……ごめん、烈。真相が分からないまま終わらすのはよくないね」

泣いているかなと思いつながら烈が阿笠の顔をのぞきこむが、目を開いた阿笠は意外にも晴れやかな顔をしている。

臆病者、卑怯者と言われてようやく気づいたようだ。

大事なことを見失うところだった。

「……協力してくれる？」

阿笠は横目でチラッと烈を見上げ、返事をもらう前にフッと笑う。

烈が断るわけないと知っている阿笠は、久しぶりに本気の笑顔を見せてみた。

いつもの優しい優しい、爽やかな笑顔はいつぶりか。

きつと秋人もホッとするに違いない。

「つたりまえだろ？」

そんな阿笠の笑顔を見て、ついっられて烈も笑った。

ようやくいつもの阿笠が戻ってきた。

n
e
x
t

第29話【見かけた姿】

その後2人は仲良く部屋でくつろぎ、夕方になれば烈がそうめんを茹でて食べた。

2人でこんなにゆっくりしたのは本当に久々で、なんとも穏やかな空気が流れていた。

暗黙の了解で、とりあえず今日は綾女の話題はやめようということ
で以後一切出てこず、中学選抜時代の一緒に試合に出ていたときの
ビデオを見返したりして笑いあう。

深夜までかかり、どちらからともなく2人は就寝、そうして現在は
翌日の午後2時を迎えている。

「んあ……メールいっぱい……」

日頃の疲れを癒すかのごとく阿笠は熟睡していて、今ようやく目を
覚ました。

とりあえずテーブルの上に置いてある携帯を開くとメールが10件
近くきていて、まあ早急なものはないので携帯の時刻だけ確認して
すぐに閉じる。

そういえば烈は講義があると言っていたことを思い出し、阿笠は何をしようか考えるが、暇つぶしにやっぱり大学に行くことにした。

烈は来るなど言っていたし騒ぎを起こしたくないだろうから、完璧な変装をしようと阿笠は何の服を着るか選り始める。

世間のイメージ的にはユニフォームを着ている阿笠しかあまり印象にないのだろうけど、念のためいつもと違う路線にする必要がある。

……そう、綾女と最後に会った日のような。

あえて変に変装するよりはシンプルなほうが紛れるような気もするし、サングラスとかをかけたほうが怪しいかもしれない。

何の服を着るか決めた阿笠は、先に髪をいじることにした。

阿笠といえば茶髪。

ならば今日はアッシュにでもしてみようか。

染めるのは面倒だからスプレーを使用することにし、7対3くらいで右分けしている前髪は10対0で右分けにスプレーで固定する。

耳が髪で隠れている髪型をしているので、やはり右側だけ髪を耳にかけて耳を出し、そこも落ちてこないようスプレーと黒いピンで見えないように止める。

全体的に右側がすっきりした印象がある髪型にしたようだ。

そうして珍しく出している耳に垂れ下がっている黒い十字架のイヤリングをつける。

髪型をセットし終えたあと顔を洗い、服を着替えた。

本当にシンプルで、黒いジーンズの上に胸元に英語が書かれている白いTシャツを着、ネックレスをつける。

チャラそうなジャラジャラしたネックレスの効果のせいか、阿笠はそこらへんにいるチャラク軟派な男子そのものだが、もともとカッコいい顔をしているのでそんな格好は決して嫌味ではなく、素直に似合う。

阿笠は全身鏡の前に立って、髪を少しいじりながら満足げに笑う。

「これなら俺だってバレないんじゃない？」

茶化しに、というよりはやっぱり烈の講師姿を見たいんだ。

サッカーをしてる俺を応援してくれるように、俺も夢に向かってる烈に頑張れって言いたいから。

何か食べたい気もするが夕方に烈がイタリアン料理店を予約してあるはずなので阿笠は何も食べずに、ポケットに財布と携帯を入れてキーケースを持ち家を出る。

車で行くとするが、烈の大学はパスカードがないと駐車できない

ことを思い出し、金をおろすのも面倒なのでタクシーを諦めてバスで行くことにする。

マンションから歩いてすぐのバス停から、烈の大学最寄りのバス停まで乗り、そこからは歩いていくことになる。

幸いバスはそんなに混んでいなく余裕で座れ、阿笠は真ん中の窓側の席に腰をおろす。

ぼーっと窓の外を見つめながら、楽しみだなとワクワクしている反面やはり綾女のことや頭の隅にちらつく。

協力してと言ったものの、自分自身何がしたいのかはいまいち分かっていない。

綾女に自分を好きになってもらいたいのか、それともただ真実を知りたいだけなのか。

ただ前者は果てしなく難しいだろうことは分かっているから、やっぱり引け目を感じる。

その真実とやらがもし体よくない話だとしたら、きっと綾女はさらに俺から遠ざかる。

それこそ本当に言葉通り二度と会ってはくれないだろう。

だけど、そんなのは困る。

ならば綾女に会わないまま真相を調べていくしかないのか。

これ以上嫌われるくらいなら綾女自身には何もしないほうがマシかもしれない。

「ん……えっ、綾女？」

考えごとをしながら外を見てみると、綾女らしき女の子が歩いているのが見えた。

隣にはこの暑いのにスーツを着た男が綾女のために日傘をさしていた。

「ちよっ…………うつ、運転手さん！ 止めて!!」

反射的に阿笠は立ち上がり、運転席に近づいて叫ぶ。

「無茶言わないでくれ。次の駅じゃだめかい？」
「そっ……」

なんとか止めてもらいたかったが、こんな交通量の多い大通りでバスが止まれるはずもない。

指定速度で走り続けるバスからはもうすでに綾女の姿は見えない。

阿笠は真逆に歩いて行った綾女の軌跡を切なげに見つめ、運転手に軽く謝って元いた席に再び腰をおろした。

ついさっきまで、綾女には会わないほうが得策だなんて思っていたけどそんなのは無理だ。

こうして姿を見ただけで追いかけてしまう。

あんな人混みの中から見つけられるほど、綾女（あやめ）の存在はとても大きい。

止まらない。

好きだ

好きだって

それしかない。

「っ……………」

本当に全然諦めきれていなかったんだ。

阿笠は前の席のシートを叩き、悔しそうに唇を噛み締める。

今会いに行ったところで鬱陶しがられるのは分かっているし、何を言えるわけでもない。

きつとまたケンカになるかもしれないし、それ以前に口も聞いてもらえないかもしれない。

だけど、会わなきゃ始まらないんだ。

とにかく、自分の中で気持ちを整理させる必要がある。

全てを知ったあとで、会いに行くのはそれからだ。

なにもかも分かった上で、それでもまだ好きだと思えたら

いや、きっとそれでもまだ好きだと思えるだろうから、そしたら俺から会いに行く。

絶対終わらせない。

俺のためにも、応援してくれる友達のためにも。

しばらく走ったバスは、各停に止まりながら阿笠のアパート近くを出発してから15分ほどして烈のいる静岡美術大学近くのバス停に着く。

そこから5分ほど歩くと、中宮大ほどではないがなかなか広い敷地にガラス張りの建物が並び立っていて、まだ新しく思える大学が見えた。

阿笠は躊躇することなく堂々と大学に入り、案内板に目を通して烈がどこにいいのかを確認することにした。

が、さすがは美術大学、ほとんど美術に関する教室ばかりで予想すらできない。

全部を見て探すのは面倒くさすぎると思いながら、阿笠は首の後ろに手を当てながらため息をつく。

と、そこに2組の男子が歩いているのが目に入り、阿笠はすかさず話しかけた。

「あつ。あのう、れ……愛川先生って今どこで授業してるか分かります?」

「あ? あゝ、愛川先生どっかで見たなあ」

「あ、それならS号館の207っすよ」

阿笠の問いかけに怪しむことなく気前良さげに教えてくれ、阿笠は礼を言って再び案内板をチラッとその教室の場所を見て教室へと向かった。

後ろで2組の男子のうち1人が阿笠のほうを見て、あいつどこかで見たことねえ?なんて言っている。

もう1人が、同じ大学だからじゃねえの、と答える。

そんなやりとりなど聞こえるはずもなく、阿笠は一目散に烈のいる講義室を目指す。

歩いて2分くらいで辿り着き、講義室の前までくるとドアが開いていないのにマイクの声が漏れていて、すぐにそれが烈の声だと気づく。

軽く音を立てないようにドアを開けてみると、広い講義室の中には生徒は20人ほどしかいなく、黒板には何やら色とりどりの円が書かれている。

正しくは、ゲーテの色彩の理論の図が黒板に貼られているのだが阿笠にそんなことが分かるわけもない。

生徒は前付近に集中しているがまさかそこまで近づくわけにはいかず、阿笠は一番後ろの列の席にこっそり腰をおろした。

「プリズムの実験によってゲーテは黄と青を両極と展開した。白い紙の上に黒い紙片をおいてプリズムで眺めると次第に青、紫、赤、橙、黄に見えるんだ」

クールビズなのか烈はネクタイはしめていなく、スラックスの上は真っ白の半袖のYシャツだけを着ている。

一応チャラチャラしたピアスは外しているだろうが、赤い髪と青いカラコンではやはり講師とは思えないが、マイク片手に棒で黒板に貼られている用紙を指しているその姿はとてもサマになる。

「……………であることから、ゲーテは青、赤、黄を三原色とし

た」

ゲーテの色彩論について講義していることは明らかだが、阿笠には全く理解できず、まるで呪文のように聞こえる。

けれど大学生にならなかったから大学の雰囲気味わえることには興味がある。

烈が志した道に触れるのも悪くはない。

「赤を頂点に青と黄を両極に置くと三角形ができ、緑を下の頂点として紫と橙を両極に置いて逆三角形をつくと六角形になる。これがこの黒板のゲーテの色彩の理ろ……………」

学生たちが必死にメモを取っているのをコツコツ革靴の音を立てながら烈は歩いて見つつ淡々と話している。

テキストも見ずにどこからそんな知識が出てくるのか摩訶不思議だ、そんなことを思いながら阿笠が烈を見ていると、烈はふと後ろのほうに目が行ったのか阿笠と目が合った。

声に出さずに笑いながらヒラヒラ手を振ると、烈は絶句したのが動きをピタリと止める。

「愛川先生？」

学生の1人が烈に呼びかけると、烈は慌てて再び話し出した。

キッと阿笠を睨みつけると、阿笠はピースしたりしてふざけてみせた。

授業はそれからあと30分程度で終わり、その間阿笠はぼーっと烈を眺めていた。

最後に烈が質問はないかと尋ねると、学生が挙手しながら言った。

「俺追試受かるかなあ」

質問であって質問ではないだろう、と突っ込みたいような言葉だが自分次第だとかありきたりなことは烈は言わずに、少し笑いながら答える。

「ここ数日の補習でみんな前よりずっと知識を深めたし、頑張ってたって思うよ。だから大切なのは自分を信じることかな」

烈は棒とマイクを教卓に置いて質問した生徒に歩み寄る。

「こんなの覚えるだけだろって先に受かった人の中には言う人いるけどさ、俺は安易に覚えるだけじゃ身につかないと思うんだよね」

烈は笑って言うけど、烈の言葉は最もだ。

おそらく質問した学生だけでなく、ここにいる補習を受けていた学生全員が受かるかどうか心配しているに違いない。

それを理解している烈は、みんなが座っている席を行ったり着たりして学生たち1人1人の表情をうかがいながらなおも応答している。

「補習という名目とはいえ、みんなかなり必死にやったでしょ？
つまり、運で受かった人よりよっぽどすごいんだよ」

当たり前の話のような、きれいごとのような、けれど納得できてしまう。

烈の言葉1つずつに重みを感じ、本当にそうかもしれないという気にさせられる。

ほう……っと魅いられたように阿笠は少し感動している。

ただ頑張れとは言わずにみんなを持ち上げてモチベーションを上げようとしている烈の思いやりが実感できる。

「じゃあ、受かる！　って思ったら受かりますか？」

今度は他の学生が尋ねた。

「受かるよ。だって俺が教えたんだから」

躊躇せずにそう即答したことで笑いが起きるが、誰1人として否定はしなかった。

夏休みだというのに自分の時間を裂いて嫌な顔もせずに補習してくれた烈に感謝しているのだろうし、事実烈が教えれば間違いはない。

烈的的確かつ分かりやすい授業は学生たちに人気があり、烈の講義を休む者などいない。

説得力があるからだ。

「かぁーっこいー……」

阿笠はポケットとしながら烈を見つめている。

学生たちに慕われながら烈らしい言葉をかけているその姿は、紛れもなく先生だった。

n
e
x
t

第30話【嬉しくて。】

「この、バカっ!!」

「あてっ」

授業後、結局見知らぬ人がいると学生が指差して阿笠の存在は普通にバレる。

が、変装していたので阿笠大悟であることは誰も気づかず、烈の友達と称して適当な名前を言って免れたが、結局かっこいいだのなんだのと騒ぎ立てられた始末。

ようやく学生たちを帰し、2人きりになったところで烈は阿笠の頭をゴチンと拳で叩いたところである。

「なんでえ？ 俺だってバレなかったじゃーん」

阿笠は口を尖らせながら不満げに言うが、反論したためまた叩かれた。

「だったらもっと不細工な面してこい！ あとでアドレス聞いとるか頼まれんの俺なんだぞ?!」

「あっ、なるほど」
「~~~~ったく」

一応理解はしたものの阿笠は悪びれた素振りすらせずヘラヘラ笑う。

呆れたように烈がため息をつく、阿笠は笑って言った。

「でもかつこ良かったなー。烈の先生姿」

「あ？」

「すごいサマになってた。ヤンキー先生ならぬチャラ男先生みたいな」

「……誉めてんの？」

「うん」

チャラ男というフレーズに引っかかるところがあるが、これまた悪気がない阿笠に再び大きなため息をつきながら額に手を当てる。

とりあえず講義室をしめて鍵を学務課に返さなければならぬので、2人は講義室から出て鍵をかけ、学務課があるほうへ歩き出す。

見慣れない敷地を珍しそうに阿笠は眺め、すげーなんて言いながらはしゃいでいる。

この学校で助手をすることになってからもうしばらく経っている烈は見慣れているので、そう？と適当に流している。

だがよく考えれば、高校で公立に通っていた阿笠には私立の金のかけ方は見慣れないものだ。

汚いとは言わないが決してすごいとは言えない校舎で学び、他の部とグラウンドを共有していた星陵高校を卒業し、大学には進まなかったのだから余計に。

「俺は大学生にはならなかったからな。羨ましいなあ」

敷地内を歩いている学生を見ては羨ましそうに目で追う。

烈も決して大学生をやっているわけではないが、こうして大学に通っている分阿笠からすれば十分羨ましいはず。

なら大学行けば良かったじゃないかと思うかもしれないが、Jリーグからスカウトされてるのにわざわざ大学に行く必要なんてない。

将来を見据えるのならば大学の部活でサッカーするくらいならプロになったほうが比べ物にならないほど良い。

必然と進学の文字など阿笠の辞書にはなかった。

「後悔してる？」

烈は学生たちから預かった課題プリントを大まかに目を通しながら尋ねた。

「まさか」

「してないんだ」

「しないよ。なんでさ」

おかしいことを言う烈に阿笠は不思議そうに笑う。

ワールドカップの決勝前夜に秋人に漏らした弱音は烈には話したことはない。

というか誰にも話したことはなく、あの日限りだ。

けれど、もしかしたら秋人に聞いて知っているのかも。

いや、聞いていなくても烈なら分かるかもしれない。

烈はつかさとの約束のせいで阿笠がサッカー選手になろうと決めたことを知っている。

だが、それだけのはず。

つかさとの約束がそんなにも阿笠を苦しめていたことや、約束を果たしたら何のためにサッカーすれば良いのか悩んでいたことを知らないはずなのだ。

少なくとも阿笠からはそんな話はしていない。

「いや、まあ……。でも良かった。俺ワールドカップで優勝したあとサッカーやめるかと思った」

ペラペラとさっきの学生たち全員分の課題を流し読みしながら何気なく言ったその言葉に阿笠は振り向いた。

冷や汗混じりで、え？と薄ら笑いして答えると、烈は尋ね返されたこと自体が不思議なように首を傾ける。

「ん？　だって、世界一になるのが約束だろ？」

そうだけど

その通りだけど、

「阿笠がサッカーやんのは自分のためじゃないじゃん？」

「なんで……そう思う？」

「まあ、気づいたのは高3ときだけどな」

高3のときなんかあったっけ、と阿笠は記憶を巡らす。

だが身に覚えがなくて顔をしかめていると、烈が促す。

「ほら、あ、違うわ。引退前の冬だから高2か」

「んん？」

「秋人がドイツに旅立った日だよ。お前人形みたいになったの覚えてる？」

烈がそこまで言うと、ようやくあの日のことを思い出す。

今では秋人ともあのときのことは笑い話にできるようになっていた。

裏切りとか募る感情とかを乗り越えて、それすらも絆の糧としているのだ。

確かにあの日人形のように無気力になった。

秋人を追いかけて空港に行って、秋人を必死に探してやっと見つけたのに俺の言葉は無視されて行ってしまった。

そのあとの記憶はあんまりなくて、気づいたら学校の保健室のベッドで寝てた。

「うん。けどそれが、」

「そのあと部活行っただろ？」

「あ、うん。それで烈がサッカー部入らせれそうになったとき正氣に戻ったんだよね」

部員の提案で烈をサッカー部に入れば阿笠も戻るのではないかと、半強制的にPKをやることになって、ルールは烈が5本全て止めればサッカー部入り、1つでも決められたら話はなしというあまりにも烈の意志に反したものだっただけ。

サッカー部に入る気なんてさらさらなのに、阿笠のためと言われたら断れるはずはない。

現役サッカー部員の球を4本軽々止め、あとがなくなってきた最後、球を部員が蹴ろうとしたとき、烈をサッカー部に入れるわけにはいかないと阿笠が動いた。

部員が蹴る前に阿笠がその球をどこか遠くへ蹴り飛ばし、「勝手なことは許さない」と言った。

「やー、今思えば部員も必死だったんだろね。部長の秋人がいない上に副部長の俺まであんなだったんだから」

阿笠は他人事のようにケラケラ笑う。

大事な親友を巻き込まれたと、阿笠は部員たちにグラウンドを走らせた。

まあ結果として阿笠が正常に戻ったからよしとされたが。

「ははは。だろうな」

「で、それが？」

「ん、ああ、だって不思議じゃないか？」

明確に思い出している記憶の中に不思議なことなんて見当たらない阿笠は「だから何がさ？」と聞き返す。

むしろなぜ気づかないのかと呆れ反面の烈も言い返した。

「立ってらんないくらい無気力だったお前が部活に参加したことがだよ」

「え、」

「あんどきお前は怪我だっしてしてたんだから元々激しい練習には参加できなかった。しかもあんな状態ならなおさらだ。なのにお前は、サッカーやんなくちゃって言ったんだよ。ふらふら今にも転びそうになりながらもグラウンドに向かったんだ。部室で着替えてサッカー

ボール持って俺とパスしたんだ。あんな無気力になってたら、我を忘れてたら普通部活のことなんて忘れるだろ。なのにお前は忘れていなかった。いや違う、お前は部活に参加しようとしたわけじゃない。サッカーをしようとしたんだ。分かる？ 記憶さえごちゃ混ぜで錯乱してんのにサッカーやろうとしたのは、お前の記憶の奥底にあるつかさちゃんとの約束があるからだよ。つまりつかさちゃんとの約束がない限りお前はサッカーをしない。チームプレーを省みないのも仲間に技術指導しないのも、全ては自分がした約束を果たすためだけにサッカーしているからなんだよ」

長々しいセリフを囁みもせず烈は少し強めに言った。

ズラズラ言われて必死についていこうとした阿笠は、内容をよく考えてみた。

確かに烈の言う通りだ。

そんなこと気にしたこともなかったけど、自分でもつかさのためにしかサッカーしていないこと分かっていたけど、でもまさか気づいてくれる人がいるとは思わなかった。

「……すごいね、烈」

阿笠は少しだけ嬉しそうに口元を綻ばせた。

サッカーをずっと共にしてきた秋人でさえ気づかなかったというのに。

本当はやめようかどうかどうしようか悩んでいたけど秋人が助けてくれたことは今は言わないで後々言うことにした。

今とても気分が良いから。

「?　そう?」

あっけらかんと君は答えるけど、何も言わずに見守ってくれていたことに本当感謝する。

確かにつかさのためにしかサッカーをするつもりはないけど、でも共にフィールドに上がった小学生のときに一緒にプレーができて良かったって思っていることも本当なんだ。

そんな俺の気持ちも分かってるって自惚れても良いですか。

もう、ありがとうとしか言えなくて。

n
e
x
t

第31話【陰日向】

「なんで歩きなんです？ 小浦さんに頼めばよろしかったのに」

烈と阿笠が大学にいる頃、綾女と相良は街中を歩いていた。

真夏の日差しは日射病になってもおかしくないほどなのに、綾女がどうしてもと言って歩いて出かけているのだ。

さすがの相良もこの日差しには敵わなく、スーツのジャケットを脱いで手に持っている。

「歩きたい気分なのっ」

「最近ずっと機嫌悪いですね」

「相良のせいでしょ?!」

「それはまた、」

なぜですか、と驚いた顔もせずにニコリといつもの笑顔を絶やさずに相良が尋ねると、カチンときたのか綾女はムツとして叫ぶように言った。

「羽柴継げとかっ……大悟くん忘れろとかいろいろ言うから頭がご

ちやごちやになるんじゃないっ……!」

水色の花柄のワンピースにシルバーのミュールを履き、珍しく前髪を分けてハートのピンで止めている。

どこから見ても街にいなような普通の女の子で、そもそもその手の階級の人間にしか綾女の身分のすごさは知るよしもなく道端ですれ違う人たちは綾女のことなんて知らない。

隣にスーツを着た男がいるのでチラッとたまに見られたりはするが、羽柴綾女だから見られているわけではない。

綾女は昔から自分が羽柴の人間であることを嫌がっていた。

なにが嫌って、自分が羽柴で育てられたことこそが最大の哀しみなのだ。

つかさを亡くした比護家の両親のことを思えば。

本当なら、比護家を守るのは綾女の役目だった。

だけど悔しいことに羽柴の血が流れているばかりに羽柴の跡取りとして生きなくてはいけなくて、そんな運命をつくった羽柴を毛嫌いしているのだ。

「間違ったこと言いました？」

「っ……」

「あなたが羽柴に來た理由を考えれば当たり前ですよ」

相良は痛いことをサラリと言ってのけるので、綾女は傷つくことすらできない。

子どもだった自分には大人が決めたことに逆らうことなどできなくて、今でもそう。

反発しているくせに羽柴を捨てることができない臆病者。

ただ、羽柴の両親を愛していないわけではない。

この20年近く、溢れんばかりの愛情を注いでくれたし無理を言って自由に生きてきたこれだ。

惜しめない愛情で抱いてくれるその手は温かくて優しく、愛を感じた。

「阿笠大悟を望むのなら羽柴を捨てるも同然。彼には羽柴を継げません」

そんなこと分かっている。

彼にはそれ相応の身分はなくて、何よりサッカー選手だから。

全てを理解した上でそれでも好きだと思って、けれど自分から切ってしまった。

誤分らないって思っただろうけど、もしあそこで大悟くんがつかさとあたしを重ねて見ることなんかありえないと言ってくれといったら覚悟だって決められた。

「……あんたは誰の味方なの」

「もちろんお嬢様の」

「嘘」

「私は生まれながらにお嬢様の付き人ですから」

笑ってはいるものの、真っ直ぐな瞳できっぱりそう言っただけのける相良に怒る気も失せる。

というより、綾女の判断は相良の人生も決めることになるので何も言えないのだ。

羽柴に来てから相良が綾女から離れることはほとんどなく、常に側にいた。

綾女の世話をしして綾女の側で綾女をお守りすることだけを生き甲斐としてきた。

「……もしあたしが羽柴を出ても、相良は来てくれるの？」

そう、だから一度確かめてみたかったんだ。

相良は羽柴家令嬢の付き人なのだから、もし自分が羽柴でなくなったらどうするのかと。

自分が羽柴にいる限りはずっと側にいるだろう。

けれど……

「私は羽柴家に仕える身なので羽柴を出ることは許されません」
「……そう、だよね」

当たり前前の答えに綾女は少し切なげな表情を浮かべる。

せめて一瞬くらい躊躇してほしかったな、なんて思うのは甘えだろうか。

そんな綾女を知ってか知らずか、相良は更に続けて言った。

「けれど私の主は綾女様なので、綾女様さえ良ければどこへでも付いていきます」

綾女はその言葉に顔を上げて相良を見た。

やっぱりいつものように笑っているけれど、綾女が不安そうな顔をしているのを見て相良はニコリと微笑み、頭を軽く下げながら言った。

「私、相良陸は綾女お嬢様の陰日向となり一生お仕えしていきたい所存にございます」

ああ、嘘ではない。

いつしかの記憶が綾女にそう思わせる。

あれはつかさが死ぬ1ヶ月ほど前だっただろうか。

比護家を出てようやく落ち着いてから相良を紹介しようと、あの日内緒でつかさに会いに行ったときに相良も連れて行った。

あの頃からすでに相良は落ち着いていて博識で他人から一歩引いているところがあり、そしてやっぱりスーツを着ていた。

紺のスーツに赤いネクタイをしていた相良を物珍しそうにつかさは眺めていて、「誰？」と聞いてきたつかさの問いには答えなかった。

主より先に喋ることはでしゃばりだと教わっていたのか、相良は微笑んでつかさを見るだけであたしが答えるのをただ待った。

『あたしの付き人の相良。相良陸だよ』

『綾女付き人いたの?! わぁゝっ、すごい』

そうしてようやく、相良は口を開いて今みたいに頭を軽く下げながら言った。

『私、相良陸はお嬢様の陰日向となり一生お仕えしていきたい所存にございます』

たかだか小2の子どもが言うセリフではなかったからか、当時はなぜつかさがあんなに驚いたのか分からなかった。

あたしにはそれが日常すぎて何も感じなくて、そのときには相良はあたしの中でとても大きな存在になっていた。

もちろんつかさのことを全て話したし、つかさにも相良を知って欲しいと思った。

『綾女様に仕えお慕いし、お守りしていきます。つかさ様もどうかお元気で』

そう言い残し、相良は先に羽柴家に帰った。

2人して羽柴家からいなくなれば問題になるかもしれないし、おそらくつかさと2人きりになれるよう気を使ってくれたのだろう。

昔から空気だけは異様に読む男だった。

「それ……覚えてたんだ」

驚いた表情をした綾女に、相良はもちろんですと笑う。

「私の教訓ですから忘れようにも忘れられませんよ」

相良は綾女の右の手を取り、愛しそうに両手で包む。

その仕草があまりに優しくて、こんな主に忠誠を誓ってくれるのが嬉しくて、不本意だけど涙が出てきた。

すごくホッとしている。

何があっても離れていかないんだと思うと安心する。

「ゆっくりご決断下さい」

何があっても相良だけは味方でいてくれる。

その事実が、あまりにも嬉しくて。

「お母さん？ 何してるの？」

比護家、のんきにみかさは棒のアイスを食べながらキッチンから自分の部屋に戻ろうと階段を上がってきた。

そのときつかさの部屋のほうからガタツと音がしたので、不思議に思ったみかさが覗いてみると部屋の中には母親がいた。

「あなた……母子手帳知ってる？」

「ん？ ううん。あ、探してくれてたんだ」

何の予防接種をしたか学校から調べてこいと知らせがあり、みかさは母子手帳を出してほしいと母親に頼んでいた。

母子手帳のありかを知っているのは母親だけで、自分で探したいのはやまやまだがどこにあるか教えてくれないのだ。

当然だろう。

見られては困るのだから。

「え、でもそれそうじゃない？」

みかさが引き出しをあさっている母親の足元に落ちている母子手帳を指差すと、母親はしまったというかのようにビクツとなった。

そうして動揺を隠すようにそれを拾い上げて、愛想笑いをしながら

言う。

「そ、そうね。これだわ。いやねえ、私ったら」

けれどあからさまに不自然な母親を見て、みかさはずっと気にかけていた事実を確かめてみたいと思ってしまう。

彼氏に調査を頼んでいるけど、何か大きな秘密を知ってしまったかのように烈はみかさには何も言わない。

烈のことだから絶対重要なことを調べたに違いない。

それが言えないってことは、やっぱりその事実がみかさにも関係しているからで。

「……誰の母子手帳がないの？ お姉ちゃん？」

「あ、……」

この部屋に入った人を1人だけ知っている。

この引き出しを見ていた人を1人だけ知っている。

「それを持ってった人がいるって言ったらどうする？」

みかさのその言葉に、母親は勢いよくみかさを見上げて目を見開いた。

困ったように眉をひそめて、けれどボロを出さないために何も言えないでいる。

誰かが母子手帳を持っていたのだとしたら、それは烈しかない。

みかさは分かっていた。

なぜなら、烈がここで母子手帳を見て驚いている姿をみかさはドアの隙間から見ていたから。

少し開いたドアから見えたのは、2つの手帳を見比べて綾女の名前を言っていた烈。

確かにあのとき、長女綾女次女つかさと言っていた。

あたしはそれ以上知るのが怖くなって、ドアを開けて何食わぬ顔で「何かあった？」なんて言っただけだ。

「……世間話して良い？ 大悟くんの彼女はね、羽柴綾女って人なの」

「えっ……?!」

「もし2人が結婚したら、幼なじみの大悟くんの妻なんだからきつと親しくなるよね」

何かを軽蔑するような冷めた瞳をしながらみかさは薄ら笑いをする。

信じられないのはみかさのほうだ。

たった1人の姉が実は次女で、次女のはずの自分が三女だなんて信じたくない。

けれどそんなみかさの思いにはちっとも気づかないで、母親はみかさにしがみついた。

その焦った表情には冷や汗が浮かび、今まで見てきた中で一番必死にも思える。

「みかさ?! あなたつ……………何を知ってるの?!」

大悟くんがお姉ちゃんにソックリだと言うのなら本当にソックリなんだろう。

みいはお母さんとお父さんの中間くらいの顔だけど、お姉ちゃんはお母さんの生き写しだった。

小学生のときのお姉ちゃんを見てそう思えるんだから、羽柴綾女はさぞかしお母さんにソックリなんだろう。

「じゃあ、お母さんは一体何を隠しているの?」

みんないろいろな地で互いのことを思いあう。

そして今、20年近く包まれてきたボールが、ようやく開かれよう

n
e
x
t

としていた。

第32話【暗雲と希望】

「な……何も隠してなんかいいわよ」

母親はみかさから手を離し、作り笑いをしてから背を向ける。

そして母子手帳が入っていた引き出しをしめて、さっさとこの場を去ろうと立ち上がる。

だが、それをみかさが引き留めた。

「待つて。話は終わってない」

「何も話すことはないわ」

「事実を隠して、逃げて、それで得るものはあるの？」

みかさがそう言うのと、母親はカッと顔を赤くして振り向いてきた。

眉をひそめ、あなたに何が分かるのと珍しく罵声を浴びせた。

だが怒鳴り声に臆することなく、みかさは真っ直ぐな瞳で母親を捉え言いのける。

「羽柴綾女が大悟くんの彼女っていうのは嘘。でも、両思いなのは確かよ。覚えてる？　大悟くんが顔や腕を怪我したこと。あれは羽柴綾女のせいよ」

阿笠が怪我をしたことは国民なら全員知っている。

結局真実を明かされることなく流されてしまったが、阿笠の周りの人間には忘れられない出来事だった。

「正確には羽柴家かしら。脅迫状も何通か送られてきて、みいと縁を切れていう内容もあった」

「え……」

「……もう知ってるのよ！　羽柴綾女がみいの姉で、でもそれを知られないために大悟くんが被害にあってること……！」

誇大化してはいるが、確かにみかさが知っていることは事実だ。

詳しいことはなにも知らないけど、ありきたりな推理でカマをかけるしかないと考えたようだ。

みかさとして他人事ではない。

「羽柴綾女なんて……知らないわよ」

「嘘つかないで！」

「大悟くんの怪我也きつと偶然よ。くだらないこと言っていないで勉強でもしなさい」

「っ……」

母親は視線を反らしてぶっきらぼうに言った。

完全にバレているにも関わらずしらをきろうとする母親にみかさは憤りを感じる。

いつも優しくして何でも話し合える仲の良い母親をこんなにも憎らしいと思ったことはない。

「……真実を言うまで帰らないから！」

しびれをきらしたみかさは勢いよく部屋から出ていき、ものすごい音を立てながら階段を駆け降りていく。

幸いポケットに携帯は入っていたし、財布も居間に置いてあったか

らすかさずそれを手に取り、有無を言わずみかさは家を飛び出した。

止めようにも止められない母親は深いため息をつく。

みかさの行くところといえば友達のところか烈のところだろうと安心している部分もある。

だが、すぐに不安に襲われた。

「……烈くん？　もしかして……」

母子手帳を持っている確率が高いのは明らかに烈だということにようやく気づいた。

みかさのただの友達ならそんな母子手帳を持っていく必要なんかはないし、羽柴家の人間がこの家に来たわけでもない。

でも烈ならいつでも自由にこの家を出入りできるし、何より彼はみかさの彼氏なのだからみかさに頼まれたら調べごとくらいするだろ

う。

確か前に彼はまるで探偵のように情報通であり調べることが得意だとみかさが言っていた。

……いえ、それ以前に彼は大悟くんの親友でもある。

大悟くんが傷ついたら放っておけない人だから、みかさに頼まれなくても調べようとしたかもしれない。

どのみちここに母子手帳がないってことは、おそらくかなりの確率で烈くんが持っているに違いない。

「そう……。だからみかさも知っているのね……」

もし知っているのなら、どこまで知っているのかは分からないけど全てを知る前に止めなくちゃいけない。

みかさはまだ全部を知っているわけではないようだけど、烈くんはどうかしら。

もしかしたらもうとっくに知っているけど、みかさには酷で言えないのかもしれない。

……躊躇っているとすれば、今すぐにも彼を止める必要がある。

みかさが烈くんの家に着いてしまう前に。

「ん、あ、俺だ」

予約していたレストランで早めのディナーを食べ終えたばかりで、ちょうど席を立とうとしたときに携帯が鳴った。

その携帯の持ち主は阿笠だ。

「お？　なんだろ」

電話主の名前を見て一言そう呟き、阿笠は電話に出る。

それと同時に今度は烈の携帯が鳴り始めた。

俺もか、なんて気軽に思っていた烈が携帯を開くと予想外の人物からの電話で一瞬躊躇う。

が、待たせるわけにもいかないのですぐに出た。

「はい。——はい。……え？」

烈は訳が分からなく首に手を当てて眉をひそめた。

その隣では後頭部に手を当てながら困った顔をしている阿笠。

「ええ？　どういふこと？」

2人して少し困惑気味で、切るのも同時だった。

時間にしたら1分もかかっていなく、どちらも一方的に喋られて一方的に切られたよう。

電話が切れてツーツーと鳴る携帯を片手に、2人は顔を見合わせて言った。

「わり……なんか用事できちゃった」

「れ、烈も？　俺も。タクシーで帰るわ」

「お、おお。じゃあまたな」

ぎこちなく別れを告げ、会計をし終えてからレストランを一緒に出る。

そうして阿笠のタクシーが来るまで共に待ち、数分後2人は別々に帰って行く。

まだ夕方の空は全然明るくて昼間のようにも思える。

訳が分からないまま目的地に到着したのは阿笠が先だ。

阿笠は自分のマンションに着くと急いで玄関の中へ入って行く。

設備がしっかりしているので主以外は中からしか開けられなく、みかさは玄関に体育座りをしながら阿笠の帰りを待っていた。

「み、みかさ？」

バッグすら持たず部屋着をそのまま着て飛び出してきた感じが丸分かりだ。

適当な白いTシャツにチノパンを履いて、髪はおろしてあってビースンを履いている。

いかにも急いできたという雰囲気で、しかもこんなところに座り込んでいるとは普通ではないことに少し阿笠はたじろぐ。

体育座りをしながら頭を伏せていたみかさは、阿笠の呼びかけに反応してゆっくりと顔を上げた。

その表情は、哀しそうというより泣きそうというより、あまりにも切なそうで見ているこっちが泣きそうになる。

「とりあえず部屋行こっか」

「……うん」

差し出してきた阿笠の手を取り、みかさは立ち上がる。

空調の効いてない玄関にいたからか少し汗ばんでいて、おろしている髪の毛が暑そうだ。

特にこれといった会話をせずに2人は部屋に着き、共に居間に座り込む。

しばらくの沈黙。

いったい何があったのかさえ分からず、ただ電話で「今から大悟く
んちに行くから」とだけ言われた。

聞き返しても反応はなく、すぐに電話は切られてしまい、とりあえ
ず阿笠は戻ってきた。

烈のおかげで部屋が綺麗で良かったな、なんてのんきなことを考え
ながらアップルティーをカップに入れ、みかさに手渡した。

ボソボソとありがとうと言っているようだが聞き取れる音量ではな
く、テレビがついてない部屋は静かすぎる。

みかさは、ここにきてようやく事の大きさを思い知る。

もし阿笠がまだ綾女への未練があるとしたら、それは阿笠にも大き
な問題になる。

いや、未練がなくても阿笠には関係がある話かもしれない。

つかさとみかさと幼なじみで、綾女に想いを寄せているのだとしたら。

そこには越えられない壁がある。

「……羽柴綾女のこと……好き？」

何の前触れもなくみかさは単刀直入にそう尋ねた。

阿笠は少し驚いた顔をしていたけど、躊躇うことなく「うん」と返事をする。

本当は、みかさには言わないほうが良いのかもしれない。

阿笠はそう思いながらも、いつかバレるのなら早いほうが良いと自分なりに言い聞かせる。

もし綾女とつかさが双子なら、綾女はみかさの姉になる。

他人事ではないのだ。

「……もしかして、みかさももう知ってる？」

「もって……え、じゃあ大悟くん、」

「うん。……ごめんね」

やっと口を開いたみかさに、阿笠は申し訳なさそうに言う。

なんでごめんなのか理解できないみかさは、少し震えた声で呟いた。

「なんで謝るの……？」

分からないはずなのに阿笠を直視できないのは、おそらく心のどこかで分かっているから。

タクシーでここまで来たみかさは、タクシーの中でこれからどうなるのかということを嫌というほど考えた。

知っている限りのことを整理して、そこから妄想を膨らませては悩み、ちっとも考えなんてまとまらない。

だけど、1つだけ思ったことはある。

「……綾女の素性を知りながらも、……つかさやみかさの気持ちを考えてもそれでも、やっぱり好きだと思ったんだ……」

悔しそうに唇を噛み締めて自分を責めながらそう言った大悟くんのセリフに、なぜだか分からないけど泣けてしまった。

ポロポロポロ落ちる涙を止めることができなくて、そんな自分を見て大悟くんは更に哀しそうになってしまった。

だけど、

大悟くんはみいのたった1人の幼なじみ。

大悟くんは烈くんの大切な親友。

……大悟くんは、今でもお姉ちゃんを愛してる人。

だから決めたの。

何が敵になろうとも、絶対全力で大悟くんの味方になる。

どんな運命が訪れようとも。

n
e
x
t

第33話【さくらの心情】

車を急いで走らせること小1時間、烈はようやく目的地に辿り着いた。

駐車場に適当に車を置いて勢いよく車から飛び出、家のインターホンを鳴らす。

すると、待っていたと言わんばかりにすぐに扉が開いた。

「いらっしやい」

扉の向こうにいたのは、みかさの母親だった。

みかさの母親、もとい比護さくらは黒いミディアムの髪の毛でくせ毛なのか毛先は少しカールがかかっている。

若いうちに子どもを生んだのでそう年も言っていない、まだ40歳前後ほど。

「……お邪魔します」

さくらに誘導されて烈は2階へと上がる。

居間ではないことに疑問を抱き、すぐに嫌な予感がした。

階段を上がってさくらが向かうのは、烈の予想の通りやはりつかさの部屋だ。

さくらがつかさの部屋のドアを開けると、ものすごい動悸が烈を襲う。

考えなくても、なぜさくらがこの部屋に烈をつれてきたのかくらい分かる。

「おばさん、……」

烈は冷や汗をかきながら入り口に立ち尽くす。

さくらは構わず入り、例の引き出しを開けた。

うわっ……と内心思いながら烈は片目を閉じる。

母子手帳がないことがバレたことを表しているのだ。

あれは、綾女とつかさが双子である明らかな証拠。

だが、どうしても血液型だけは納得いかない。

「烈くんなのね？」

「……………はい」

「あなたはどうするつもり？」

さくらはあくまで穏やかな態度を貫く。

どうしたもんか、烈は眉をひそめながら考える。

ここから一步踏み出せば、ああそうですかで済ませられる話ではな

くなる。

だけど、これは願ってもない絶好のチャンスだ。

きっと今を逃したら二度とこんな好機はこないだろう。

「……阿笠のために真相を調べてます」

「調べて、それから？」

「羽柴綾女との……幸せな未来を見てみたいです」

全力で協力すると決めた。

簡単な問題ではないことも俺とは直接関係がないことも知っているけど、それでもやっぱり阿笠のためならなんだってしてやりたい。

彼女の母親を敵に回そうとも。

「どこまで知ってるの？」

「まだ何も」

「嘘は良いわ。みかさは羽柴綾女が自分の姉だと知っていた」

「……?! みかさが?!」

烈は前のめりになりながら驚きを露にした。

今日は補講のためにスーツを着ているが、見た目からしてチャラく見えてしまう烈は割と不利で、本気で心配しているのか分からないと思われることもある。

烈の本性を知っていればそんなこと思う人はいないし、さくらの烈が真面目に心配したり喜んだりすることを知っている。

烈が一流から認められるほど素晴らしい才能を持っていることも分かっているし、みかさの婚約者としても認めてる。

烈の全てを知り烈を快く思っているのは本当だが、今だけはそんな烈を恨めしく思う。

「……あなたが教えたんじゃないの?」

「えっ、いや……俺は一言も……」

「なぜ言わなかったの?」

「みかさが……傷つくかもしれないと、」

さくらの冷静な質問にたじろぎながらも烈はなんとか平静を装いながら受け答える。

「あなたが調べなければみかさは知らずに済んだわよね？」

「そ、それは……」

みかさに頼まれたからとは口が避けても言えないだろう。

さくらもまさかみかさから烈に調べて欲しいと言ったとは思わないし、烈自身そう思ってほしくない。

だって、例え綾女が比護家と関係があるにせよ今はさくらにはみかさしかないのだ。

つかさが亡くなってから蝶よ花よと懸命に大事に育ててきたたった1人の娘。

「……みかさがもう知っているなら、みかさには全てを教えたんで

すか？」

「いいえ。家を飛び出して行ったわ。みかさから連絡はなかった？」
「え？」

思い当たらない烈は怪訝そうに問い返すが、更に驚いたのはさくらのほうだ。

「連絡、きてないの？」

友達か烈のところだと予想していたが、9割は烈だと思っていたようだ。

あんな口論をしたあとなのだから、愚痴を言うにも泣き言を言うにも話が重大すぎて友達には言えないはずだ。

だがその烈には連絡がきていないことでさくらは少し焦る。

「きてな……………あっ」

きてない、と言おうとした烈は途中であることを思い出した。

先ほどレストランで、さくから電話がかかってきたとき阿笠にも誰からか電話がかかった。

秋人や他の友達という可能性も普通にあるが、このタイミングこの人選。

おそらくあのときの電話の相手はみかさに違いない。

「心当たりがあるの?!」

さっきまでの穏やかな態度とは打って代わり、少し声を荒げてさくらは烈の腕を掴む。

だがバカ正直に阿笠のところだなんて言ったらすぐに連れ戻されてしまうだろう。

俺じゃなく阿笠を頼ってきたことは、阿笠があるときみかさからの電話だと言わなかったのは、きっと俺に知られなくなかったんだ。

自分が綾女との関係を知っていることを。

俺があえて言わなかったことも知っていて、きっと俺に気を使って
くれている。

関係ない関係ないとは言うけど、一応俺はみかさの婚約者だ。

本当に羽柴綾女がみかさの姉だとしたら、俺とみかが結婚したら
親戚になる。

一言に関係ないとは一概には言えない。

「……連れ戻したいですか？」

「当然でしょ！」

「なら教えてください。羽柴綾女について」

烈は真っ直ぐな瞳でさくらを見つめた。

さくらは一瞬困ったような表情を浮かべたが、すぐに阿笠から手を
離して背を向ける。

小さな肩は小刻みに震えている。

「……なら良いわ。もう帰って」

「おばさん！」

「羽柴綾女は羽柴家のお嬢さんでしょう?! ……比護家の子どもはつかさとみかさだけよ！」

そんな風に叫ばれても納得できることではないが、震えている肩がこれ以上はもう耐えられないと物語っているようで、烈は軽くため息をつく。

その先はもう今は話してくれないだろうと見切った烈は、適当にあいさつをして部屋から出て階段を降りていく。

物静かな家に烈が歩く音だけが響き、やがて玄関から出ると一層家の中はシンとなる。

後ろに烈はもういないのに、怖くてさくらは振り向けない。

一生隠し続けていこうと決めていたのに、まさかこんなにも早くバ

レてしまうとは。

手に汗がたまるのは夏だからか、気持ちが高まるのは暑いからなのか。

なにせよさくらにはどうすることもできない。

言えるのはただ1つ、真実さえバレなければ良い。

きっとバレたら今度こそ家族が崩壊してしまうだろう。

『ママ！　なんで綾女が出てくの？！　綾女はつかさのお姉ちゃんだよ！』

『綾女は明日来る人に引き取られるのよ』

『やだ！　ママやだ！　綾女ずっとここにいたい！』

あれは、もう幾年も前の出来事でやっぱり記憶からなくなることはない。

4歳の小さな女の子たちが必死にすがりついてきた。

嫌だ嫌だと私の服の裾を掴みながら、離れたくないと訴えてきた。

『羽柴家はね、すごくお金持ちなのよ。きっと綾女も気に入る』

『お金持ちじゃなくて良い！ ママは綾女が嫌いなのか？！』

『っ……』

嫌いなわけではない。

嫌いになれるはずがない。

できることなら私だって綾女を手放したくなかったし、今でも綾女を愛している。

『……大好きよ。だから絶対幸せになるのよ、綾女』

『やだああああ〜!!』

泣き叫ぶ綾女を見て、つかさももらい泣きをする。

そんな2人を見て私も泣きたくなるけど、ここで泣いたら悪者の自分が悪者ではなくなってしまう気がして、やっぱり堪えるしかなくて。

羽柴家が金持ちだから綾女を渡したのではない。

たまたま羽柴だった、それだけで。

だけど、結局私が羽柴に綾女を売ったのよ。

反対する夫を抑えてまで、羽柴に綾女を渡すしか方法はなかったの。

羽柴を敵に回したら私たちは生きて行けない。

生きて行けないの……

『ごめんね……。離れていても綾女は私の子ども。2人は私が生んだ真正正銘の双子だから』

十字架を背負って生きていくのは、私だけで良い。

あの日そう誓った。

n
e
x
t

第34話【訪問】

「だから、大学の友人だって言ってるじゃないですか」

『信用しかねます。お嬢様は鈴木大輔などというご友人はいないとおっしゃってます』

「~~~~っ」

鈴木大輔、もとい愛川烈は今豪邸羽柴家本邸の門前にいる。

が、どんなに会わせてくれと言っても門前払いで門を開けてもらえないようだ。

インターホンの向こうから聞こえる声は冷徹で、どんなに烈が頑張っても無理なよう。

粘ってからもうかれこれ20分近くは経つ。

「つくしよー……」

阿笠は門前に座り込んで頭を抱える。

綾女はもとも烈とは知り合いではないが、愛川烈の名は今や日本

では有名も有名。

天才画家（新米）としてももちろん名高いが何より阿笠大悟の親友だ。

阿笠の知り合いだとバレるわけにはいかないのだ。

どうしたら良いか悩んでみてもなかなか良い案は浮かばない。

でももう後には引けない。

みかさのために、そして阿笠のために絶対真相を調べるんだと決めた。

なぜみかさのためにとって？

真相を知って一番傷つくのはみかさだけど、でももし推測が事実ならみかさにはまだこの世に姉妹がいるってことになる。

俺はもともと1人っ子だから分らないけど、みかさはつかさちゃんに亡くなって寂しいって顔をしてるんだ。

言葉には出さないけど、仲良さげな兄弟とか見るたびに羨ましそうな哀しそうな表情を浮かべていた。

本当ならつかさちゃんがみかさの近くにいて、一緒に買い物したり姉妹喧嘩だっけしているはずだった。

俺は兄ちゃんみたいだけど、でも兄ちゃんにはなりきれなくて、血の繋がりにって強いんだと感じる。

だからみかさと血が繋がってる人がまだいるなら、きっと哀しみの

先に喜びがあると思ったんだ。

「どうも。お嬢様はお会いにはならないそうですよ」

しゃがみこんでいた烈の頭上に突然言葉が降ってきた。

思わず顔を見上げると、そこには長袖のシャツに水色のネクタイをした青年が立っていた。

「え……」

「ん？ どっかで見たことあるような……」

相良は、あまりにもしつこいから見てこいと執事に言われたようでのんきに小浦運転の車に乗ってここまで来たようだ。

玄関からは歩くにはかなりの距離があるため、敷地内は車の移動になる。

烈はとりあえず立ち上がり、見知らぬ人物の登場に少し戸惑う。

「……………あ！ あ！ 愛川烈さんですね。いつもテレビで見えます。私あなたの作品好きで、」

相良はいつものように楽しげに笑いながら言うが、自分の名前が出たことに反応した烈は思わず叫ぶ。

「あ、の！ 俺は愛川烈ではありません！」

「は？ いえ、私暗記力は悪くないので間違えではないと思うのですが」

相良は不思議そうに首を傾げる。

普通なら、すみません人違いですか、くらい言う場面のはずだが相良はお構いなしに自分が正しいと言っているので、マイペースな相良に烈は困惑する。

烈もマイペースな人間だが、マイペース同士でもウマが合わないこともあるのだろうか。

なんと切り出したら良いか分からず、烈は黙り込む。

が、そこは空気を読んだ相良が思い出したように言った。

「ああ、なるほど。名乗りたくないのになぜお見えになられたのです？」

「——え、」

空気のような笑いをして、相良は深々とお辞儀をした。

「申し遅れました。私、羽柴綾女様の付き人の相良陸と申します。お見知りおきを」

そうして、烈に近づいて「ここではなんですから、移動しましょう」と耳元で囁く。

烈の返事を聞く間もなく、相良は小浦に出かける旨を伝えて呆然としている烈に近寄る。

爽やかそうに見える笑顔は素なのかそれとも裏があるのか、訳が分からないまま烈は相良と共にその場を離れることになる。

綾女に付き人がいることは調査の段階で知っていたが、まさかこんなにも若いとは思っていなかったようだ。

というより、なぜ相良は烈が名乗りたくないことを知っているのか
が不明だ。

あの事件は世間には何も事実とは伝えられていなく、知っているのは
当事者のみ。

羽柴絡みだということは分かるが、相良が知っているということは
綾女も知っているのか。

2人は歩いて10分ほどの場所にあるファミレスに入ることにした。

喫茶でも良いが男2人でしかも2人してスーツを着ているから怪し
く見られそうということで無難なところを選んだ。

入ったからには何か頼まなければなので、とりあえずアイスコーヒ
ーを注文し、さっそく本題に入るべく相良のほうから話を持ち出し
た。

「単刀直入にお聞きします。あなたは阿笠大悟様が怪我なされた理
由を知っているのですね？」

「理由ってというか、まあ羽柴の差し金ってことは」

躊躇いもせずきっぱりと相良が言うものだから、一瞬呆気にとられそうだったが綾女の付き人である彼ならかなりの情報を知っているに違いないと、烈も怯まずに答える。

「そうですね、その通りです。阿笠様には大変なことをしてしまいました」

「大変なことだと……？ 分かっててやったくせに」

「いえいえ。確かにうちの者の仕業ですが、以降はもう何もないでしょう？ 私の知らないところでされていたので、ひとまず止めておきました」

相良の説明にどこか矛盾を感じる。

阿笠に言わせれば、阿笠と綾女が別れたおかげで狙われる必要がなくなかったはずだ。

今ではまるで相良が揉め事を収めたかのようだ。

「あ、そうか。同じ時期くらいにお嬢様と阿笠様が別れたんですよ。あなた方はそのせいでもう襲われなくなったと思われたでしょう」

予想外の事実だが、正直そこらへんのことはどうでも良い。

大事なのは狙われなくなったという事実のみ。

「もちろん、綾女様はそのことは存じておりません」

相良は烈に喋る暇を与えないくらいに話し続ける。

だが、ただ無造作に話しているのではなく烈が聞いたような内容的を得て説明する。

人の心が読めるのかと突っ込みたくなるくらい、頭の回転がはやいということだろう。

とりあえず綾女は知らないということに烈はホッとする。

もし綾女が知っていたの犯行だとしたなら、阿笠の淡い恋心が踏みにじられたように思えるからだ。

もともと近づいてきたのは綾女のほうからなのだから、綾女が仕掛けるのはおかしい話だ。

「相良……さんはどこまで知っているんですか」

「相良で良いです。同じ年ですし私はただの付き人なので敬語も結構です」

「えっ、同じ年？」

確かにかなり若くは見えるが、付き人をするくらいなのだからちゃんとした大人なのだろうと思っていた烈には少し衝撃的のようだ。

相良はクスリと笑い、自分の身分を明かす。

相良家が昔から羽柴家に仕えてきたという事実と、常に側にいるために同じ大学に通っていること。

後者の話題はさすがに烈も食いつく。

綾女は中宮大学体育学部保健体育科に所属していて、そこには春樹や麻冬もいる。

まあほとんど大学には行っていないのだが。

「春樹様と麻冬様には仲良くさせて頂いておりますよ」

「へえ。付き人ってそこまでするんだ。って、あそこは何かスポーツしてないと入れないんじゃない？」

「ははは。そこはもちろんアレですよ」

「アレ、ね。さすが……」

何事もないかのように笑って受け流す相良に、烈も引き笑いをしながら流す。

一流しか入れないはずの場所は金とコネでは入れないのかと思いきや、羽柴様にはそんなこと関係ないわけか。

そもそも羽柴家の令嬢である綾女がそこまで運動神経が良いということも驚きもの。

お嬢様はみんな運動神経がよろしくないと言いたいわけではなく、お嬢様が一流のアスリートを目指すのかという話だ。

「ところで、阿笠様はやはりお嬢様が好きなんですか」

「それは、」

「お嬢様は阿笠様に好意を持っておられます」

「えっ」

あれほど諦めるだのなんだのと昨日阿笠と口論したばかりなのに相良があっさりとそう言ってしまったって拍子抜けする。

ただ、別れを言い出したのは綾女のほうなわけだから些か不思議ではある。

調べれば調べるほど因子がたくさん出てきてなかなか関連づけるのが難しい。

でも絶対にそれらは1つに繋がっているのだ。

相良の言葉に希望を持った烈が相良を見つめると、相良は深く瞳を閉じた。

「だけど、後悔する前に諦めたほうが懸命です。私は綾女様の味方なので、やはり綾女様が傷つくのは見たくない」

「なぜ傷つくと、」

「あなたはどこまで知っていますか？」

どこまでと言うほど大して知らないので、相良の問いには答えられない。

烈が黙っていると、相良はようやくきたアイスコーヒーに砂糖を混ぜながらいつになく真面目な顔をしてこう言った。

「私は全て知っています。あなた方が知りたがっている羽柴家最大のトップシークレットも」

n
e
x
t

第35話【名前の由来】

「え、出かけた？」

「ええ。小浦さんから言付けを頼まりましたの。先ほどいらしたお客様とお出かけになられたようですわ」

言付けを頼まれたメイドが綾女の部屋に来て説明する。

なかなか帰ってこないと思っていたから出かけてたのか。

「鈴木大輔……だっけ？　ふうん、相良の知り合いなんだ」

相良が付き人になってからは常に一緒にいたのだから知り合う人はみな同じ人のはずだが、あいにく綾女にはそんな知り合いはいない。

それもそうだ、本当は愛川烈なのだから。

とは言っても愛川烈自体は知り合いでもなんでもなく、ただ昔から阿笠を見てきた綾女は阿笠の親友なので烈の存在は知っている。

厄介払いをしに出てきたのが相良で良かった。

綾女だったら全てがパアになるところだったかもしれない。

用件を伝えたメイドはすみやかに退室し、綾女は再びまた1人になる。

相良とDVDを見ていたのだが、しかも相良が見たいと言っていたものののでひとまず止めることにした。

一気に暇になった綾女はソファーに寝転がる。

ふかふかのソファーに体が沈み、柔らかさが気持ち良くてリラックスできる。

今日は部活もないし誰かと約束もしていないし、おまけに大学から出された課題もとっくに終わっている。

残る夏休みの過ごし方は、部活の練習や合宿、羽柴絡みのパーティーや友人との遊び、あとはつかさの月命日のお参りくらいか。

月命日だけはどんな用事があってもどんな時間になっても、ずっと欠かさずに墓参りをしてきた。

試合がある日は早朝に行き、合宿があるときにはこっそり夜中を抜け出ることもあった。

どんな場所に行っても行こうと決めたのは綾女だ。

何もしてあげられなかったせめてもの償いに、自分が生きている間はつかさの墓を綺麗にし続けると決めた。

「月命日明後日か……。……。違うわ……。命日だ」

つかさが亡くなったのは真夏の暑さが厳しい8月の半ば。

夏休みを終えて新学期を迎えることができなかった。

阿笠は命日には必ず行くが、綾女のように月命日も欠かさずということはない。

フラッと行きたくなったときや、何か大きなことがあるときにはつかさに見守ってもらうために訪れたりする。

県東部に比護の家があり、阿笠家もすぐ側でその近辺につかさの墓がある。

県中部の羽柴家からは少し離れているので阿笠ほど気軽に行けたりはできないのだ。

「つかさが死んで12年になるのか……。」

あと2ヶ月で8歳の誕生日を迎えるはずだったのに、わずか7歳で逝ってしまった。

別々で暮らすようになってからは一緒に誕生日を祝うことはなくなっただけ、一緒の日に誕生日会をやっていることは分かっていた。

同じ日同じ時間にあたしたちは共に大きくなる。

もうじきあたしは20歳になって成人になる。

なのに、同じ日に生まれたつかさの時間は7歳10ヶ月から動き出さない。

本当なら中宮大にいるのはつかさで、あたしがいるはずではなかった。

あたしがどんなにつかさのように生きようと、止まってしまったつかさの時間を再び動かすことはできないんだ。

あたしがしていることは無意味かもしれない。

なんでそこまでつかさに思い入れするんだと思うかもしれない。

だけど、つかさはもう1人のあたしなの。

全く違う人間だけど、血の繋がりがある双子。

……生みの母親は、あたしたちを生んですぐにDNA鑑定をしたらしい。

そして、あたしだけ綾女と名付けられた。

比護さくらと比護要から生まれた双子は、「綾女」と「つかさ」と名付けられた。

後を追うように生まれた三女は「みかさ」と名付けられ、あたしだけ疎外された。

なんであたしだけ平仮名じゃないのか、なぜ妹2人だけ似たような名前なのか。

ずっとずっと疑問で、でも羽柴に來てもう少し経ってからようやく分かった。

最初からあたしは比護家では暮らせなかったんだ。

羽柴家当主の名は羽柴^{はしば}耶^{かい}斐。

お父さんの名前の斐は「あや」とも読める。

あたしの名前はきつとそこからもじったものだろう。

DNA鑑定をした結果名付けられたのがこの名前というわけなら、なんて哀しいのだろう。

比護家長女として比護をずっと守るつもりでいたのに、比護の両親はそんなつもりは毛頭なかったんだ。

その事実が悔しくて憎らしくて、だからこそ余計に羽柴を継ぎたくない。

だって、悪いのはあたしではないでしょう？

あたしは比護家に生まれて双子の妹もいて、そのあとまた妹が生まれて幸せだった。

金持ちの子になんかなりたくなかったし、両親はさくらと要が良かった。

……どうせ羽柴に渡すつもりならあたしが物心つく前に渡しておけ

ば良いのに。

最悪すぎる。

「綾女……？ はっ……」

真実を知ったそのときから、自分の名前が大嫌いだった。

つかさに呼ばれるのも少し嫌だったし、何より比護の両親がどんな気持ちであたしの名前を呼んでたのかと思うと吐き気がする。

比護綾女改め羽柴綾女は、子どもに恵まれない羽柴に養子として引き取られ、それは上流階級に旋風をもたらした。

静岡という異端な場所を本拠地としているが、資産額は日本でも指折りの名家だ。

名家ともなれば誰が後を継ぐのかというのはその界のものなら誰し

もが気になる話題で、綾女を養女にしたときには財界が揺れる勢いだった。

あの羽柴の養女ならばかなりの秀才なのだろうと言われてきたにも関わらず、金持ち学校には入らずに育ってきたものだから噂はまちまち。

わがままお嬢様

やっぱりよその子に継がせるのが間違ってる

あんな子じゃ羽柴の荷は重すぎる

そもそも羽柴の当主が甘やかしすぎ

いろんな噂話は、すぐに綾女の耳にも入る。

学歴がなんだっていうんだと反論したいが、頭のお堅い連中に言い訳は通じない。

あることないことをたくさん言われてきた。

「羽柴綾女なんて……ただの偽物じゃん」

斐からもじった綾なんていない。

耶斐は男であたしは女だから、綾に性別つけて綾女って？

……バカにしてんの？

耶斐なんて関係なく、あたしだけの名前が欲しかった。

つかさやみかさみたいな、その個人だけの名前。

おまけに養女になったことで名字が変わって羽柴になってからは、余計に偽名のように思えてしまう。

あたしは比護

羽柴じゃない。

羽柴綾女？

ダレソレ

まあ、だけどそうだね。

あたしがいつまでも比護にいたらバレルものね。

比護にいるときにはずっとあたしはO型だと言われてたけど、本当はB型で、怪我でもしたら一発だもの。

あたしが比護を出るときにママがこっそり教えてきた。

パパとママはO型で、O型同士からはどうしたってO型しか生まれない。

ならB型のあたしは？

訳が分からなくて、あたしは今のお父さんに問い詰めて全ての事実を知ったの。

お父さんはB型で、その真実が本当なら頷けるしあたしが羽柴に引き取られる理由も分かる。

分かるし、子どもを産めないお母さんのことを考えたらこれが一番妥当なのかもしれないけど、でもやっぱり許せない。

だって、知らないの。

羽柴のお母さんも比護のパパも真実を知らないの。

みかさも知らないし、知っているのはあたしと相良と相良父と、お父さんと羽柴の上層部の人だけ。

一流階級の間でもすぐにあたしが養子であることはタブーとされ、今では元から羽柴に生まれた秘蔵っ子と言われ、あたし世代の人たちはあたしが養女であることすら知らない。

うちの使用人たちもトップ以外は当時総入れ換えとなり、残った者のみしか真実を知らないというわけだ。

「……なんで？ ママ……。こんなにもママにそっくりなのはもう……あたしだけなのに」

つかさと綾女の顔はさくらにソックリで、まるで生き写しだ。

つまり2人は外見は母親から、中身は父親から譲り受けた。

つかさがいない今は、さくらに一番似ているのは確かに綾女で、け

れど綾女の戸籍は羽柴。

さくらとはもうなんの関係もないのだ。

血が繋がってるのに、遺伝子を受け継いでるのに、こんなにも似てるのにもう赤の他人。

ママがあたしを羽柴に売った日からあたしはママが大嫌いになった。

だって、ママとは血が繋がっているのに、よく平気で違う人に自分の子どもあげるなんて真似できるよね。

信じられない。

大好きなんて気休めの言葉じゃない。

あのかきはつきり言えば良かつたんだ。

あんたは比護家の娘ではないって。

n
e
x
t

第36話【相良の頼み】

「トップ……シークレット？」

みかさは母子手帳を見た。

阿笠も姉妹であることは気づいた。

だけど、やっぱり最後の一押しがないためにみかさと阿笠の2人だけではそれ以上の詮索はできない。

みかさが泣き止み、少しその話題に触れたあと阿笠が烈を呼ぼうかと提案したが、みかさは首を横に振った。

烈はきっと知っている。

なぜかそんな思いに課せられるのはみかさだけではなく阿笠も同じだ。

事実を知りたい。

だけど、烈から言ってこない限り聞けない。

それがみかさの気持ちだ。

だがそんな2人の期待とは裏腹に、烈が知っていることは2人と大して変わらない。

「それは羽柴のほんの一握りの人間しか知らない、羽柴最大の秘密。あなた方が知ろうとしている内容が世間にバレれば羽柴は墮落するでしょう」

墮落……？

あまりにも大袈裟な物言いだ、笑ってばかりの相良が前を見据え烈をじっと真剣な眼差しで直視していたものだから思わず烈は息を

飲んだ。

羽柴綾女に関することが羽柴最大の秘密であるということのために、羽柴綾女と親しくなった阿笠が狙われたのか。

しかもその線からいけばやはり綾女とつかさが姉妹であることが裏付けされる。

脅迫状に書かれていた、みかさとも縁を切れというのはつまりそういうことだろう。

そう考えるとつじつまが合う。

だけどもなぜそこまで秘密にする必要があるのか。

いや、秘密にしなければまずいのは確かだ。

生まれた年生まれた日からいつて2人がただの姉妹ではなく双子である可能性のほうがかなり高いが、あの双子は羽柴家からも比護家からも生まれてはこないはずだから、どこか他所で孕ませた確率がある。

腹違いの兄弟というのはよく存在するが、腹違いの双子なんて聞いたことがない。

……腹違いの双子？

「……あのさ、1つ言っておく。俺は比護みかさの婚約者だ」
「……え？」

「比護家を出入りするくらい容易だ。……俺は羽柴綾女の……もとい比護綾女の母子手帳を持っている」

烈の衝撃的な告白に、相良は言葉もなく口をあんどぐり開けている。

何も知らないとかをくくっていた相良にはかなりの驚きに違いない。

母子手帳は最大の武器であり、烈は今はっきりと比護綾女と言いつた。

「羽柴家最大のトップシークレットだって？　そんなの俺には関係ない」

烈はアイスコーヒーを一口分口に含ませる。

外の暑さと対称的にファミレス内はエアコンが利いていて涼しく、アイスコーヒーのおかげでかなり快適だ。

砂糖もいらなくらいの苦味が今はちょうど良い。

なんと返したら良いのか戸惑っている相良に追い討ちをかけるかのごとく、カップを置いて烈は言った。

「もっと言ってやろうか。比護家長女綾女、次女つかさ、三女みか

さって書いてあつたんだよ。」

羽柴綾女にはどうしても聞けないのならば、こいつに聞くしかない。

羽柴のトップシークレットを知るのはほんの一握りって言ってたけど、つまり偉いやつしか知らないんだろ。

そんなやつらを相良が抑えることができるってことは、こいつには相当の権力があるというわけだ。

つまり、相良ならなんだって知っている。

「愛川さん、」

「さっき、みかさの母親と口論してきた。その足で羽柴に来たんだ」
「……」

「……羽柴綾女は羽柴家の血を引いてるんだな？」

どうしても知りたかったのは、やっぱりそこだ。

だが相良に答えられるはずもなく、相良はテーブルを見つめながら固く口を閉じている。

知ったところで、烈がどうにかできる問題ではないし、みかさの婚約者だからといって直接烈に関係することでもない。

だけど、約束した。

みかさのために調べると、阿笠のために協力すると。

まあ、羽柴側からしてみればこんな約束ごときに羽柴最大の秘密を安々話すわけにはいかないだろう。

別に全部話してくれるなんて思っちゃいないさ。

でも第三者が秘密を知っているという事実を知れば、羽柴内で何かが変わるかもしれない。

鉄壁の鎧を剥がすことができるかもしれない。

どうにかして止まっている歯車を動かしたかったんだ。

長いことの沈黙は、周りの音をよく響かせる。

夏休み真っ只中の夕方、部活帰りや遊びついでの若者がたくさん訪れるこの店には活気が溢れている。

もちろん家族づれで夕飯を食べている人たちもいて、そんな中でスーツの彼らが沈黙を守っているとなると異様な光景に映るだろう。

イエスカノーか、肯定なのか否定なのか、首を縦に振るか横に振るかだけなのに相良はなんの反応も示さない。

代わりに違う話を始めた。

「……綾女お嬢様は本当はサッカーなんてするはずではなかった」
「え？」

「本当なら羽柴の令嬢としてそれなりの知識や教養を身につけ、今の大学にも進学していなかったんだ……」

烈相手に敬語を使うのも忘れ、その声はあまりにも切なげ。

綾女が決めた道に逆らうことは己の忠義心に反するが、それでもどうしても綾女の幸せを願わずにはいられない。

一生をかけてお仕えすると決めた、その日から。

「……つかさ様の夢は、綾女の夢……。綾女はプロになろうとしている。実際高校のときにはLリーグからスカウトされた」
「えっ、る……って……」

「だけど、綾女は断って今の大学に進学したんだ」

相良家は代々羽柴家にお仕えする立場で、生まれたときからすでに

俺の行く末は決まっていた。

相良の嫡男に生まれたらその瞬間から、羽柴家の跡取りが跡を継いだときには右腕となりサポートをする役目を課される。

俺は相良家の長男に生まれ、羽柴家には綾女しか子どもがいなかっため必然と綾女が継いだらそのサポートをすることになる。

付き人として、他の使用人とは全く違う扱いをされる。

いくら家臣だからと言っても相良家に命令できるのは、当主の羽柴だけなんだ。

遠い遠い昔、平安時代で羽柴家は華族と名付けられ、平成にいたる今では名家とされた。

記憶も何も残っているわけでもない。

ただ、平安よりもっと昔から流れるこの血が、羽柴を絶対裏切るなと、この絆は永遠だと言っているんだ。

「……羽柴に来てから、綾女は羽柴に反抗しつつもやっぱり羽柴を裏切れないでいる」

「……」

「だけど、綾女はこんなこと望んではない。あの家で……妹たちと幸せに暮らしたかっただけで、……」

妹たち……

相良から出るいろんなワードが烈の心を揺らす。

証拠が確かなものへと変わっていく。

「……すみません。余分な話をしました」

相良は我を忘れていたことに気づいて現実に引き戻され、苦笑いしながら言った。

その言葉の通り綾女の側にずっといたのは相良自身で、誰よりも綾女を理解している。

そんな相良だからこそ綾女の本心を知っていて、どうにかしたいと思っっているに違いないんだ。

哀しげに笑う痛々しい相良を見て、烈はそう思う。

烈が羽柴の鎧を剥がしたいと思っっているように、おそらく相良もそれを期待している。

「……話してよ。相良が言えるだけのことで良いから」

だけど、相良は羽柴に仕える身だから羽柴を裏切ることとはできなく、羽柴を否定するようなことすら言えない。

それは烈にも十分伝わってきている。

相良のためにも、なんて言うのはあまりにも綺麗すぎるが、事実羽柴の中でも権力のある相良がつくのなら有利ではあるのは確かだ。

相良がここでうんと言ってくれたら、あとはもう仮面を崩していくのみ。

「阿笠……」

意を決したのか、相良はポツリと呟いた。

確かに阿笠と聞き取れたが、そのあとの声はあまりにも小さくて聞こえず、烈は聞き返す。

そんな烈の顔を直視できず、烈はテーブルに両肘をついて額に手をあて、ギョツと目をつむりながら消えてしまいそうな声で言った。

「綾女の思うように……羽柴にも比護つかさにも束縛されずに生きて欲しい……。……阿笠大悟に伝えてくれ……。……綾女を助けて欲しい、と……。……」

虫の音のような、今にも泣きそうで哀しげで切ないその言葉は、綾女を思うその気持ちは、確かに烈に届いた。

n
e
x
t

第37話【事情】

「ふう……」

烈が比護家を出て行ってからもしばらくさくらはその場でただ突っ立っていた。

もう、なにをどう足掻いたら良いのかも分からない。

足掻いたら足掻いただけボロが出てしまいそうで、でもこのまま黙って見過ごすわけにもいかない。

さくらがやっとそこから離れたのは、電話が鳴り始めたことがきっかけだった。

初めは無視しようとしていたが、出るまで鳴らすぞと言わんばかりにコールは鳴り続け、しぶしぶ電話に出ることにした。

「……はい、比護です」

どうせ何かの勧誘だろうと思っていたが、電話越しに聞こえる声に身が凍りつく。

『さくら』

そこに立って受話器を持っていられることが不思議なほど衝撃的で、さくらの体はガタガタと少し震えている。

名前を呼ばれても声が出ず、受話器を持つ手に力が入るばかりだ。

『久しぶりだな、さくら。元気にしてたか？』

「……な……」

『今日みかさちゃんは？』

「……」

『いないんだな』

穏やかな口調ではあるが、さくらにとっては驚愕そのもの。

さくらが答えずとも勝手に話してくるこの人物は、

そのときインターホンが鳴り、さくらは誰か来たからと、震える手で電話を切った。

受話器を置くと、しばらく放心状態だったが訪問者が来ていることに気づいて、さくらは急いで階段を降りて玄関を開けた。

ガチャ、と音を立てて開いた扉の向こうに立っていたのは、予想もしない人で。

「いきなり電話を切るやつがあるか？」

そこにはワックスで髪の毛を固めてこの真夏に紺色のスーツに身を包んでいる男性がいた。

れんげ色のネクタイが紺の暗さを引き立てていて、主張しすぎていない色合いだ。

整っている顔のつくりは、格好いいというより美しいといったほうが正しいが、その瞳は力強く一途。

さくらはドアノブに手をかけながらその男性を見つめたまま、まるで金縛りにあったかのごとく動けずにいる。

「入れてはくれないのか？」

「な……にしに來たの……っ」

「君の顔を見るに」

その男性はさくらの手を取り、力ない手で抗うさくらを簡単に押し退けて勝手に家に入る。

強引で勝手なところが昔からちっとも変わっていないこの男性は、居間に入って夕方みかさが見ていたため付けっぱなしのテレビを流し見る。

ソファやテーブル、洋棚が並んでいて洋風な感じの居間を懐かしげに眺めている。

クールそうで冷徹な表情をよく浮かべ、どこか歪んでさえいるような気もする。

何を考えているのか分からないと言ったほうが分かりやすいだろうか、とにかく腹の底に何か暗闇を抱えているような、決して軽い人間ではない。

だけど、いつだって周りのことなんかたいして考えてなんかいない。

出会った頃も、あの日も、綾女を取られた日も。

いつもいつも

「……耶斐っ……！」

部屋を眺めていた耶斐は、さくらの呼びかけに振り向いた。

あからさまに震えた声をしていたさくらを、耶斐はいつものように歪んだ笑いをしながら見ている。

「なんでっ………会わない約束でしょう?! 夫が帰ってきたら……っ」

「良いじゃないか。要は俺の親友だ」

「よくもそんなことっ……」

まるで嫌いな人に会ったかのように全力でさくらは否定し、反論する。

そんなさくらを見ても耶斐はお構いなしで、それどころか余裕の笑みを見せている。

いつもそうやって人より1枚も2枚も上手に行き、高みから人を見下ろしている。

できて当たり前、できないやつは能力がない、そんな風に思うしかできないのも生まれ育った環境のせいだろう。

幼い転から英才教育を受け、羽柴の時期当主になるため辛い思いもしてきた。

その過程で培ったのは、不器用な心。

「明後日は出張なんだ」

「……？」

「命日だろう。つかさちゃんの」

耶斐は居間から出て廊下を渡り、奥の座敷の部屋へと向かう。

あとを追うようにさくらも慌ててついてくる。

俺の部屋には、空き部屋であるがテーブルに座椅子などが置いてあり、向かって右側には祭壇がある。

その祭壇の中央には幼きつかさが笑っていて、周りは花で埋めつくされている。

お供え物としてつかさの好きなジュースも置いてある。

「……なんで今年来たの」

耶斐は祭壇の前で正座をし、マッチに火をつけて線香を供え、目を閉じて静かに両手を合わせた。

後ろから尋ねてきたさくらの質問が聞こえていないのかと思わせるほど無心で、まさかこの人がつかさの冥福を祈っているとは思わなかった。

祈りが終わると耶斐はゆっくり目を開く。

だが後ろを振り返らず、遺影をじっと見つめている。

この顔は、耶斐にはとても他人事ではない。

さくらと、綾女とソックリなこの顔は。

「……本当なら成人になる。二十歳になっているはずだった」
「……」

「節目だと思ったんだ」

つかさが亡くなって12年、綾女を引き取って16年が経とうとしている。

時が経つのははやく、小さな少女だった女の子はもう成人の年を迎える。

比護家にも、本来なら成人を迎える子がいた。

俺が綾女を引き取らなければ、つかさちゃんがいなくとも今の俺の気持ちになっていたはずだ。

俺が綾女を引き取らなければ、もしかしたら違った未来があったかもしれないし少なくとも、この双子は引き離されずに済んでいた。

俺だって本当なら引き取るつもりなんてなかったさ。

だけど、妻が子宮を全摘出しているため子どもを産めない体ということで養子を迎えるという話になったときに、小百合（妻）はどうしても俺の子どもが欲しいと言った。

だが代理出産は許さないこの国では難しく、俺はつい綾女の存在を話した。

なぜ俺が綾女は俺の子であると知ったかというと、髪の毛少し頂いてさくらに内緒で勝手にDNA鑑定をさせてもらったんだ。

どうしても確かめたかった。

さくらの子どもが、俺の子なのか要の子なのか。

……妻は、俺の遺伝子を受け継いでるのなら喜んで養女にしたいと、そう言った。

最初躊躇ったが、どうしてもそうしたいとスがる小百合に押し負け、

それと同時に久しぶりに綾女を見たときにすごく情が沸いた。

公園にいた双子の1人は、サッカーボールを楽しげに蹴る元気な少女でまるで要のようだ。

だがもう1人は、それを愛しそうに眺めている。

ブランコに座りながらブランコを揺らすでもなくただ座ってつかさちゃんを眺めていた綾女を見て、まるで俺が親友の要を見守っているような、そんな光景がフラッシュバックした。

話し方も穏やかでつかさちゃんとは違い落ち着いているその様は、要でもなくさくらでもない、俺の血だと感じた。

俺の子ども。

世界でたった1人の、俺の娘……

俺が今愛した妻の子どもではないけれど、小百合は過ちを犯した俺を許してくれて、自分とは血の繋がりのない綾女を愛しいと言ってくれた。

妻の言葉もちろんだけど、俺自身綾女を見て綾女を育てたいと思った。

一生命をかけて大事に育てていきたいと、……後継者としてではなく唯一の愛娘として、綾女と一緒にいたいと思った。

綾女は俺を恨んでいるだろうけれど。

「……耶斐。この秘密がみかさに……大悟くんと烈くんにバレてい

るわ」

さくらのその言葉に、耶斐は勢いよく振り返った。

まさか、というような顔をしながらさくらを見る。

「みかさちゃんの幼なじみと婚約者……？」

「……ええ」

「あ……ああ、そうか。だから君はそれほどまでに」

怯えていたんだね。

そう言おうとしたが、そんなことを言っている場合でもない。

その事実が知られて困るのは、さくらと俺だけ。

さくらにしてみれば要を裏切ることになるし、俺も周りのお偉方に

批難されるだろう。

俺だけが批難されるならまだしも、いや、俺が批難されるということは羽柴直下や傘下の人間、羽柴本家、羽柴に関わる全ての人間が上流から追い出されるということになる。

綾女さえも。

そのために事実には伏せ綾女を養子縁組したと報告し、使用人たちを一斉に変えた。

バレないようにと、臭いものに蓋をして、その入れ物を腫れ物に触るかのように扱い、いつしか放置した。

だけど

「……潮時なのかもしれないね」

いつかは蓋はこじあけられるものだとも思っていた。

一生隠し通せるわけなどないと。

そもそもあの日あんなことをした俺が一番の加害者なのだということを。

n
e
x
t

第38話【展開】

「うーん……」

烈は相良と話し終えたあと、共に羽柴邸に戻り路駐していた愛車に乗り込んで走らせた。

だが家に帰ろうか阿笠のところへ行くかで迷い、結局また適当な場所
所に車を止め、車内でどうすべきかを検討する。

相良のおかげでかなりの情報を得ることができたものの、いまいち
整理がつかない。

なんだかねで相良は核心は言ってくれなかった。

ただ1つ、綾女とつかさとみかさが姉妹であることは分かったけれど。

結局2人は双子なわけで、え、じゃあ何か？

羽柴綾女が羽柴家の血を継いでるなら父親は羽柴耶斐で、ならばつかさちゃんも羽柴耶斐の娘ってことか？

……ちよつと待てよ。

だったら比護さくらは羽柴耶斐とできてるってことになるけど、2人に何の接点が？

しまった、そっちのほうは関係ないと思って全然調べていなかった。

いや、だけど羽柴耶斐の娘だとしたらなぜつかさちゃんだけは比護家にいたんだ？

しかも、羽柴耶斐は羽柴綾女と養子縁組をしている。

もとは2人とも比護家で育ってきて羽柴綾女だけを引取ったんだから当たり前だが、ますます不自然だ。

羽柴耶斐の娘たちがなぜ比護要に育てられていたのか。

……分からない。

まったく理解できない。

阿笠にサッカーを教えたのはつかさちゃん、彼女にサッカーを教えたのはおじさんだ。

おじさんは元々学生時代は有能なサッカー選手だったらしく、確かにスポーツ推薦で県中部にある桜ノ宮学園に高等部大学部と通っていた。

桜ノ宮学園は県下唯一の金持ち学校で、おばさんはおじさんについていくため学業特待生として同じく高等部から入学。

確か記憶では……あそこはランク分けされてるはずだ。

家柄でクラスが決まり、羽柴のような世界的な大金持ちはAクラスで、数少ない特待生たちもAクラス……

「……知り合い？　3人は知り合いだったのか……？」

おじさんとおばさんは幼なじみで親も公認の恋人。

高等部に入るときにはすでに付き合っていたと聞く。

高等部からAクラスに入ってそこで羽柴耶斐に出会って……

おばさんと羽柴耶斐は恋に落ちた……？

いや、そんな偶然……

羽柴耶斐がどの学校出身かなんて調べてはいないけど、でも桜ノ宮しか考えられない。

都心部のように金持ちがたくさんいるわけではないため、桜ノ宮には近隣の県からもたくさん来ている。

そのため寮も完備されていて、東京にある聖プレジデント学園や凱琳、桃院にも引けを取らないほどの歴史も由緒もある学園なのだ。

俺なんかじゃ絶対に入れないような。

そうか、でももし本当に3人が知り合いでおばさんと羽柴耶斐がおじさんに黙って隠れて付き合っていて、そうして産まれてきたのがあの双子なのだとしたら一応繋がる。

そうして結局は許嫁のおじさんの元に帰って2人を育てることにした。

だけど羽柴耶斐は自分の娘をどうしても見放せず、片方だけ引き取った……そう考えるとなんとなく流れは掴める。

だけど……

羽柴綾女だけ違和感を覚えないか？

彼女の名前、普通双子だったら似たような名前にしたりしないのか？

つかさちゃんはその妹のみかさとは似ているけど……

……考えすぎか？

まるで最初から羽柴綾女だけ違う扱いをしてるような……

「……はあ、」

考えれば考えるほどいくつも謎が生まれてくる。

考えたって答えを導き出せるはずなのに。

「お、双子連れ」

車の中から横目で外を見ると、両親が10歳くらいの双子の男女を連れて仲良さげに歩いていた。

双子に縁があるのかな、なんて思いながらその家族を見ると、女の子は母親似で男の子は父親似だ。

元氣そうな父親と同じく女の子は楽しげに元氣に笑っているのに対し、穏やかな母親に似たのか男の子は大人しい……というかクールそうだ。

なるほど、ちょうど別々の親から顔と性格を譲り受けたってわけか。

「そういうもんなのかね。……あ……？ …………！！」

その瞬間、ハッとした。

ま

さ

か

そんなことあるはずない。

だけどそれしか考えられない。

「医師、医師……違う、産婦人科医……！」

烈は黒い手帳を取り出して、ペラペラとめくる。

スケジュールの紙とアドレスの紙でなかなか厚いその手帳には一体どれだけの人間のアドレスが入っているのか。

こんなとき、人脈があることは便利ではあるがこうも多いと探すのが一苦労だ。

烈はお目当ての人物の名前をくまなく探した。

同時刻、相良は屋敷内に入り綾女の部屋に戻ろうとしたがやはり止めて別の場所へ向かう。

広すぎる本邸は歩くだけでかなり運動になり、付き人として、一応は使用人として働く以上敷地内の往復など当たり前で体力など小さい転からついでにしまっていた。

お嬢様付きの相良は基本綾女の日常の管理をするため、いわゆる秘書のようなもので、洗濯や掃除などをする使用人や料理人とはまた違う。

「陸さん。こんにちは」

「ああ、こんにちは」

廊下ですれ違うメイドや執事、羽柴の仕事の関係者たちがこぞって相良にあいさつをする。

愛想笑いをしながら適当に受け流し、相良は足早にある場所へと歩いて行く。

使用人たちの部屋が並ぶ1階、羽柴家が食事をする間やバスルームなどの部屋、綾女や相良の部屋がある2階、そして3階には耶斐や小百合の部屋や書斎などが並び、部屋の数だけでいったら1つの階につき30はあるだろうか。

もちろん各部屋の大きさは異なるので一概には言えないが。

そして相良が向かうのは、2階のある部屋。

ドアをノックするとすぐに返事が返ってきて、相良は名を名乗って許可をもらおうと部屋の中に入った。

「ああ、陸。さっきの客はなんだったんだ？」

社長椅子のような黒いふかふかの回る椅子に腰かけていたのは40代後半か50代前半の男性。

穏やかそうな表情が相良と同じで、というかスーツを着ているところも同じだ。

まあ当たり前だ。

「んー、ちょっとね。それよか父さん、聞きたいんだけど」

そう、この部屋の主は相良の父・相良誠。

耶斐の付き人兼パートナー兼秘書ってところだ。

「阿笠大悟襲撃事件。あれって父さん関わってる？」

本来なら人前ではきちんとした態度を例え父親相手でも取らなくてはならないが、ここは誠の部屋なので無礼講。

腕を組みながら誠をじっと見つめているが、誠はその質問には答えず黙り込んでいる。

それどころか、ニヤツと薄気味悪く笑っていて、普段穏やかで優しいような表情をしているものだからより一層ぞっとする。

誠がそんな態度をするのが分かっていたかのように、相良は眉をひそめて誠を睨み付ける。

双方に流れる緊張感が伝わっているかのように、部屋の中は異様な雰囲気だった。

n
e
x
t

第38話【展開】（後書き）

お気づきの人いますか？

実は「僕はまるで石ころのようで、星みたいな君」に出てくる学校名を入れてみました。（笑）

聖プレジデントは綾、凱琳は蒼、桃院は伊賀がいますね…（笑）

第39話【冷戦】

夕方は過ぎ、夜になるが夏の空はまだ明るい。

ガラスの窓から見える景色は暗闇ではなく、未だ青みを帯びている。

蝉の鳴き声が暑さを強調させ、エアコンがついているもののあまり温度を下げていないのか大して涼しくはない。

相良と誠はそんな中、お互い一步も引かずに睨みあう。

正確には睨んでいるのか相良だけだが、誠も意味深な笑みを浮かべて相良を見ている。

終わりのない冷戦。

「……否定しないってのはそういうことかよ。やっぱり」

相良は深くため息をつく。

「良いじゃないか。どのみち陸が止めたんだろう」
「ざけんなよ」

阿笠の襲撃事件から、もう2ヶ月半近く経つ。

その間一度も誠を疑わなかったわけではないし、正直見てみぬふりをしておこうとさえ思っていた。

綾女と仲が良くてもそのうち消える感情だろうと、別に無害だろうと。

だけど、綾女が本気で阿笠を想っていて阿笠も綾女を想っているのだとしたら話は別だ。

綾女の意に反することを見過ごすわけにはいかない。

「陸が私を止めるのはお嬢様のためだろう？ 私は耶斐の付き人だから耶斐のためにしているだけだ」

「耶斐様が望んだと？」

「私の独断だよ」

誠が言うことも分かる。

相良が綾女に対して絶対服従のように、誠も耶斐に対してそうなのだ。

例え耶斐が直接命じなくても、耶斐の邪魔になるものは全て排除する、それが誠の仕事でもある。

「……それほどまでに守らなきゃいけない秘密なわけ」

「当たり前だろう」

「綾女が継がないって言ったらどうすんの」

なおも腕を組みながら、相良は座っている誠を見下ろす。

そんなはずないとたかをくくっているのか、誠は鼻で笑いながら答えた。

「なんのために引き取ったと思ってるんだ？」

そう、確かに綾女は羽柴の跡取りとして引き取った。

小百合が子どもを産めたなら綾女を引き取ることはなかったが、なんの因果か耶斐は綾女を引き取ることになり、しかも実の娘なのに戸籍上では養女。

それでも一番親子の関係に近い特別養子縁組ではあるが、血の繋がりがあつのに養女とは少し切ない。

だからこそ綾女は、居場所がないと思わずにはいられない。

比護の両親から見放され、本当の父親とも養子縁組。

一体どこにいたら自分は自分でいられるのだろう。

比護綾女も羽柴綾女も、どちらも違う。

いっそ名前を改名したいと思うほどに、綾女は追い込まれているのだ。

「そうやって大人はエゴばかりだ」

相良は悔しそうに歯ぎしりをしながら眉間に皺を寄せる。

「綾女がいつ継ぎたいと言った？ 綾女がいつ引き取ってくれたと言った？ せっかく比護家で幸せに暮らしていたのに、それを壊したのはアンタらだろ！」

相良は誠が肘を置いている机を思いきり叩き、さっきよりも近くか

ら誠を睨み付ける。

あのまま行けば、比護つかさと綾女の両方が阿笠大悟の幼なじみだったはずだ。

阿笠が比護つかさを好きだったかは知らないけど、でも綾女との幸せな未来だってあったかもしれないのに。

比護つかさが阿笠に夢を託したと知っていたら綾女はサッカーをやらずにすんだのに。

夢を追う阿笠の隣でいつだって笑っていられたはずなのに。

「耶斐がしたことに反論する気か？ 立場を忘れたのか、陸」

でも、そんな人生だったら俺は綾女と出会えなかった。

……けどそれでも、綾女が幸せなんだったら出会えなくても良かったんだ。

「俺の主は綾女だけだ」

俺は綾女に会えて、綾女に仕えることができ嬉しいけど、綾女にとってここにいることは全く幸せではないのなら、俺のことなんかどうだって良いんだ。

寂しいけれど、相良家嫡男として新しく迎える羽柴の跡取りに仕えたって良い。

何も望んでこなかった綾女が唯一、阿笠大悟が好きだとそう言った。

俺は綾女に意見する権利はないから綾女が決めるまで待つしかできない。

簡単に羽柴を捨てるとも、羽柴を継げとも言えないから。

だからせめて決まるそのときまで綾女の側にしようと思った。

誰を敵に回しても。

「なるほど。ならお前は私と耶斐の敵となるのだね」

「綾女が望むなら」

「ふふ。面白いじゃないか」

不敵な笑みの裏にはなにがあるのだろうか。

お前に勝ち目なんか無いと言わんばかりの目に、相良は初めて父に
対して憤りを覚えた。

いくら綾女が跡取りで相良が使用人の中でも権力があるとは言っても、耶斐と誠は更にその上にいるのだから不利どころか勝負にすら
ならないだろう。

そんなことは百も承知でいるからこそ余計に苛立つ。

耶斐も誠もいざとあらば手段は選ばない人だ。

現に何もしていない阿笠にあんな怪我を負わせたのだから。

だけど退くわけにはいかない。

「……で、父さんはこんなところでなんで暇してんの？ 耶斐様は」

ひとまず話は置いておこうと、相良はガラッと話題を変える。

誠も特に不思議に思わずに相良の問いに答えた。

「ああ、耶斐は今比護家に行ってるよ」

「——なんだって？」

「明後日が命日だろう。だけど明後日は外せない用事があるから今

日行ってるんだよ」

何の躊躇いもなくそう言った誠の言葉に、相良は大きな衝撃を受けた。

ついさっきまで烈が比護家にいて、さくらと口論していたことを相良は知っている。

烈の話から耶斐のことは出てこなかったから耶斐とはすれ違いになったんだろうけれど、今このタイミングでまさか耶斐がさくらに会いに行っているとは。

バレる

バレるじゃないか……

耶斐様に……

阿笠大悟が、愛川烈が羽柴のトップシークレットを知ってるなんてことが知られたらどうなるんだ。

十数年前使用人を一斉に総入れ換えするほど、阿笠を襲撃するほど守ろうとしていた秘密がバレたとなれば、口封じすることすら考えうる。

どうする……

今比護に向かったって遅い。

比護さくらに電話しても意味なんかない。

どうする……

「陸？」

机に手をついたまま冷や汗をかきながら啞然としている相良に違和感を覚えたのか、誠は相良の名を呼ぶ。

だが今の相良には誠の声は届いておらず、悶々と考え込んでいる。

綾女が羽柴の秘密を守ると言うなら俺は耶斐様の指示のもと秘密を知る者を消すだろう。

だけど、綾女の妹の婚約者を……綾女の想い人の阿笠を綾女が傷つけるはずがない。

綾女が2人を守ると言い切ったそのときに、本当に耶斐様や父さんを敵に回すことになる。

勝ち目のない戦……

兵の数も少なく、参謀も特攻隊もない。

舞台も何もかもが不利だ。

「……………」

……いや、革命群はいつだって少ないんだ。

そもそもこっちは相手の弱点を掴んでいるんだ。

つまり、やられる前にやれば勝てる。

超速勝負なら、トップにいる耶斐様より俺のほうがあつ。

「あつ、おい！　陸？！」

相良はそのまま誠の部屋を飛び出し、廊下を疾走する。

あまりに険しい表情で慌ててうる相良を見た使用人たちは何事かと

ガヤガヤし出す。

普段温和な相良がこれほどまでに取り乱しているのは初めてだからだ。

そんな周りの反応が目に入らないくらい相良は必死だ。

相良が向かったのは当然綾女の部屋で、その勢いでドアを開けようとしたがドアノブに手をかけようとしたところで動きが止まった。

綾女に会ってどうするのかと、ハッと我に返ったのだ。

綾女はみんなに真実がバレることを望んでいないし、阿笠にすら言わなかった。

つまり言いたくないってことなんだろう。

「……………くそっ……………」

ドアノブにかけようとした手を引っ込め、相良は向きを変えて歩き出す。

冷静沈着が売りの彼が、いろんな思考が頭の中に飛び交うせいで行動に移せない。

額に手を当てながら歩くその姿は何とも齒がゆそうだった。

n
e
x
t

第40話【電話】

自室で相良の帰りを待っていた綾女は、どうしてもブーツとしていられなくてついに行動に出る。

羽柴には内密のため小浦に運転は頼まず、タクシーを拾って出かけることにした。

今日行く必要はないが、なんだか胸騒ぎがして今行かなきゃいけないような気がした。

「運転手さん、急いで！」

綾女はポケットから携帯を取り出して、アドレス帳から番号を探して電話をかけた。

綾女がある場所へ向かっている最中、みかさは烈のところに行くことにすると言い阿笠のマンションから立ち去る。

本当は阿笠も烈に会いたかったが、みかさを優先させてみかさと別れた。

阿笠は1人になると昨日今日のことを回想した。

諦めようとしていた綾女への恋心を応援してくれる人があんなにもいる。

自分を襲撃したのは羽柴だと分かっている、これから周りに多大な迷惑をかけるかもしれないと予想できてもみんなそれでも良いと言ってくれる。

頑張れ、頑張れよと背中を押してくれた。

……気になるのならやっぱり本人に聞くしかない。

綾女と話して、真実を知る以外方法はない。

思いたったらずぐに行動しようと、阿笠は一瞬だけ躊躇うものの携帯を手にし、電話をかけることにした。

だがコールすることなく、通話中だと音声に言われる。

構わず再びかけ直してもまだ通話中のせいで相手は出ない。

このまま待っているのもむず痒く、阿笠は立ち上がって勢いよく部屋を飛び出した。

部屋を飛び出しながらも電話をかけ続けるが、やはりまだ出ない。

「っ…………綾女っ…………」

阿笠が電話をかけた先は、阿笠の想い人である綾女だった。

だが綾女はいつまでも通話中でなかなか電話に応答してくれない。

それもそのはず。

なんせタクシーの中から綾女が電話をかけている人物こそが阿笠だからだ。

お互いに電話をかけあっているため繋がらない。

「大悟くん……」

2人が連絡を途絶えてからかなり久しぶりなのに、今まさにこのタイミングでこうなるとは相性が良いのか悪いのか。

ようやく勇気を振り絞って電話をかけたのにこれではあんまりすぎる。

5分ほど電話をかけ続けても互いに出ることはなく、2人はそのまま断念した。

あんな別れ方をして辛かったのは阿笠だけでなく綾女も同じだ。

綾女も、決して阿笠が嫌いになったわけではない。

だけどつかさと重ねてみられることほど綾女にとって哀しいことはなかった。

つかさのように生きようと決めたのは綾女だが、それでも愛する人には自分だけを見て欲しかった。

きつと言わなきゃ後悔する。

ただどその前に、ちゃんとケリをつけなきゃいけない。

過去を思い出して哀しく思うのはやめにしたい。

ずっと聞きたかったことを聞いて、それでもう全てを終わりにして過去を凌駕したい。

祈るように、綾女は手を握りしめた。

そして阿笠も、これ以上あやふやにするのはごめんだと思い車に乗り込み、急いで走らせた。

せっかくの練習休みにこんなにごたごたになるとは思っていなかったが、逆に休みで良かったかもしれない。

法定速度よりも若干速いスピードで違反ギリギリ（むしろ軽く信号無視しているが）の運転をしているのも、一刻もはやくある場所へ向かうため。

いつもなら運転中でも電話がかかってくれば平気で出ていたが今はスピードを出しているため、現に今着信音が鳴っているが出るに出られずにいる。

2回電話が別々に鳴るが、何度目かのコールのあと留守電に入って切れてしまう。

そのうち信号につかまり、携帯が鳴っていたことを思い出すと携帯を開いて誰からの着信なのかを確認した。

1つめに開いたのは最終着信である烈からの電話だった。

「烈だ」

阿笠は烈に電話をかけ直すと、すぐさま烈は電話に出た。

どこにいるのか電話の向こうはガヤガヤ騒がしく、外にでもいるのだろうか。

『阿笠！ 今どこ?!』

「今運転中だけど、なんかあった？」

『俺今実家のほうにいるんだけど、……あゝ!!』

烈はせわしく慌てているような声で、いきなり発狂し出した。

なぜ実家のほうにいるのか疑問だが、阿笠が「俺もそっちに向かっている」と答えると烈は再び奇声を上げ、すぐに来いと言って電話を切った。

一体なんなのかわからないが、とりあえず電話を切ってもう1つの着信が誰からのなのかを確認すると目を疑った。

その人は、さっきどんなに電話をかけても繋がらなかった人

綾女だった。

阿笠は信号が青になって自身も車を走らせたにも関わらず、すぐに綾女に折り返し電話をかけた。

3回コールしないうちに綾女は電話に出て、向こうも急いでいたのか慌てた声だ。

『……大悟くん?!』

いつぶりだろう。

生涯で考えたらほんの一瞬なんだろうけれど、この1ヶ月2ヶ月はとても長かった。

綾女の笑顔を忘れてしまいそうなくらい、長く切ない日々だった。

「綾女……？」

電話の向こうから聞こえる声に、こんなにも愛しさを覚えたことはない。

残酷な言葉を述べて会えなくなってしまっても、それでもやっぱり好きだから。

今日街中で見かけて姿を追おうとしたくらいに、好きだと思ってしまったから。

『会って……話したいことがあるの。あたし……あんなに酷いこと言っちゃったけど……！』

「俺も……。俺も言いたいことあったんだ」

左手に携帯を持ち、右手だけでハンドル操作をするがさすがアスリートだけあって反射神経も平衡バランスも良い。

電話中のため先ほどよりはスピードを落としているが、それでも普

段よりは速い。

『……あたし今つかさの家に向かっているの。だから……また改めて会っ』

「俺もだよ！　良いよ、綾女。……もう知ってるんだ。綾女とつかさが双子でみかさが綾女の妹だってこと」

『——え?!』

ついに阿笠は綾女に言った。

綾女はタクシーだということを忘れ、どういふことかと目一杯叫ぶ。

綾女からしてみれば、今阿笠が口にしたことは羽柴に引き取られてから一度も他人（相良以外）に話したことはないし隠していた事実だ。

それなのに第三者にバレたとなれば、必死に取り繕ってきた羽柴は終わってしまう。

いや、綾女には羽柴のことなんかどうでも良いはず。

跡を継ぐ気なんてさらさらなのに嫌がったのに無理矢理養女になったのだ。

だけどやっぱり綾女には耶斐を裏切れない。

綾女にとってたった1人の父親だから。

綾女は阿笠の返事を待たずに続けて言った。

「みかさにも言ったの?!」

金切り声に近いような口調が必死さを伝える。

阿笠はすぐに応答した。

『言っていない、けどみかさも知ってる。みかさは俺の幼なじみでもあるけど、俺の親友の婚約者でもあるんだ』

「……?! ……婚約者?」

なぜこの場でみかさの婚約者が出てくるのか分からないが、今の綾女にはそこまで考えてる余裕もなく聞き返す。

綾女にここまで余裕がないのならば、運転している阿笠はもっと余裕がないだろう。

久々の会話だというのに感動の再会のあいさつすらなく、互いに叫び合っていて、あまりに必死すぎる互いの言葉が時折理解できないときもある。

『俺の親友、烈が調べたんだ。とにかく今俺運転中だから、とりあえず向こう着いたらまた………えっ?! わっ……うわああああ!!』

阿笠の言葉を聞いていた綾女の耳に、阿笠の悲痛な叫び声が届いた。

何事かと一瞬戸惑ったが、すぐに問いかける。

「大悟くん?! 大っ……」

だが電話はプツツと切れてしまい、ツーツーと音声が続いている。

すぐに電話をかけ直すが携帯が壊れたのか何なのか繋がらなくなっている。

綾女は効果音が聞こえそうなほどの勢いでサーツと顔を青くした。

何度かけても繋がらることのない電話に、身の毛もよだつほどゾツと寒気がした。

「ど、どうしよ……」

チラチラと運転手に見られているがそれどころではなく、綾女は眉をひそめて困惑するしかなかった。

n
e
x
t

第41話【事故現場】

「どっ……どうしょ………えっ………なんで………」

綾女は阿笠と連絡が途絶えて動揺し、まかさのことを考えると体が勝手に震えた。

だけど、運転中だと言っていたしあの叫び声と携帯が繋がらないことを考えると、どうしても阿笠が事故に遭ったとしか考えられない。

さすがに見かねた運転手が綾女に何かあったのかと尋ねた。

綾女は何を言っているのかよく分からない言葉を話し、運転手に混乱を招く。

状況がつかめないのだから混乱するのは当然だし、最愛の人の最悪自体を想定すれば落ち着けるはずもない。

「お姉さん、車止めるかい？」

一瞬そうして車から降りようかと考えたが、阿笠の言葉が綾女の脳裏によぎった。

確かあたしが比護家に向かってるって言ったら大悟くん、俺もだつて言った。

大悟くんと向こうを出るタイミングがズレたとしても、比護のほうに向かうルートなんて限られている。

てことは、あたしより前かあたしより後に絶対いたはずなんだ。

携帯に出れたってことはインターには乗ってない……はず。

「……運転手さん！ このへんで事故とか起きてないか探してもらえる?!」

「えっ」

「お願い！ あたしの大切な人の一大事なの!!」

そう言うど運転手は困ったような表情を浮かべたが、すぐに了承してくれた。

運転手仲間に無線で連絡を取り合い、近辺で事故がなかったかを尋ねた。

その前にとりあえず近くの駐車場に止まり、もちろん駐車代は綾女持ちで、運転手は運転手仲間だけでなく本社にも呼びかけている。

綾女も携帯でニュースを見たりし、2人がかりで一斉に調べた。

なかなか知らせは得られないまま10、20分と過ぎて行く。

このままでは阿笠を見つけられないかもしれないと、綾女は最大に焦り始めた。

が、そのとき運転手仲間から渋滞の速報を受けた。

あまり広くない一般道で人身事故が起き、その道が通行止めになっ

ていてまだ警察も救急車も到着しておらず到着してもあまりの渋滞で辿り着けないという。

「場所は?!」

いてもたってもいられない綾女は無線に向かって叫ぶ。

無線特有のザーという音の向こうから、綾女が一番知りたかったその場所の名前が聞こえた。

「って……………この3本隣の通りじゃないか」

綾女たちがいるのは大通りで、その場所は近道として知る人ぞ知る市道だった。

「3本隣のね?! 運転手さんっ、お金!」

綾女は財布から1万円を取り出して運転手に渡す。

お釣りを出そうとした彼に、いらないと叫びながら勢いよくタクシ―から飛び出て全力疾走をした。

渋滞ってことは車では入っていけないし、体力に自身があるから走ったほうが良い。

そう判断したのだ。

昼間出かけていたときはワンピースにミュールを履いていたりしたが、家に戻ったあとは綾女は部屋着に着替えていて、プーマの黒地に白ラインの膝丈ズボンに中宮大体育学部蹴球部と書かれた半袖の練習着を着ていた。

それにスニーカーを履いているものだから、綾女は着替えたことに感謝している。

ミュールではいつものように全力で走れない。

1キロもない距離にいる阿笠目掛け、綾女は流れる汗を振りしきる。

もう夜だというのに道が込むのは、やはりここらがたくさん会社が

ある街だからだ。

普段ならスイスイ通れる市道が渋滞してしまうほどの事故なんだろうか。

いつになく必死に綾女は走り続けた。

3分少しくらいでその道路に到着すると、確かに渋滞だ。

どうにかその道から外れようともがく車や、イライラしながらハンドルを握っている運転手も大勢いて、そんな渋滞の先には大きな野次馬があった。

その方向に走っていくが、あまりに多すぎて綾女は中の様子が全く分らない。

阿笠の可能性が大きいので綾女はとにかく状況を知ろうと、近くにいた婦人に話しかけた。

「あのっ、これどうしたんですか?!」

この近くに住んでいるのだろう、買い物袋を持った女性は頬に手を当てながらため息をつく。

「交通事故ですって」

「誰っ……誰が?!」

「なんでもひきそうになった女の子を避けて電柱に突っ込んだみたいなのよ」

電柱……?!

その言葉に綾女はゾッと悪寒がした。

電柱に突っ込んだのならかなりの重体じゃないのか。

見るからにまだ事故したてで救急車も警察も来ていないようだ。

この野次馬の真ん中にいるのが阿笠だったら……

そう思うものすごく怖い。

血だらけの阿笠が横たわっているとしたら……

どうしよう。

また失うの？

また大切な人を失ってしまうの？

つかさだけでなく大悟くんまで……

結局いつも何も言えないまま、死ぬ瞬間すら見届けられずに大切な人を失ってしまうのだろうか。

つかさを失ったあたしはつかさのように生きようと決めた。

大悟くんを失ったら、今度は大悟くんみたいに生きるの？

それに何の意味があるの？

……だめだよ。

だって、つかさが託したのは大悟くんでしょう？

あたしじゃない、大悟くんと夢を約束したんだ。

あたしにはつかさの代わりに也大悟くんの代わりにもなれない。

そんなこと分かってる……

分かってるのに、やっぱりつかさの存在を消したくなってあたしは
こうして大学でサッカー部に入っている。

だけど、それとはまた別の話なの。

つかさとか夢とかそんなの関係ない。

あたしが嫌なの。

大悟くんがいなくなったら、あの笑顔を失ったらあたしが嫌なの…
…！

「とっ、通して…通してください！」

綾女は人だかりの中を懸命にかき分けて前へ前へと進んでいく。

邪魔だよと文句言われたり、時には肘打ちをくらったりもしたがそれでも早く阿笠に会いたいという気持ちで上回って群衆の間をゆく。

綾女の目に映ったもの、それは

電柱に突っ込んでガラスが割れ左側がペシャンコになっている車

泣いている女の子を抱きしめている母親

仰向けになっている男性に懸命に声をかけている数人の通りすがりらしき人

そして

「……………大悟くん!!」

手や服が血まみれになっている阿笠大悟の姿だった。

n
e
x
t

第42話【再会】

時間は少し遡り、阿笠は例の市道をスピード出して走りながら綾女と電話していた。

何回も通っている道だから油断していたのも事実だが、一番まずいのは夜だったという事実。

久々の綾女の声に感激しつつもとにかく早く向かわなきゃという気持ち勝ち勝る。

綾女も向こうに向かっていているのなら話は早い。

向こうに言ってから綾女からも事情を聞こうと、綾女との電話を終えようとしていた、まさにその瞬間だった。

「えっ?!」

阿笠が見たのは、目の前を走っていた車が急にハンドルを切って横の歩道に突っ込んだ光景だ。

「うわああああ!!」

そしてその向こうには飛び出してきたらしい小さい女の子がいた。

どうやら前の車はその少女をよけるために歩道に突っ込み、思いきり電柱に当たった。

物凄い音を立てて車は止まり、電柱が車の中に埋まっているような見るからにおぞましい状態だ。

阿笠も急ブレーキをかけて止まり、すぐさま歩道に車を寄せて車から降りた。

少女は特に怪我をしていないようで、母親らしき人が少女を抱き締めていた。

阿笠はすぐにその事故車に近寄り、車の中を覗く。

「!! 大丈夫ですか?!」

中には若い男女2人組がいて、運転していた男性は意識があったが女性も電柱にもろぶつかったようだった。しばらくして、

阿笠は近くの人に助けを求め、男女を何とか車の中から出す。

女性のほうは激しい出血で見るからに危険な状態で、阿笠は布などが無いので周囲に求め、みんな協力的で阿笠の指示通り動いていく。

「救急車に電話を！ あと……AED！！ 近くの会社か学校から持ってきてくれ！！」

一番血が出ているのは大腿部で、電柱についていた金属片が刺さったようだった。

おそらく電柱にぶつかった衝撃で刺さり、車がそのまま歩道に乗り上げたあずみで金属片が外れたのだろう。

金属片には真新しい血がこびりついていて、もし刺さったままならこんなに出血せずに済んでいたかもしれない。

頭も打っているがそこはそこまでひどくはないからとりあえず受け取った布で頭を押さえ、さらに違う布で大腿の出血している部位よ

り少し上できつく縛る。

心臓に近いほうで止血することで血が巡らないようにするのだ。

「意識なし……動脈触れない。呼吸なし……！」

頭部後屈顎先挙上をして気道の確保と呼吸や脈を調べるが完全になり。

阿笠は人工呼吸を行い、心臓マッサージを始めた。

チームに入りたてのときに受けた講習がまさかこんなところで役に立つとは思ってもみなかった。

阿笠が女性に心肺蘇生をしている側で他の人が怪我をしている男性を見てくれている。

男性は意識はあるもののどこかぶつけたのか息苦しそうで、けれど懸命にうわ言のように女性の名前を述べている。

だが立ち上がれないでもがく男性を横目でみた阿笠は、必死に叫んだ。

「ここにいる！ まだあんたの彼女は死んでない！！ 助けるからっ……………だからお前も死ぬな！！」

ハンドルを切ったせいで彼女に電柱がぶつかり、彼女が重体であることは彼にも分かっていただろう。

だが阿笠のその言葉に、事の重大さを気付かされたようで男性はうつすら涙を浮かべてそのまま気を失ってしまった。

まだ20代前半で若く、これからだというのに。

阿笠は女性の血液が手や服にかなりついてしまっているが、それでも気にせず心臓マッサージと人工呼吸を続けた。

血のついた手で額の汗をぬぐうとヌルツとした感覚に襲われ、額や頬にまで血がこびりつく。

その姿を見たら誰もが一步引いてしまうような状態だが、それでも阿笠は救命作業を続ける。

「死ぬなっ！ 絶対死ぬなよっ……！！！」

赤の他人だが、人の命を助けるのに理由はいらない。

周りで見ているだけの人よりも阿笠には勇気があった、ただそれだけだ。

みんな何とかしたいと思ってもなかなか行動に移せないもので、見守っているのが精一杯なのだ。

時折あれ阿笠大悟じゃないのか、という声がしたりもするが必死の阿笠には届かない。

いつまで続くのかと思われ、阿笠も心が折れてきた頃、1人の声が聞こえた。

「……………大悟くん！！！」

なおも心臓マッサージを行いながらその声の方向を向くと、そこには息を切らした綾女がいた。

「綾女……!!」

阿笠は目を見開きながら驚いている。

そういえば綾女と電話をしている最中だったことを思い出し、それでもよくこの場所が分かったなとも思えてしまう。

綾女は急いで阿笠に近付き、女性の側にひざまずく。

すぐに状況を察したのか、綾女は疲れている阿笠に対して「交代する」と言って阿笠と心臓マッサージを交代した。

一瞬ポケットとしていた阿笠もすぐに現実に戻り、周囲を見回して救急車とかはまだなのかと叫ぶ。

ちょうどそのとき、近くの会社まで走っていた高校生の男子がAEDを持ってやってきた。

阿笠は男子からそれを受け取ると、綾女が心臓マッサージしている邪魔にならないようにAEDの電源を入れて服を少し上げながらパットを女性の体に貼っていく。

そうしてA E Dの音声に従い、ショックを行う準備をする。

「綾女、離れろ。……俺よし、あなたよし、周りよし。ショックするぞ」

阿笠の手によってボタンが押され、女性にショックを与える。

そうしてすぐさま綾女は再び心臓マッサージを始めた。

さすが鍛えているだけあって綾女の心臓マッサージは力強い。

グググッと押される胸部を見ている阿笠の目には、胸部を押している綾女の手の上に涙が落ちたのが見えた。

阿笠が顔を上げて綾女を見ると、綾女は声を押し殺して泣いていた。

いつの間に泣いていたのか、頬に涙が流れていて、それがまた綾女の手に落ちる。

「綾女……」

何に対してなのかわからない阿笠は戸惑いを見せるが、綾女のほう

は力強いマッサージを止めずに懸命に女性を生かそうとしている。

そして綾女は、眉をひそめながら消えてしまいそうな声で言う。

「大悟くんが事故にあったのかと思った……。不謹慎だけど、酷いかもしれないけど……。大悟くんじゃなくて良かった……」

「あ……。ああ、そうだよな。ごめん……」

「絶対生かすから……。！　もう誰も死なせたりしない……。っ」

綾女のクリツとした瞳には溢れるほどの涙が溜まっている。

誰を重ねているのか。

おそらく一緒だった。

2人の目の前にいるのは、幼いつかさ。

すぐ側にいたのに何もできずに見殺しにしてしまった阿笠と、離れた地にいてつかさの最期を看取れなかった綾女の目の前にいるのは成人女性ではなく、比護つかさだった。

あるとき助けられなかった哀しい気持ちはきっと一生消えない。

トラックにひかれたつかさを助けてあげられなかった分を今――
|。

「う……………」

綾女から声が漏れる。

だぼだぼと滝のように流れている涙を抑えることができずに、それでも心臓マッサージをしているため手は離せないから涙を拭くことすらできない。

「……つかさっ……………」

確かに綾女の口からつかさの名前が出たのを聞いた阿笠は、目をギョツと閉じて何かを堪えるような表情をした。

そして、今度は綾女と交代して再び阿笠がやると言い出し、綾女は素直に手を離れた。

手が空いた綾女は、半袖の服で涙を拭き、阿笠の手伝いをする。

あの日、綾女と阿笠が最後に会った日に言った阿笠の言葉は全てが嘘ではない。

綾女のことをただの友達だと言ったのは明らかに嘘だが、綾女とつかさを切り離して見れないことは本当だった。

どうしたって綾女の前につかさを見てしまう。

幼なじみなのだから、大事な人だったんだから当たり前だ。

けれど、こんなにも綾女に会えたことを嬉しく思う。

傷つけて傷つけて、それでも会いたいと言ってくれた。

好きだ

好きだって

本当にそれしかなくて。

「こんなときにごめん……。だけど、俺はっ……」

阿笠の目にも涙が浮かぶ。

グッグッと女性の胸部を押している阿笠もそろそろ息が切れはじめている。

「……俺も……っ……ずっと会いたかった……！」

「大悟く……」

「つかさを抜きに綾女が存在を考えられないのは確かだけど……
……はあっ、は………、だけど俺はっ……」

今この瞬間だけは羽柴のことや疑いなんかを全て忘れている。

全て忘れて、阿笠の世界にはつかさを重ねてこの瀕死の女性と綾女しか写っていない。

きつとつかさは俺や綾女が不幸になることは望まない。

つかさが俺と綾女を引き合わせてくれたんだ。

「それでも綾女を好きだって思ったんだ……！」

阿笠のそのセリフに、綾女はさっきまで以上に涙を流しながら口を手でふさいでいる。

ずっと聞きたかった言葉。

ずっと欲しかった言葉。

後ろ楯や世間体ばかり気にして素直になれなかったけれど、阿笠を好きな気持ちはきつと誰にも負けない。

「あたしも……っ……っ」

綾女は口だけでなく顔を全部手で覆っている。

微かに震えている肩に触れたいけれど、心肺蘇生をやめるわけには
いかない。

2人はそれ以上何も言わず、心臓マッサージ人工呼吸AEDを繰り返し行
った。

数分後、ようやく救急車やパトカーが到着し、男性と女性は救急車
で運ばれた。

ピーポーピーポーとサイレンを鳴らしながら遠ざかっていく救急車
を、2人はずっと見送っていた。

n
e
x
t

第43話【一触即発】

「遅……。携帯つながんないし何やってんだ」

阿笠が来るのを待っていた烈は少し苛々している。

本当ならもうとっくに着いてるはずなのに一向に現れない。

どこで待っていようか迷ってとりあえず阿笠の家の近くで車を止めていて、テレビを見ながら待つことにしていた。

なかなか面白い番組がやっていたのだが今の烈にはそれどころではない。

そこに更なる追い討ちとして突然番組に代わり臨時ニュースが始まった。

どうやら交通事故が起きたようで、烈はチラ見程度にそれを流して見ていた。

重体で運ばれていく女性と男性らしき人、それからたくさんの野次

馬。

そしてアナウンサーがアナウンスしている向こう側にいたのは阿笠
そのものだった。

「はっ?! あっ……阿笠?!」

全身血まみれで、警察とその後何か話しているようだ。

まさか阿笠も事故に巻き込まれたのだろうか。

そんな予想が頭をよぎる。

だが事故に巻き込まれたとしてあんなに出血していたら普通に警察
と話なんかできるのか。

さっきまで興味がなかったテレビに釘付けになる。

『はい、あちらに見えるのは清水エスパルス所属のプロサッカー選手のア笠大悟さんです』

アナウンサーがア笠のほうを見ながら説明をしている。

『たまたま居合わせたア笠さんは事故にあった重体の女性を救急車が来るまで心肺蘇生していたようです！』

「心っ……？　じゃああれはア笠の血じゃないのか、」

アナウンサーの言葉に烈は安堵して肩の力を抜く。

ア笠が襲撃されたのを会見で見たとき以来のショックで、しかも今回はあんなに血まみれな姿を見ているから余計に怖かった。

まだアナウンサーやら何やらが話しているが、烈はすぐに車を走らせた。

とにかく今すぐにでもア笠に会いたかった。

その無事をきちんとこの目で確認するまでは安心できないから。

事故現場では、警察に話をし終えた阿笠や綾女が報道陣に捕まっていた。

人助けをただけでもニュースに乗るだろうが、それが阿笠大悟となればニュースにせざるを得ない。

国民的スターで老若男女構わず好かれる人気者の定めというか、仕方のないことだ。

「阿笠さん、〇〇ニュースの遠藤です！ 今回のことについて何かお願いします」

「えー……いや、まだ2人がどうなるか分からないので、とにかく助かることを願うだけです」

せっかく今日は昼間からバレないように変装をしていたというのに、変装姿（まあ血まみれであり意味はないかもしれないが）を国民に見られた上にそれが阿笠だとバレた。

これからはもうこの変装ではバレてしまう。

意識不明の男女を救おうとしたのは阿笠だけではないが、やはりどうしても報道陣は阿笠に集中しがちなので内心阿笠は面倒くさいな
どと思っている。

目立つ容姿や行動をする割にはこうして目立つことは嫌がるので、
阿笠はあまりインタビューなど好きではない。

だがテレビに写っている以上あからさまに嫌な顔をすることはでき
ず、少し顔がひきつっている。

それでも答えないわけにはいけないので、何人もの記者に同じよう
なことを何度も聞かれるものだからうんざりしていた。

阿笠の隣には綾女がいるが、誰も阿笠と綾女が知り合い……いや、
恋人だなんて分かるはずもなくただ偶然一緒に救命作業をしたと思
っているらしくそのような対応をしてくる。

まああえて知り合いですと言う必要もないので、2人は聞かれたことに対してのみ受け答えしていた。

そんな阿笠の元に、テレビを見て駆けつけてきた烈がようやく到着した。

どこか近くに車を止めて、そこからは走ってきたのだろうか息が少し切れていた。

現場にいる警察の手を振り払い記者たちの中をかき分けながら烈は阿笠の前にやって来て、なんとか息を整えながら阿笠の顔をじっと見た。

「れっ……烈?!」

「あ……かさ……」

烈は阿笠の体や顔を触り、どこも怪我をしていないのかを確認した。

阿笠についている血が阿笠の怪我によるものではないと理解すると、

肩の荷が下りたのか大きな息を吐きながらその場に崩れ落ちた。

本当にたまたまそこに居合わせただけなんだ。

そう確信できただけで十分だ。

「烈？　ごめ……もしかしくてもニュース見て来てくれたんだよね」

地面に尻をつけて座り込んでいる烈の視線に合わせるため、阿笠はしゃがみこむ。

額に手を当てながらうつむいている烈の顔を覗くと、烈の目には涙が浮かんでいた。

「良かった……今度こそ阿笠がいなくなるのかと……」

烈の泣いた顔を見るのはおそらく初めてで、阿笠はどうしたら良いのかとオロオロしている。

小学校からの長い長い付き合いで、どんなときも一緒にいたかけがえない親友

その親友を失うことほど怖いものはない。

鼻をすすりながら懸命に涙を抑えようとしている烈があまりにも切なくて、嬉しくて、阿笠まで泣いてしまいそうになる。

現場を見ればどれだけ大変な事故だったのかは一目瞭然。

道路には大量の血液が散らばっていて、破損した車がいて、阿笠の血まみれな姿は明らかに酷い。

「ごめんな。ありがとう、烈」

阿笠は微笑みながらそう答え、烈が手に持っていたタオルで烈の涙を拭く。

だがすぐに烈はタオルを阿笠に押し付けて、阿笠の顔を思いきりこすった。

「ぶっ……?! んんっ……!」

「俺より先にお前だろ! その面何とかしろや!」

何すんだよ、とタオルをどかして文句を言おうとしたときにタオルに血がついているのを見て、阿笠は自分の状況をようやく理解した。

こんな格好でテレビに写っていたのか……

阿笠はありがたくタオルを受け取って顔や手を拭くも、固まってきているので全部は落ちない。

とりあえずさっさとこの場から離れたほうが良いと思う。

2人して立ち上がったとき、有名人の烈まで登場したので大騒ぎになろうとしていたため烈は阿笠の手を引いて逃げようとするが、側に綾女が立っていることに気づいて足を止めた。

烈が綾女と会うのは初めてだが、綾女の素性を調べるときに綾女の顔は写真で見ていた。

というか、さくらにこんなにも似ているのだから分らないはずもない。

烈が綾女をじっと見ていると、綾女は不思議そうな表情を浮かべた。

「……どうも。鈴木大輔です」

「はっ？」

「え？ え、さっきうちまで来てた？」

すっとなきような声を上げる阿笠を無視し、烈は綾女に話しかける。

今日は本当にいろいろなことがありすぎたが、昨日なんだ。

阿笠が頑張るって決めたのは昨日で、まだたった1日しか経ってないんだ。

時間は確かに関係ないのかもしれないが、今ここで2人が一緒にいるのは偶然ではないだろう。

「聞きたいことがあるんだけど」

「……あなた愛川烈さんだよ。さが……うちの付き人が大ファンなの。そんな人がなぜうちに？」

「相良、ね。なぜって、相良から何も聞いてないんだ」

「なんで相良を知っているの？」

一触即発な雰囲気には阿笠はハラハラするも、こんな大勢の前ではちよつとまずいので、とりあえず阿笠は2人の手を引いて走った。

烈と阿笠は有名人、そこに一般の女の子……いや、大企業の令嬢と一緒にいるとなると記事でなんて言われることか。

高校時代にも散々あることないこと言われ、あの秋人だってフィードにひれ伏して泣いている写真が大きく載せられて世間からバッシングを受けたのだ。

まだサッカーに関することならまだしも、恋愛のことなんて書かれただらたまったもんじゃない。

ましてやお相手があの羽柴家の跡取りなのだから。

……怖いのは世間じゃなくて、羽柴本体だ。

今度は何されるのか。

「烈！ 車どこ?!」

とにかく3人は烈の車へと走って向かった。

n
e
x
t

第44話【ホテル1】

烈の車へと乗り込んだ3人は、ひとまずその場から去り近場のホテルに向かうことにした。

もうすでに22時を回っているため、こんな時間に開いているのはファミレスくらいだが、ファミレスでは血まみれの阿笠が見せ物状態になってしまう。

誰かの家が一番良いのだがここからは実家にしろマンションにしろ少し距離がある。

手続きを済ませた3人は案内された部屋に行き、阿笠はとりあえず先に綾女にシャワーを浴びるように促して、烈と阿笠はようやく落ち着いて腰をおろした。

取った部屋はスイートルームで（夏休みのため他の部屋は満室だった）とても広く綺麗で、テーブルを挟んで向かいあわせになっているソファに阿笠と烈が向かいあって座った。

先程の話が何なのか切り出したいが、なんとなく気まずい雰囲気があり、阿笠はなかなか言い出せない。

そんな阿笠に構わず、烈はハッと気づいたようにこう言った。

「そーいやなんで2人一緒に……」

烈の問いかけに、阿笠はチラッと綾女がいるシャワー室のほうを見てから答えた。

「俺がつかさんち向かってるとき、綾女もちょうど向かってたんだ。……で、俺の目の前で事故が起きて……何とか心肺蘇生しようとしてたら綾女も現れた」

「で」

「……で、告白した」

告白した、ならば答えは？　と思い烈は阿笠のほうを見るが、阿笠は黙りこむ。

相良の話から綾女も阿笠のことが好きだというのは知っていたが、付き合っていると阿笠が言わなかったのが不自然だ。

いや、むしろ自然なのかもしれない。

綾女相手に軽く付き合ってるとは言えるはずないし、実際簡単に付き合えるわけではない。

阿笠にしろ綾女にしろ、自分の立場は十分承知している。

「……彼女はなんて？」

分かっているくせに、烈は阿笠に問いかける。

お互い好きだと言えば幸せになれるというわけではないと分かっているくせに。

「……あたしも、って……………」

阿笠はうつむきながら消えてしまいそうな声を出す。

そんな阿笠にかける言葉がない烈は、阿笠から視線を把持して、まあそくだよな、とため息をつく。

しばらく沈黙が流れて、そうこうしているうちに綾女が出てきた。

綾女は阿笠のように顔や髪にまで血液がこびりついているわけではないので、適当に軽く体を洗って出てきたようだ。

話は途中だったが、気まずい空気から逃げるよに阿笠は綾女と入れ違いにシャワー室へと入った。

脱衣所にあった浴衣を着て、綾女はさっきまで阿笠が座っていたソファに腰をおろして、そっぽを向いている烈をじっと見つめた。

さきほどの続きをしようとしているのは分かるが、綾女からは言いだせないようで、チラッと視線を変えて綾女を目があった烈を、今度は綾女が顔を反らせて視線を外した。

このままこうしていてもラチがあかないし、阿笠が出てくるまでにしたい話もあったので烈のほうから口を開いた。

「……羽柴さん、俺は全部知ってる」

いきなりの烈の言葉に、綾女は「え……?」と言いたげな表情を浮

かべた。

「羽柴さんの出生も羽柴最大の秘密も、阿笠を襲撃したのが誰なのかも。……あなたがなぜサッカーやつてるのかも、全部知ってる。これは……羽柴の秘密以外は相良が全部話してくれたんだ」

少し罰の悪そうな表情を浮かべながら烈は一気に喋り上げた。

まさか相良が話したとは思ってなかった綾女は心底驚いた表情をしている。

付き人が主の秘密を話すなど言語道断なのだから当たり前だろう。

それも阿笠に言うのならまだしも綾女にはあまり関係のない烈に言ったのだ。

「……それからもう1つ、相良に頼まれたことがある。これは阿笠に対して」

「……」

「羽柴さん、相良はあなたに羽柴を継ぐ意思がないのを知っている。羽柴が嫌だということを、けれど比護つかさのようにも生きていけないことも知っている」

本当は、阿笠の前で話すつもりだった。

だけど、阿笠の前で話すより先にどうしても綾女に確かめたかった。

さっき阿笠が綾女も向こうに向かっていたと言っていたが、それはつまり比護家に向かっていたということだろう。

ということは、綾女も何らかの行動を起こそうとしていた。

俺や阿笠が比護さくらに真実を問いただそうとしたように、羽柴綾女も比護さくらに何かを言おうとしていたに違いない。

「……あなたは……誰？」

綾女はゆっくりと烈を見上げながら尋ねた。

「誰。そう聞かれると困るけど、あえて言うなら……」

「大悟くんの親友でみかさの婚約者……ですって？」

「ああ、うん。その通り」

綾女は驚きも憤りも越してすでに冷めている。

あるがままを受け入れるかのように、軽くため息をついた。

「なら、あたしの身内になるのよね。……血縁上は」
「——ああ」

戸籍上比護ではない綾女とは実際には親戚にはならないが、元を辿ればみかさの姉なのだから身内になる。

そこまで言ったのならもう認めたも同然。

綾女は薄ら笑いをしながらこう言った。

「良いわ。……大悟くんにも話すわ。だけど、どうせならその話はパパやお母さんにも聞いて欲しいの」

「みかさのおじさんと……羽柴さんのお母さん？」

「ええ。あの2人も……知らないはずだから」

綾女のその言葉に、え？と烈が不思議そうに反応した。

綾女がなぜ羽柴小百合が事実を知らないと思い込んでいるのかは分からないが、知らないはずがないだろう。

使用人でさえ知っているのだから。

そう言うと、綾女は目を丸くして驚いた。

本当に知らないと思っていたようで、まさかと疑いの念を抱いているが、おそらく知っているという烈の説明から納得せざるを得ない。

そうになると、知らないのは比護要と比護みさかだけ。

つまり比護家で知っているのはさくらだけだ。

「終わらせようと思ったの。……ママに聞きたいことを聞いて、それでもうこんな生き方はやめようって」

綾女は軽くうつむきながら瞳を閉じた。

終わらせる、とは何を終わらせるつもりなのか。

突っ込みたいが聞ける雰囲気でもないし、そもそも聞く必要はない。

なぜなら予想できるから。

「……阿笠に君を幸せにしてもらいたい、……相良がそう言った」
「……え？」

ポツリと呟いた烈の声を聞き逃さなかった綾女は、目を開いて烈を見た。

綾女の顔は、みかさにも似ているしさくらとはソックリすぎてさくらが若い頃は瓜二つだったはずだ。

烈でさえそう思うのだから、阿笠は更に思うだろう。

昔から比護家と関わりのある阿笠にはこの顔は見てみぬふりはできない。

特につかさという綾女にソックリな幼なじみがいたのだから。

「俺も相良も……君と阿笠が想いあつてのを知ってる。応援したいと思ってる。つかさちゃんや羽柴のことを考えた上でそれでも、2人には幸せになって欲しいと思ってる」

烈がたどたどしくそう説明しているまさにそのとき、ちょうど阿笠はシャワー室から出て脱衣所にいた。

濡れた髪の毛をタオルで乾かしていると、静かな広い部屋に広がる烈の声が響いていて、つい阿笠はタオルを拭く手を止めて聞き耳を立てていた。

テレビもついていない、音楽も流れていない、カチカチという時計の音さえしない空間はあまりにも無音で、その中に浮かぶ声はなぜだか少し遠慮がちで。

「簡単な決断じゃないことは分かってる。だけど、やっぱり聞きたかった」

阿笠は脱衣所のドアを少しだけ開けて、そのすき間から2人の様子を眺めた。

ソファに向かいあって座りながら話している光景はいたって普通の
のだが、どうにも重々しい空気が流れている。

「君は……どうしたい？」

それは、阿笠にとっても烈にとっても一番聞きたくて聞けなかった
質問だった。

n
e
x
t

第45話【ホテル2】

生まれたときの記憶なんてもちろんない。

誰かが一緒に生まれたことを覚えているわけではない。

だけどそれでも双子というのはただの兄弟とは違う。

もう1人の自分

一心一体

片割れが泣いていたら自分も哀しくなるし

片割れが笑っていたら自分も嬉しくなる。

だから片割れがピンチのときにはすぐ分かる。

……そう、つかさが事故にあった瞬間もあたしはつかさが死ぬことを感じ取った。

夏休み、相良と部屋で遊んでいたときだった。

無償に胸騒ぎがして気づいたら泣いていて、つかさの名前を連呼していた。

その後お父さんからつかさが死んだことを聞かされ、やっぱり思ってたまた泣いた。

片割れがいなくなると、世界に1人だけ取り残されたような気分になる。

置いていかないで、そう言った。

お父さんに頼んで葬儀に参加させてもらったけど、約束としてパパやママ、みかさとは一言も喋らなかった。

いつの間にかみかさも大きくなっていて、でももうお姉ちゃんがいなくなっちゃったと泣き叫ぶ彼女を見て、お姉ちゃんならまだここにいると言いたかった。

あたしが出ていったときみかさは小さくて、あたしのことを覚えていなかったみたい。

秘密でつかさに会いに来ていたときも、つかさにしか会わないようにしていた。

つかさが元気な女の子だったことを知っている。

つかさがサッカー好きだったことを知っている。

だからつかさの死に顔を見たあの日、つかさになるって決めたの。

つかさのなりたかったものになれるのは、双子のあたししかない。

そして何より、誰かに気づいて欲しかったんだ。

……それは本当のあたしではないってこと。

誰かに……みかさに知って欲しかった。

あなたにはつかさだけじゃなくあたしもいることを。

直接会うことも許されなく、あたしの存在すら知らないみかさに教えるにはあたしが有名になるしかなくて。

そしたらやっぱりサッカーしか思いつかなかった。

つかさのように生きること罪悪感をなくそうとしたの。

本当は、あの比護の家でこうして大人になって行きたかった。

つかさと共に時間を過ごしながら歩みたかった。

なんで双子なのに離れなくちゃいけないんだって、何度も思ったよ。

今つかさが生きていたら、あたしはどんな風に過ごしていたのかな。

羽柴の跡取りとして英才教育を受けてただろうか。

本物のお嬢様みたいになっていただろうか。

中宮大に通うことなく、全ての学校生活を桜ノ宮学園で過ごしていただろう。

……大悟くんに近づいたのは、不思議だったから。

つかさの唯一の幼なじみだった大悟くんもサッカーやってて、きつとつかさが教えたに違いないんだ。

そんな人が学生時代から脚光を浴びてプロになったなんて、偶然ではないと思った。

なぜサッカーやってるのか、なぜサッカー続けているのかどうしても知りたかった。

それだけだったの。

つかさがどんな様子だったのかを聞くだけ、それくらいのはずだったの。

まさか好きになるなんて夢にも思っていなかった。

こんなに近い存在になるなんて思っていなかった。

大悟くんはつかさの存在を知るものだから絶対にだめだと何度頭の中で繰り返し返しても、そのあとにはやっぱり好きだって思うんだ。

つかさの夢を追っているのはあたしだと思っていたのに、つかさに夢を託されたのは大悟くんだと知って正直憤りを感じたりもした。

つかさの真似事をしているのだから大悟くんがあたしをつかさに重ねて見てしまうことくらい分かっていた。

こんなことをしていても所詮あたしは結局羽柴を継ぐんだろうと思っていた。

その全てを考えて、大悟くんとあたしは一緒にはなれないと分かって、だけどそれでもどうしたら好きだと想うこの気持ちを抑えられるのが分からなかったの。

姿を見るだけで、声を聞くだけでこんなにも愛しい。

好きなの。

そんなあなたが、こんなにも。

「……大悟くんは……あたしを好きなの？」
「？」

好きになるつもりがなかったのなら、相良の言うように最初から大悟くんに近づかなければ良かった。

興味本意はあたしも大悟くんも結果的に傷つくことになるって分かっているから忠告を無視した。

「あたしがサッカーやってるから……つかさみたいだから、……つかさの双子だからそう言ってるんじゃない？」

「羽柴さ……」

「だってあたし大悟くんに酷いこと言ったのよ。……大悟くんが言ったのよ、あたしをつかさを重ねずに見るのは無理だって」

今にも泣いてしまいそうな声を出してそういう綾女に烈はイラツとする。

自分が入っていけない世界で、横やりしてはいけないと思っていた。

これは阿笠と羽柴綾女だけの問題で、俺が口を出すようなものではないと。

だけど、俺はやっぱり阿笠側の人間で阿笠のことばかり考えてしま
う。

だから何も分かってないこいつが許せなくて。

「……分かんねえの？　なんで阿笠があんたにそう言ったか」

それでも腹立つ気持ちをなんとか抑えて、烈は眉間にしわを寄せる。

「阿笠を襲ったのは羽柴だ。それだけじゃない、数々の脅迫状や嫌

がらせをされた」

「……何を言って……」

「羽柴の秘密がバレるのを恐れて羽柴が阿笠を襲ったって言うんだよ！」

だが、やはり気持ちを抑え切れずに烈は声を荒げた。

ビクッと反応した綾女に食ってかかるように烈は続ける。

「みかさと縁を切れ、これ以上羽柴に関わるな、そう言われ続けてきて現に阿笠だけでなく秋人だって怪我したんだ」

「嘘……」

信じられないというような表情を浮かべる綾女に、更に苛々が募る。

何も知らないのはこいつ。

何も知らないでそれでいて自分を可哀想ぶって悲観して、しまいに阿笠を傷つけた。

分かってないくせに、何も知らないくせに人だけは傷つける。

「……羽柴の仕業だと分かってもお前と一緒にいたのは好きだから
だろ?! だけどどうしても周りに迷惑はかけられないからって、
わざとお前に嫌われるような言葉を吐いたんだよ!」

阿笠のこととなると見境なしについて理性を失ってしまいがちになる
烈。

大切な大切な友達の阿笠を傷つけることだけでも許せない
らしく、昔からそうだ。

そのことを知っている阿笠は、怒鳴り声を上げている烈がキレてい
ることにすぐ気づき、適当に体を拭いて急いで浴衣に着替え始めた。

「あいつは自分の気持ちより周りの気持ちを優先する奴でっ! 俺
や秋人が背中押してようやくあんたに気持ちを伝えることができた
んだ!」

「……」

「俺だってわざわざ阿笠を襲った、しかもつかさちゃんの双子のあ
んたを好きになる必要なんてないと思ってるさ! ……けど! そ
れでも好きなんだってこと分かってやれよ!」

いきなり怒り出した烈に驚いて綾女は何も言えずに啞然としている。

同時に、烈の言葉が胸に響いていた。

阿笠はちゃんとお前自身を好きなんだと、一生懸命説明をされたせいか泣きたいような気持ちにもなる。

阿笠に言われた言葉ばかりがコダマしていた綾女にとって、あれは嘘だと言う烈が信じられなくて、でも信じたくて相反する気持ちが交差する。

だって、自分にとっては本気の恋だったから。

「烈っ、とりあえず落ち着こ！」

浴衣を着た阿笠が急いで脱衣所から出てきて、綾女を庇うように綾女の前に立って烈を止めた。

n
e
x
t

第46話【ホテル3】

「阿笠……」

烈の驚きを交えた切なげな瞳が阿笠に降りかかる。

阿笠のためを思って言ったのに裏切れた気持ちでいっぱいなのがすごく伝わってきて、阿笠は少し怯む。

分かってる、烈がなぜあんな風に言ってくれたのかも分かるし、全てが事実だ。

俺のためってすごい伝わるし、嬉しいと思う。

だけど、決して綾女を責めたくて彼女に告白したわけじゃないんだ。

例え嘘だとしても、あの日綾女にああ言って傷つけた事実は消えたりしない。

「ごめん、烈。庇ってくれてありがとう。だけど、」
「……」

「綾女が信じられないのは俺のせいだから、どうか責めないで欲しい」

阿笠の必死な顔に、どうやら怒りを鎮めたらしい烈は片手で顔を覆ってため息をついた。

烈から何かを言うことはなく沈黙となり、とりあえず阿笠は綾女の隣に腰をおろす。

だが阿笠も罰が悪いのか綾女のほうは向けず、座っている自分の足元を見つめた。

こんなことになるはずではなかったのに、どうしてこうなってしまうのだろう。

好きだと伝えたところで何とかなる話ではないことは分かっていたのに、それでもようやく会えた喜びからつい本音が溢れて告白してしまった。

しばらくすると烈は顔から手を離し、再びため息をついてから言った。

「……ごめん。怒鳴るつもりじゃなかったんだ」

いつもの冷静さを取り戻したのか、烈は綾女に謝った。

綾女は首を横に振りながら、あたしが悪いのと答える。

罰が悪そうにしおらしくして視線を合わせない2人を交互に見ながら阿笠も、いたたまれない気持ちになる。

みんなが背中を押してくれたって、綾女も自分を好きだと言ってくれたって、実際問題現実には難しいのは阿笠も分かっていた。

バレたくない秘密を比護と交流ある阿笠にバレ、おまけに羽柴といえば日本の指折りの名家で世界的に有名な事業をおこしているのだから到底阿笠が踏み入れて良い世界ではない。

いわゆる身分の差だ。

恋愛は自由だと言うが、そんなのが通じる世界ではない。

否、もはや阿笠と綾女が結ばれる将来などあり得ない。

「……俺は、さ」

沈黙を破るように重々しく阿笠が口を開いた。

烈も綾女も阿笠のほうを振り向いて見つめる。

「綾女が好きだって言ってくれて嬉しかった。……みんなが応援してくれんのも嬉しいけど、実際綾女には羽柴としての跡取りって問題があるだろ」

そんなことはない、と言いたいけど言えない。

1つ問題を解決したところで更に問題は増えてくるだけ。

「羽柴の……その秘密も俺は詳しくは知らないし、他言しようとも思わない。だからさ、もう……終わりにしよう」

終わりにしよう、その言葉に烈と綾女は一瞬考えこむ。

だがすぐにその意味を理解したのか、かなりの衝撃を受けたように目を見開いて言葉も出てこないほど驚いている。

相良に頼またというのもあるが、烈自身阿笠の恋を成就させたいと願っていた。

綾女が跡取りだとしてもそこは何とか親を説得させてとか、あわよくば綾女が羽柴を出ればなんて考えていた。

阿笠が幸せになる未来しか見えていなかった。

綾女も綾女で、烈に聞かされた衝撃的な事実を含めた上で戸惑っていたのだ。

大好きな大好きな阿笠、ようやく見つけた初恋、また羽柴のせいで大事なものを失うのは嫌だった。

だけど覚悟が決められなくて、これからをどうしたら良いか迷っていた。

「なんで……？」

綾女は震える声で尋ねた。

阿笠は躊躇うことなくこう答える。

「俺たちは世界が違う。……つかさが重荷なら、もう綾女がつかさの夢を追うことはないんだ。俺が背負っていくから」

「……」

「綾女は羽柴を継ぐことだけを考えたら良い。それで俺はサッカーで生きていく。本来の道を進めば良いんだ」

阿笠が言っていることは正論で最もだ。

このまま知らないふりしてなかったことにして過ごしていくのが一番良いのは確かだ。

何より楽だろう。

反対されない恋で苦しむことがなくなることは。

綾女は同じ階級の金持ち子息と、そして阿笠はもっと一般の子と結ばれたほうが身分相応だ。

そしたら誰かから蔑まれたりすることもなくなる。

お互い無理することなくそれまで通り過ごしていける。

だけど、本当に？

「……お互い離れて、違う人見つけて結婚して………大悟くんを
想いながら他の誰かと生きていけって言うの？！」

離れたら忘れられるものなのだろうか。

相手を思って別れても意味がないと知っているのは阿笠自身のはず
なのに。

中学のとき、いじめられていた麻冬を守るために別れたせいでイザ
コザになったのを忘れたわけではあるまい。

元サヤに戻って、でもあの頃の気持ちを巻き返すことはできないと分かったくせに。

阿笠は必死の訴えをしてきた綾女に少し怯むが、グッと堪えて真っ直ぐに綾女を見つめながら言い放つ。

「――そうだ」

「なっ……阿笠?! お前なんてことっ」

「別に俺を想わなくて良い。俺以上に好きな人を見つけて、幸せになっってくれるば」

静かな口調だがどことも震えている気もするし、阿笠が真剣なこととは目を見れば一目瞭然だ。

だが、だからと言ってはいそうですかと納得できるわけもなく、綾女は涙目の目で阿笠をキッと睨んだ。

こんなにもあっけなく終わらそうとする阿笠に、自分の気持ちが伝わらないことが悔しくて唇を噛み締める。

どうしたらそうじゃないと分かってくれるのか。

綾女が迷っているのは、身分が違うからではない。

羽柴の人間に阿笠が襲われたりしてた事実を聞かされて、付き合うことになったら本当に殺されてしまうかもしれないことが心配なだけだ。

秘密なんてバレても良い。

周りの金持ちたちから何を言われても構わない。

どうしたって阿笠が好きだと思いう気持ちは消えないのだから。

「……あたしが比護にいたら良かったの？ 羽柴じゃなかったらど

うしてた？」

「……」

阿笠はおもむろにソファから立ち上がり、阿笠を見上げた綾女を見下ろした。

溢れ出す気持ちを抑え、溢れ出す涙を堪え、平然を装いながら答えた。

「……君が羽柴綾女だから好きになった。ただ、それだけだよ」

これ以上ここにいたら決意が揺らいでしまいそうで、阿笠は洗濯し終えていない服はそっちのけに財布と車のキーを手にとって部屋を出て行こうとする。

烈が呼び止めても阿笠を止めることはできず、財布から1万円取り出すとそれを靴箱の上に置いた。

阿笠を追いかけることもできずにソファでベソベソ泣いている綾女とは逆に、烈は玄関まで追いかけた。

「阿笠っ……」

言いたいことならたくさんある。

励ましの言葉、慰め、聞きたいことも山ほどある。

だけど今この場で本気の阿笠に対して言う言葉が見つからなかった。

引き止めようにも、烈には言葉が出てこない。

阿笠は振り向きたい気持ちを抑えて、綾女に聞こえるように少し声を張った。

「……こんな俺を愛してくれてありがとう。どうか幸せに……」

部屋のドアを開けて出ていこうとする阿笠の頬に、1粒の涙が流れていた。

n
e
x
t

第47話【ホテル4】

ボタン、と閉められたドアの向こうに聞こえるスリッパで歩く足音。部屋の中では堪え切れずに泣いている綾女がいて、烈は阿笠を追いかけることもできずどうしたら良いのか途方に暮れた。

ようやく、ようやく2人が結ばれるのだと思っていた矢先思いがけない阿笠の言葉、予想外の別れ。

綾女にかける慰めの言葉なんて出てこない。

かといって、阿笠を悪者にして責めることもできない。

分からない。

ここまできて、ようやく真実を全て知ることができたのにここまできて、こんなことになってしまうとは思ってもいなかった。

明日から阿笠はまた忙しい毎日を迎え、当分は昼間に遊ぶことなんてできなくなるし、夜だって疲れてすぐ寝てしまう日々だろう。

だけど俺は……俺も羽柴さんも10月に入るまで大学は始まらない。

忙しさと哀しみを忘れることができないまま、どうやってあと1ヶ月半も過ごせと言うんだ。

「……羽柴さん、あの、……」

烈はようやく綾女のもとへ行き、声をかけた。

綾女はまだ泣いているようだが、烈に肩を叩かれると顔を手で覆ったままゆっくりと立ち上がった。

烈は困ったようにその様子を見ながら、綾女の行動を見ていて、さすがに綾女は鼻声でこう言った。

「……ごめんね、愛川くん。帰る……。……みかさに……。……もう迷惑はかけないって言っておいて……」

そして綾女も、ソファから離れてドアのほうへと向かう。

玄関に向かうと靴箱の上にお金が置いてあるのが見え、おそらく阿笠が置いていったのだろうと察知した綾女は、その1万円札を手に

取ると、思わずクシャツと握りしめた。

その手はとても震えていて、手の甲に涙が落ちた。

手の平から札を出し、自分の財布から同じように1万円札を取り出すと、同じようにそこに札を置き、阿笠のように浴衣のままスリッパをはいて部屋を出て行った。

取り残された烈は、出ていく綾女のほうを振り向くこともせず、背中を向けたまま立ち尽くしている。

その表情は、もどかしさからくる怒りに震えているようで、同時に切なさも伝わってくる。

誰もいなくなり、本当に静まった部屋には、洗濯機の音しかない。

せっかく高い部屋取ったのにか、せっかく2人出会えたのにか、いろいろ思うところはあるのだが今はそんなことを考えている暇はない。

阿笠が出した結論が許せなくて、でもどうにもしてやることができなくて、そんな自分も許せなくて。

分かってる、阿笠の選択は正しい。

羽柴の世間体も保たれ、阿笠も窮屈な思いをせずにすむし周りの関係者たちにこれ以上の被害を与えることもなくなる。

一石二鳥どころか、三鳥、四鳥だ。

政略結婚でもあるまいに、祝福されない結婚をする必要なんかない。

そもそも綾女は1人娘で阿笠だって1人息子なんだ。

阿笠が羽柴家に婿入りすることもなければ綾女が阿笠家に嫁入りすることもないのだから、白紙も同然かもしれない。

そうなんだ。

これが一番良い道で、だから綾女もああやって阿笠を追いかけずに泣いてはいたものの受け入れたのだ。

これで良い。

これが良い。

そう、これで良いんだ。

けれど……

結局烈も、このままこのホテルにいる意味もないので出ていくことにした。

洗濯は終わったものの綾女の服などを烈が届けるわけにもいかない
ので、ホテルマンに阿笠と綾女の住所を書いたメモを渡して乾いた
らそれぞれ送るように頼み、ホテルを後にした。

駐車場に止めてあった車に乗り込み、キーを差し込んでエンジンを
つけたものの、一向に走りだす気配は見せずにハンドルに頭を乗せ
て動かない。

そのうちハンドルをバンツと叩いたりするなどして、やり場のない
感情をぶつけているようだった。

阿笠思いの烈、どうしても阿笠には幸せになって欲しかった。

なのにこんな結果になってしまうなんて。

そのとき、メールがきたことに気づいて携帯を取り出した。

着信3件、メール4件入っていてそのうち着信2件メール2件はみ
かさからだった。

携帯なんて気にせずにしたものだからこんなに着信があるとは思ってみなかったのだ。

メールを開くと、今烈のマンションにいたといった内容が書かれていて、烈は夕方のことを思い返す。

確かみかさは比護を飛び出したあと阿笠んところに向かったはず。

だけどあの事故現場にみかさの姿はなくて、阿笠1人だけだった……ということはマンションを出る前に2人は別れた。

んで、その足で俺のマンションに向かったのか。

全く気づかなかった。

「……阿笠も言ってくれりゃあ良いのによ……って、それどころじゃなかったか……」

とりあえず、今から帰ることをメールで伝えて烈はようやくその場から去った。

同時刻、阿笠は先ほどの事故現場まで歩いていった。

そんなに遠くではなかったので30分くらい歩いたらすぐに着いて、もう夜中で暗いのだが街灯のせいで現場の非情のあり様が痛々しいほど伝わってくる。

道路に乾いた真っ赤な血、未だに散らばっている車の破片。

阿笠の車は道路の隅に止めてあったので、特にいたずらなどはされていなかった。

ふと携帯はどこだろうと思い、ズボンのポケットに手を入れようとするが今着ているのは浴衣でポケットなどあるはずがない。

ホテルに忘れてきたかも、なんて一瞬思うが次にはそもそもホテルに携帯なんて持って行ってないと断言できた。

ここで事故が起こったとき、確か電話をしていた。

だが自分も急ブレーキかけて止まった反動で、確か携帯を手から離して思い切り助手席の前のものを置いたりできるスペースの角らへんにぶつけて変な音を立てた気もする。

そのあと車を飛び出したときには持っていなかったはずだから、携帯は車の中だろう。

阿笠は急いで車を開けると、携帯が落ちていないか探した。

携帯はすぐに見つかったものの、ぶつけたときの表紙に壊れてしまったようで電源がつかない。

「あー……壊れてらあ」

綾女や烈が電話しても繋がらなかったのはこの訳だ。

壊れた携帯を助手席にほっぽり、阿笠は車に乗りその場を去ることにした。

「……待てよ、みかさ烈んち行くって言ってなかったっけ」

マンションを出る前、阿笠と一瞬にいたみかさは烈のところへ行くと言って出ていった。

だがそのとき烈は実家のほうにいて、さっきまであのホテルにいた。

てことは烈には会えてないはずだ。

まあ、合鍵くらい持っているだろうから大丈夫だろう。

「……ま、携帯使えないしみかさも子どもじゃないんだから平気だろ」

自己解決して阿笠は足早にマンションへと向かった。

明日から練習がまた始まり、朝も早いものだからあまり悠長なことは

してられない。

久々の休日だったはずなのにこんなにも忙しくて、普段の練習以上に疲れた。

ああ、事故に遭った男女は生きているだろうか。

どこの病院かも分からないし名前も知らないからどうしようもないが、阿笠はハッと気づいてナビのテレビをつけた。

阿笠のナビは運転中もテレビが見れるもので、チャンネル数は限られているがあんなデカイニュースならどのテレビでもやってるだろう。

適当なチャンネルにセットし、テレビを見るとやはり臨時ニュースとしてやっていた。

確かに阿笠が戻ったときまだ警察や報道もチラホラいたし野次馬もいた。

だがそのおかげでバレずに今こっそり帰ることができていたのだ。

内容は先程の事故の原因と阿笠が人命救助に加わったこと、そして怪我した男女の容態だった。

「男性重体………女性……重症………」

その知らせを聞いて、阿笠はホッと安堵した。

男性のほうは命に別状はないようだ。

女性のほうはまだ緊急オペ中でのようになるか分からない状況らしいが、とりあえずまだ生きている。

良かった。

生きている。

「そっ………か………まだちゃんと生きてる……。良かった………」

阿笠がああしていただければ確実に女性には出血多量によるショックで死んでいた。

まだ瀬戸際だが、阿笠が彼女に生きる標を必死に与えたことで救急車の遅れにもかろうじて対応でき、そのまま治療もせず亡くなることもなかった。

あの幼き日、目の前で死んでいくつかさに何もできなかった阿笠の精一杯の償い。

彼女に届け。

n
e
x
t

第48話【刹那】

「大悟くん?! ……あれは……烈くん!!」

阿笠のマンションを出たあと烈に電話をかけたが出なかったので、とりあえずみかさは烈のマンションに向かった。

合鍵を持っていたので開けて入り、中で待ってるというメールを一応送り部屋の中にいることにした。

適当に雑誌を読んだり携帯をいじったりしていたが、飽きるとテレビをつけた。

たまたま映ったチャンネルはちょうどニュースをやっていて、ここからそう遠くない場所で事故があったというものだった。

何気なく見ていたが、次の瞬間には目を疑う。

自分の幼なじみと彼氏がテレビに写っていて、しかも阿笠は全身血まみれだ。

テレビに釘付けになって夢中になってニュースを見ながら、なにがあったのかを悟る。

「！」

阿笠と烈が2人一緒にいる側にもう1人誰かにいることに気づき、よくよく見てみるとそれは今は亡きみかさの姉にソックリな人。

すぐにそれが羽柴綾女だと気づいた。

綾女本人を見たことはないが、幼き姉の面影と母親の若かりし頃の顔は絶対にさくらの血筋であることは確定だし、何より阿笠と一緒にいる。

それだけでも分かる。

初めて見た。

羽柴綾女を知ったときからずっとどんな人なのか気になった。

この人がつかさお姉ちゃんの双子の姉

この人が大悟くんが愛した人

みいの、この世に生きてるたった1人のお姉ちゃん――

たまたま居合わせたには偶然が過ぎるし、3人は意図的にはちあわせたに違いない。

どういふことなのかを確認したくて烈くんに電話をかけるが、ライブで放送してるテレビの中にいる烈くんは携帯の着信に気づかず、3人でその場から去って行った。

知りたい事実がすぐそこにあるのに伝わらないもどかしさ。

何より、もし羽柴綾女がみいのことを知っているのなら会いに来て欲しかった。

羽柴のような大金持ちが一般庶民の比護家出身の娘を養女にしたことは確かに世間体には良くないかもしれない。

でもそのせいでみに事実が隠されていたり、羽柴綾女が会いに来れなかったのだとしたらすごく悔しい。

……待って。

なんで羽柴みたいところがうちの家から養女をもらう必要があるの？

庶民っていうのもそうなんだけど、普通施設の子とかを引き取ったりするもんじゃないの？

両親がいて、特に暮らしに問題もない比護家から養女をもらう意味が見当たらない。

しかも、なぜ長女の綾女のほうを引き取る？

引き取るなら普通比護の跡取りの羽柴綾女ではなく次女のつかさお姉ちゃんのはず。

ということは、羽柴綾女を引き取らなければならない事情があった……ってこと？

でも、なんのために？

分からない。

全く意図が読めない……

いくら考え込んでも見当たらぬ答えを求めてさ迷っているうちに、部屋の主である烈が戻ってきた。

時刻はとうに日付を越していて、急いできたのか烈は少し息を切らして汗をかいていた。

疲れたのか烈はすぐさまソファに座り込み、袖で汗を拭う。

「わり……。いろいろあって着信気づかなかった」

烈はため息をつきながら、今度は横になった。

今日は昼間から講義がありそのあと阿笠と食事、そして県内を車で何度も右往左往した上に終いには綾女と初対面して目の前で2人は別れた。

身体の疲れはもちろん精神的疲労も大きく、どうしたら良いのかという悩みに苛まれ頭はパンク状態だ。

みかさに話して良いものか悪いのか、それすらも悩みの種。

「……テレビで見てたよ。大悟くん、人助けしてたね」

「あ……ああ、みかさも見てたのか」

「羽柴綾女……だね？ あれ」

綾女の名前に反応を示した烈は、顔をみかさに向ける。

みかさは笑っているでも怒っているでもなく、無表情だ。

テレビを見ていたなら綾女が近くにいたことがバレても仕方はないが、綾女の秘密を知った今どうしたら良いのか分からないため戸惑っているようだ。

冷や汗すらかいてしまうような雰囲気、烈は押し黙る。

「お母さん、教えてくれないの。羽柴綾女なんか知らないって」

なおも無表情のままみかさは淡々と話した。

髪を後ろで1つに縛っているため前から見るとショートカットにも

見え、クリツとした瞳は綾女を思わせる。

姉妹だからやはり似ていて、でも3姉妹はみな性格が全く違っていた。

共に生きていたらどんなに楽しかったことだろう。

もう叶わぬ夢。

「何なの？ あたしには関係ないって言うの？ 揃いも揃って……バカにしてんの？」

「そんな、」

「むかつく……。あたしにだって関係あるのになんで黙ってられるの？ 今更……今更なんなの？！」

黙っている母親

会いに来ない姉

何も言わない彼氏

姉を好きな幼なじみ

そのどれもが憎らしくて、歯がゆかった。

自分も関係者なのに全く知らされないことの悔しさ。

「みかさ」

苛々が募るみかさに、烈はそつと声をかけた。

みかさは烈を睨みながら振り向くと、思いの外烈が優しい表情をしていたので驚いた。

「羽柴さんがみかさにもう迷惑かけないと言ってた」

「……なに？ 関わるなってこと？」

「たぶん」

別れ際に言っていた一言、忠実にみかさに伝えた。

「だけど、彼女はもう終わりにするとも言っていた。何も知らない比護要の前で真実を明らかにして、比護さくらに聞きたかったことを聞くんだと」

そろそろ汗もひいてきて、烈はソファに横になったまま仰向けになり、目をつぶった。

落ち着いて全部を説明したいところだけど、あまりにいろいろあったため記憶もごちゃごちゃになっている。

忙しすぎた1日がようやく終わろうとしているものの、最後にはみかさという難問が立ちはだかっている。

「だけど……阿笠は彼女を振ったよ。だから羽柴さんはお前には何も言わないかもしれない」

「……振った……？」

「簡単に言えば、羽柴の跡取りとサッカー選手では身分が違うってことさ」

ふう、と烈は軽く息を漏らす。

身分違いの恋

こんな時代にもそんなものがあるのかと思ってしまいが、相手が世界を渡る大企業の娘なのだとしたら仕方がないのかもしれない。

それは、阿笠にとって応援されることは酷かもしれない。

綾女が羽柴を捨てない限り、2人の恋は報われない。

どんなに周りが押しても、どんなに阿笠が諦めたくないと思っても羽柴という壁は超えることができない。

綾女と両思いだと知ったその瞬間、阿笠はそう悟った。

ちょっと考えれば初めから分かっていたことなのに。

「羽柴さんの代わりに、俺が言おうか。ようやく今日全てがはつきりしたんだ」

阿笠のことを聞かされてショックだったのか放心状態だったみかさに声をかけると、みかさは眉をひそめた。

今ここで聞いてしまえば苛々もなくなり事実を知ることができる。

だけど、みかさはただ事実が知りたかったわけじゃない。

己のために調べたかったわけではない。

「良い」

烈から顔を背けながらあっさりと断る。

予想外の返事に、本当に良いのかと念を押してきた烈のほうを振り返ることなく、みかさは立ち上がった。

風呂に入ったためおろしていた髪の毛がサラリとなびき、こんなに大人っぽかったかとみかさの後ろ姿に烈は見とれた。

「けど、みかさ……」

比護と羽柴に絡んでくる問題をみかさが知らなくて良いわけもなく、烈は戸惑う。

本人が良いと言っているのだからよせば良いものの、もとはみかさに頼まれたことだ。

だがみかさが頼んだのは、阿笠のためだった。

「……大悟くんがその人と結ばれないんなら、もう良いの」

そう言い残し、みかさは自室として使用している部屋に入ってしまった。

残された烈は、そういうことかと少しだけ納得したものの、それで良いのかとも思う。

阿笠の幸せのためだけに調べたかったのだとしても、羽柴綾女はみかさの姉だ。

なぜ養女になったのかとか知りたくないのだろうか。

いや、知りたいはず。

それでも聞こうとしないのは、やっぱり周りが何も言ってこないから。

知らないほうが身のためなのかもしれない。

今までそうして生きてきたのだから。

知りたい気持ちと知りたくない気持ちが混ざりあって、胸がしめつけられる。

自室に閉じこもったみかさは、電気も付けずにドアによりかかりながら声を押し殺して泣いていた。

n
e
x
t

第49話【月日は流れ】

その年は何事もなくそのまま過ぎて行った。

練習に試合、テレビに大忙しの日々を送っていて、いろいろありすぎた夏を越すと秋や冬はいとも簡単に訪れた。

次の春、変わったことと言えばみかさがフランスの州立大学に入學したこと。

高校でフランスに留學するつもりだったが烈が日本にいたため留學はやめ、大学をフランスで過ごすことに決めていた。

もちろん最初は両親からいろいろ反対されたが、烈が近いうちフランスに行くことやみかさの熱意に負けてフランス行きを認めた。

最後の最後までさくらは秘密は守り通した。

そして夏、烈は再び師匠のもとで修行するためにフランスに向かう。

阿笠とも離れてしまった。

ワールドカップで活躍した阿笠や秋人も、もうこの年にはエスパルスでスタメンを張っていた。

いとも簡単に潰れていく新人は五万というが、2人はどんな逆境にもめげずに立ち向かい、乗り越えた。

同年、武井はドイツに、村田はスペインのチームに移籍し、本格的に阿笠はチームのエースストライカーとなり、秋人も10番を背負った。

いよいよここからまた新しいスタートを切ることになり、更にやる気に磨きがかかる。

阿笠は真っ茶色だった髪を金色に染め、片耳にピアスの穴が2つあいている。

1つは綾女と別れた次の日、全てを忘れるためにあけたもの。

そして2つめは烈が旅立つときに烈にあけてもらったのだ。

金髪にしたのはいつだったか覚えてない程度の適当な日。

たくさんのファンから手紙やプレゼントをもらい、いろんな人に告白された。

だが阿笠が本気の女性からその好意を受け取ることは一度たりともなく、また同時に阿笠の髪は伸び続ける一方だった。

翌年には、肩甲骨の最下部より下くらいまでの長さにまでなり、なおも色は金だった。

練習中は後ろで1つに結っているが、普段や試合のときなどは結っておらずそのままで金色の美しい髪がフィールドを駆け巡った。

シャギーを入れていて決して重そうではない髪は、あの穏やかな阿笠をワールドに見立てる。

そしてその年は、4年ぶりのオリンピック開催年だった。

n
e
x
t

第50話【オリンピック開催】

「はあ？ お前テレビとか見てへんの？ そもそも開会式にもおったやろ」

今年のオリンピックはなんと日本、大阪で行われた。

久々の開催地ともなれば日本中がおおいに熱狂している。

どのスタジアムも満員御礼、日本人の数かなり目立つ。

ホームでの大会ともなれば断然有利だ。

「ずっと見てないや。開会式は……」

「あー、せや。立ったまま寝とったな」

「ははは」

ホームだろうがアウェイだろうが対して気にせず、いつものごとくマイペースなのはやはりこの阿笠大悟。

金色の髪に片耳ピアスはもはや彼のトレードマークとなっている。

日本代表のジャージを着て、阿笠は同じくサッカー日本代表の友人と選手村の中を歩いていた。

やはり今年も日本代表に選ばれており、前回のように控えからの出だしではなく彼は日本のエースストライカーだ。

テクニク、ボディバランス、バネ、反射神経のどれをとっても一流で、それに加わった彼の強気なプレースタイルはもはや日本のスタイル。

「まあそれやったら会ってからの楽しみや。——あ、おった」

今は友人と日本女子サッカーの代表の人に会いに行くところだ。

彼、あけのしげのり明野成徳は阿笠と選手村での宿泊の部屋が同室で、おまけに阿笠と仲が良い。

関西出身なのだが、阿笠が金髪というところで阿笠をかなり気に入っているようだ。

そんな派手なナリは自分に自信がなければできなく、そんな強気な

ところを好いているらしく、同年代でもある。

通称シゲには女子代表に彼女がいるようで、その彼女と同室の子の4人で飲もうという話だった。

「あれ、もう1人は？」

「あのね、急に腹痛で来れなくなったのよ」

待ち合わせ場所にはシゲの彼女しかいなく、気をきかせた阿笠は2人で遊ぶようにそそくさとその場を去ることにした。

もともと阿笠はそんなに乗り気ではなかったのでちようど良い。

適当にうろちよろして適当に宿に戻ろうと阿笠は首に回していたヘッドホンを耳につけて音楽を聴き始めた。

選手村には当たり前だが日本だけでなく世界中の選手たちが溢れていて、もちろん阿笠を知らない人もいるだろう。

だが阿笠を知らなくてもその外見に惹かれる人はたくさんいる。

歩いている阿笠を見ては女性たちがキャアキャアと楽しげな声を上げている。

音楽を聴いている阿笠には聞こえていないようだが。

ちなみに今秋人は、高校時代の親友の櫻井春樹・海野夏実、そして彼女の雪原麻冬と一緒にいる。

春樹はバドミントン界の若きエース、夏実も全日本バレーのエースアタッカー、麻冬も日本での予選3冠女王としてオリンピックに出場していた。

もう、あの夏から2年経とうとしている。

あっという間に過ぎていったようにも思うし、まだ2年なのかとも思う。

あれ以来一度も会うことなく、携帯からも彼女のデータは削除した。

春樹からも綾女の話題は聞かないようにしていたし、彼女に関する全てを忘れようとした。

「えー?! 阿笠くんと飲みー?!」

「だって。でも腹痛で急に行けなくなったらしいよ、亜子」
「もったいない! ならあたしが行くのにっ」

ふとそんな会話が耳に入ってきた。

音楽を聴いていても聞こえるほどの少し大きな声に、阿笠もついそちらのほうを向く。

どうやら会話からサッカーの女子代表のようで、ここで見つかったら面倒くさそうなので阿笠は方向転換して別のほうへ歩き始める。

あれが日本女子代表か、なんてのんきなことを考えていると繁栄してる村から外れてしまっていた。

静かな畔のせせらぎに包まれた緑が広がり、大阪にもこんなところがあるのかと思わせた。

美しく新鮮な空気に思わず体を伸ばす。

音楽をとめ、再びヘッドホンを首に回して芝になっているところに行って寝転んだ。

遠くからは村にいる人たちの声が聞こえてくるが、ほんとに耳に届くか否かくらいの音量で、それよりも鳥の鳴き声のほうが大きい。

自然に触れることなんてそうないため、この静けさがまた居心地が良い。

「緊張感ねー……俺」

すでにリーグ戦は始まり、明日は初試合だ。

オリンピックという大きなタイトルを前にして緊張しない人なんていないだろう。

選手たちはみんなそれぞれの国の看板を背負っている。

今夜から先に女子代表が試合なのだが、そういえば彼女らさつき遊んでなかったか。

「……飲むって……嘘じゃん」

そして、やっぱり考えることは1つだけ。

まだ綾女がサッカーをやっていたら今回こそ本当に選手に選ばれていたのではないか。

彼女がプレーしているところは少ししか見てないけど、俺と同じ技を使える奴なんて男でもなかなかいない。

体は華奢だし大きいわけではないからフィジカルもそう強くないだろう、そう、だから俺と同じタイプなんだ。

オールラウンドなプレーをするわけで、似ているからこそ共感も持てた。

なんて、今更言ったって仕方ないか。

「……試合……18時からだったっけ」

今はまだ昼前で、寝ていたかったところをシゲに無理矢理起こされたのでいっそのことこのままここで寝てしまおうか。

女子の試合なんてあまり興味ないが、たぶん男子みんなで応援に行くことになってるから、それまで休憩していよう。

とりあえず、また世界一にならないとな。

前回のオリンピックでは優勝はできなかった上にスタメンでもなかった。

だが今回は違う。

日本中に日本のエースストライカーと認められ、侍ブルーの看板を背負っている。

つかさとの約束、一度世界一になったくらいで終わりにしようとしていたけどそれって違うんだよな。

秋人が新たな約束作ってくれたように、約束は永遠に続いていく。

きつと一生サッカーやっていく。

そう思って目を閉じ、うとうとし始めた頃、ガサガサッと茂みを掻き分ける音が聞こえた。

それでも気にせず寝ていたが、次の瞬間何かが顔にあたった。

「ぶっ……………はっ……………?!」

鼻に直撃し、阿笠は驚きのあまり鼻を押さえながら上半身を起こ上がらせた。

何が起こったのかキョロキョロ見回してみると、側にサッカーボールが転がっていた。

「……俺ボールなんて持ってきてないぞ？」

ボールを手に取り、あぐらをかきながらボールを抱えた。

なんなんだろう、なんて思っていたのもつかの間、すぐさま人が現れた。

「もー、蹴り損ねるとかひどいなー自分」

聞き覚えある声

後ろから近づいてくるその人物に、胸が高鳴る。

間違えるはずがない。

何年経ったとしても、聞き間違えるわけがない。

阿笠は、目を見開きながら後ろを振り向いた。

n
e
x
t

第51話【再会】（前書き）

そうそう、言い忘れてたんですが題名の金色は「こんじき」と読んでくださいね。

どうでもいいことをすいません^^;

第51話【再会】

空は青く

雲は白く

風がなびき

緑が広がる

その中心にいたのは、やっぱり君だった。

「大悟く……」

日本代表のジャージに身を包みショートカットの君は、あの頃と何も変わらない。

「……綾女………」

阿笠の存在に気づいた綾女も心底驚いた表情をしている。

こんなところに人がいるなんて思ってもいなかったのだろう。

だがいつまでも呆けてるわけにもいかず、綾女は後ろに振り返り走り去った。

「待っ……!」

ボールを返す暇もなく、すぐに綾女の姿は見えなくなってしまった。

追いかけるかとも思ったが、追いかけるわけにはいかない。

もう会わないと決めた2人、こんなところで出会うわけにはいかなかった。

この再会は、2人が初めて出会ったときと似ている。

今度は綾女とつかさを間違えたりしない。

阿笠は綾女が探していたボールを見つめ、ポツリと呟いた。

「サッカー……続けてたのか」

もうやめたものだと思い込んでいた。

彼女がつかさのためだけにサッカーやっていたことを知っている。

だからこそ、俺という存在がいるからもうやめたと思っていた。

好きで続けていたわけではないんだろう。

なのになぜまだサッカーをやっているんだ？

こんなところにいるんだ。

なぜまた俺の前に姿を現したんだ……。

「大悟お？ こんなところにおったんか」

女子の試合を見に行く時間間近になっても現れない阿笠を心配したシゲが阿笠のもとにやってきた。

阿笠みたいな目立つ人なら数人に目撃証言を聞けばすぐに見つかる。

最後に阿笠を見た人の話から数時間経過していたが、阿笠が動かないでいたため対して探すのに苦労はしなかったようだ。

シゲが声をかけても反応を示さないため、肩をポンと叩くと驚いたように阿笠がシゲを見上げた。

「大悟？ どないしたん」

「あ……あ、シゲ……」

あぐらをかいたままボールを抱き締めているのを見て、「練習しとったん？」と声をかけるが、すぐにそれが阿笠のものではないことに気づく。

ピンクのラインのそのボールには、何やらメッセージがたくさん書かれていた。

女の子特有の字がたくさん並んでいて、だが見たことない名前ばかりだ。

それもそのはず。

これは中宮大女子サッカー部部員が綾女に書いてくれたものなのだ。

「綾女へ……って、それ羽柴綾女のやん。なんで大悟が持ってはるん？」

「あ……拾った……」

「さやか。ほなついでに届けたらええわ。ほら、行くで」

座り込んでいる阿笠の腕をグイッと引く。

阿笠はノロノロと立ち上がり、シゲのあとをついていく。

だがいつもと明らかに様子が違う阿笠に、シゲは首を傾げる。

ちょっと目を離れた隙に何かあったのだろうか。

ほんまにどないしたん、とシゲが聞いても阿笠は何も答えず、目の焦点も合っていない。

阿笠とは試合で顔を合わせる程度の付き合いしかないシゲは、強気な阿笠しか知らない。

天才的な技で相手をおちよくるのが趣味で、3人にマークされても突破してしまうような凄い選手というイメージしかないので、こんな状態の阿笠を見たことがないのだ。

とりあえず男子代表が集まっているところに行き、シゲは秋人を探した。

昔からの友人である秋人にしかなんとかできないだろうと踏んだように、ちょうど春樹たちと遊び終えて来た秋人もこの場所へとやって来た。

シゲは急いで秋人を連れて来て、阿笠と対面させる。

自分はいないほうが良いかとも思い、気を使ってシゲは2人から去った。

「え？ なんなんだ、シゲの奴。なあ阿笠」

特に説明されずに連れて来られた秋人は不思議がるが、反応がない阿笠に疑問を抱く。

もう一度阿笠の名前を呼ぶが、阿笠はピクリともしない。

どうしたのかと思った矢先、阿笠がボールを抱えているのが目についた。

よくよく見ればすぐにそれが綾女のものだと気づく。

秋人は、目を丸くしてボールから阿笠の顔に視線を移した。

「阿笠っ、お前……」

羽柴綾女に会ったのか、と言おうとしてやめた。

言ってしまったら更に阿笠が陥ってしまうと思ったようだ。

綾女と別れたあと、秋人は烈から話を簡単に聞いた。

阿笠が弱ったときに力になって欲しいということで大まかに説明したようだ。

それからしばらくして阿笠が落ち着いた頃、阿笠から詳しく話を聞いたらしい。

だから阿笠と綾女が別れたことはもちろん知っていた。

「……それ、どうするんだ？」

「……」

「捨てるか？ それとも俺が返そうか」

とにかく綾女と会わせるわけにはいかない。

そればかりに必死な秋人に、阿笠はこう声をかけた。

「……綾女が女子代表って、知ってたの……」

「そ、それは……」

むしろ知らなかったのは阿笠くらいしかない。

あれだけ新生と騒がれてテレビでも大々的にお披露目されていたのだ、日本人なら誰でも知っている。

今まで通り秋人の部屋に住み着いていて、なぜ秋人が知っているのに阿笠は知らないのかと言うと、阿笠は綾女を忘れるために普通以上の練習を重ね家に戻ってくるときには疲労のせいでご飯もろくに食わずにすぐに寝ていた。

そして朝ギリギリまで寝て朝食を食べ、秋人と共に練習に向かうという日々を繰り返しテレビなど見ている余裕はなかった。

秋人が気を使って綾女が出そうなチャンネルは阿笠がいるときには付けなかったせいもあるかもしれない。

新聞もたいして読まないし、どちらかというところ知らなかったというよりは知ろうとしていなかったのだ。

目に入りそうなときは目を閉じ、聞こえそうなときは耳を塞いで分からないようにしてきた。

そうすることでしか忘れる術を知らないから。

「羽柴の跡取りになるんじゃないのかな……」

「阿笠、」

「……それとも学生の道楽なのかな……？」

身分違いの恋

羽柴の跡取りとサッカー選手とは叶わぬ恋

そう思ったから未練が残っていても身を引いたのに。

彼女はサッカー選手になるつもりなんだろうか。

サッカー選手になるつもりがないのなら、オリンピックになんて出ないでもらいたい。

だって、オリンピックに出たら嫌でも顔を合わすだろう。

オリンピックに出るとしてプロにはなりませんなんて、腹が立つからやめてもらいたい。

じゃあ何か？

本気でサッカー選手になるつもりがあるのか。

なるつもりがあるなら、どうしてあの日あの場でそう言ってくれなかった？

羽柴を継がずにサッカー選手になるのなら、そう言ってくれたら良かったんだ。

「……なんのために別れたんだ……っ……」

綾女の考えていることが分からなくて

あの日の自分の決断が意味ないものだと言って

まだこんなに未練たらたらなんだと気づいて

悔しくて

悔しくて

切なくて

哀しすぎる。

阿笠の目から大粒の涙がボロボロとこぼれた。

n
e
x
t

第52話【複雑な感情】

『だいぶ伸びたな。珍しいな、阿笠がこんなに伸ばすなんて』

金色に輝くストレートでサラサラな髪を見ながら、いつだったか秋人がそう言った。

金髪にしたときも秋人にはだいぶ驚かれ、髪の長さにいたってはしみじみと感心されていた。

痛むどころか艶やかな美しい髪は、丁寧にトリートメントされている。

『あは、初めてかもね』

学生時代以上に体力や筋肉をつけたにも関わらず、細身の体はしなやかだ。

それでいて甘い容姿に金髪とくれば見るものを魅了する。

いつも笑っていて楽しそうで、決して怒ることなどしないがサツカ

ーをすれば本気を出す。

本気を出さなくても勝てた学生時代、それじゃ先には進めないと知ったプロ1年目。

余裕を持つのプレーが阿笠のスタイルで、阿笠が真面目に本気でやっているところなどかつて誰も見たことはなかった。

相手をおちよくるプレーは相変わらずだが、練習にも真面目に取り組むようになり、何より勝つことに貪欲になった。

プロ2年目、初夏のワールドカップでは日本を久々に優勝に導いたスーパールーキー。

プロ3年目、ベテランが所属チームから抜け、本格的にチームのエースストライカーになる。

そして今年プロ4年目、オリンピック2度目の出場を果たす。

『なんで？ なんかあった？ あ、願掛け？』

プロ2年目の夏は、あまり良い思い出がない。

だが、阿笠がサッカーを続けるにあたってなくてはならない時期でもあった。

『願掛け？ あー……うん、そんな感じかな』
『ふーん？』

ただ、何年経ってもその時期にできた傷を乗り越えることはできていないようだ。

何かに夢中になることで傷ついたこと自体を忘れようとして、前に進もうとはしていなかった。

君のため俺のため、そう言い聞かせて別れを告げ、臭いものに蓋をするように哀しい思い出を見ないふりをしてきた。

そうして何もなかったように過ごしてきて、そして再会してしまつた今、癒えてない傷に更に傷を重ねて哀しみは何倍にもなって阿笠を襲う。

会いたかった

会いたかった

だけど、会うわけにはいかなかった。

幾ら出会ってもどんな形でも、きっと阿笠は何度でも綾女に恋をしてしまうだろうから。

「あか……、阿笠っ」

秋人は自分が着ていたジャージの上着を阿笠の頭からかぶせ、あやのようにギュッと抱き締めた。

「大丈夫。大丈夫だから」

こればかりは、どうしたら良いか秋人にも分からない。

少なからず綾女が日本女子代表だと知ったときからこうなることは予測できていたのだが、だからと言って阿笠に綾女が女子代表だと秋人の口から言えるはずがなかった。

困惑しながらも、阿笠を抱き締める手は強まる。

声押し殺して泣いている阿笠だが、しだいに声も漏れてくる。

チームメイトたちがぞろぞろともうスタジアムのほうへ向かって行く一方、2人は取り残されている。

心配したシゲが近づいてきたので、秋人は後から行くことを伝えた。

とりあえず人目につかないところに移動しようと考えたが、どう考えてもスタジアムになんて行けるようにはならないだろうと宿に戻ろうとした。

だが、その足を止めて秋人は阿笠を離してこう尋ねた。

「……なんで彼女がサッカー続けてるのか知りたくないか？」

秋人の脳裏によぎったのは、綾女が日本代表だと知ったときから抱いていた疑問。

阿笠は将来的に綾女が羽柴の跡を継ぐので別れたと言っていたが、ならばなぜ彼女はオリンピックに出場したのか。

もちろん実力があるからなのだろうけど、オリンピックのようなデカイトルの大会に出ることを親は許すものか？

オリンピックで活躍すればその後も期待される、つまりはサッカー人生を歩むことになる。

そもそも亡き妹であるつかさのためにサッカーをやっているだけだと聞いた。

ならば上を目指す必要はないのではないか。

それなのになぜ。

「……？」

阿笠は秋人の言っている意味が分からなくて、少し首を傾げた。

「プロになるつもりなら立場はお前と同等。ってことは、身分違いの恋じゃないだろ」

「……」

「良いのか、このまま終わりにして。後悔する前にぶつかったほうが良い」

阿笠には秋人の言っている意味が分からなかった。

後悔？

もう今すでに後悔してるというのに、これ以上何に後悔するということのか。

秋人の言葉も理解できず、涙は一向に止まらず、こんな不甲斐ない自分があまりに惨めで阿笠は唇を噛み締める。

手でむやみに涙を拭き、温かい温もりで抱き締めてくれる秋人の胸を押した。

まさかの行動に秋人は思わず手を離し、そんな秋人に阿笠は被せてくれた秋人の上着を突っ返した。

「阿笠？」

驚きながら上着を受け取る秋人の顔をチラッと見ながら阿笠は何か言いたそうな表情を浮かべてたが、すぐに走ってどこかへ行ってしまった。

「阿笠っ!!」

だが追いかけることはできなかった。

秋人を見た阿笠の顔は、涙で潤みながら事の展開に付いていけずもどかしそうで、微かに口元で「ごめん」と呟いていたからだ。

何に対しての謝罪なのか、きっと泣いたことに対するごめんなのだろうけれど、秋人は今の阿笠を1人にして良いのか分からなかった。

秋人の足元には、秋人が阿笠を抱き締めた際に落とした綾女のボールが転がっている。

それを拾い上げて、阿笠が去って行ったほうを見つめた。

もう2年も経ったと思っていたが、まだ2年だったか……。

仕方なくとりあえず秋人はスタジアムへと向かった。

さすがホームでの開催だけあって、青いユニフォームを着ている観客が目立つ。

顔や腕に日の丸の絵を書いている人、国旗を掲げている人、すでに酔っ払っているのかどんちゃん騒ぎな人。

みんなどこにいるのかとキョロキョロ見渡していると、シゲが秋人に近寄ってきた。

「こっちこっち！　って、大悟は？」

「あ、あー……」

「どっか行ったん？　あいつ自分が方向音痴なん分かってんのか」

その言葉に秋人はハツとするが、何にせよここは大阪、日本なのだから例え迷っても大丈夫だろうと自分に言い聞かせる。

だが実際阿笠は適当に走ってしまったため人気の少ない場所に出てしまっただけ迷った。

近くにいた警備員にどうにか道を聞いて、宿に戻ろうとしたが、やはりスタジアムへの道順を尋ねることにした。

なんでと聞かれたら答えられないが、このまま宿に戻ったのではさっきの秋人の言葉を理解することができない。

モヤモヤしたまま明日の試合を迎えることになる。

自分は日本代表、エースストライカー、そんなプレッシャーを背負っているのだ。

普段はそんなこと考えずに楽しくをモットーとして勝負なんてちつとも気にしていないが、オリンピックはそうもいかない。

日の丸を背負う覚悟がなければ選ばれない。

「はい……か」

阿笠がスタジアムに着いた頃にはすでに前半は終わっていて、日本が1－0で勝っていた。

かなりの距離を走り回ったことで涙はとうに枯れている。

目元が少し腫れているが、そこまで酷いわけでもない。

チームメートたちがどこかにいるはずなのだが、行きづらいのであえて探すのをやめると、阿笠は久々にある人物に出会った。

「ダイゴ。おひさあ」

ナチとナギだ。

彼らはドイツ代表のジャージに身を包んでいて、阿笠と同じ年の双子のプロサッカー選手。

中学のときに海外遠征で知り合って以来、彼らとは仲良しになっていた。

秋人が高校時代留学していたのも、彼らが通っていた高校。

「ナギ！ ナチ！ なんだあ、2人も代表だったの」

「あったりまえっしょ！ 俺ら2トップよ？」

双子なのに、兄のナギは小柄で弟のナチは阿笠と同じくらいだ。

やんちゃで可愛らしいのがナギでクールなのがナチでもある。

2トップ、確かにドイツは2・4・4の陣形を取っている。

今の日本は、多少相手によって変えることもあるが3・4・3の陣形で超攻撃型。

秋人を中央に置いて、フォワードの3人が駆け巡る。

アジア人は他国に比べてガタイが良いわけではないので守るよりも攻めたほうが良いという結論によるもの。

「それよか日本の9番すげえのな。ダイゴみたい」

「あん？ 俺11番」

「アホ。女子だよ」

そう言いながらナチはフィールドを指差す。

ハーフタイムを終え後半に入っている今もなお日本優勢で、今まで全く試合を見ていなかったがナチに言われてようやく試合を観戦した。

とりあえず9番を探してみると、いとも簡単に見つかったがそれが綾女だと分かると、眉をひそめて「試合にも出てんのかよ……」と呟いた。

ダイゴみたい、とそう言ったナチがよく分かるのは阿笠だけではないだろう。

相手を恐れない強気で多芸なプレーは確かに阿笠と同じ。

せめてポジションが違ったら良かったのに、などと無茶なことを思いながらも試合からは目が離せなかった。

n
e
x
t

第53話【魅せられたプレー】（前書き）

ファイナーレまでもう秒読みになりました。
御愛読頂いてる皆様、どうぞ最後までお願いします^^

第53話【魅せられたプレー】

「うお、あの子うまー」

「9番？　ほんとだな」

観客席で秋人たちは女子の応援をしているが、やはり目につくのは綾女の姿。

誰が見ても認めるその実力は輝かしいものだ。

「あー、せや。先に俺ら女子にエール送ったんやけどな、そんなとき9番ちゃんが月影くんはおらんのか言うてたで」

「え」

「知り合いなん？」

知り合い

そう聞かれるとなんと答えたら良いのか。

おそらく阿笠のことは知っていると分かっているだろうし、直接会ったのも何年か前に真夜中偶然出会っただけ。

知り合いと呼べる間柄なのかは分からなかったが、互いのことを知り尽くしているのは確かだ。

「ああ、まあな。彼女中宮大んだけど俺の親友と友達なんだとさ」
「ほ」

とりあえず突っ込まれるのはまずいので無難に答えておく。

それより、綾女が秋人のことだけを言ったことがやはり気になる点だ。

綾女は秋人と阿笠が仲が良いことを知っている、つまり阿笠共々このスタジアムにいないということは阿笠から先程のことを聞いているのだろうと予測したはずだ。

オリンピックの初戦、綾女に変な重荷をかけてしまったかもと秋人は少し同情気味。

だが綾女がなぜここにいいのか見極めるまでは、そんな悠長なことは言ってもらえない。

阿笠はああ言っていたが、きっとスタジアムに来るか来なくても宿かどこかでこの試合の中継を見ているに違いない。

終わりにした

2年前ある日突然阿笠にそう言われて正直哀しかった。

ようやく阿笠にも愛する人ができたというのに、お互い好きあっているのに別れなければならいなんて切なすぎる。

高校時代、阿笠と別れた麻冬と付き合い始めた俺だけど結果的には俺が奪ったと言っても過言ではない。

俺が麻冬に告白しなければ2人はおそらく今も一緒にいたはずなんだ。

過去のことを言っても仕方ないのだけど、でもだからこそ阿笠には

余計幸せになってもらいたいんだ。

俺の勝手な願望だけど、阿笠には俺の何倍もの幸せを手に入れてくんなきゃ俺の気がすまない。

何があってもヘラヘラ笑って隣にいてくれた大切な大切な友達なんだ。

泣いたり笑ったりコロコロ表情が変わってワガママなときもあるけど、それすら愛しい俺の無二の相棒。

俺の10番はお前のために存在しているような、そんな想い。

「わー、9番ちゃん後半に入ってから更に加速しとるで。今んとこ後半だけで2点や」

「ハットトリック達成してるな」

「敵わんなあ。あと2点くらいいけるんちゃう」

なにをそんなにがむしゃらになっているのか、綾女の猛反撃は止まらない。

いや、1点も取られてないのだから反撃ではなく、猛攻撃だ。

確かに綾女のいる前線にボールがたくさんきているのも事実だが、パスして良いところも自分で行っている。

大きな体を武器にする攻撃型フォワードでもなく、こぼれ球を処理するでもなく、スペースを作って周りを動かすでもなく、独自のプレススタイルを持っている彼女はまさしくフリーマンだ。

阿笠のように。

あそこにいるのは阿笠ではないかと思わせるほど。

そのスピードと体力は華奢の体のどこから生まれるものなのか、きつと彼女……彼らは天性のフォワード。

2人ともつかさのためにサッカーをやっているのだと言うが、つかさが亡くなってなかったらプロにはならなかったのかと思うとかな

りの宝の持ち腐れだ。

今つかさが生きていたらどんな選手になっていただろう。

2人と同じフオワードか、2人のようなプレースタイルか。

考えただけでも惜しい。

ナチとナギのように2トップになっていたかもしれない。

世間的には何も知られていないつかさの存在。

上手いと言っても小2の時の話だけど、でもその年でいろんな技ができたのなら阿笠よりもすごい選手になっていた可能性は十分あった。

惜しかった、そんな言葉では済ませられないほどに。

それが分かっているから阿笠も綾女もこうして今世界のフィールド

に立っている。

そう、つかさがいたことを証明するためだけに。

「……また上手くなってる……」

試合に釘付けになっている阿笠はポツリと呟いた。

その声は聞こえていないようだが、楽しげにナギは言った。

「ほんとダイゴみたいだ！ 俺やナチでもあんなんできないぜ」

黄金世代と呼ぶに等しい、阿笠の世代。

日本だけでは秋人や阿笠、シゲくらいなのだがドイツではナギ、ナチそしてここにはいないがミッドフィルダーのハノイがいる。

「なあ、お前あの子にサッカー教えた？」

「まさか」

ナチの質問に阿笠は苦笑するが、それでも納得していないようなの

で阿笠は渋々答える。

「……俺の幼なじみが俺とあの子に教えてくれたんだ」

実は、阿笠がつかさの両親からもらったたくさんの技が書かれていて、つかさなりの阿笠への教え方も細かく書いてあったノートは、もう1冊あったのだ。

正しくは、つかさが自分用にしていたノートを通夜、こっそり要が綾女に渡した。

つまりあのノートを先に手にしていたのは綾女で、その後つかさの死がショックで不登校になった阿笠のためにもう1冊のノートを阿笠に渡したのだ。

なぜあるとき要が綾女にノートを渡したのかは、綾女にも分からない。

さくらも耶斐もそのことは知らないし、知っているのは相良だけ。

そして相良と烈が初めて会ったときに相良が話してくれ、綾女と阿

笠が別れて数日してから烈はそのことを阿笠にも話した。

同じノートを見て練習した幼い自分たちを慈しむように、阿笠は少し笑っていた。

「へえ。通りで。んでその幼なじみは？」
「……」

阿笠は薄ら笑いをしながら、空を指差す。

しまった、とナチは思うもののもう遅い。

ごめんと謝るが、阿笠は首を横に振りながら気にしないで言う。

試合はもうそろそろ終わりを迎え、残り5分ほどになる。

あのあと更に1点追加されて今は4・0と日本の圧勝中で、残り5分ではひっくり返されることはまずないだろう。

そろそろ体力も尽きてくる頃だろうのに、綾女は走るスピードを落

とさずにボールに食い下がる。

ここまでリードしておきながらなぜこんなに必死になっているのか、きつと見ている観客や味方も不思議だろう。

すげえ、なんて言っってはしやぎながら試合を見ていたナギはおもむろにこう言った。

「ほんじゃ9番ちゃんとダイゴは幼なじみのためにサッカーやってんだ？」

「え、……」

「ん、待てよ。でも9番ちゃん見てると何か自分をアピールしてるみたいだなあ。なわてゆーの？ 私はここにいる、みたいな」

ナギが何気なく漏らしたその言葉に阿笠は振り返り目を見開いた。

そしてその隣ではナギの言葉に付け足すようにナチが続く。

「あ、そうか。サッカーやるのは幼なじみのためでも、サッカー続けるのは自分のためってことか」

「……自分のため……？」

「サッカーと生きていく、ってことだろ」

つかさの存在を示すためにサッカーをやっている綾女。

その全てはつかさのためだけだと思っていたのに、裏切られたと思っていた俺の前に現れたお前は今度は自分のためにサッカーをやるのか。

羽柴を継がずにサッカーと共に生きていくのか。

なぜ？

俺を裏切るため？

違う。

羽柴に楯突くため？

違う。

サッカーが好きだから？

違う。

……俺に会いに来るため？

そう思うことは自惚れだろうか。

「綾女……」

もし本当に綾女がサッカーをやり続けるとしたら、その真意は何だろうか。

ああ、だからさっき秋人は俺にああ言ったんだ。

真意を知らないまままた会わなくなって、後で聞けば良かったと後悔だけはしないようにと、そう言ってくれたんだ。

2年経ってもやっぱり逃げていたのは俺。

綾女は前に進んで何らかの覚悟を決めてきた。

そしたら、今度動くのは俺しかない。

そう思ったとき、ホイッスルが鳴り試合は終了した。

5分のうちに更にまた点が加わりナギの予想通り日本は5－0で勝

n
e
x
t

利
し
た。
。

第54話【ボール】

「阿笠さんっ！ サインください！」

「握手してください！」

試合が終わり、ナチナギと別れた阿笠は1人スタジアムを出た。

そこではスタジアムから出てきた人やスタジアムに入りきらなかった人が大勢いて、1人でいた阿笠はまんまとファンたちに捕まっていた。

秋人たちのように代表たちで集まっているとそこまで酷く絡まれな
いのだが、1人でいると標的にされやすく1人にサインか何かする
とみんなにしてあげなければならなく、それはそれはかなり大変だ。

本当は出待ちして綾女を待っていようと思っていたのだが、とても
そんな状況ではない。

そこまで人気がない人ならまだしも、阿笠のような国民的大スター
はなかなか抜けられないし、おまけに金髪ロン毛という目立つナリ
をしているのだから抜けてもまた次の波に襲われる。

とりあえず逃げるしかない、適当な言い訳を言って阿笠はその場から走り去る。

残念がる声ばかりが聞こえるが構っている余裕はない。

一度スタジアムの中に戻るが、阿笠はあることを思い出してまた外に出る。

見つからないように少し奇妙だが上着を頭にかぶり、できるだけ端のほうを通りながら足早に向かう。

秋人の前で泣いたあの場所に向かおうとしているのだ。

綾女が置いていったボールをあそこで手放してしまい、そのあとほっぽってしまった。

人のものなのにもし盗まれてもしたらたまったものではないが、あそこにまだある可能性のほうが高い。

というよりも、秋人が持っていることを知らないのだ。

選手村に来ればもうただのファンの人はいないので一安心で、とにかく阿笠はその近辺をくまなく探し始める。

夏と言えど夜になれば暗くもなり見にくくなるものだが、そんな悠長なことは言ってられない。

だがボールなどいつまでも同じところに転がっているわけはなく、ましてや秋人の手にあるのだから見つかるはずもない。

それでもどこか狭いところに入り込んでいないかとか、考えられそうな場所を探した。

汗をかきながら一生懸命走り回り、土を這うようにしてドブの中を探したりと、自慢の髪を1つに束ねながら泥まみれになりいつしか日付も越した。

その頃宿では、阿笠と同室のシゲが未だ阿笠が帰らないと秋人に伝

えていた。

携帯も部屋に置きっぱなしで連絡取れず、おまけに夕方様子もおかしかったのでシゲはかなり動揺してしまっている。

だが、更に動揺したのは秋人のほうだ。

綾女のこと絡んでいるので余計心配なのだ。

確かに方向音痴で道に迷っているだけかもしれないが、綾女のこと
がショックで万が一ということも考えうる。

阿笠は見かけによらず精神はかなり弱く、特に信頼している人に裏
切られると病んでしまう。

当たり前だと思ふかもしれないが、秋人の留学事件をお忘れではな
いだらう。

阿笠に黙ってドイツに行こうとした秋人を何とか引き留めようと空

港まで追いかけて、ようやく見つけた秋人に必死に訴えかけたにも関わらず阿笠を無視して旅立ってしまったことで、阿笠は喋ることも立ち上がることもできずに、記憶まで混乱してしまった。

まるで人形のように動かなくなったのだと烈に後から教えられ、阿笠がいかに脆い人間なのかを秋人は思い知った。

相手が自分だったから余計にそうなったんだろう。

ならば、愛した人が相手の場合はどうか。

絶対に阿笠が正気でいられるはずがないのだ。

「っ……あのバカっ……！ シゲっ、お前俺の部屋にいろ！ 俺阿笠探してくる！」

「手伝うで。2人のほうが早いやろ」

「だめだ。2人していなくなったら問題になる。鳴海に俺と部屋変わったって言っといてくれ」

シゲの返事も待たずに秋人は飛び出した。

鳴海とは秋人の同室の人のことで、確かに秋人が阿笠を探しに行っただなんて言ったら問題になるだろう。

さすが頭の回転が早いが、こんな広い村のどこをどう探すつもりなのか。

むしろ村の外にいるのかもしれない、携帯を持っていないことすら憎む。

だがそんな秋人の予想とは裏腹に、宿を出るとすぐに阿笠が姿を現した。

ちやうど阿笠も帰ってきたところで、行き違いにならずにすんで良かったのだが秋人は阿笠を見るなりつい怒鳴り声を上げてしまった。

「どこ行ってたんだよ?! 心配しただろ!! 携帯くらい持ってけ!!!」

阿笠はいきなり怒られたことに体をビクッと跳ね、泥だらけの顔を

泥のついてない二の腕で拭いた。

「ごめ……」

秋人は滅多なことでは怒らないのを知っているせいで余計縮こまる。

それほど心配してくれたということなのだが、今回はすぐに見つかったから良かったものの阿笠が自ら帰ってこなければ探し出せなかったかもしれない。

一言叫んでとりあえず落ち着いた秋人は深くため息をつきながらゆっくり阿笠を見る。

「……え、なんだよその格好？　なんかあったのか？！」

しよぼんとしている阿笠の肩を掴みながら、今度は驚いた表情でそう尋ねた。

膝まで上げているズボンや着ているTシャツは土で汚れ、両手や顔は泥で汚れている。

どんな風にしてればこんなになるのか予想もできず、まさか何かの事件に巻き込まれたのかと秋人は考えるが、阿笠が発したのは意外な言葉だった。

「ボール…………綾女のボール見つからなくて……」

「へ？」

「さ、探してたけどもう真っ暗で見えなく……」

泥まみれの真実を知って秋人はホッとして阿笠から手を離すが、阿笠のほうは泣くのを堪えるように眉間にしわを寄せて唇を噛み締めている。

そんな派手な身なりをしているくせにこんなに弱いなんて詐欺のようにも思えるが、どんな髪をしても秋人には中学時代から知る阿笠大悟でしかない。

「ど…………どうしよう…………。俺、綾女のとこ行こうと思って…………でもボールないから…………」

震える声を宥めるように、秋人はボールなら自分が持つてることを伝えた。

阿笠はキョトンとしながら何を言っているのか分からないという顔をしたが、秋人が繰り返し同じことを言うと、安堵したのかその場に崩れ落ちた。

片膝を曲げてその膝に顔を乗せ、気が抜けたように「なんだ………」と消えそうな声を出した。

秋人は膝について阿笠と同じ高さになる。

「悪かった。もっと早く気づいてやれば良かったな」
「いい……ありがとう」

顔を上げずにそう答えた阿笠の腕を掴み、阿笠を立たせた。

とりあえず風呂に入らせようとして、秋人は阿笠とシゲの部屋に向かう。

その途中でシゲと部屋が変わったことを説明したが、ふと阿笠がジャージの上着を持っていないことに気づいた。

確か一緒にいたときには着ていたはず。

どうしたのか尋ねると、阿笠も忘れていたらしく驚いていた。

取りに行こうとした阿笠を押さえ、自分が行くからと阿笠は残して秋人が向かうことにした。

要は阿笠が泣いていた場所らへんということだろう。

さっきまで持っていたならこんなにすぐに誰かに持って行かれるわけもないだろうと、秋人は走りはせずに歩いた。

街灯もたいしてないこの暗さでよく探してたいたな、なんて感心している秋人は人影を感じた。

どうやら向こうに誰かがいるようで、だがこの暗さでは誰なのか分からない。

とりあえず近づいて行くと、その辺に落ちていたジャージらしきものをその人物が拾い上げて、名前を確認していた。

日本代表のジャージはみんな同じのため、腕の部分に名字とファーストネームの最初のアルファベットが刺繍されているのだ。

つまり秋人ならTSUKIKAGE・Aである。

この辺に落ちていたのだからそれはおそらく阿笠のもののはずだが、その人物はジャージをギュッと抱き締めた。

何をしているのかと更に近寄ると、近くの切れかけていた街灯がパッと灯りをつけた。

そして、その光の下に照らされた人物は……

「……羽柴……さん」

n
e
x
t

第54話【ボール】（後書き）

うーん、かなり久々に1日に2話投稿してみました。

秋人と綾女、前に会ったのは2年以上前で真夜中のたった一瞬。
どうなるのかなあ、

第55話【一騎討ち】

夜中の1時過ぎ、どうしても眠れなくて散歩することにした。

真っ暗で街頭もろくに付いていないけれど目が慣れてくれば歩けなくはない。

試合をして圧勝して疲れているはずなのに、なぜか眠れない。

1人で4点取って、時々いつもより無茶苦茶なプレーをしたことは反省してる。

がむしゃらに走り回って、いつもより相手をバカにしたプレーをしていたのは分かっていた。

だけど、どうしてもせずにはいられなかった。

大悟くんに見て欲しかったの。

……きつとあたしの試合なんて見てもくれないかもしれないけど、万が一見てくれているのならと思った。

あの湖畔で大悟くんと会ったときにはさすがに驚いた。

何か言わなきゃって思ったけど、驚いた顔をしている大悟くんにも言えなくなっただけで逃げたの。

もしかして、あたしが代表だったこと知らなかったのかも。

忙しくてテレビなんて見てる暇もなかったのかな。

じゃなきゃ、なんでこんなところにいるんだみたいな目で見ないよね。

だからこそ、余計に大悟くんには何も言えなくて。

だって、裏切り者とかいろいろ思ったに違いないのよ。

大悟くんはあたしが羽柴の跡取りだったために別れた。

なのにあたしがこうしてオリンピックに出場してることは、大悟くんのしたことを無意味にしてしまうことだから。

それを分かっているながらここにいるあたしは最低なのかもしれない。

あなたに会いたかったと言ったら信じてくれますか？

あなたと同じ世界にいたいんだと言ったら信じてくれますか。

あたしのプレーを見て、あたしが本気なんだってことを知って欲しかったの。

今あたしがフィールドに立つのはつかさのためではなく、自分で選んだ道なんだと知って欲しかったの。

あなたがつかさのためにサッカーやり続けるのなら、あたしはあなたのためにサッカーを続けようって決めた。

「ん、ジャージだ。……これ……大悟くんの……」

歩いていたらジャージの上着を拾い、それが大悟くんのものだとすぐに分かった。

なんでこんなところに置いてあるのか不思議だけど、自然とそれを抱き締めた。

「大悟くん……」

2年間、ずっとテレビであなたを見てきた。

テレビ越しのあなたの声が、姿が、笑顔がとても懐かしくて、いつだってあなただけを想ってきた。

大悟くんは他の誰かと幸せになれって言ったね。

もしかしたらもう大悟くんには好きな人や彼女がいるかもしれない。

あたしのことはきっぱり諦めて、他の誰かを愛しているかもしれない。
い。

けれど、もし許されるのならば、実らなくても良いからあなたを想
って生きてても良いですか——……。

「……羽柴……さん」

そのとき、ジャージを抱き締めている綾女に誰かが近づいてきた。

綾女が振り返ると、そこには驚いた表情をした秋人が立っていた。

綾女はジャージを後ろに隠し、引き笑いをしながら「どうかしたの？」と尋ねた。

そんな綾女に、秋人は恐る恐るジャージを指差す。

「それ、阿笠の？ ……探してたんだ」

「えっ、あっ」

「もらって良い？」

綾女は一気に顔を赤くし、急いで秋人に渡す。

ゆでダコ状態の綾女を見て、秋人は少し安堵したように笑った。

だがすぐになぜ笑ったのか自問自答した。

綾女は阿笠の想い人だが阿笠に連絡の一切もよこさずに裏切った人。

阿笠の敵。

言わば俺の敵。

阿笠に別れを告げられても止めもせず、連絡をよこさず、そして阿笠を泣かした張本人。

「……何で阿笠のジャージ持ってたの。君、阿笠とはもう関係ないんだよね」

「そ、それは……」

「裏切り者」

秋人は阿笠のジャージを握りしめながら、眉をひそめた。

軽蔑したように見えたのか、綾女はビクッと一步下がる。

だが何も言い返してこないところを見れば、裏切ったという自覚はあるのか。

「あんたのボール、なんで阿笠に渡した」

「あれは……大悟くんに会ったことに驚いて置いてきちゃったのよ」
「じゃあなぜ阿笠の前に姿を現したんだ」

俺が聞くことでも責める内容でもないことは分かってる。

だけど、どうしても許せなかったんだ。

俺は阿笠が羽柴綾女と別れてから烈や阿笠からいろんな事実を聞かされて、阿笠が大変だったときには何もしてやれなかった。

阿笠は笑ってもう良いんだと言っていたけど、一緒に暮らしてる俺は知ってる。

阿笠が夜な夜な寝言で泣きながら羽柴綾女の名前を呟いていたことを。

阿笠は気づいていないだろうけど、阿笠はいつも淋しそうで哀しそうだった。

髪を金にしたのも自分を元気づけるためじゃないのか。

「サッカーを続けるのならなぜあるとき阿笠にそう言ってやらなか

った。そうしたら阿笠は別れずにすんだんだ」

別れてもなお阿笠を苦しめる羽柴綾女が許せなかった。

だから、春樹から羽柴綾女が代表に選ばれたことを聞いたときには冷や汗すらかいた。

テレビでその旨を知り、羽柴綾女に怒りを覚えた。

何もしてやれなかった自分への怒りと、また阿笠を苦しめる存在の羽柴綾女への怒りは消えることはなかった。

「あんたの存在があいつを苦しめてるんだ。なんで今更オリンピッククなんか出てんだよ」

「……」

「プロなめんなよ」

高校のときにオリンピックに出た俺に言えたセリフではないが、もしも学生のうちだけサッカーをやるつもりだって言うなら更に許せなくて。

できれば2年前にキツパリサッカーをやめて欲しかった。

俺のただのワガママかもしれないけど、でもそうでもしなきゃ阿笠は立ち直れない。

「……大悟くんは……何か言ってた？」

秋人を直視できず綾女は少しうつむきながら、ようやく言葉を発した。

「それを聞いてどうする？」

「……月影くん、あたし大悟くんと話したいの」

「今更何を」

冷たく鋭い秋人の追求に綾女は顔を上げる。

こんなに冷徹な秋人は、テレビで見たり阿笠から聞いていた秋人のイメージとはかけ離れていて恐怖さえ覚える。

だが、どちらが本物なのかは考えなくても分かる。

阿笠を苦しめた自分に怒っているあまりの態度であることは綾女にも理解できた。

けれど、秋人に譲れないものがあるように綾女にも譲れないものがある。

「……大悟くんがもうあたしを好きじゃなくても、あたしは大悟くんを追いかけたいの。……羽柴は捨てた。ずっとサッカーやるつもりなの！」

綾女は必死に訴えかける。

綾女の言葉は何となく予想していたが、彼女の口から聞けるとは思っていなかった。それで正直秋人は驚く。

羽柴を捨てた、その言葉にかかる重みは計り知れない。

「だったらなんで早く阿笠にそれを言わなかった」

綾女も苦勞してきたのだということは分かる。

養女なのに簡単に跡取りをやめられたわけではないことも予想できる。

あなたが背負ってきた重い過去を聞けば同情してしまう部分もあるし、同じ選手としてサッカーでいきっていくと覚悟するには相当の勇気が必要だったことも共感できる。

けれど、それでもやっぱり俺は阿笠の友達だから阿笠側についてしまおう。

阿笠が笑ったら嬉しいし、阿笠が泣いたら哀しい。

とにかく一刻でも早く阿笠に幸せになってもらいたいんだ。

これは俺のエゴ。

あいつ、高校卒業して以来一度も麻冬と会っていない。

いや、高2の冬に別れたそのときから2人はほとんど話すらしていない。

どうやら約束したらしいんだ。

阿笠が幸せを掴んだら、そのときは自分から麻冬に会いに行くのだと。

それまではお互い別々に頑張るんだと。

阿笠から麻冬を奪ってしまったせめてもの報いとして、阿笠の幸せは最前線で精一杯応援すると誓った。

「……あたしのプレーを見てもらうまでは何も言わないつもりだった」

「は、」

「あたしの本気を直接見て欲しかったの」

今、この場で阿笠を呼ぶことが一番良いのか。

それとも彼女を阿笠から遠ざけたほうが良いのか。

俺には分からない。

だけど、彼女に未練があると言って泣いた阿笠は絶対に羽柴さんに会いたいはず。

「勝手だな」

ひたむきな綾女に、秋人は一言そう言い放つ。

一瞬傷ついたような表情を見せたが、目をつぶって軽く頷いているところを見ると秋人の言葉を受け止めているよう。

かなり反省し、とても苦勞し、そして今この場にいる彼女に責める言葉は秋人にはこれ以上見つからない。

秋人は、深くため息をついたあと綾女から視線を外してこう言った。

「……だけど、阿笠はあんたの悪口を言ったことは一度もなかった。2年前も、さっきも」

裏切り者だけど、どうしようもなく勝手な人だけど、それでも阿笠が好きになった人。

阿笠がまだ好きだと言うのなら、俺が引き裂くわけにはいかない。

秋人が呟いた言葉に、綾女は大きな瞳から一粒の涙を溢した。

n
e
x
t

第56話【電話】

「んゝ。さっぱり」

泥を落として少し気分が良くなった阿笠は、適当なTシャツとプーマの半ズボンを履いて風呂場から出てきた。

「あれ、秋人まだ帰ってないの？」

上着を取りに行ったただけなのだからとつくに帰ってきていてもおかしくないのに、秋人の姿が見当たらない。

どこか出かけたとは時間的にも考えられないし、散歩をしているとも思えない。

ということは、まだ探してくれているのだろうか。

なら探しに行ったほうが良いのかもと思ったが、行き違いになってまた怒られたらたまったものではないので先に秋人の携帯に電話することにした。

何回かのコールのあと、秋人が電話に出た。

阿笠は今どこにいるのか尋ねるが、秋人は質問には答えることはせずにスピーカーにして互いの声が綾女にまで届くように設定する。

誰からかの着信なのかを確認してすぐ秋人が画面から目を離したので綾女はメールかなんかだと思っている。

「……？ 秋人？」

綾女には届かないほどの小さな声で阿笠は秋人の名を呟き、それを妨げるように秋人は話し続けた。

『……だけど、阿笠はあんたの悪口を言ったことは一度もなかった。2年前も、さっきも』

何を言っているのか分からない阿笠は、首を傾げる。

自分の名前が出されて、その意味を頭の中で考えると出てくる人物は1人だけだ。

まさかと思いながら、2人の会話に耳を傾ける。

『阿笠はそういう奴だ。そんなあいつに何て言うつもりだ』
『……』

『やっぱりサッカーを選びました。だからもう一度付き合ってください。って？ ざけんなよ』

やっぱり綾女だ。

秋人と綾女がなぜだか一緒にいるようだ。

さっき試合後に待ってようと思って会えなかった綾女、今なら会える。

2人がどこかで待ち合わせているはずもないのだから、偶然外で会ったに違いない。

今走って行けば綾女に会える。

聞きたかったことを聞ける。

でも……

『あんまりあいつを翻弄しないでくれるか。せつかく2年経って少しは傷が癒えたのに、またあいつを傷つけんのか』

だけど、怖いんだ。

まだ好きだと言ったら幻滅されてしまいそうで。

未練がましいと蔑まれてしまいそうで。

君の笑顔が見れなくても、話せなくても嫌われても、君の姿を見ただけで思い出が溢れ出すんだ。

『阿笠を泣かせる奴は許さない。阿笠を傷つける奴はもっと許せな

い』

辛くて辛くて、綺麗事を述べて戦おうとしなかった2年前の恋の記憶が蘇る。

身分違い、それがなんだったというんだろう。

俺が殺されかけて周りにも迷惑がかかって、綾女と付き合ってるなんて羽柴にバレたら今度こそ死ぬと思った。

俺が死んで、秘密を知る烈や秋人やみかさまで失ってしまったらと怖くなった。

そうさ、俺は逃げたんだ。

『……あたしがしてることが大悟くんを傷つけるって分かってる。それでも、どうしたって大悟くんが好きだからっ……!』

好きだから

その言葉に阿笠は目を見開いて、携帯を握りしめながら思わず走り出した。

好きだと言われた言葉が嬉しかったわけではない。

いや、嬉しくなかったわけではないがその言葉に感銘を受けたのではなく、辛い恋から逃げたのは俺なのに綾女は自分自身を責めていたから。

違うんだ。

綾女はちつとも悪くない。

綾女のことを無視して綾女の言葉すら聞かずに、目先の不幸に怯えて身を引いた本当の裏切り者は俺なんだ。

綾女が自分を責める必要なんじゃない。

この2年間、ずっと綾女を忘れようと努力している一方でやっぱり綾女を想い、同時に可哀想な自分を演じていた。

別れを切り出したのは俺なのに被害者ぶっていた。

辛くて切なくて哀しくて、でもサッカーしてる綾女を見てそれは違うと分かった。

——サッカーやるのは幼なじみのためでも、サッカー続けんのは自分のためってことか——

ナチが言ったあの言葉の意味がようやく理解できた。

俺も綾女もつかさのためにサッカーやっていて、もともと綾女もサッカーはそこまで本気ではないクチだったからつかさの荷を背負うのは俺だけで良いと思った。

つかさのことがあるから羽柴を継ぐことに躊躇うんだと思っていた。

——サッカーと生きていく、ってことだろ——

でも違うんだ。

つかさのために羽柴を継ぎにくかったんじゃない、羽柴のためにサッカーをやりづらかったただけなのか。

この2年の間にお前がどうやって羽柴に楯突いたのか想像もできないけど、おそらくかなり苦労しただろう。

羽柴の跡取りとして養女になったのに継がないのなら意味がないと怒られたことだろう。

でも、それでもそんな苦難を乗り越えて俺と同じ世界にいてくれた

ことがとてつもなく嬉しかった。

だって、俺も好きだから。

綾女のことか。

どうしようもなく好きで。

もっと上手に言いたいけど、でもやっぱ大好きしか出てこない。

だからもし、逃げ出した俺を許してくれるというのなら今度こそ綾女と向き合いたい。

俺はまた後ろを振り向いて怯えるかもしれないし、泣いてしまうか

もしれない。

けど、それでも良いと言ってくれるのなら、許されるのならもう一度君に伝えたい。

「――綾女!!」

全力で走って2人がいる場所に着いた阿笠は、通話中の携帯を握りしめながら膝に手を当てて思いきり綾女の名前を叫んだ。

n
e
x
t

第56話【電話】（後書き）

ああ……ついにフィナーレですね。

ちなみにこの小説のバックテーマはファンモンの告白です。

何度か出していましたが今更ですみません^^；

第57話【星は瞬く】

風呂上がりだというのにまた汗をかいていて、いつもどんなにフィールドを駆けてもたいして息が乱れない超人的な体力を持つ阿笠が、膝に手を置いて肩で呼吸をしている。

どれだけ必死に走ってきたのかは一目瞭然で。

手に力が入らないのか汗で滑ったのかは分からないが握っていた携帯を地面に落とした。

「阿か……おま、どんだけ全力疾走してきたんだよ」

来るだろうと予想していた秋人だったが、阿笠の状態を見て啞然としている。

阿笠に近寄ろうとした秋人だったが、綾女に気をつかったのかその場から去ろうとする。

だがそんな秋人の行動を見据えて、阿笠は何とか息を整わせようとしながら秋人の腕を掴んだ。

「待つて。……聞いてて」

秋人を見つめる阿笠の瞳に迷いや曇りはなく、真剣であることを察知した秋人は軽く頷いて阿笠の後ろで見ていることにした。

ありがとう、とお礼を言ってから阿笠は視線を綾女に移す。

まさかの阿笠の登場に綾女は驚いているが、今の阿笠にはそんなことは関係ない。

阿笠は綾女に歩み寄り、一歩後ろに下がった綾女を逃がさないように綾女の右手を握った。

久々の感触に綾女もなぜだか安堵する。

考えてみれば、2人はキスどころか手を繋いだことすらない。

ケンカ別れしたときはまだお互い相手がどう思っているか分からないときだったし、次に会ったときは両思いと分かったそばから別れ話だ。

なんて幼稚な恋。

だけど、その1つ1つが2人にとっては真剣そのものだった。

「……聞かせてくれる？ 2年間のこと」

「えっ、あ……うん」

「だけどその前に聞いて欲しいことがあるんだ」

え？と首を傾げた綾女に、阿笠はクスツと笑う。

聞きたいことは山ほどあるんだ。

あの別れた日、綾女は本当はどうしたかったのか。

別れてから、綾女はどんな日々を過ごしてきたのか。

羽柴のことをどう思い、どう捨ててきたのか。

羽柴を捨てるのがどれほど大変だったのか。

羽柴の養女でいることが許されているのか。

なぜ羽柴の当主は許してくれたのか。

綾女とつかさは一体誰の子どもなのか。

みかさとも本当に血が繋がっているのか。

なぜ綾女が養女になる必要があったのか。

いつから俺の存在を知っていたのか。

俺がつかさの幼なじみだから近づいたのか。

テレビに映る俺を見てどう思ったか。

俺と同じ技を使う君は俺に対して怒りはないのか。

俺がいると知りながらなぜまだサッカーを続けているのか。

なぜ羽柴よりもサッカーを取ったのか。

どんな気持ちで同じ世界に来てくれたのか。

聞きたいことは本当に山ほどあるんだけど、今必要なのはそんな世間話ではない。

もちろん、聞かなくてはならない内容だけど今はそんな余裕はなくて。

珍しく息を切らせながらここまで全力で来たのは、これを伝えるためなんだ。

「好きだ」

気の聞いた言葉なんて思い付かないし、いろいろ言いたいことはあるけど、バカな俺が今の気持ちを伝えるにはやっぱりこの言葉しかなくて。

「逃げてた俺をまだ好きでいてくれるのなら、どうか許して欲しい」
「だ……」

「例え羽柴を敵に回しても、もう逃げない。だから、……………」
「……」

なんと言ったら良いのか分からなくて言葉が続かない。

急に恥ずかしくなって顔を伏せようとしたけど、綾女の瞳に涙が溜まっているのが目に入って、逃げてはいけないと思った。

恥ずかしさを堪えて、目をギュッとつぶってもう一度綾女の顔を見下ろす。

「一緒にいて欲しい。……大好き……なんだ」

空は暗いが街灯のせいで阿笠の顔が耳まで真っ赤なのはきっと綾女にも見えている。

だけど綾女は、そう言った阿笠に満面の笑みを浮かべた。

瞳に溜まっている涙が溢れ出しそうで、でも溢れないようにしているのが愛しい。

笑顔1つで、過去なんかいくらでも凌駕できる。

「綾女……っ」

阿笠は握っていた綾女の手を引いて綾女を抱き寄せ、抱き締めた。

綾女は抵抗すらせず阿笠の背中に手を回した。

もっというろ口論するものだと思っていたのにいきなりラブシーンに入っただけ秋人は啞然としながら見ている。

去ったほうが良いのか、でも阿笠がいてくれと言ったからいたほうが良いのか。

「ありがとう、秋人」

綾女を抱き締めている手を離れた阿笠が振り返り、しどろもどろしていた秋人にそう言った。

その隣で涙を拭いながら綾女も言う。

「月影くん。電話……大悟くんに繋げてくれていたんだね」
「えっ、あ」

始めに綾女を呼んだ阿笠の声が秋人のスピーカーにしてある携帯からも聞こえてきたので、その時点で綾女は気づいていた。

綾女を責めながらも、阿笠に会わせてやろうとした秋人の気持ちが

伝わったのだ。

「ありがとう。月影くんや愛川くんが許してくれるように、あたし頑張るから」

精一杯笑いながら言う綾女に、少し罰が悪い秋人は通話中の携帯を切ってポケットに入れ、2人から視線を外して宿のほうを向いた。

行ってしまうとする秋人の名前を呼び、阿笠はもう一度ありがとうと叫んだ。

秋人は2人に背を向けながら、左手を上げた。

秋人の罪悪感と照れ隠しの行動であるとすぐに阿笠は理解する。

そのまま無言で秋人は立ち去って行った。

いよいよ2人きりになった阿笠と綾女は、恥ずかしそうに見つめあって笑った。

とにかく、伝えたかった想いは届いた。

「そういえば、なんで髪伸ばしてるの？」

「ん、ああ」

見上げた空は、意外にも星が散らばっていた。

どれがどの星座なのかとか夏の大三角形とか全然分からないけど、ただ単純に綺麗だなとは思える。

こんなに余裕を持って空を見上げたのは何年ぶりだろう。

君がいたらきつとたくさん問題は出てくるんだけど、それでも僕には君がいなきゃだめで。

瞬く星が唄うように、僕は何度でも君に言う。

「もう一度恋をしたら切ろうと思ったんだ」

大好きだ、と。

f
i
n

第57話【星は瞬く】（後書き）

これにて完結です。

このあと少しafter storyやanother storyなどの執筆をしていこうと思います。
最後までお付き合いお願いします^^

after story【招集1】

「あっ。やべ」

オリンピックが終わり、しばらく休暇中の阿笠にそれは突然訪れた。

「あー……取られちゃったね」

見事オリンピックで男子サッカーは優勝、女子は準優勝という結果を残した。

アベック優勝にはならなかったが、阿笠と綾女は共にMVPに選ばれ、一躍世界的に有名になった。

男子はオリンピック2大会連続優勝で、女子もメダルは初だったので日本は大いに盛り上がりを見せた。

さすが秋人と阿笠のコンビは劣ることなく強豪相手も果敢に攻め、決勝戦はPKにもつれこんだ末の勝利だ。

そしてオリンピック最中、突然阿笠が髪を切ったことにメディアは

大騒ぎ。

色は相変わらず金色だが、長かった髪の毛が肩につかない程度まで切られてしまい、昔の阿笠の髪型に戻った。

髪型だけでもずいぶん騒がれたのに優勝に加えてMVPとなれば報道も黙っていない。

相も変わらずメディアは阿笠に質問攻めだ。

そして今、ようやく大きな大会を終えて一段落し、阿笠と綾女がドライブで休憩していたところ記者に写真を取られてしまった。

明日には雑誌や新聞に載るだろう、なんてことを考えているあたりがノンキだ。

まあ、スキャンダル王の阿笠にはもう怖いものもない。

昔から何かとメディアに取り上げられて騒がれていたのだ、彼女がいたくらい問題ない。

おまけに相手はオリンピックで大活躍した羽柴綾女。

世間的には全く問題ないのだが……

「どうしよ。とりあえずおじさんに挨拶しなきゃかな」

「良いわよ。だって知ってるもの」

「えっ」

綾女は焦りすら見せず淡々と言った。

「もともとサッカー許してもらうときに大悟くんのこと話したの。それに今イギリスにいるみたいだし」

そうなんだ、と阿笠は相づちを打つものの良いのだろうかとも思う。

騒がれる前に一応報告するのが礼儀だろうが、イギリスにいるのなら仕方ない。

ならば母親にくらいはしたいと言った阿笠に、綾女は首を傾げながらうーんと悩む。

未成年じゃないんだしそこまでしなくても良いと綾女は思っている
ようだが、阿笠だけでなく綾女も今や国民的大スターなのだからそ
うもいかない。

結局綾女が折れて、後ほど羽柴家に挨拶に伺うことにした。

ちょうど阿笠は黒いスーツを着ているからタイミングも良い。

なぜスーツを着ているのかというと、そう、今は9月の半ばでつか
さの月命日。

命日は先月でオリンピック真っ最中だったが、綾女も阿笠も真夜中
にこっそりやって来た。

日本にいる限りはできるだけ命日は絶対に出たい。

そして月命日は毎回必ず墓参りに行っている綾女に、偶然阿笠が今
日つかさの墓参りに行かないかと声をかけた。

阿笠は好きなききにフラッと訪れ、今回も本当に偶然だったのだ。

休憩し終えた2人は再び車に乗り込んで走り出す。

2人一緒に墓参りをするのはこれが初めてだ。

そうそう、オリンピックの決勝戦には烈もかけつけてきてくれた。

フランスで修行している最中だけど理解ある師匠のおかげで決勝戦を見に行くことを許された。

フランスの大学にいるみかさもちょうど夏休みなので2人は一緒に来た。

いやあ、なかなか大変だった。

なんせ阿笠は烈とみかさに綾女を彼女として紹介したのだから。

まず綾女がオリンピックにいることを2人も知らなかったのだから、そこから驚いていた。

羽柴を捨てたという事実にも驚くし、阿笠と恋人になったことにも驚きもので、2人はショックで言葉がなかった。

そして、綾女とみかさが面と向かって対面したのはそのときが初めてなわけで。

重々しい空気の中、泣いて喜ぶ烈をよそにみかさは喜びたい気持ちを抑えて、一度ちゃんと両家で話したいと言った。

結局みかさは全てを知らないのだから仕方がない。

綾女も了承したようで、そもそも綾女自身ずっとさくらに聞きたいことがあった。

2年前に聞こうとしていたがそれは流れ、結局何もしないまま時は過ぎた。

阿笠が綾女を墓参りに誘ったとき、綾女はみかさも誘うと言っていて、それならばいいそのこと比護家みんなを誘えば良いのではない

かということになり、日本滞在中は烈が借りたままのあのマンションに烈と住んでいるため、烈も同伴してもらうことになった。

そう、今から向かうつかさの墓場には、比護家3人と綾女、阿笠、烈の6人が集まるのだ。

幸い今日は休日でも仕事はなく好都合で、全ての原因はさくらにあると綾女は耶斐を呼ばなかった。

そもそもイギリスにいるのだから呼ぶに呼べないが。

2年前の因縁が、ようやく今日明かされる。

n
e
x
t

after story【招集2】

墓場には、すでに烈とみかさがいてそこで綾女と阿笠が落ち合った。

まだ比護の両親は見えていなく、4人が一緒になるのはオリンピックで阿笠が綾女を紹介したとき以来だ。

ようやくバタバタした日常が落ち着いて、烈と会えるのが久々の阿笠はいつも以上に嬉しそうな顔をしている。

「烈ーっ!!」

綾女そっちのけで阿笠は烈に抱きついた。

「ははは、久しぶりーってほどでもないか？　　ったくよお、テレビでは爽やか紳士がこんな甘えたなんて」

そう、阿笠はテレビの前では高校のときと同じく爽やかで人に優しい青年だ。

阿笠がワガママで甘えん坊で泣き虫なことは阿笠と親しい人しか知

らない。

どっちが本当とかではなく両方阿笠なのだが、親しい人にしか心を広げないだけだ。

「メディアが勘違いしてるだけっ」

「そうだな」

烈は抱きついている阿笠の頭をポンポン叩く。

2人は出会ったときからこんな風にしてイチャついていて、みかは見慣れているが綾女は見るのが初めてだ。

彼氏たちに放っておかれた彼女たちのうち1人は嬉しそうに微笑んでいて、もう1人は啞然としている。

男同士で、しかも赤髪で青いコンタクトをしている男と金髪の男が抱き上っていたらはたから見ればかなり不気味だ。

「驚いた？ 2人っていつもこういうの。妬けちゃうくらい」

呆然としていた綾女に、生まれて初めてみかさのほうから話しかけ

た。

やっぱり姉妹だけあって似ているものがある。

驚いた綾女がみかさのほうを振り向くと、みかさはなおも2人を見つめながら続けた。

「2人の付き合いは小学生のときから。……兄弟のいないみい……あたしは幼なじみの大悟くんと烈くんがずっとお兄ちゃんだった」

「……」

「お姉ちゃんのためにサッカーをする大悟くんは辛そうで、だけどいつも笑ってた」

阿笠の口からサッカーが好きだという言葉聞いたことは一度もない。

サッカーをやらない未来はないと言っていたことはあるが、それは好きだから続けたいのではなく、つかさとの約束があるから義務的なものだ。

だけど、それでもサッカーをやりたくないと言ったことや嫌いだと言ったことはなかった。

今日も勝てた、また秋人に怒られちゃった、そう言いながらいつも笑っていた。

阿笠が笑えば嬉しいけど、辛さをわざと隠しているみたいで哀しくもなるとみかさはずっと思っていた。

自分の姉のために幼なじみが自分の人生を台無しにしてしまうのは切なすぎて。

サッカー仲間だった烈くんもサッカーをやめ、彼女の麻冬さんも結局は秋人さんに渡してしまい、いつだって大悟くんは淋しさでいっぱいだったはずなのに。

いろんなものを背負って、プレッシャーに押し潰されそうになりながらそれでも笑ってくれているから、どうしても願わずにはいられない。

彼の幸せを。

「……あなたは、……あなたとの恋愛は初めて大悟くんが望んだワガママだった」

「初めて……？」

「人のため誰かのため、いつもそうやって自分のことは後回しにして自分が傷ついてた」

2年前、諦めかけた恋を頑張りたいと言ったあのときが初めての大悟くんのワガママで、初めて自分の意見を言った。

それが嬉しくて、あたしと羽柴綾女の関係とかどうでもよくなって、ただ頑張っただけで欲しいと思えなかった。

だから、さすがにそのあと羽柴綾女と別れたんだと烈くんから聞いたときはあたしの中で羽柴綾女イコール悪者というイメージしか生まれなかった。

たくさんたくさん大悟くんを傷つけた、最低の女。

そうと思えなくて、だから大悟くんから羽柴綾女を彼女として紹介されたときには羽柴綾女を刺してしまいそうなほど憎らしかった。

だけど、違うよね。

大悟くんがどんなに傷ついても、それでも愛した人。

大悟くんが初めて貫いた自分の気持ちを応援しないわけにはいかないでしょう。

相手が誰だろうと、大悟くんが幸せならそれで良い。

大悟くんが本当の笑顔になれるのなら、あたしも嬉しい。

「……幸せにできる？　大悟くんを」

ようやくみかさが綾女の顔を見た。

「できないのなら、大悟くんには近づかないで。大悟くんには他の誰よりも何千倍も幸せになって欲しいのよ」

真っ直ぐな瞳で綾女を見つめているみかさから綾女は目を離すことができない。

みかさは姉がいると知り喜ばしい曲面なのに、綾女もようやく妹と会話ができて嬉しい場面のはずなのに、初めて話した内容がこれ。

積みもり積もる話やつかさのことなどいろいろあるだろうのに、あえてみかさは阿笠の話題を投げ掛けた。

つかさが死んだあの日からずっと心の中で兄弟を追い求めている。

夢が叶ったのは事実だがでもそれ以上に、自分が幸せだと感じる前に阿笠に幸せを掴んで欲しかった。

たかが幼なじみのためにそこまでするのかもしれないが、みかさにとって阿笠の存在だけがつかさが生きた証。

つかさの幼なじみだった阿笠は、つかさのためにサッカーをしている阿笠は、つかさが確かに生きていたことを証明してくれているから。

そんな彼をないがしろににできるわけがない。

苦労を全て背負わせ、孤独な背中をどれほど見てきたか。

そんな背中に優しく触れて良いのはみかさではない。

つかさ以上に、阿笠を愛した人だけ。

「2人で……一緒に幸せになるって決めたの。でもきつと、彼が愛してくれる以上にあたしも彼を愛するわ」

「……」

「……ありがとう、みかさ」

綾女は優しく微笑んでそう言った。

初めてみかさは名前を呼ばれ、嬉しい反面照れくさい気持ちもあるけど、目を見開いて次には顔をほころばせた。

「お姉ちゃん——」

ポツリと呟いたその言葉は、綾女に贈るものかそれとも綾女と瓜二つのつかさへの言葉なのか。

みかさ自身にも分からないが自然と口が動いたのだ。

ただ1つ言えることは、目の前にいる人は姉・つかさに瓜二つの双子の姉・綾女であるという事実。

阿笠の人生がつかさの存在を証明していることもまた事実なのだが、綾女の存在こそつかさがそこにいたことを表す紛れもない人物。

わずか小2でいなくなった姉が今も生きていたなら、こんな風になっ
っていたのだろうか。

どんな理由があったか知らないが羽柴綾女が養女にならなければ2
人の姉と楽しく過ごしてこれただろうか。

大悟くんが双子の姉のどちらを選んだだろうか。

そして、烈くんは羽柴綾女が比護家にいたとしても姉のどちらかではなくあたしを選んでくれただろうか。

そんなありもしない妄想をいくらしても意味はないのだけど、狂った菌車が正常に動いていたならと願わずにはいられない。

もしかしたらそこには違った未来があったのかもしれないのだから。

なおもラブラブな彼氏たちを無視してそんな会話をしていたら、後ろから革靴で歩く足音が聞こえてきた。

綾女とみかさが同時に振り向くとそこにいたのは、いるはずのない人間。

「……お父さん?!」

羽柴耶斐だった。

n
e
x
t

after story【招集3】

なんでこんなところにいるのかと綾女が詰め寄ろうとする前に、耶斐の後ろから続々と重要人物がやって来た。

比護さくらと比護要、みかさの両親だ。

全員が揃うと、みんなで顔を見合わせてシンと静まり返る。

まさか耶斐まで来るとは思っていなかったから無駄に緊張感も走るが、そんな空気を断ち切るかのごとくさくらが口を開いた。

「……耶斐を呼んだのはあたしです。耶斐と話したの。全てを終わらせようと思って」

墓参りという口実のもとでの招集会。

男性陣はみな黒いスーツに黒いネクタイをしていて、女性陣は形は違うものの黒い服を身にまとっている。

女性陣は半袖やノースリーブの上にボレロを羽織ったりしているが、

男性たちは揃いも揃って上着を羽織っていて暑くないのだろうか。

だがそんな事実を気にする余裕もない雰囲気、みかさは息を飲んだ。

「……そう。良いわ。じゃあ、お話願えますか？　比護……さくらさん」

綾女は真っ直ぐにさくらを見つめた。

話したいことがあるからと要は言われてついてきたのだが、まさか綾女がいるとは知らずに驚きを隠せなかったがどうにか平然を装う。

特別養子縁組の規則として、綾女は比護さくらと要に会うことは許されない。

それなのに今この場にいるのだから驚く以外の感情はない。

「さくら……？　これは一体どういう、」

「要。あなたにも話さなくてはならないことがあるの」

「その前に、君、阿笠大悟くん？」

さくらを遮るように、耶斐が阿笠に話しかけた。

不意打ちにビクッと体を跳ねさせたが、阿笠はすぐに返事をして耶斐を見やる。

すると耶斐は突然頭を下げてこう言った。

「すまない。うちの者のせいで君にあんな怪我を負わせた」
「えっ」

「君ももう知っているだろうが、全ては羽柴の最大の秘密を表にバラさないためのことだった。本当に申し訳ない」

あの耶斐が、世界的大企業の羽柴財閥の社長が深々と頭を下げている。

耶斐に頭を下げさせるなんて恐れ多くて普通の人には到底無理で、阿笠も慌てて頭を上げるように言った。

阿笠に言われて顔を上げた耶斐は、真っ直ぐに阿笠を見つめて阿笠からの言葉を待つ。

それを感じたのか、阿笠はゴクリと唾を飲み込み、手を握りしめながら応えた。

「あなたのせいではありません。羽柴を思つての使用人の独断だと聞きました。けど、それでも頭を下げてくださいるなら俺も謝らなければなりません」

「……？」

「それほどまでに秘めておきたいあなた方の秘密を勝手に知ってしまったこと、心から詫びます」

耶斐にひけを劣らず阿笠も真っ直ぐに耶斐を見据えた。

一方的に傷つけてしまったのに、自分にも非があると言つた阿笠に対し耶斐は目を見開いた。

まさかそんな反応が返ってくるとは思わなかったのだろう。

真剣な眼差しをしているせいか、太陽に照らされて輝く金色の髪が眩しいのか耶斐は瞼を閉じて、軽く俯く。

だが阿笠には、耶斐が微かに微笑んでいるのが見えた。

「……さあ、話してください。あなた方がそうまでして22年近く
守り通そうとした、……綾女とつかさが生まれた経緯を」

ようやく、羽柴のトップシークレットが暴かれる。

n
e
x
t

a f t e r s t o r y【招集4】（前書き）

耶斐・要・さくらの学生時代の話で始まります。

after story【招集4】

『へえ。君が学園唯一のサッカー特待くんか』

羽柴耶斐は幼稚部からずっと桜ノ宮学園に在籍していて、当然ながら高等部に進学した。

桜ノ宮はいわゆる金持ちしか入れず、静岡を拠点として近隣の県からも金持ち子息令嬢が来ていて寮も完備している。

特徴的なのはクラスを家柄や成績などからAからEにランク分けしており、学園のトップクラスと言われる人たちは常にAクラスだ。

羽柴のような大金持ちは当然Aクラスで、その中でもやはりトップレベルだった。

Aクラスはクラスメートがほとんど変わることもないので、毎年代わり映えのしない面子だったが高等部に上がった直後はなかなかザワついた。

Aクラスに中流階級の間人が2人もいたからだ。

1人はサッカーの特待として入った比護要。

そしてもう1人は勉強の特待生である石橋さくらだ。

『そうだけど。君は？』

特待生はAクラスと決まっていて、高等部1年のときに3人は出会うべくして出会った。

入学式後クラスに戻ったとき、みんなが2人を珍しいものを見るような眼差しをしていた中堂々と耶斐が要に話しかけた。

787

『羽柴耶斐。俺もサッカーやってんだ。すげえ奴来るって言ってたから楽しみだった』

『羽柴……あつ、羽柴財閥の？』

『ああ、まあ。でも家は関係なく仲良くやろうぜ』

爽やかに笑いながらそう言って差しのべた耶斐の手を、要も疑うことなく握った。

『ああ』

これが全ての始まりだった。

羽柴ほどの家柄を持っていながら自慢するでも上から見てくるわけでもなく、対等に普通の友人として接してくる耶斐に好感を持った要は、すぐに耶斐と仲良くなりいつしか親友にまでなっていた。

運動にも力を入れている桜ノ宮が学園史上初のサッカー特待を取ったので（勉強特待はたまにいる）要は学園中から注目されていて、更に耶斐の親友ともなれば中流階級なんか関係なくすぐに学園の中でスターとなった。

かなり有望とされていた要は、確かにサッカー部に貢献していたし、当時同じフォワードだった耶斐と2トップで、耶斐もまたかなりのレベルと才能を持つ人で、特待の要と同等の技術だった。

普通の庶民はある程度小金持ちくらいのも要もAクラスの人間として受け入れられるのにそう長い時間はかからなかった。

そして、さくらかもその才能を存分に発揮し学園史上初と言われるほ

どの頭の良さを持っていた。

それまでは、家柄・成績・スポーツ共に学園一だった羽柴耶斐を迎え撃つかのごとく、さくらは試験では必ず首位に立ち、要とはサッカーを競いあった。

要と仲良くなるということはイコールさくらとも必然的に親しくなる。

耶斐と要とさくらは、誰もが羨むほどの仲になっていた。

そのまま高等部を卒業し大学部に上がることになり、耶斐とさくらは法学部、要は理学部へと進学するが耶斐も要もサッカーは続けたので3人の仲は依然として変わらない。

2人は高校時代にはU・19に選ばれたり大学に上がってから日本代表に選ばれたりしていたが、耶斐は家を継ぐことを優先し日本代表は辞退、要もまた将来ずっとサッカーをするつもりはないと辞退した。

もとよりさくらと要は恋人であり、幸せな家庭を築きたいのだと要は笑っていた。

『進路、どうすんの？』

『んん。専業主婦になろっかな』

あるとき学部棟の講義室でさくらと耶斐はこんな会話をしていた。

『誰の？』

『誰って……要に決まってるでしょう？』

『ならなんでそんな切なそうに笑う？』

秀才だが見た目はいかにも真面目という身なりではなく、どこにもいる可愛らしい女の子だったさくら。

長いパーマのかかった髪をフワフワしたゴムで横で1つに縛っているのが愛らしくて、学園にいるどんな令嬢よりも耶斐には輝いて見えた。

物をはっきり言う割には照れ屋で素直なところが可愛く、耶斐は友達になってからすぐにさくらを好きになった。

『な、何言ってるのよっ』

だけど、好きになったところでさくらは親友の恋人。

奪うつもりもなかったし幸せになってくれるのならそれだけで十分だと、ずっと気持ちを隠してきた。

『……こっち向けよ、さくら』

『……嫌……』

『俺の目を見てもう一度言ってみろよ。要の妻になるって』

だけど、4年生になった春、さくらが専業主婦になると言いながら哀しそうに笑っていたのを見て万が一の可能性に賭けた。

だめでもともと、それでも良いから確かめたかった。

顔を背けたさくらを無理矢理こっちに向かせると、さくらの顔は真っ赤になっていて瞳が潤んでいて。

そのときすぐに、自分たちが両思いであることを確信した。

『……好きなんだろ？ 俺のこと』

『そんなことっ！』

『俺は好きだ』

そして、このとき初めてさくらを抱き締めた。

7年目の初恋。

恋よりも親友だと思っていたのに、両思いだと知ったとたんそんな方程式は消え去った。

要の顔が一瞬浮かんだが、それを振り切るようにさくらを抱き締める手に力を込めた。

『あたしも……好き』

『さくら——』

『だけど、ごめんなさい。あたしには要を裏切れない』

さくらは耶斐の胸を押して離れた。

まさかのセリフに耶斐は呆然とするしかなく。

『この学園も……要を追ってついてきたの。彼とは昔から将来を誓っていた。……あたしは要と結婚するわ』

『なんでっ………おかしいだろ?! 両思いなのに!』

必死に食い下がる耶斐の努力も虚しく、さくらはごめんなさいと言
いながらその場を走り去って行った。

追いかけてやろうとしたけど、走り去る彼女の瞳から涙が流れているの
が見えて足を止めてしまい、追いかけることができなかった。

要にはこんなことがあったなんて知られたくなくて、3人でいると
きは今まで通りを装っていたけど同じ学部にしようとさくらと一緒に
の時間はほばなくなった。

どちらからともなくお互いに避けていた。

そうして、時はすぐに流れて大学部も卒業し、俺たちはそれぞれの
道に旅立った。

卒業してすぐ要とさくらの結婚式は行われ、俺も当然のことながら
招待された。

さくらのドレス姿はとても美しく、そのままさらっていきたくな

ったけどさくらの隣で笑っている要を見たら、そんな気持ちはすぐになくなった。

俺は要の親友、だからこの場にいる。

そう言い聞かせたかったが、やっぱりどうしても想いを抑えることはできず。

式が終わり控室で私服に着替え終えたであろうさくらのもとを訪れた。

『耶斐……』

『本当に結婚するのか』

『式を……見たでしょう？　もう後にはひけないのよ』

『それでも俺は良いと言っても？』

親友の結婚を祝福したい。

そう思う一方で、さくらと結ばれたいと思う気持ちもあって。

もう頭の中は混乱していた。

『……隣で笑ってくれる要を愛しいと思った。あなたを愛したこと、一生をかけて彼の側で償うつもりよ』

『……俺との恋愛は罪だって言うのかよ?!』

『っ……』

好きで、好きすぎてどうしようもなかった。

こんな想いをするのならば高等部に進学したあるとき、要と友達にならなければ良かった。

あるとき要に話しかけていなければ、さくらを好きになることもなかったのに。

だけど、そんなことを思う自分が憎らしい。

大事な親友をそんな風に思ってしまう自分が許せなくて、どうしたら良いのか自分でも分からなくなっていた。

『あなたは……羽柴を継ぐ身。それにみあった恋をして』

『誰よりもお前を愛してるっ……! 羽柴の地位なんかいらない!』

! お前さえいたら何もいらなかったのに……!』

泣きながらそう言ったさくらに俺は叫び、そのまま押し倒した。

だめだと言う彼女を無視し、抑え切れない思いをぶちまけて彼女を犯してしまった。

自分も彼女も泣いていて、愛しあっていると伝わってくるのにさくらから愛の言葉を聞くことはなく、8年目を迎えた恋は終わりを迎えた。

その後はやはり要とはよく会っていたから3人で会うこともしばしばあったが、さくらも俺も目を合わせることはなく、そのうち比護家には双子の子どもが生まれた。

俺もそれから今の妻と結婚して、さくらへの思いも何とか吹っ切ることができた。

これで本当に全てが終わるのだと思っていた。

n
e
x
t

a f t e r s t o r y【招集5】（前書き）

長めです。

after story【招集5】

「妻は子どもを産めない体で、それでも俺の子どもが欲しいと言った」

秘密を知っているといっても阿笠や烈はそこまで知らず、みかさ共々驚いた表情を浮かべている。

知っているのは、当事者のさくらと耶斐から全てを聞いていた綾女だけ。

要にいたっては何も知らないはずなのに、凜としながら真っ直ぐに耶斐を見つめていた。

「……ある日、綾女とつかさちゃんが公園で遊んでいるのを見かけた。元気にボールで遊んでいるつかさちゃんとは対照的に、綾女はそんなつかさちゃんを愛しげに見ていた。その光景はまるで自分と要のようで、目を疑った」

そして、知られないように双子の髪を拝借して黙ってDNA鑑定を頼んだと付け加えた。

もしかしたら自分の子どもかもしれないという淡い期待に賭けてみると、その期待はいとも簡単に叶った。

「綾女は正真正銘俺の子どもだった。……だがつかさちゃん是要の子ども」

どういうことだ、と阿笠とみかさは首を傾げる。

双子なのに父親が違うなんてありえないはず。

それなのに綾女は耶斐の娘でつかさは要の娘？

そこまで説明し終えた耶斐に代わり、今度はさくらが説明を始めた。

「……2人はどちらも私の娘。確かに双子よ」
「……意味が分からない」

ポツリとみかさが呟く。

常識を超えた内容にすでにキャパオーバー状態だが、それでもみかさは何とか聞き取ろうとしている。

さくらはみかさをチラリと横目で見て、申し訳なさそうに要のほうを向いた。

だが驚くでもなく啞然とするでもなく、なおも真っ直ぐに耶斐を見つめ、さくらの視線に気づいて今度はさくらを見つめてくる要の顔を見ると一気に怖くなったのか、さくらはうつむきながら微かに震えた。

耶斐もあまりに酷すぎて二の句が告げず、2人は黙ってしまった。

確かに、阿笠を傷つけてまで守ろうとした秘密なのだからそう簡単に言えることではない。

だがここで言わなかったら拗れた糸は二度と戻らない。

「……異父重複受精」

静まり返る空間に言葉を投げたのは、意外にも烈だった。

みんなが一斉に烈を見、烈は軽く目を閉じて続けた。

「24時間以内に2人以上の人とセックスした場合、両方と受精している場合がある。HSと言われる。……かなりの低い確率で起こるものだが、おばさんから生まれた双子は異父姉妹だ」

烈があの日手帳の中から探した知り合いの産婦人科医から、おそろくの確率でHSだろうと言われた。

そのため烈だけが部外者の中で唯一事実を知ることができたのだった。

「……そう。烈くんの言う通り」

烈にサラリと言われ、覚悟を決めたさくらは賛同する。

「比護つかさの母親は私、比護さくらで父親は比護要」

さくらは綾女と耶斐を交互に見ながら、最後にはもう一度綾女を見た。

「そして、羽柴綾女、あなたの母親は私、……父親は羽柴耶斐よ。私と要はO型で私たちからはO型しか生まれない。あなたがB型なのが何よりの証拠」

さくらの言葉に、みかさは目を丸くして手で口を押さえた。

22年間秘密にしてきたものが、ようやく暴かれた。

異父重複受精などそうそう起こるものではないので、一般の人が知らないのは無理もない。

さくらも、産婦人科医からそう告げられたときには顔を青くした。

もともと妊娠したと分かったときに、どちらの子どもなのか分からなくてどうしたら良いか迷っていたが、まさかおろすわけにはいかなかった。

子どもができたと言ふ要に不信感を与えるわけにはいかず、要の子どもだと信じて産んだ。

まさか双子の片割れが耶斐の娘だとは思わずに。

だが耶斐の子どもだからと言って切り離すことはできなく、自分が母親であることには間違いなかった。

それでもどうしても自分が犯した過ちが許せないさくらは、長女の名前を綾女とし、次女をつかさに決めた。

「……耶斐の斐はアヤと読める。だから綾女、耶斐の娘に生まれたあなたを綾女と名付けたのよ。それとは対照的にするためにつかさはあえて平仮名にして、あなたの名前とは何の関係性もないものにしたの」

いつしか、自分の名前の意味に気づいたが今まさに名付け親に事実だと釘を刺され、綾女は悔しそうに唇を噛んだ。

そうだろうとは思っていたけど、心のどこかでは違う理由を求めて

いた。

そんな適当な由来でつけられたなんて認めたくなく、未練がましいこともしないで欲しかった。

「……最低ね。最初から養子に出すつもりだったんだ？」

「綾……」

「比護家に生まれたのに！ 始めから比護の人間として育てるつもりがなかったわけ?!」

綾女はさくらに食って掛かる。

今にも胸ぐらを掴みかかりそうなほどの勢いで、阿笠も綾女を止めようと思ったがあまりに真剣な顔をしているので手を出せなかった。

「パパも！ 何とか言ったらどうなの?! 知らなかったで済まされる話じゃないでしょ?!」

反論する余裕すら与えず、今度は要に向かって叫んだ。

要は綾女を直視して、少しだけ微笑んでみせた。

なぜ笑うのか理解できない綾女は眉をひそめたが、そんな綾女に要はこう言った。

「まだパパと呼んでくれるんだね」

「なっ……」

「知ってたよ。全部」

落ち着いた口調の要に、みんなが振り向いた。

予想外の要の言葉は、その場にいる人みんなを凍らせた。

そんな中一番驚いているのはやはり当事者のさくらと耶斐で、2人は今にも飛び出してしまうようなほど目を見開いた。

ばかな、と呟く耶斐をよそに要は淡々と言った。

「2人が愛しあっていたことも、綾女が耶斐の娘であることも。……だからあの日、耶斐から綾女を養女にしたいと言われたとき受け入れたんだ」

「要……」

「耶斐、君は親友である俺たちの娘なら本当の自分の娘として可愛がれる、だからどうか養女に欲しいと言ったね」

要はなおも驚いている耶斐を見ながら言い、そして次にはさくらを見た。

「さくら、親友のために何とかしてあげたいと泣いたね。……見事な芝居だった」

耶斐からの養女の申し出があった日、要には2人の芝居がとても醜く見えた。

耶斐が言った言葉に嘘はないだろうけど、そんな理由で子どもを譲れるわけがないことくらい耶斐なら分かっていたはず。

羽柴の跡取りにするには、どこの子どもか分からない人間ではだめだと、親友の俺の子どもならきつと大丈夫だと君は言っていたけれど、どうせならはつきりと君たちの口から聞きたかった。

綾女は羽柴の血が繋がっているのだから返して欲しい、と。

口が裂けてもそんなことを言わなかった君たちを憎らしいとさえ思った。

「……そんな幼稚な理由で俺が納得するとても？　俺の血が繋がってなくても綾女は俺の娘だ」

要は耶斐とさくらを睨みながら言い切る。

大学時代から、いや、高校時代から2人が惹かれあっていたことはすぐに分かった。

だが自分はさくらの恋人、親友を牽制することも彼女を譲ることもできず知らないフリをし続けた。

4歳まで育てた双子を見ていれば、つかさは自分に性格がそっくりだが綾女はどう足掻いても似ていないことくらいすぐに分かった。

綾女に懐かしさを感じるのはなぜか、ずっと疑問に思っていたがすぐに気づいた。

耶斐も言っていたように、2人の関係がまるで耶斐と俺のようだと。

だがつかさが俺の娘で綾女は耶斐の娘だなんてそんな信じがたいことがあるのかと、インターネットで調べてみたらそういう受精卵も場合によってはあるのだと知り、疑いが決定的になったのはやっぱり耶斐が養女の話を持ち出したとき。

ああ、そうだったんだ、と哀しさ半分納得半分だった。

「……俺はさくらに、綾女を渡さなければ秘密を要にバラすし要の会社も潰すと脅しをかけた」

冷戦の中、声を押し殺しながら耶斐は言った。

「知っていたのなら！　なぜお前は綾女を養女にした？！」

「大方そう言われただろうことは予想できたさ。だけど俺には分かる。例えさくらが断っても、お前は秘密はバラさないし会社も潰さない。……親友だからな」

「要……」

耶斐は困惑したように眉を八の字に上げた。

耶斐がどんな人間なのかは要が一番知っている。

高等部から大学部までの7年間、ずっとつるんできた一番の友達な

のだから。

周りはなぜそんな大した地位もない要とわざわざ一緒にいるのかとよく耶斐に詰め寄っていたが、耶斐は必ずこう言った。

家柄で友達を選ぶお前らと一緒にするな、と。

羽柴の跡取りである耶斐にはもっとみあった人間をと言われても、耶斐は要から離れようとはしなかったし要もそんな耶斐が大好きだった。

無二の親友だから。

「だけど、綾女が成長したらいつかきつとバレるだろうし、確かに綾女は耶斐の血を受け継いでいる。……俺にとっても大事な娘だけど、綾女はさくらと耶斐が想いあった結果できた子。だから、本当の父親のもとで暮らしたほうが良いと思ったんだ」

要は耶斐とさくらの前を素通りし、綾女の目の前に立つ。

養女に出してから一度も直に見ることはなかった娘。

血なんか関係ない。

養女に出したのを後悔したほど、愛しい我が子。

「すまない。お前の気持ち関係なしに勝手なことをして」

「パパ……」

「お前が羽柴にしようと、誰の子だろうと、俺はお前を愛してる。ずっと伝えたかった……」

そう言った要の瞳は涙で潤んでいて、それを見て感化された綾女はボロボロと涙を溢した。

簡単に養女に出されてしまう自分は嫌われているんじゃないかと思っていた。

事実を知ったとき、厄介払いされたんだと悟った。

だから、まさかこんなにも愛してくれているなんて夢にも思わなかった。

綾女は要に抱きつき、声を上げながら泣いた。

事実を知って哀しいのか感動しているのか、隣でみかさも泣いていて、耶斐とさくらは罰が悪そうに俯いている。

「……要、ごめんなさい。ずっと黙っていて、本当に。……要が望むのなら離婚しても構わな……」
「言っただろう、知っていたと」

要は綾女を抱き締めながら、さくらの言葉を遮った。

横目でさくらを見ると、さくらは不思議そうな表情をしながら哀しげな目を向けた。

「君は俺を選んでくれた。俺の側にいてくれた。耶斐に惹かれながらも」

「……」

「それだけで良かったんだ。……俺は君のことがとても好きだから」

その瞬間、緊張の糸が解けたようにさくらは手で顔を覆い隠しながらワンワン泣いた。

それこそ子どもみたいに、綾女よりも子どもらしい泣き方をしている、要はびっくりするがすぐに微笑んだ。

そして、最後に付け加えてありがとうと言った。

この長い年月、親友を騙すしかできなかった耶斐と、夫を裏切るこ
としかできなかったさくら。

だが要がもう良いよと笑って許してくれたから、長い年月をかけて
積もった邪の気持ちが消え去った。

さくらだけでなく耶斐も、目を押さえながらも少しだけ泣いている。

「ママ、ママ……」

要に抱き締められている綾女が譫言のようにさくらを呼ぶ。

それに気づいた要が綾女を離すと、綾女は泣いているさくらに話しかけた。

「ママ……も、あたしのこと愛してくれてた？ それとも厄介払いしかかった……？」

綾女の言葉にさくらは顔を上げ、ぐしゃぐしゃな泣き顔をしながら綾女をキッと睨む。

「……子どもを愛してない親がどこにいますか。……いずれあなたも自分の父親が要ではないと分かるかもしれない、それならば傷が浅いうちに耶斐のもとに返したほうが良いと思ったのよ。耶斐なら……要の親友だから大事に愛を持って育ててくれると思ったの……」

みんな、全てあたしのために。

ああ、一番聞きたかった言葉ようやく聞けた。

あたしがパパの娘じゃないとかつかさとは異父姉妹だとか、そんなことはもはやどうでも良かったのよ。

ずっと確かめたかったのは、こんなあたしをパパとママは愛してくれていたのかという事実。

パパもママもあたしを愛してると言ってくれた、だからそれだけでもう十分。

「……お前が望むなら戸籍を戻すが、どうしたい」

耶斐が綾女に向かって言った。

「なあに、跡取りじゃないからいらない？」

「え？ いやっ、そういうわけでは——」

「ふふ、冗談よ」

珍しく慌てる耶斐が新鮮で綾女はつい笑ってしまう。

確かに名目上は羽柴の跡取りとしての養女だったが、耶斐が綾女のこと文句を言ったことは一度もなかった。

桜ノ宮学園から他の学校へ転校したときも、さくらが中宮大にサッカー推薦で入学したときも。

そう、無理強いしたかったのではなく耶斐は綾女には自由に生きて欲しかった。

羽柴を継がないならそれでも良い、継がなくてもお前は大事な娘だと、耶斐なりの愛情をもって育ててきた。

「あたしは羽柴綾女よ。……あたしがサッカーすることでお父さんは周りからいろいろ批難されるかもしれない。それでも受け入れてくれるなら、あたしは羽柴でありたい」

そんな耶斐の気持ちを汲み取れないほど綾女もバカではない。

それでも、羽柴の一人娘である以上自分が継ぐしかないというプレッシャーはいつでも背負ってきたけれど。

涙を拭いながら前を見据えて真っ直ぐに耶斐を見るその姿勢は、凜として堂々と意思を貫く彼女は、顔は確かにさくらそのものだが耶斐を思わせた。

さくらにも要にも耶斐にも、その姿は耶斐そのものに見え、輝いて見えた。

3人の恋愛のもつれによる哀しい運命を背負ってきたが、それでもなお綾女は幸せだと笑う。

「良いに……決まってるだろ。何よりお前が一番大事だ」
「ありがとう」

枷を外して自由を掴んだ綾女は、この上なく清々しい表情をしていた。

n
e
x
t

after story【招集6】

話し合いの結果、綾女はこのまま羽柴家の人間として生きることになり、同時に特別養子縁組の掟を無視していつでも比護家に遊びに来て良いということになった。

もちろん羽柴の一員としてそれなりの節度は守ることになるが、耶斐は快く承諾してくれたしみかさも受け入れた。

みかさにとって綾女はこの世に生きるたった1人の姉。

実姉。

まだギクシャクすることもあるし、上手く馴染めないかもしれないがそれでも姉妹がいなかった2人にとってはかけがえのない存在であることに代わりはない。

羽柴のトップシークレットを公にし、さくらと要の本音も知れたところでもう大人たちに隠すものはなにもなかった。

多少気まずさもあったが、みんなで綾女の墓参りを済ませ、どうせならと共に食事をすることにした。

どこかで食べるのも良いがせっかくなので比護家で食べることにし、それぞれの車に乗り合い比護家に向かう。

烈と阿笠は親子同士水入らずのほうが良いと帰ろうとしたが、耶斐以外のみんなが引き留め、全員でということになる。（そもそも耶斐はあまり烈や阿笠を知らないのだ）

まあ、比護の人間たちにとって阿笠はつかさとみかさの大事な幼なじみ、烈はみかさの婚約者なのだから家族も同然である。

今はなかなか会えないが、彼らが学生的时候は自由に比護家を出入りしていたほど。

家に着くなり、女性3人がいそいそと食事を作り始めた。

戸籍が違うといえど、本来ならば仲良く食事やスイーツを作ったりしていたはずの3人だ。

そこには確かに家族の絆を感じるものがある。

そんな3人に任せ、男性4人は居間のソファに腰を下ろして、堅苦しいスーツの上着を脱いでいた。

「いやあ、大悟くんが綾女の彼氏とは」

「嬉しいっすね」

「烈くんとも義兄弟になるのか。あ、ならないか。ははは」

要と烈は楽しげにそう言うが、その手の会話をされて阿笠はハッと気づく。

まだ正式に自分の口から言っていなかった。

「あ、の！ お……僕、綾女さんとお付き合いさせてもらってる阿笠大悟です」

「一応綾女からは聞いていたが」

「言うのが遅くなってすみません！」

頭を深々と下げて慌ててそう言う阿笠に、耶斐はクスリと笑う。

「まだ君のことはよく知らないが、要も陸も君を推している。悪い

奴ではなさそうだ」

「当然。大悟くんほどの人間なかないぞ。優しいし格好良いし頭良いし、今や日本を背負うJリーガーだ」

まるで自分のことのように自慢げに要は言った。

要にとって阿笠は息子同然であり、それが綾女の恋人とくれば嬉しいものだ。

頭を下げている阿笠に、耶斐は頭を上げるように促した。

ひとまず頭を上げてから耶斐を見ると、笑っている要に対して耶斐は照れを隠すように軽く唇を尖らせていた。

羽柴財閥の社長と聞いただけで近寄りがたくなるが、要と話している耶斐はどこそこにいる普通の父親と変わらない。

綾女を愛し、綾女を想う1人の父親に過ぎないのだと確信して安堵した。

「うーん、つかさちゃんのサッカーの才能はおじさん譲りで羽柴さんの才能は耶斐さん譲りかぁ」

阿笠の隣で烈は考えこむように唸っている。

「いや、まあ才能は俺の遺伝かもしれないが綾女のあのスタイルは俺とは全く違う」

「え？」

「俺はポストプレーをこなしながら得点するフォワードだった」
「てことは、」

阿笠が聞き返すと、耶斐はフツと口元を綻ばせた。

「君の真似さ」

え？と声を上げながら、阿笠は烈と顔を見合わせた。

確かに綾女のプレーは自分に似ていると思うし、周りからもそう言われた。

だがそれは偶然であるとはかり思っていたが、よく考えればそんな偶然なんてあるはずがない。

阿笠は学生時代も含めこれまで何百人というフォワードを見てきたが、自分のようなサッカーをやる人はいなかった。

ぶっちゃけた話、自分の実力がどのくらい分かっているし俺と同じ才能を持って同じプレーできる人などいないと思っていた。

だからこそその他人をおちよくる技を見せつけるわけだし、天才と呼ばれることに否定した覚えもない。

「阿笠の真似なんて普通できませんよ。こいつは日本ではトッププレーヤーだ」

耶斐の言葉に烈は反論するが、耶斐は首を横に振る。

「綾女はつかさちゃんが亡くなったときからずっと阿笠くんを見てきた。……阿笠くん、君はつかさちゃんと約束をしたようだね」

「え、あ」

「あの子がサッカーをし始めた理由知ってるね？ 君はつかさちゃんにサッカーを教わった。だから君の真似をすればつかさちゃんのようになれると、つかさちゃんが生きていたらそんなプレーをしたはずだと思っただろう」

淡々と語る耶斐に、阿笠はついていけずポカンと口を開けている。

綾女がそんなことを思っていたとは知らなかった。

そこまでつかさになろうとしていたなんて知らなかった。

どれほどつかさのことを思い、つかさのために尽くしてきたのだろう。

つかさが死ななければサッカーをすることはなかった彼女が今やLリーガー。

大学に通いながらLリーグに所属している。

「俺や耶斐から見ても大悟くんは天才的だと思うし、サッカーの神に愛されてる。だから君の真似なんてしようと思ってできるもんじゃない」

「ああ、要の言う通り」

「つまりだ。あの子にも俺らを越して君と同じくらいの才能があったというだけさ」

要の説明に阿笠も烈も納得せざるを得ない。

阿笠ほどの才能がなければ無理だというのにできるのなら、それは阿笠ほどの才能を持っているという話。

そんな人がたまたま女性で、たまたまつかさの双子の姉で、そして必然的に阿笠の恋人だったというだけ。

阿笠がサッカーをしなければ、綾女もサッカーを始めなければ出会うことはなかった2人。

もっと言うならば、つかさがいたら出会うことはなかった。

そう言ってしまうのは酷かもしれないが、つかさが生きていたら今の現実はない。

死んで良かったと言いたいのではなく、つかさが亡くなったのも全て運命だった。

つかさが亡くなったあの日から、2人のサッカー人生は始まったのだから。

「そういえば大悟くん、なんで髪切ったんだい？　綺麗だったのに」
「あはは」

「大悟くんもなかなかスキヤンダラスだな。何回新聞のトップ飾ってるのか」

要はケラケラ笑う。

破天荒な阿笠はどうしても目立ってしまうので、メディアの良い餌食なのだ。

「あ、スキヤンダルで思い出した。あの、おじさん」

阿笠は耶斐のほうを向きながら話しかける。

目線を阿笠に合わせてきた耶斐に、こう言った。

「さっき綾女との2ショット取られました。明日の新聞に載るかもしれません」

エヘ、と猫みたく笑う阿笠に呆れたのか、耶斐はため息をついた。

「いやー、羽柴財閥の長女との熱愛となればおじさんにもいろいろ

メディアが押し掛けるかしんないです」

「はあ……。まあ良い、本気なんだろう」

「もちろんです」

とりあえず彼女の父親に許しをもらったので、阿笠にとってこれ以上脅威はない。

その後食事の支度を終えた女性陣たちと共にみんなで食卓を囲み、全員で遅い昼食を取る。

墓場でのギスギスした雰囲気がないのは、大方要の許しによりさくらと耶斐の間にわだかまりがなくなったことによるが、阿笠と耶斐がどこことなく親しくなってきたことも関係しているだろう。

ちなみに、羽柴のトップシークレットについてはこの先も世間には公にはしない。

あえて言う必要もないし、事実綾女も跡を継がないのだからバレたところで耶斐が批難されるだけで羽柴自体には問題もない。

羽柴の跡取りには、相良が選ばれた。

正しくは、昨年第三者の卵子による体外受精によって生まれた羽柴本家の長男・彩人^{あやと}が大人になって継げるときがくるまでの代理だ。

耶斐の精子と耶斐の妻の妹の卵子によって産まれた彩人は紛れもなく羽柴直結。

妹の卵子ならきつと自分にも似ていと妻が望み、耶斐も綾女も承諾したのだ。

彩人が将来跡取りとなると、相良の役職が彩人を支える大きな糧となると踏んだのだ。

そして、相良がじきに結婚して産まれることになる長女が彩人と結婚し、相良家と羽柴家の間に主従関係がなくなるのはそう遠くはない話。

長男、彩人の名は耶斐が名付けたもので、ずっと綾女という名前を気にしていた綾女を氣遣ったのだ。

耶斐の娘だからと、他の姉妹とは全く違う名前であることに哀しみ

を感じていた綾女のために、耶斐の息子で綾女の弟だから彩人と名付けた。

綾女は照れくさそうに、でも嬉しそうに笑っていた。

アヤという名前の繋がりに初めて家族の絆を感じることができたのだった。

20才も離れた弟、それでも間違いなく血の繋がりがあ実弟。

綾女が継がないと決めたために羽柴の跡取りとして産まれてきた彩人のおかげで、阿笠は綾女と結ばれることができた。

結果的には彩人は文句1つなく跡取りとして成長したのだが、またそれは別の話。

そしてやはり、翌日の朝刊の一面トップにはオリンピックでダブル MVP を取った阿笠大悟と羽柴綾女のラブラブ熱愛報道が載せられていた。

f
i
n

another story【十数年をかけた約束】

阿笠大悟と羽柴綾女、21才のときオリンピック出場、華々しい結果を残す。

22才のとき結婚、阿笠綾女となる。

23才のとき共に渡独、それぞれドイツのリーグに所属、初めて秋人と離れる。

25才、共にオリンピックに出場、男女共に優勝を決め、3大会連続優勝に貢献した阿笠は国民栄誉賞授賞。

26才のとき周りから反対されるも綾女はサッカーから一時離れて4月、長男誕生、同年3月に年子の長女誕生。

27才で阿笠綾女はblankを乗り越えサッカー界に復帰。

そして、29才。

「今年はオリンピックの年かー」

ドイツに住んでいる阿笠一家にはお手伝いさんがいて、3歳になる子どもたちの世話を任している。

なぜなら、彼らのパパとママは一世を風靡するプロサッカー選手だからだ。

「お前どうせまた日本代表として出るんだろ？ やんなるぜ」

「ははは、そう言うなって。お前だって俺と秋人のコンビ見たいだろ？」

「くっそ。お前らに敵う奴いねえよ。ミスター月影今はスペインだろ？」

「ああ」

阿笠がドイツに渡ったのち、秋人もスペインに渡った。

離れたくないがために日本で同じリーグに所属したが、それぞれが更に技術に磨きをかけるために離れることを決意したのだった。

世界大会さえあれば2人は日本に戻り日本代表として同じフィールドに立ち、かつて見せた名コンビとして活躍する。

本当の本当は離れたくなかったが、サッカー選手は寿命が短い。

やれる期間が限られているのだから、その少ない期間を最大限に有効活用することにしたのだ。

そのためには、彼らには日本は狭すぎる。

「そうだ、お前今週末スペインに行くって？」

「うん」

「相棒に会いに？」

「いや、初恋の人に会いに」

友人が不思議そうな表情をしていたが、阿笠は流して、楽しみだと笑った。

「子どもも？　なんなら預かってもいいぜ」

「悠紀も由良も連れてくよ。約束なんだ」

それだけ言い、阿笠は友人と別れを告げ家に帰る。

マイホームには、すでに妻も帰宅していて子どもたちは寝静まっていた。

綾女はグラスを用意し、適当につまみを作って2人でワインで乾杯をする。

もともと阿笠はドイツ語を話せたが、綾女はこっちに来てから覚え始めた。

もう何年もこちらで暮らしているので普通に話せるようになって、ドイツでの生活も慣れた。

外ではドイツ語ばかりなので家にいるときくらいは日本語で話しているため、子どもたちは常にドイツ語と日本語の両方を聞くことになる。

阿笠家長男・悠紀^{ゆうき}と長女・由良^{ゆら}は同じ年に生まれた年子の兄妹で、わざと年子になるよう仕向けた。

子どもは2人くらいは欲しいというのが阿笠と綾女の望みだったが、綾女はこれでもプロなのだからそうそうずっと休んでいるわけにもいけないので、間をあまりあけずに子どもを2人産むことにしたのだ。

同じ年になったのは偶然だが、これも何かの縁だろう。

引退してから産めば良いと散々周りから言われたが、それでは遅いのだ。

阿笠にはやるべきことがあったから。

「……今週末、なんでスペインに行くかまだ言ってなかったね」
「そうね。なんで？」

「会いたい人がいるんだ」

ワインを飲みながら、阿笠はポツリポツリと過去の話をした。

もう10年以上前になる、当時まだ高校2年生で、16才だった。

これを話す機会はなかなかなく、言ったら綾女に怒られてしまいそうな気もしていたが言わずにはいられない。

阿笠が前に進めるようになったのは、その人のおかげだから。

ワインを飲む手を止めてしまうくらい夢中になって話す阿笠の言葉を一字一句落とさないように綾女は真面目に聞いた。

阿笠の中学から高校にかけての3年間に渡る恋のエピソードは、1時間では終わらず、真夜中になっても続いた。

なかなか壮絶な内容ではあるが、阿笠は懐かしげに笑ってみせたの

でさほど淀んだ空気ではない。

「……弱い俺を、甘えたな俺を守ってくれた。隣にいて支えてくれたんだ」

「うん。あたしも会ってみたいな。大悟を守ってくれた人」

綾女は笑った。

嫉妬されるかもしれないと思ってたから、笑ってくれて心がすごく軽くなる。

俺は、ずっと離れないと決めた相棒と別れ離れた土地でサッカーをすることにし、綾女との子どもも2人授かった。

もちろん上手くないこともあるけれど、サッカー三昧の毎日と子どもたちの笑顔は俺にとってかけがえのないもので。

だから、今だと思う。

高2の初冬、ある約束をした。

自分の足で、1人で歩けるようになって、いつか幸せを掴んだらその証に会いに行くと。

「行こう。今俺はとても、幸せだから——」

今週末、スペイン。

「今日、何があるの？」

雪原麻冬改め、月影麻冬は夫である秋人と共に飲んでいた。

2人はオリンピックが行われた年翌年、つまり26才のときに結婚し同年2月長男出産。

できちゃった結婚だったのだが、2人は婚姻届を役所に出すだけで結婚式や披露宴は行わなかった。

周りからはなぜだなぜだと言われてきたが、2人には決めたことがあった。

「お楽しみ。お前、いつまでスペインいるっけ？」

「来週まで」

「ふーん。じゃ、オリンピック終わったら結婚式しようか」

秋人はサラリと言った。

今2人は拠点を違う国、秋人はここスペイン、麻冬は日本にいたため遠距離だった。

「いやあね。秋人が言ったんじゃない。結婚式はまだしないって」
「——ああ。今のままじゃまだあいつが式に来てくれねえからな」

秋人は昼間にも関わらずビールを一口飲む。

その隣で、麻冬は懐かしそうな表情を浮かべた。

「早いね。もう13年になるわ」

「お前らの意地も怖いもんだ」

「ふふ」

やはり話題は高2のとき。

いつだって思い出すのは阿笠大悟の姿だ。

麻冬と秋人が結ばれたのは阿笠のおかげといっても過言ではなく、
そしてやはり麻冬と阿笠がした約束は今も2人は守り続けていた。

阿笠たちは、その約束を守るために高校を卒業してからまだ一度も
会ったことはない。

もちろんお互いスポーツ選手としてテレビや新聞で見ることがあっても、会える距離にいても会いには行かなかった。

阿笠が幸せになれるまで会わない、そう約束したから。

そんな口約束をしてもう10年以上経ってしまっている。

阿笠の幸せは、仲間うちなら誰しもが願うものだった。

勘違いから夏実を振ってしまっ行って場をなくした春樹の背中を押したのは阿笠。

2人の幸せを願って麻冬と別れて秋人に託したのも阿笠。

烈がフランスに旅立つことでお互い好きだと言えなかったみかさと烈を仲介したのも阿笠だった。

友人たちの恋をいつだって応援してくれていた。

だから、阿笠には自分の何倍も幸せになってもらいたいというのが仲間たちの気持ち。

「怖いのは秋人のほうよ。何よ、阿笠と同じ年の子どもが欲しいとか言ってる」

「あはは、悪い悪い」

「まったく。スポーツ選手にブランクはきついなのよ？」

麻冬は意地悪く笑う。

そう、阿笠家に3年前のちょうど今頃長男が誕生し、秋人は麻冬に今年子どもが欲しいなどとんでもないことを言ったのだ。

神が仕向けたのか本当に子どもは生まれ、悠紀や由良と無事同じ年だった。

なぜか、そんなこと聞かなくても分かる。

いつかサッカーするであろう悠紀と同じピッチに立たせるためだ。

自分と阿笠がチームメイトとして同じフィールドで戦って得たものを息子たちにも味あわせたかった。

秋人の長男誕生の知らせに阿笠は泣いて喜んでいた。

「だって俺らの子どもなら絶対良いコンビになるからさ」

長男をすでにサッカー選手にしようとしている当たりが秋人らしい。

麻冬はもし女の子が産まれたら自分と同じ水泳選手にしようかと考えているが、今のところ子どもの気配はない。

それに、秋人と阿笠の子どもたちなら確かにきつと良いコンビになるだろう。

阿笠が阿笠のサッカーを教え、秋人が秋人のサッカーを子どもに教えたら今の秋人と阿笠の二世の出来上がりだ。

それかなり話題を呼ぶだろうけど、でもそれではつまらない。

やはり子どもには伸び伸びサッカーして欲しいというのが父親の心情だ。

「あら、そういえば夾は？」

「あ、そういやいな。参ったなー」

息子、夾の姿が見当たらず2人は慌ててダイニングから出て家中を探した。

ちなみに息子は今秋人がこちらで育てていて、普段はベビーシッターに世話を頼んでいる。

日本にいたほうが秋人や麻冬の両親もいて良いかもしれないが、やはり育てるのは麻冬か秋人の手が良く、秋人のほうが稼ぎもあるから秋人が引き取ることにしているのだ。

結婚しているのに離れてくらすのもなかなか寂しいし、もう十分なほど技術は身につけた。

まだ足りないものもあるが、秋人はそのうち日本に移籍するつもりだ。

今年のオリンピックを終えたら日本に戻り、最後に更に4年後のオリンピックを終えたら引退しようかと思っている。

そのときには33才だ。

おそらく阿笠も同じことを考えているに違いない。

「外かしら」

麻冬が外に出てみると、夾が走っている姿が目に入った。

家とは逆の方向に走って行く夾を引きとめようと追いかけると、向こうで誰かが夾を抱き上げた。

麻冬はつい足を止める。

夾を抱き上げたその人は、肩につかない長さの金髪をしていて太陽に反射していた。

眩しくて目を細めるが、すぐに誰なのか分かる。

「よお夾、でかくなったじゃん。ほら悠紀、一緒に遊んで来い」
「うん！」

夾をおろした彼がそう言うなり、2人の男の子たちは悠紀が持っていたサッカーボールを手にとどこかへ行ってしまった。

金髪の男性の隣には、見覚えのある女性が女の子を抱いている。

もうこの光景には目を丸くして驚かざるを得ない麻冬には言葉が出てこない。

麻冬の後ろから家から出てきた秋人も現れ、そうして金髪の男性が一步一步歩み寄ってくる。

「麻冬」

名前を呼ばれた麻冬は感極まってポロポロ涙を流すが、ようやく彼も幸せを掴めたのだと精一杯満面の笑みをした。

「――阿笠！」

麻冬の笑顔に、阿笠もつい嬉しくて微笑んだ。

13年前にした約束はようやく果たされた。

綾女も秋人も何も言わずに微笑みながら2人を見つめていて、約束を果たせた2人はきつとこれからどんどん前に進んで行けるだろう。

その傍らでサッカーをしている悠紀と夾、今ここから新たなサッカー物語が始まる。

f
i
n

another story【綾女と相良】

「あたし、サッカー選手になります」

19才の夏、もうじきハタチになろうとしていた大学2年、俺の主・羽柴綾女が耶斐様にそう言った。

どちらに転ぶかは五分五分だったけどそう答えてくれたとき、ホッとしたのを覚えてる。

そして大学3年、羽柴家に長男が生まれた。

名を彩人と言った。

綾女が跡取りから脱線したことにより俺の主は彩人様——になるはずだった。

だが羽柴の当主に命じられたのは、彩人が大人になるまで代わりに俺が引き継ぐこと。

なんてことだ。

「相良」

「ああ、綾女様。いかがなされました」

とにかく羽柴について知るために、たくさんの勉強に追われた。

もともと俺の役目は主の従者として、つまりは秘書兼右腕として働くものだったがその主がいなくなれば困ったもの。

要は、主がするはずの仕事をしろということだ。

羽柴で素晴らしい地位を与えてもらえるのは確かだが、相良家の人間としてそんなこと許されて良いのだろうか。

あくまで羽柴の人間の付き人として生涯を終えるはずなのだが、そうも言ってられない。

「ちょっと良い？」

サッカーの練習のウェアを着た綾女が相良を自分の部屋に誘った。

言われるがままに従い、綾女の部屋に行くとソファに腰をおろすように言われて座った。

向かいに綾女も座り、何やら深刻そうな表情をしている。

彩人が生まれて、ちょうど1ヶ月経ったばかりで相良がその役目を命じられてまだ間もない。

綾女はというと、昨年全国大会で見事優勝をおさめ、大学に通いながら今はLリーグに所属している有望なサッカー選手。

プロになると父親に宣言してから綾女はその道を確認に歩んでいた。

「なんていうか、……ごめん」
「え？」

「あたしが跡取り問題から逃げたせいで相良に迷惑かけて」

綾女は頭を下げてそう言った。

相良は慌てて綾女に頭を上げるように言い、気にするなと付け加えた。

相良は決まった定めに対し誰かに不満を漏らしたことはなく、なすがままに受け入れた。

もちろん、綾女が脱線したことに面白くない相良の父は不満そうにしていたことに関してはザマアミロと内心思ったりはしていたが。

綾女の告白に耶斐は特に何を言うでもなく、ただ一言「途中で諦めるな」と言った。

綾女に跡継ぎを強要していなかった耶斐ならではの、跡取りのために綾女を引き取ったと信じ込んでいる相良父には気に食わなかったことだろう。

「優しいね、相良は……」

綾女ひ淋しげに笑う。

「俺は生涯羽柴家に仕える身だから。お前はお前の道を行け」

綾女の部屋ということで相良は敬語を使わず、幼なじみとして接する。

最も相良は相良家嫡男として羽柴の跡取りに仕える身、跡取りからとんずらした綾女はすでに主ではないから問題はないのだが、それでもやはり綾女と2人きりのとき以外は以前と変わらぬ態度で接する。

元主だが、昔綾女に誓った通り綾女が継がなくても陰日向となり生涯お仕えすると決めていたから。

だから綾女のためにこの道を進むことになるのなら本望のはずだった。

「っ……」

再び頭を下げて謝ってくる綾女に、相良は人知れず泣き出しそうになる。

切ない。

哀しい、哀しいってそればかり思ってしまう。

綾女が羽柴家に養女に来たときから今までずっと仕えてきたのに、彼女は相良の前からいなくなってしまふ。

阿笠と幸せになって欲しいと願ったのは自分、だけど阿笠と別れて1人でサッカーの道に行く綾女を見送る勇気がない。

「……1つ聞いて良いか」

相良は目頭を押さえながら低い声で尋ねる。

頭を上げた綾女が返事をする、相良はこう言った。

「なぜサッカーを選んだ。……阿笠とは終わったんだろ」

阿笠とは終わりにしたのだと聞かされた去年の夏、哀しみに浸っている綾女にはそんなこと聞けなかった。

聞けないうちに突然綾女は耶斐に告白し、そのうちどんどん元気になり始めてより一層サッカーに打ち込む多忙な日々を送っていた。

やっと元気になれた彼女に蒸し返すような質問などできるはずなく、綾女が決めたことなら黙っていたが、やっぱり確かずにはいられない。

綾女の進みたい道を行けば良いと言い続けたのは相良だが、綾女は高校のときにスカウトを断るなどサッカーに迷いを見せていた時期もあり羽柴の唯一の後継者は自分であるという認識も捨てられていなかった。

羽柴を継がないと決めるにあたって相当の覚悟が強いられたことは予測できる。

だから、一体何が綾女に覚悟を決めさせたのか、知りたいのはそれだけだ。

「身分が邪魔するのなら、地位を捨てても構わなかったのよ」
「え？」

「あたしが跡取りだからダメだというなら、あたしは跡を継がない。彼と同じ世界に生きる。……それしかないと思った」

つまり阿笠だけのために後継者問題から脱線した、と。

「来年のオリンピックに出場できたら、もし代表に選ばれて再び大悟くんに会えたら自分の素直な気持ちを伝えるの」
「……今行けば良いじゃないか」
「だめ」

綾女は首を横に振った。

相良には綾女が言おうとしていることが理解できていないが、綾女は続けた。

「サッカーと共に生きる。ちゃんと上手くなってそんな覚悟も持て初めて彼に一步近づけるの」

迷いを断ち切った綾女の瞳は頑なだ。

おそらく誰が何を言っても揺らがない意志があるだろう。

阿笠のことはもう諦めたと思っていたけど、阿笠のために追いかけるのか。

阿笠のために羽柴を捨てるつもりなのか。

「……追いかけてダメだったときどうする?」

あれだけ国民的大スターなのだから、彼女などいくらでもできるだろう。

距離を置けば互いの気持ちなどすぐに冷めてさまうかもしれない。

会わなければ、いつかはなくなってしまいう気持ちなのかもしれないのに。

それでも良いのか。

「更に追いかける。それでもダメなら……生涯サッカーだけに打ち込んでいく」

「良いのか」

「はじめなの」

あの日、綾女と阿笠が別れようとしていたときにすぐに羽柴を継がないと答えることができなかった自分への罰なのだと綾女は笑って言った。

自分1人が悪いみたいに言う綾女に同情した相良は、身分を乗り越えようとしなかった阿笠にも非はあるのだと、もしかしたら阿笠にはその程度の気持ちだったのかもしれないと言ったが、綾女はそうではないと首を振る。

あくまで阿笠を裏切った自分を戒めたいのだと言う。

そこまでして阿笠を好きでいるのだと相良はようやく理解した。

「相良のためにも頑張るわ」

ヒラリと蝶のように笑う綾女がいつになく可愛くて、相良も瞳に水晶を浮かべながらつられて笑った。

これまでずっと羽柴に仕える身として恋の1つもしてきことがない彼には、綾女の行動は理解し難いものがあるが、恋とか地位とか関係なく、彼女が彼女だけの道を見つけてくれたことは心から嬉しかった。

まだ赤ん坊の彩人にいつか仕えるそのときまで、綾女のその言葉をむねに励もうと決意した。

翌年綾女は見事日本代表に選ばれてオリンピックに出場し、日本を準優勝に導いた。

その後1ヶ月もしないうちに、綾女と阿笠の熱愛報道が報じられ、綾女の念願は叶う。

十数年後かに、相良の娘が彩人と結婚して相良家が羽柴家の従者ではなくなるのは、そう遠くない話。

——私、相良陸は綾女お嬢様の陰日向となり一生お仕えしていきます
たい所存にございます——

そう誓ったあの日から、いつでも幸せを願っていた。

あなたが異国に行きもうお仕えすることができずとも、永久に祈っております。

あなたが二度と哀しみにふけることがないようにと。

f i n

そして・・・ **f o r e v e r**

「悠紀！ てめっ、そのメチャクチャな動きやめろ！！」
「ええ？ 俺の動きを読んでこそその10番だろ？」

阿笠悠紀、15歳。

月影爽、14歳。

共に中学2年生の夏。

父親たちは、世界を風靡するプレーヤーだった、阿笠大悟と月影秋人。

母親たちは、世界を魅力した選手だった阿笠綾女と月影麻冬。

両親たちは40歳を迎え、みな今は日本に滞在中。

7年前に行われたオリンピックピックを最後に、彼らはその選手としての人生にピリオドを打った。

ドイツにいた阿笠家は日本に戻ってきて、スペインにいた秋人と夾、カナダにいた麻冬も帰ってきたのだった。

阿笠・秋人・麻冬は計5回、綾女は計4回オリンピックに出場し、華々しい結果を残してきた。

特に男子サッカーは、5回のオリンピックを連続して優勝したという神々しい結果を手にし、日本のエースとして秋人と阿笠は称えられた。

33才のときに惜しまれつつも有終の美を飾って引退、その後はそれぞれ日本で働くことにした。

「「夾、それくらいの動きは予測しろ」」

声を合わせながらそう言ったのは、紛れもなく阿笠と秋人なわけで。

「父さん！ 無理だよ！ だって爆走してんだぜ?!」

キャンキャン吠える夾に阿笠はケラケラ笑う。

「お前の親父はやってくれたぜ？ 俺の動きをいつだって読んでくれた」

「うっ……」

日本に戻ってきた阿笠は、中学生のナショナルトレセンのコーチを引き受けた。

各地域選抜から更に選手を選抜した、いわゆる全国選抜だ。

静岡選抜のヘッドコーチをしていた秋人を無理矢理引っ張り、阿笠につれられて秋人もナショナルトレセンのコーチに就任。

その後何年かしてようやく今、彼らの息子たちもナショナルトレセンに選ばれた。

ほぼ同じ時期に帰ってきた阿笠と秋人は、当時小学生だった悠紀、爽、由良を同じ小学校に入れるために近場に一戸建てを立てた。

静岡は東京ほど物価も土地も高くはないし、彼らの収入ならば家く

らいボンと買える。

実家からもそう離れていない、秋人がかつて学ぶはずだった校舎。

秋人は日本で小学校を卒業していないので、どうせなら自分が通うはずだった学校にと選んだのだった。

もちろん小学校のときから悠紀も夾もサッカーをしていてその才能はさすがと言うほどのものだったが、中学受験は特にせず秋人が通った中学にそのまま入学した。

そして今に至るのだが、必然というか定めというか、これを運命と呼ばずになんと言おう。

「うゝ。竜也からも何とか言ってくれよ」

悔しそうに唇を噛みしめながら夾は側にいた竜也という少年に声をかけた。

この少年を見れば、誰の息子なのかはすぐに分かる。

髪型も顔も、どこを見ても父親にそっくりなのだ。

「やだなあ、前線は俺にや関係ねえもん」

他人事のようにヘラツと笑いながら竜也は言う。

「お前、ほんと義兄さんそっくり」

秋人が呆れながら言う。

そう、彼は佐々竜也。

父親は佐々佑亮といい、秋人と阿笠が高1のときキャプテンでいんなりリーグからスカウトされるほどの技術を持ち、最強のディフェンダーと呼ばれていた。

同時に、星陵高校を初めて全国制覇に導いた人でもある。

だが、中学のときから付き合っていた秋人の姉のためにサッカーは

高校までとし、大学に進んでからはサッカーはしなかった。

そんな佑亮の息子も今やサッカーをやっていて、佐々一家は佐々家の実家に住んでいるためもちろん中学は地元。

佑亮と秋人は同じ中学だった、つまり竜也も悠紀や夾と同じ中学でしかも同じ年なのだ。

天才と言われたフォワード阿笠大悟の息子はフォワード。

カリスマと歌われたミッドフィールダー月影秋人の息子もミッドフィールダー。

最強と呼ばれたディフェンダー佐々佑亮の息子もディフェンダーなのだ。

これはもう偶然ではなく、父親の背中を見て育ってきた息子たちの意思だろう。

「ははっ。夾だって秋人くんのプレーそっくりじゃん。悠紀のスタイルなんて阿笠コーチと瓜二つだし」

秋人くん、そう言うことに違和感があるかもしれないが確かに竜也にとって秋人は叔父だ。

それが秋人と阿笠ももう40才になったことを示している。

まだまだ若いうちの記憶が新しいとばかり思っていたが、まだまだ幼いと思っていたが、彼らも人並みに、いや人並み以上の恋をして家庭を築いた。

「ほらほら、悪ガキども練習再開するぞ！」

秋人と阿笠が出会ったのは、ちょうど今の悠紀や夾と同じ年のとき。

違う中学出身だった彼らは共に同じ高校に進み、秋人はキャプテン兼エース、阿笠は副キャプテン兼エースストライカーとして黄金コンビと呼ばれ全国制覇を成し遂げ、また高3でオリンピックにも出場、優勝に貢献した。

高校卒業後、共にエスパルスに入団、目まぐるしい活躍を見せ、2度目のオリンピックでは日本のエース・エースストライカーとして優勝に導く。

その後秋人と別れ、阿笠はドイツ、秋人はスペインに移籍。

26で阿笠の妻・綾女が悠紀を産み、約束を叶えるために追うようにして秋人の家にも夾が生まれた。

「やー、俺らもおじさんかあ。もう40だもんなあ」

本来なら阿笠がコーチの職につくなんて周りには考えられなかった。

阿笠は自由奔放で、他人に指導したりするのを昔から嫌がり、チームメイトへのアドバイスをすることすら嫌った。

要はチームをまとめる気などサラサラなく、そのため秋人が阿笠にとって永遠の不動のキャプテンであるのだ。

そんな彼がなぜコーチを引き受けたのか、そこにはやっぱり自分のサッカー人生に終わりを迎えたくなかったから。

「ああ。あ、そうだ。約束覚えてる？」

「忘れないよ。約束のおかげで俺サッカーやってられるんだから」

彼らの言う約束とは、プロとして初めて迎えた、生涯で見れば2度目のオリンピックの決勝戦前夜での阿笠と秋人がした秘密の約束のこと。

もともとつかさのためにサッカーをしていた阿笠は、あの日世界一になるという約束を果たしたらこの先どうしたら良いのか分からないと泣いていた。

阿笠にとってサッカーはつかさそのもので、自分のためではなかったから。

だからそんな阿笠に、秋人は新たな約束をしてあげた。

「世界一になったら、世界一を取り続けて、そしたら子どもを生んで、子どももサッカー選手にする——だよね」

「ああ」

つかさに捧げた人生。

だけど、悔いはない。

なぜなら、サッカーを通して大事な人がたくさんできたから。

「サッカー選手かぁ。きつとなっちゃうよね。俺らの息子だし」

「自惚れはしたくないけど、確かになるだろうな。日本を背負うプロに」

「てことはさ、実写版黄金コンビ見れるじゃん」

阿笠は楽しそうに笑う。

実写版というのは些か可笑しいが、彼らには自分たちがしているプレーは当然第三者として見ることはできなかつたので、周りがあれだけ騒いでいるのだから見てみたくなつたのだろう。

黄金コンビと呼ばれた自分たちのプレーを。

「そうだな。俺がどれだけ苦労してるか見れるな」

「えー！　どれだけ俺がすごいかが見れるんだって」

冗談交じりに2人は言う。

日本に留まらず世界でもトップレベルだった2人。

世にも稀な才能の持ち主たちだった。

息子たちが彼らを超えられるかは難しい問題の気もするが、だが阿笠も秋人も自分を超えろとは言わないだろう。

自分たちがしてきたように、時にはがむしゃらに時には楽しく、自由にフィールドを駆け回ってくれば良い、そう思っている。

「……覚えてる？ 高校時代」

「忘れないさ。義兄さんが同じ学年だったらどれだけ良かったかと思っただけ」

「今度は3人同じなんだね。羨ましい」

「竜也もいつかサッカーから離れてしまうのかな」

「あはは、先輩の子どもだもんね。でも、今度は好きな人のためにサッカーを諦めないで欲しいかな」

グラウンドで中学生たちが練習しているのを阿笠はじっと見つめて

いる。

悠紀が、夾が、竜也が、他の選抜の子たちが懸命にボールを追っている。

あんな時代が自分にもあった。

懐かしくて、また更に笑みが溢れる。

「そういや晴、今回骨折して辞退だって？」

「らしい。あいつもいたら完璧なんだけどな」

秋人が思い出したように述べた名前、晴は烈の息子で、本当はトレセンに選ばれていたが今回は残念ながら出れなかったようだ。

学生時代秋人も勝てなかった名キーパーで、晴が中学生になってもサッカーやってくれていることが阿笠には何より嬉しい。

烈は画家になる夢を追いかけるためにサッカーは小学校で終わらせてしまったから。

きつと烈なら阿笠たちと肩を並べて日本を背負えていたはずだった。

親友がサッカーをやめることに哀しみを抱いていた阿笠が晴がサッカーやっていることで、どれほど救われたことか。

「ところでお前いつまで金髪でいるつもり？」

秋人は阿笠の髪をチラッと見る。

青い空に浮かぶ照りつけるような太陽に反射してキラキラしている金色の髪が、風にサラサラなびいている。

「もうこれトレードマークしょ？ 20年もこれだし」

綾女と別れたハタチになる前の夏を終えてから髪を金色にし続けた。

一時期はかなり伸ばしていたが綾女と結ばれたことにより髪を切り、肩につかない程度の長さが阿笠の髪型として定着している。

「良い年して」

「ちよっと。この髪はいつだって願掛けてんだから」

「今は？」

「とりあえず俺たちの約束が叶うように。ってさ、絶対叶うじゃん。そしたらどうしようか？」

約束を作れと、阿笠は子どもみたいにせがんでくる。

年を重ねても変わらない相棒に愛しさを感じる秋人だが、それは秋人だけではない。

こんなに長い付き合いになることは予想していたけど、いざ実現できるとなると嬉しくて仕方なくて。

これだからサッカーはやめられないんだ。

君と出会ったサッカー

君と競ったサッカー

きっとこれかも死ぬまで一緒なんだろうね。

「そうだな、じゃあ俺と阿笠の孫がプロになるまでサッカー続ける
ってことで」

「言うと思った」

こうして、彼らのサッカー物語は続いていく。

f
l
n

そして・・・ **f o r e v e r** (後書き)

最後までご愛読して頂いた皆様、本当にありがとうございます。

これをもちまして2年間に渡って連載をした「春夏秋冬」 「僕は唄う」 は終了となります。

ここまでこれたのも皆様のおかげです。

今ムーンライトノベルズで本編の最後に出てきた秋人や阿笠たちの子どもたちによる「僕は君に恋をする。」を執筆させて頂いてますので、よろしかったらご贔屓願います^^

ではまた会える日まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8550k/>

僕は唄う、金色に輝く想いを乗せて。

2011年5月7日15時51分発行